

博士学位請求論文

指導教員 門田誠一

論文題目

中近世移行期における城館遺構と  
地域社会に関する研究

佛教大学大学院

文学研究科歴史学専攻

高屋茂男



# 目 次

序 章	3
研究の目的	4
第 1 部 城館遺構の分析と大名勢力	
第 1 章 畝状空堀群の研究史と視点	8
はじめに	8
第 1 節 研究史の整理と問題点	8
第 2 節 畝状空堀群の年代観と分類に関する研究史	12
おわりに	16
第 2 章 畝状空堀群の分類と構造	19
はじめに	19
第 1 節 畝状空堀群の構造	19
第 2 節 時期ごとの遺構の変化	27
第 3 節 分布と地域性	30
おわりに	33
第 3 章 畝状空堀群の地域的特質に関する検討	48
はじめに	48
第 1 節 丹波・丹後における畝状空堀群	48
第 2 節 出雲・石見における畝状空堀群	53
第 3 節 畝状空堀群の分布と大名勢力	57
第 2 部 中近世移行期における城館構成の変容と地域社会	
第 1 章 丹波国何鹿郡上林谷における事例検討	76
はじめに	76
第 1 節 上林地域の城館分布	77
第 2 節 日置谷城の構造と築城主体	86
第 3 節 発掘調査成果からみた上林城の構造	88
おわりに	91

第2章 丹波国船井郡園部における事例検討	104
はじめに	104
第1節 園部陣屋成立前史～中世園部城の検討を通して～	105
第2節 丹波穴人城と小出氏の園部入部	111
第3節 中世における園部周辺諸村	121
第4節 園部陣屋・町の成立	129
おわりに	135
第3章 山陰における織豊期城館の展開	142
はじめに	142
第1節 山陰における織豊期城館と研究史	142
第2節 城郭の改修と維持～出雲真山城を事例に～	153
第3節 伯耆亀井山城の構造と意味	161
おわりに	166
第4章 出雲月山富田城の構造と位置付け	173
はじめに	173
第1節 遺構と形態	173
第2節 石垣	180
第3節 山中御殿の評価	183
第4節 城下からの視覚	185
おわりに	186
終章	207
引用・参考文献一覧	212
初出一覧	217

## 序 章

# 序章

## 研究の目的

近年中世城館研究の進展は目覚ましいものがある。その研究手法には文献、考古、歴史地理などがあるが、1980年代以降定着した手法が、現地を歩き地表面観察を行い、簡易測量による縄張り図を用いた手法である。この手法は一人で行えることもあり、戦前より民間研究者によって担われてきた。それを在地構造と地域史の史料として活用することに意義を見出したのは村田修三氏である。地表面観察による縄張り図は、曲輪や堀、土塁、虎口などがどのように結びついているかを見極め、特徴を見出すことで年代の判定や、地域性、築城主体の検討を行うことができる。しかしながら、城跡は戦国時代末期から近世初頭に廃城となり、その後近世・近代を経て堀は埋没し、切岸は崩れ、人々の営みの中で改変を受けている可能性も残る。そのため平地や山麓部では注意を要するが、山上などでは驚くほど城跡の遺構はよく残されている。このような縄張り図を用いて、全国各地で調査報告がなされ、その数は枚挙にいとまがない。

中世城館研究の中で、畝状空堀群は戦国期を特徴づける遺構として注目をされているが、畝状空堀群の分布状況はこの20年で大きく様変わりした。例えば京都府では分布調査の中で従来認められていなかった丹後半島でも数多くの畝状空堀群を持つ城館が検出されている<sup>2</sup>。また畝状空堀群あるいはその周辺が発掘調査された事例が少ないながらも蓄積されてきた。そこでそういった具体例をもとに改めて考え直す時期が来ていると思われる。

畝状空堀群は1986年に開催された第3回全国城郭研究者セミナー「いわゆる畝状空堀群について」において、全国的に認知されることとなった。その後、2016年に30年を経て改めて第33回全国城郭研究者セミナーが「連続空堀群再考」と題して開催された。ここでは東北から九州まで各地の研究者が報告している<sup>4</sup>。報告の後シンポジウムが開催されたが、畝状空堀群が設置される場所は、ある程度傾斜を持った斜面もあるが、緩斜面にも構築されている。また堀切に連続するものや、曲輪から離れた場所に構築される場合もある。形態も堀と堀の間に大きな土塁を造るものや、上部に横堀を持つものなど、様々なものがある。分布も密に分布する地域やほとんどない地域がある。このように機能や構造、敷設場所など様々なものが存在し、これらについて全国的見地での整理を試みる必要があるであろう。またシンポジウムでは畝状空堀群は、畝状空堀群、連続空堀群、畝形阻害など様々な呼称で呼ばれるが、名称についても検討された。しかしながら名称は、その遺構がもつ機能や構造などについて十分な検討がなされた上で決定されるものである。そのため本論では筆者がこれまでに用いてきた畝状空堀群を仮に用いる。

従来、畝状空堀群は毛利氏に関連付けて語られることも多かった。しかしながら畝状

空堀群の敷設状況などで分類すると、小規模城館での導入例も多く、毛利氏と直接的に関連しない城館での導入例も目に付く。本論ではこの点について出雲、石見や丹波、丹後での導入例をもとに検討を行うことで、その築城主体を探ってみたい。今後は、中国地方では岡山県、山口県で城館分布調査が進行中であり、これらの調査進展に合わせて改めて分布について検討する必要があるであろう。

筆者はこの畝状空堀群について約20年取り組んできたが、そこから見えてくるのは、戦国大名だけでなく、中小規模領主たちが政治状況に翻弄されながらも、自領の防衛のために城館を改修してきた姿が浮かび上がる。第1部では畝状空堀群の検討を行うことから、戦国期城館の特色を見出したいと考える。

一方、戦国期には数多くの城館が築かれた。縄張り図をもとにした城館研究の特色の一つに、特定の地域の悉皆調査を行い、文献史料のない地域でも歴史を語れる点がある。特に小規模城館は一見特徴を見出しがたいものが多く、単体では検討が難しいが、地域全体を見渡すと分布状況などから一定の見解を示すことが可能になる。

第1部の畝状空堀群の検討では、綾部市や福知山市から舞鶴市にかけて多く分布する傾向が看取されるが<sup>5</sup>、綾部市上林谷地域は、丹波から若狭へ抜ける重要なルートのため3ヶ所の畝状空堀群が確認できる。特にこの地域の領主である上林氏の居城である上林城では4次にわたって発掘調査が行われている<sup>6</sup>。ここでは畝状空堀群を埋めて曲輪を拡張している点や、主郭で建物の建て替え、石垣の構築など、中近世移行期における城館の構造変化や、地域社会の中での在り方を検討する上で好例である。

また船井郡園部は北野社家領舟井荘や室町幕府御料所桐野河内が存在し、京都に近く重要な荘園が存在した。また桐野河内には京都市北方の北桑田郡に源流のある大堰川（桂川）が流れ、材木の流通に重要な役割を果たした。特に桐野河内に存在する蟠根寺と蟠根寺城には室町幕府執権の伊勢氏が居住するなど当地を代表する城が築かれている<sup>7</sup>。しかし近世初頭の元和5年（1619）に入部した小出吉親は蟠根寺城やその山麓には入らず、京都所司代で山城国奉行であった板倉勝重に相談の上、舟井荘内の小島氏を頼るようアドバイスを得て、小島氏の館に仮住まいをしている。福島克彦氏や若江茂氏の検討により、小島氏の館に隣接して小出氏の仮館と考えられる遺構が確認されている。その後小出氏は改めて城地選定後に園部へ陣屋を構えているが、その過程についても福島氏の検討がある。しかしながら、近世初頭の大名入部や城・陣屋の構築にあたっては、必ず家臣団もいずれかの地に居住しているはずであるし、周辺の町場や交通の中で検討していかなければならない。

第2部第1章、第2章ではこの2つの事例検討を通じて、中近世移行期の城館の構造変化と地域社会の中での位置づけを試みたい。

第2部3章、4章では、山陰を事例として広域を支配した大名勢力の居城の在り方や、織豊勢力との関係性や支城について検討する。具体的には出雲は戦国大名尼子氏の支配下にあったものが、毛利氏の支配下に置かれ、当初尼子氏の城であったものがどのよう

に維持管理されたか、また尼子氏の居城であった月山富田城が尼子氏、毛利氏、吉川氏、堀尾氏と変遷する中で、どのように構造変化を遂げるかを明らかにする。また従来伯耆では米子城については、考古学的研究が進められているが、同じ伯耆国内に存在する亀井山城については、考古学的研究は皆無であった。亀井山城には石垣が存在し、その復元、位置づけを行うことが今後の当地における研究の指標となると考えられる。これにより第1章、2章と対比して中近世移行期の城館の在り方を検討したい。

全体を通して、第1部では戦国期城館の特色、第2部では中近世後期における地域の中での城館の構造変化、地域社会の中での在り方を明らかにすることで、今後の研究の進展に資することを目的とする。

- 1 村田修三 1980
- 2 京都府教育委員会 2012、2013、2014、2015a、2015b
- 3 第1部第2章 畝状空堀群の分類と構造を参照
- 4 石田明夫 2017、水澤幸一 2017、内野和彦 2017、秋本哲治 2017、吉成承三 2017、岡寺良 2017、高田徹 2017、三島正之 2017
- 5 高屋茂男 2001
- 6 綾部市教育委員会 1979、1980、1981、1982
- 7 高屋茂男 2015b
- 8 若江茂 1999、福島克彦 2005
- 9 米子市教育委員会 2017

第1部  
城館遺構の分析と大名勢力

# 第1章 畝状空堀群の研究史と視点

## はじめに

「畝状空堀群」は城館の防御施設のひとつで、斜面や平坦面に空堀を連続して並べたもので、畑の畝のようにみえるためこのように呼ばれる。この施設は「畝状堅堀群」「連続堅堀」「連続堅堀群」「畝形阻塞」などさまざまな名称で呼ばれ、「畝状空堀群」を取り上げた専論<sup>1</sup>もあるが、この施設が導入されている城館の報告の中で触れられている場合も多く、先行研究は枚挙にいとまがない。しかしこれらの先行研究では、名称も様々なものが見られ、定義も甚だ明確でない。分類についても複数の案が提示されているが、城館研究の場合地表面観察をもとに行う研究が大半を占め、検討の余地が多い。そこで本章では改めて研究史を整理し、分類案や分布について検討を行うための前提となる作業を行う。しかし本論は筆者の既出論文との整合性を保つため「畝状空堀群」の名称を用いることとする。

## 第1節 研究史の整理と問題点

### 1986年全国城郭研究者セミナー以前

この施設に関する研究としては、伊藤正一氏のものが良く知られている。越後地方の事例をもとに、畝状空堀群を「山城攻防戦の最終段階に至って初めて優れた防御機能を発揮する」とし、主郭群側面に使用された最終防御ラインとして評価している。使用年代については永正期に発生、天文期にピークに達し、永禄期には構築されなくなったとし、その要因として弓矢にかわる兵器として鉄砲が普及したことをあげている。また施設名称として「畝形阻塞」「畝形阻障」と呼ぶことを提唱している。伊藤の名はその後1984年の「第1回全国城郭研究者セミナー」での報告や、1986年に「畝状空堀群」をテーマに開催された「第3回全国城郭研究者セミナー」（第3回城郭セミナーと略）で広く知られるようになったが、それ以前にすでにこの施設の存在に触れていた研究がある。

伊藤氏と同じ新潟県で田中寅吉<sup>2</sup>氏の研究がある。田中の研究は従来、研究史上に位置づけられることはなかったが、氏は城郭に於ける特異施設としてこれを紹介し、新潟県・北条城跡の例に加え島根県・勝山城跡の例なども紹介している。内容的には隔世の感があるが、越後の北条城の北条氏と安芸の毛利氏とが同族であるということで、同族間での技術的交流を予想している点が興味深い。その後の研究史の中でも「畝状空堀群」の技術伝播に触れる研究は多いが、これが先駆けである。その他、高田徹<sup>3</sup>氏が近年紹介した根津袈津之<sup>3</sup>氏の研究がある。根津氏の研究は篠脇城（岐阜県郡上市）の事例の検討で、規模・形態・場所によって違いがあり、築城者の意図による斜面防御施設と位置付ける。

## 全国城郭研究者セミナーの開催

80年代に入り、村田修三氏を中心に『日本城郭大系』『図説中世城郭事典』の刊行により全国的な集行が行われ、1986年に「第3回城郭セミナー」で畝状空堀群がテーマとして開催され、この段階での研究の到達点となっている<sup>4</sup>。畝状空堀群の分布は、北は青森県、南は九州南部まで広範囲に分布することが確認されている。これにより研究者の間で、この畝状空堀群という施設について注目されるようになり、山城の斜面部分に対しても注意が払われるきっかけとなり大きな意義がある。特にこの報告の中で重要なのは、敷設時期についてこれ以後の研究に影響を与えたことである。

これらの流れの中で、畝状空堀群が新潟をはじめとした日本海側が主要分布域と見て、そこから伝播していったとする見方が広がった<sup>5</sup>。その中で毛利氏が多用したとする見方が広く取り入れられている<sup>6</sup>。

その他、この時期の研究としては、北垣聰一郎氏の研究が注目される<sup>7</sup>。畝状空堀群に関する記載として、永禄8年(1565)に書写された『築城記』に「山城ニタツ堀可然候」という記載に注目し、一乗谷城跡に見られる畝状空堀群のことと推定している。全国で使用される城館の規模は、一乗谷城跡のような大規模城館から小規模城館まで幅広く、地域によって粗密があり、地域ごとに違った様相を呈している。村田修三氏は高知県、北九州、秋田県南部などで爆発的に流行する時期は、天正期(1573～92)から文禄期(1592～96)だが、地方に流行する以前に近畿から中国地方には着実な発達と伝播があったとする<sup>8</sup>。また北垣聰一郎氏は新旧の検討を行い、初期の立地はおおむね尾根先端部や谷あいでありその形状は不規則で、後半期には曲輪下に規則的に敷設され数量も増加し、堀切、横堀らとの組み合わせが生じるとした。そして祖形は天文・永禄年間に大和、越前丹後、但馬に求められるとした<sup>9</sup>。

千田嘉博氏の行った研究はこれ以降の分類にも大きく影響を与えている。千田は横堀と組み合わせない古いタイプをⅠ類、横堀と組み合わせた新しいものをⅡ類と分けた。そして早い段階で織豊政権の勢力下にあったⅠ類の畿内から関東では横堀や虎口、横矢掛かりが発達し畝状空堀群が止揚され、Ⅱ類の中国・四国・九州北部、東北南部では、織豊政権による統一まで発達しながら使用されたとし、Ⅱ類の城は在地での城郭プランの到達点であるとの見解を示した<sup>10</sup>。これに対し、松岡進は千田の畝状空堀群と横堀が連動するものとそうでないもので、新旧の判別する視点に対して、両者が並行して発達した事例も例外ではないとしている<sup>11</sup>。これらを受けて筆者は以前、畝状空堀群の上部空間における横矢掛かりの意識を指摘し、横堀とのセット関係が成立する以前にもうひとつの発展段階を推定した<sup>12</sup>。しかし取り扱った事例も少なく、事例の蓄積が課題として残されていた<sup>13</sup>。

## 1990年代から2000年代の研究

畝状空堀群は基本的に織豊系城郭には引き継がれない技術として認識されているが、

京都府・日置谷城跡、大戸城跡や、兵庫県・大上西城跡など、織豊系城郭、あるいは地域内における他の城郭と比較しても、虎口形態や横矢掛かりが設けられるなど先進的と評価される城郭においても使用が見られる<sup>14</sup>。これらの事例は織豊期においても、畝状空堀群が淘汰されてしまうのではなく共存しながら発展している可能性を示している。

90年代から2000年代には、畝状空堀群の発掘調査事例が増えてきたが、遺構が斜面部分にあるためか遺物を伴うことは少なく、年代の判定は依然として難しい。そのような中、都道府県における城館遺構分布調査が進展しつつある。

## 2010年代の研究

2010年代には京都府、福岡県などで悉皆調査報告書が刊行されたが、山口県、岡山県では現在進行中であるため、西日本における最終的な分布を検討することは出来ないが、概ね傾向を見出せる段階にきている。2010年代には悉皆調査の成果に依拠しながら、新たな展開が見いだせる。永恵裕和氏は京都府での調査成果を踏まえ、土塁の大きいもの(B類)と通常のもの(A類)に分類し、舞鶴市・宇谷城の事例を引き合いにA類が古く、B類が新しいと説く。B類の畝状空堀群は上部の土塁部分がコブ状になったものを指している<sup>15</sup>。これは作図者が異なる縄張り図を資料として標準化する方法として考えたもので、作図者が異なっても畝状空堀群上部の土塁がコブ状になったものは見逃す可能性が低く、そのためこれによって分類するという手法である。この土塁がコブ状になる遺構は、畝状空堀群上部が横堀、あるいは切岸が削り込まれることによって発生するものである。しかしながら、高田徹氏が指摘するように<sup>16</sup>、地表面観察において永恵の分類について区別が可能か疑問を示しているが、筆者も島根県・城山城跡の発掘調査成果をもとに、地表面観察における山城斜面に構築された畝状空堀群の場合、上部の横堀などは埋没によって十分に判断が出来ない場合があることを指摘した<sup>17</sup>。このことについては後に詳しく触れる。岡寺良氏は秋月氏関連の城郭において、本拠である秋月(古処山城・荒平城)と、敵対地域との領域の境目地域に集中的にみられ、秋月種実の隠居した益富城のみに見られるという分布の特徴を見出している<sup>18</sup>。

筆者は出雲・石見での畝状空堀群の分布から、尼子氏の本国である出雲では少なく、月山富田城を毛利が攻めた際に拠点として、京羅木山城や勝山城でしか大規模な畝状空堀群は見られず、石見では中小規模の城館に多い点を指摘した<sup>19</sup>。このような分布の特徴は岡寺が指摘するように、政治的な安定度とかかわりがあるとみられる。また地表面観察による城館調査の有効性は既に明らかにされているとおりであるが、発掘調査成果に学ぶと堀切や塹堀はかなりの度合いで埋没していることが多い。およそ地表面で見える深さの倍以上はあるとみてよい。そのようなことも考慮しつつ地表面観察する必要がある。

2016年に第33回全国城郭研究者セミナーにて、「連続空堀群再考」と題して畝状空堀群について検討が行われた。各地の事例報告が行われ、30年前より格段に進化した研究

状況が示された。<sup>20</sup>しかし名称についても時間をついやして議論されていたが、先行研究では、畝状空堀群の機能は斜面の回り込みを防ぐ遮断や、緩斜面を潰す役割、曲輪を多数の空堀で使用できなくした破城と考えられるもの、堅堀だけでなく平坦面などでの使用もあり、地形に応じた様々な機能や役割が想定される。そのため、これらの検討が十分行われないうまま、名称についての議論は空論となる。当面は研究者によってさまざまな名称が用いられながらも、機能や役割などについての議論を十分進めるべきであろう。

## 小結

このように畝状空堀群に関する研究は、さまざまな分類が試みられ分布の特徴などについて検討が試みられてきた。この中で畝状空堀群は全国各地に分布するものの、各地域の中でも粗密があることが明らかとなった。また戦国大名も中小の領主も用い、城郭の規模では大規模から小規模城館まで、種類では拠点城郭から陣城までさまざまな城館に導入されている。そのため畝状空堀群を導入した勢力がどのような勢力か判断しがたいところもある。例えば、京都府綾部市・梨子ヶ岡城の事例では筆者は城館の規模の狭小さから在地の城であると判断した。しかし高田は国人・大名レベルの関与を想定している。<sup>21</sup>このように畝状空堀群の有無だけで築城・改修主体を判定することは困難が伴う。

また年代については、これまで各地域・旧国・府県単位で検討が行われているが、概ね文献史料をもとにその地域で激しい合戦が行われた時期などに当てはめて判断されている。つまり外部からその地域への侵入者、外的インパクトの時期に充てているのである。それによると、畝状空堀群の盛行期は永正～天文が多く、下って天正期とするものもある。また倭城での事例報告もあるように、<sup>22</sup>想定される年代の幅は広い。これは畝状空堀群がもともと堅堀・堀切といった堀を掘るといって、古くからある城館を構成する基本パーツであることが関係し、西股総生氏が指摘するように上から下へ掘っていき、その土を左右へ掘り上げたものであるため、<sup>23</sup>軍事的緊張が高まる政治状況になれば、どの勢力でも技術的には築けることに起因している。<sup>24</sup>

また、畝状空堀群の分類は筆者自身も過去に試みたことがあるが、<sup>25</sup>他にも多数試みられている。横堀と関連するもの、堀切の外側に展開するもの、曲輪と密接な関係にあるもの、離れた場所に展開するものなど立地も様々であり、構造も空堀群の上部で土塁がコブ状になるものや、整然と並ぶもの、間隔があくものなどがある。しかし高田も指摘するように<sup>26</sup>地表面観察には十分でない点もあり、調査者が異なる縄張り図をどのように標準化していくかは難しい問題をはらんでいる。永恵は畝状空堀群上部の形状に着目したわけであるが、筆者は畝状空堀群上部は埋没している可能性もあり、標準化するのは難しいと考えている。そこで現状では畝状空堀群の普請度によって、おおまかに分類する手法が有効であると考えられる。城域全体や曲輪片側などに10本以上の空堀を並べた事例を集積する手法である。この手法によると調査者が異なっても大規模な畝状空堀群の有無は判断ができる。次節では全国各地における畝状空堀群の年代観と分類に関する検討

を行い、全体像を把握したい。

## 第2節 畝状空堀群の年代観と分類に関する研究史

ここでは、主に西日本における各地での畝状空堀群の年代観と、過去に行われた分類について検討する。

### これまでに行われた主な分類案

畝状空堀群の定義についてさまざまな議論があるが、現在のところ定義については『城館調査ハンドブック』<sup>27</sup>によっていると<sup>27</sup>いいであろう。ここでは<sup>27</sup>堅堀と脇の<sup>27</sup>堅土塁を交互に三本以上並べ築いたものを畝状空堀群と定義し、2本の場合は二重堅堀とするとしている。2本と3本の間で峻別することに<sup>27</sup>どれほど論理的な理由が存在するか<sup>27</sup>明確には<sup>27</sup>言えないが、2本以上を<sup>27</sup>畝状空堀群とした場合、<sup>27</sup>分布数は<sup>27</sup>おそらく<sup>27</sup>現在知られている<sup>27</sup>数から<sup>27</sup>倍増すると<sup>27</sup>考えられる<sup>27</sup>ことから、<sup>27</sup>3本以上と<sup>27</sup>定義することに<sup>27</sup>は<sup>27</sup>一定の<sup>27</sup>妥当性が<sup>27</sup>あると<sup>27</sup>思われる。しかし<sup>27</sup>堀の間隔が<sup>27</sup>開くもの<sup>27</sup>もあり、<sup>27</sup>実のところ<sup>27</sup>3本では<sup>27</sup>定義づけが<sup>27</sup>難しい。また<sup>27</sup>堀切などから<sup>27</sup>連続して<sup>27</sup>数本存在するもの<sup>27</sup>もあり、<sup>27</sup>それらとの<sup>27</sup>峻別も<sup>27</sup>問題となる。前述したように<sup>27</sup>堀切などから<sup>27</sup>補助的に<sup>27</sup>数本構築した<sup>27</sup>ものより、<sup>27</sup>大規模に<sup>27</sup>普請された<sup>27</sup>事例を<sup>27</sup>抽出することが<sup>27</sup>望ましいと<sup>27</sup>考えるため、<sup>27</sup>本論では<sup>27</sup>5本以上を<sup>27</sup>対象と<sup>27</sup>したい。

伊藤正一氏は<sup>28</sup>傾斜角度によって<sup>28</sup>A急斜面型、<sup>28</sup>B緩斜面型、<sup>28</sup>平坦面型、<sup>28</sup>D堅堀連接型に<sup>28</sup>分類し、<sup>28</sup>空堀群の<sup>28</sup>立地する<sup>28</sup>傾斜角度に<sup>28</sup>着目している。第3回<sup>28</sup>セミナー<sup>28</sup>開催時には<sup>28</sup>全国的な<sup>28</sup>分布が<sup>28</sup>明らかになり、<sup>28</sup>分類については<sup>28</sup>他の<sup>28</sup>諸施設との<sup>28</sup>関連に<sup>28</sup>着目された<sup>28</sup>。池田憲和氏は<sup>29</sup>半装型、<sup>29</sup>全装型、<sup>29</sup>限定装備、<sup>29</sup>堀切接続など<sup>29</sup>曲輪や<sup>29</sup>堀切などの<sup>29</sup>との<sup>29</sup>関係に<sup>29</sup>着目し、<sup>29</sup>傾斜<sup>29</sup>角度も<sup>29</sup>A緩傾斜、<sup>29</sup>B急傾斜型、<sup>29</sup>C水平型、<sup>29</sup>規模を<sup>29</sup>A普通型、<sup>29</sup>B特大型と<sup>29</sup>分類している。千田嘉博氏は<sup>29</sup>横堀との<sup>29</sup>接続に<sup>29</sup>着目し、<sup>29</sup>配置が<sup>29</sup>尾根上か<sup>29</sup>谷に分けて<sup>29</sup>両者を<sup>29</sup>組み合わせて<sup>29</sup>検討している。千田氏の<sup>29</sup>検討はその<sup>29</sup>後、<sup>29</sup>横堀が<sup>29</sup>曲輪の<sup>29</sup>機能分化の上で<sup>29</sup>果たした<sup>29</sup>役割が高いと<sup>29</sup>判断し、<sup>29</sup>横堀との<sup>29</sup>組み合わせによって、<sup>29</sup>I類（<sup>29</sup>単独）、<sup>29</sup>II類（<sup>29</sup>横堀と<sup>29</sup>セット）に<sup>29</sup>分類し、<sup>29</sup>横堀のない<sup>29</sup>I類が<sup>29</sup>畿内から<sup>29</sup>中部・<sup>29</sup>関東に<sup>29</sup>多く、<sup>29</sup>II類は<sup>29</sup>中国、<sup>29</sup>四国、<sup>29</sup>九州北部、<sup>29</sup>東北南部に<sup>29</sup>密に<sup>29</sup>分布することから、<sup>29</sup>織豊政権との<sup>29</sup>対峙まで<sup>29</sup>畝状空堀群を<sup>29</sup>発達させて<sup>29</sup>いったと<sup>29</sup>推定する。

千田論には<sup>30</sup>いくつか<sup>30</sup>批判もある。筆者も<sup>30</sup>畝状空堀群と<sup>30</sup>横矢掛との<sup>30</sup>事例を取り上げ、<sup>30</sup>段階的な<sup>30</sup>発展を<sup>30</sup>論じ、<sup>30</sup>松岡進氏も<sup>30</sup>畝状空堀群と「<sup>30</sup>館屋敷型・<sup>30</sup>並立型」「<sup>30</sup>機能分化型・<sup>30</sup>求心型」の<sup>30</sup>分布の<sup>30</sup>ずれを<sup>30</sup>指摘している。しかし<sup>31</sup>高田徹氏が<sup>31</sup>千田論を「<sup>31</sup>もっとも<sup>31</sup>明快かつ<sup>31</sup>説得力のある<sup>31</sup>論述」と<sup>31</sup>評価するように、<sup>31</sup>その<sup>31</sup>後の<sup>31</sup>研究の中<sup>31</sup>でも<sup>31</sup>横堀との<sup>31</sup>接続の有無が<sup>31</sup>大きな<sup>31</sup>年代<sup>31</sup>判定を行う<sup>31</sup>根拠と<sup>31</sup>されてきた<sup>31</sup>ことが<sup>31</sup>示すように、<sup>31</sup>全国的に<sup>31</sup>数多く<sup>31</sup>分布する<sup>31</sup>畝状空堀群を<sup>31</sup>説明する<sup>31</sup>うえで<sup>31</sup>魅力的であった<sup>31</sup>ことは<sup>31</sup>間違いない。

これら<sup>32</sup>諸研究を受けて、<sup>32</sup>永恵裕和氏は<sup>32</sup>京都府での<sup>32</sup>事例検討で、<sup>32</sup>畝状空堀群<sup>32</sup>A類と<sup>32</sup>土塁

が主体のB類に分類し、両者が共存する舞鶴市宇谷城の事例検討を踏まえ、A類が先出しB類が後出すると説明する。<sup>33</sup>但馬地方での事例検討ではさらにB類に上部に横堀を伴うB2類を加えるが、<sup>34</sup>先に指摘したように空堀群上部は埋没の可能性もあり、標準化するのには難しい。そのためその検討によって導き出された結論も危うさを伴う。

北垣聰一郎氏は新旧に分類し、初期のものを尾根先端部や谷にあり形状は不規則で、後半には規則的に曲輪下に敷設され、数量も倍増し、堀切、横堀などとの組み合わせが生じるとし、祖形は天文・永禄年間に大和、越前丹後、但馬に求めた。<sup>35</sup>

戦国期城郭には戦国大名や在地の国人が築いた地域拠点城郭や、戦時に一時的に構築・利用された陣城（再利用含む）など、さまざまなパターンがあり、政治状況や築城主体の性格によっても規模や形態が異なる。それぞれ得られる条件によって、築城される山の規模や立地も異なる。その中で防御上の観点で地形を克服するため、曲輪や堀切、堅堀が構築されるわけだが、畝状空堀群は上から下へ掘削し、これを連続していくことで構築できるため、比較的導入が簡易である。城郭の立地する周辺斜面の形状がそれぞれの城郭で異なり、同一の城郭でも斜面形状により一連の造作でも異なる分類のものが築かれていることもあり、分類は難しい。また西股総生が指摘するように、掘削残土は傍らに積み上げていく手法で構築されたものと考えられる。つまり地形を克服する手法として、導入されたと考えたい。ここで村田修三氏の指摘を紹介すると、島根県鳶巣城（周布城）の事例を取り上げ、尾根の背が広がったなだらかなところに築かれたAと、谷地形のBに分類している。Aは尾根上に展開するので横堀とも解せるとしている。全国に分布する畝状空堀群の殆どがこのA・Bタイプで説明できるとする。<sup>36</sup>村田のAタイプは緩斜面型、水平型と同類で、Bタイプは急斜面型と同類とみなせる。この指摘は重要で堀切の外側の緩斜面に設置される事例なども同様で、地形を克服する手法として畝状空堀群は多用されたことが指摘できる。つまりAタイプは傾斜の緩い空間を潰すことが目的で、谷部分は堀切などからの回り込みを防ぐ目的で築かれている。多くの戦国期城郭が築城主体特有の築城技法というより、地形克服という問題に対して、導入しやすい畝状空堀群という手法を使っている姿が浮かび上がるのである。

## 分布論

個別の分類はともかく、西日本における畝状空堀群の所在地を確認してゆくと京都府北部（丹後、丹波北部）、兵庫県北部（但馬地方）、兵庫県南部（播磨地方）、岡山県北部（美作地方）、島根県西部（石見地方）、広島県（安芸地方）、福岡県北部（筑前地方）、高知県、愛媛県南部などに集中的にみられる。ただしそれらの中でも詳細に観察すると、粗密が見られるのも確かである。<sup>37</sup>

1980年代には新潟県から北陸、近畿への伝播、あるいは中国地方の毛利氏が北部九州などへ持ち込んだとされる技術伝播論が広く支持された。松岡秀夫氏は伊藤正一氏らの研究を受け、主要分布域が新潟県をはじめとした日本海側にあり、そこから若狭・但馬

などから播磨へ伝播したと<sup>38</sup>考えた。また中村修身は毛利氏ら中国地方の武将によって数度にわたって持ち込まれ、それが福岡県下を中心とした山城の築城技術として発展したと<sup>39</sup>みる。また寺井毅氏は畝状空堀群は毛利氏によるものではなく、益田氏、本城氏、高橋氏等の毛利氏に対抗した勢力によって改修されたものとし、特に益田氏に特定の技術集団の存在を想定している<sup>40</sup>。

しかし近年の各府県における分布調査の成果をもとに捉えなおすと、この技術伝播論では説明ができないと考える。つまり毛利氏による技術伝播とすると、九州北部への侵攻や、兵庫県但馬地方は毛利氏と気脈を通じていたので説明できても、丹後は結びつきを見出し難い。日本海側から播磨地方への伝播論も、但馬から播磨への伝播は近接するためあり得ても、なぜ同じ日本海側の但馬から因幡へは伝播していないか説明できない。これは以前拙論<sup>41</sup>で検討したように、ある特定の勢力が独占的に用いる技術ではなく、あらゆる勢力が利用できる下地があり、政治状況や軍事的緊張下に置かれることで創出されるものであるため、各地で多発的に出現したものと考えられる。

岡寺良が指摘する秋月領国下における分布状況も、対立した勢力との軍事的緊張下にある地域では畝状空堀群が増える傾向があり、それと同じような状況が各地で起こったことが分布の粗密の原因と考えられる。つまり畝状空堀群の分布を仔細に検討することで、その地域における軍事的緊張状況や政治状況を汲み取る指標とできると考える。その構築主体としては戦国大名も用い、中小の国人クラスも用いる普遍的な技術であると見られるが、個々に検討してゆくことで、ある程度築城主体は推定できるであろう。

#### 地域別年代観

現在、主に旧国単位程度で年代観が示されている。しかしほとんどの場合、文献史料による研究成果で最も軍事的緊張が高まった時期に当てはめられる事例が多い。例えば北垣聰一郎氏は永禄8年(1565)に書写された『築城記』に「山城ニ者タツ堀可然候」という記載に着目し、朝倉氏の一乗谷城に見られる畝状空堀群と想定している<sup>43</sup>。但馬では西尾孝昌氏によって検討が行われ、千田氏のいうⅠ類が天正3～5年、Ⅱ類が天正6～8年と推定している<sup>44</sup>。丹後・丹波北部では永正年間に細川政元・若狭守護武田元明による丹波北部及び丹後国加佐郡への侵攻と、永禄年間の丹波守護代内藤宗勝による加佐郡・若狭西部への侵攻という軍事的インパクトがあり、永正年間、あるいは永禄年間が想定されていた<sup>45</sup>が、近年の分布調査成果により丹後東部の舞鶴市周辺だけでなく、丹後半島でも数多く検出されたことで、改めて検討する必要がある。福岡県では岡寺氏が秋月氏領国下での検討で天正期と推定している<sup>46</sup>。四国では吉成承三氏が発掘事例をもとに検討し、16世紀後半(永禄～天正)を想定している<sup>47</sup>。

これらを総括すると、概ね永正から天正期が想定され、16世紀代ということになる。後述するように筆者は発掘調査による成果を検討する中で、畝状空堀群自体からの出土遺物が少ないため、直近の曲輪での遺物年代観<sup>48</sup>を援用し構築年代を推測した。詳細は第

1部第2章で触れるが、第1段階として、14～15世紀にかけて堅堀の本数が少なく堀切から連続するものを初源的なものと捉え、第2段階を15世紀半ば以降、堅堀の本数が増えていく過渡的な時期、第3段階を16世紀代とし堅堀が群としてのまとまりを持ち始める時期、第4段階として16世紀後半に堅堀上部が横堀状となる事例が見られ、堀の形状や間隔などの規格性が強まる成熟期と位置付けた。つまり14～15世紀には堅堀の間隔が開くなどまとまりに欠けるものが、16世紀に入ると規格性が強まり、16世紀後半になると10本以上の単位で規格性を持つようになるのである。しかしながら現状では発掘調査においても、堀内部から年代を明確にする出土遺物はなく、年代を特定することは難しい。そのため文献史料に拠りながら年代を比定していくことになるであろうが、数年単位での年代比定は難しいと考えられる。しかし文献史料による軍事的インパクトが、爆発的に畝状空堀群が増える契機になっているという想定は正しいと見られるため、地域ごとに盛行する時期を見極めていくことが必要である。

### 名称について

畝状空堀群はこれまでの先行研究ではさまざまな呼称で呼ばれてきた。「畝形阻塞」「連続堅堀群」「畝状堅堀群」などである。千田は平坦面に存在するものもあることから堅堀ではなく空堀とすべきだとした<sup>49</sup>。

33回セミナーでは名称についての議論も行われ、そこでも様々な用語が使用されている。先述したように畝状空堀群にはさまざまな機能があり、堅堀に限定するのは不十分である。また「畝」という用語も正確ではない。しかし16世紀後半にはある一定のまとまりを持った「群」として機能し、単純に堀を並べただけではない施設となることを考慮すれば、「畝状空堀群」や「畝形阻塞」など、「畝」という呼称を用いることにも一定の意味があろう。いずれにせよ名称については、機能や役割が十分に議論・整理される中で自ずと定まってくると考えられるので、本論では「畝状空堀群」を用いることとする。

### 小結

「畝状空堀群」は主に斜面の上から下へ連続して掘ることで導入できるため、数多くの城館で用いられている。上部の切岸を削り込み横堀状にしているものもある。従来この横堀の有無によって新旧を判別する手法が見られたが、現段階に置いて地表面観察による縄張り図をもとに標準化するには、難しい点が多い。またその構築を特殊な技術とみなし、特定の技術者集団や戦国大名・国人に付随する技術と考える見方もあったが、その発展形態から考えると、必ずしもそうとはいえない。むしろ、導入の簡易さから小規模城館から大規模城館まで、拠点城郭から陣城まで広範囲に導入された施設であると考えられ、そのため全国的に分布が確認できるのである。しかし旧国単位で見ても局所的に分布する地域や、ほとんど分布が見られ地域もあり、これは当地における政治状

況が背景にあると考えられる。

## おわりに

城館研究に置いて斜面部分に注意が払われるようになったのは、1970年代から第3回セミナーが開催された1986年頃と日が浅く、当初「畝状空堀群」は特殊な施設と見られがちであった。またその分布も新潟県での報告が特筆され、技術伝播論も多くみられた。しかしその後、全国的な分布が確認されるようになり技術伝播論では説明が出来ない状況となってきた。分類についても、斜面部分は埋没の可能性も高く、現地がブッシュにより調査不能の場合もあるので、地表面観察における分類は過剰評価とならぬよう、抑制的にならねばならない。ある程度このような困難な状況が伴うものの、地表面観察による調査は概要の把握や、広範囲に比較検討できる点など非常に有効であるため、可能な限り標準化できる手法が必要である。そこで本論では堀の本数によって大規模に普請されたものか否かを判別する手法をとることが有効であると考えられる。

- 1 伊藤正一 1977、中村修身 2000、西尾孝昌 2001、保角里志 2001、堀口健式 2005、松岡秀夫 1985
- 2 田中寅吉 1959、高屋茂男 2014 において研究史上に位置づけた。
- 3 高田徹 2016、高田徹 2017a、b
- 4 中世城郭研究会 1986
- 5 松岡秀夫 1985
- 6 中村修身 2000、岩崎健 2003、2004、2005
- 7 北垣聡一郎 1988
- 8 村田修三 1987b
- 9 北垣聡一郎 1992
- 10 千田嘉博 1990
- 11 松岡進 2000
- 12 高屋茂男 2002
- 13 松岡進 2004
- 14 城郭談話会 2004、福島克彦 1993
- 15 永恵裕和 2012
- 16 高田徹 2017
- 17 高屋茂男 2012
- 18 岡寺良 2012
- 19 高屋茂男 2015
- 20 内野和彦「奈良県下での畝状空堀群を有する城郭について」、秋本哲治「安芸毛利氏本拠地周辺における連続空堀群の分布」、吉成承三「畝状空堀群からみた四国の城館」、岡寺良「九州北部における畝状空堀群の様相」、永恵裕和「畝状空堀群の編年と課題」、中西義昌「畝状空堀群からみた「大名系城郭」概念の再評価」、高田徹「近畿地方の畝状空堀群・畝状空堀・連続空堀」、三島正之「東国における多重防御遺構の展開」の報告がなされ、その概要は『中世城郭研究』第 31 号 2017 において掲載されている。
- 21 高田徹 2017
- 22 堀口健式 2005
- 23 西股総生 2002
- 24 松岡進 2002、遮断系技術として畝状空堀群を位置付け、在地系技術を畝状空堀群が代表するという見方に対して、「地域に根差した自立的な領主たちの緊急の軍事力編成にとってとりわけ有効な技術だったのであり、織豊系以外の技術的發展総体を代表したわけではない」指摘する。また「在地での自生的な発展の全体像を得るためには、(中略) 導入系の技術や、遮断系の技術の多様な開花も視野に入れなければならない」とする。畝状空堀群を積極的に導入する地域とそうでない地域には、その地域における政治状況、軍事的緊張など様々な要因が根源にあり、けして単純に大名勢力や在地のみに結び付けられるものではない。
- 25 高屋茂男 2004、2013
- 26 高田徹 2017、兵庫県豊岡市坂津城での事例をあげ、西尾孝昌氏の先行図を高く評価しながらも、地表面観察による縄張り図は、改善の余地が見られる点を指摘している。斜面部分の遺構は藪や足元が不安定ということもあり、調査が難しい点もあり畝状空堀群の標準化の問題点である。
- 27 千田嘉博ほか 1993
- 28 伊藤正一 1984
- 29 中世城郭研究会 1986

- 30 高屋茂男 2002
- 31 松岡進 2000
- 32 高田徹 2016
- 33 永恵裕和 2012
- 34 永恵裕和 2016
- 35 北垣聰一郎 1992
- 36 村田修三 1998
- 37 美作国の山城 2011
- 38 松岡秀夫 1985
- 39 中村修身 2000
- 40 寺井毅 1991
- 41 高屋茂男 2017a
- 42 岡寺良 2006
- 43 北垣聰一郎 1988
- 44 西尾孝昌 2001
- 45 高屋茂男 2004、福島克彦 2002
- 46 岡寺良 2006
- 47 吉成承三 2017
- 48 高屋茂男 2014、しかしながら時期の特定には畝状空堀群の年代と曲輪面での異なる可能性もあるため注意が必要である。
- 49 千田嘉博ほか 1993

## 第2章 畝状空堀群の分類と構造

### はじめに

地表面観察による縄張り図をもとにした研究は、全国的視野に立って検討する場合非常に有効ではあるが、前節でみたように、新旧の判別の手法として利用されることが多かった畝状空堀群上部の横堀については埋没している事例が散見される。そのため発掘調査された事例を集積し、断面図や傾斜角度、出土遺物などから検討を行い、そこで得られたデータをもとに検討することが有効な手段と考える。ここでは主に西日本での発掘調査事例をあげて検討を行いたい。

### 第1節 畝状空堀群の構造

#### 畝状空堀群の発掘調査事例の検討

##### (1) 園田浦城跡（福岡県北九州市）<sup>1</sup>（第1図（1））

園田浦城跡は「本郭」「北郭」「南郭」とされる3つの小山が南北に連なる地形を利用した大規模な城跡である。畝状空堀群は「北郭」で3条確認されている。堅堀1・2と小曲輪をはさんで堅堀3がある。堅堀1の断面は「コ」字状、堅堀2は台形状である。堅堀3は「V」字状である。発掘調査では14世紀後半から15世紀前半の土器、陶磁器が確認され、堅堀もこの時期とされている。園田浦城跡の畝状空堀群は遺物から推定される年代観は、従来の畝状空堀群の年代観としては古い次期となるが、初現的なものとして把握できるものである。

##### (2) 庵原城跡（静岡県静岡市）<sup>2</sup>（第1図（2））

庵原城跡は丘陵部に主要な曲輪を配し、堅堀、虎口などを計画的に配置した小規模ながらも戦国期に利用された印象を与える。しかし発掘調査では斜面部分での調査が行われ、曲輪面では行われていない。そのため最終利用の年代は不明であるが、堅堀が4本確認され、堅堀3では堀内から出土遺物があり、概ね15世紀代と考えられる。遺物の年代観と縄張りから得られる年代観が異なるが、曲輪面の調査が行われていないので、明確には言えないが、堅堀の構築は15世紀代でその後も曲輪は16世紀代になっても利用されたと推定される。

##### (3) 西本城跡（高知県黒潮町）<sup>3</sup>（第1図（3））

西本城跡は丘陵の先端に位置し、城の背後にあたる南側は3重の堀切で遮断している。主郭の西側には堅堀1・2と小曲輪をはさんで堅堀3がある。発掘調査により出土した遺物から15世紀中頃から16世紀前半のものとしてされている。また土師質土器の出土が少なく、高知県内での小規模城郭の出土傾向を示しているという。西本城跡の畝状空堀群も園田

浦城跡とともに、年代観としては古い時期に位置する。本数も少なく初現的なものと考えてよいであろう。

(4) 伴東城跡（広島県広島市）<sup>4</sup>（第2図（4））

伴東城跡の主郭部分は配水池が設けられ改変をうけている。畝状空堀群は主郭東側の堀切の北側斜面より6条検出されている。西側の2条の堅堀の幅は断面も箱や薬研を呈し、東側は土塁状となり、不規則なものである。これら空堀群は標高75mのラインから上の緩傾斜の部分に築かれており、これをつぶす目的と考えられる。出土遺物は曲輪からの遺物であるが、15世紀中頃から16世紀前半にかけてと推察される。

(5) 三ツ城跡（広島県東広島市）<sup>5</sup>（第2図（5））

三ツ城跡は尾根上に並ぶ3つの起伏部を中心とした城で、それぞれが堀切で分断されている。畝状空堀群は第1郭の北から西側にかけての9本の空堀群1と、第5郭の南側に展開する10本の空堀群2がある。空堀群1はその形状からA（1-1, 2, 1-7~9）とB（1-3~1-6）に分けられる。Bは畝の上部を横堀とし堀切とつなぐ例は知られるが、下部を堀切でつないでいる点はめずらしい。上部の曲輪とは少し距離があるが空堀群側には柵列が確認されている。空堀群2も上部の曲輪とは距離を置き敷設されており、第5郭から俯瞰できる位置にある。報告書による出土遺物の年代観は15世紀前半から16世紀前半とする。

(6) 有井城跡（広島県広島市）<sup>6</sup>（第2図（6））

有井城跡では、第1郭の縁辺部を取りまくように13本の堅堀が確認されている。調査区は第1郭の北西半分のみで、検出された堅堀以外にも存在の可能性がある。検出された堅堀は、幅0.5~4m、深さ0.2~0.4mを計り、断面はU字型を呈するが、地形が急斜面で危険なためその長さ等の全容は明らかになっていない。この検出された空堀群のうち最も西側の堅堀の上端部から備前焼の甕の破片が出土している。出土遺物から当城の最盛期は、15世紀後半~16世紀初頭と推測されている。報告書からは発掘調査された以外の部分での、堅堀の敷設の状況はつかめないが、発掘調査により畝状空堀群の年代が明らかに出来る遺構としては古い時期にあたる。

(7) 西山城跡（高知県中土佐町）<sup>7</sup>（第2図（7））

西山城跡は標高70mの丘陵上に構築されている。全面的に発掘調査され、尾根上には複数の堀切が設けられている。畝状空堀群は曲輪1の西側斜面を下ったあたりに3条、曲輪2の東側斜面を下ったところに3条とその下方に5条と2段に構築されている。その他全域で19本の堅堀、10本の堀切が確認されている。検出された遺構には建物跡や虎口、通路などがある。出土遺物は3180点と多く貿易陶磁器や瀬戸・美濃系陶器も認められる。貿易陶磁器の中には青磁香炉、盤、花瓶などもあり、威信財として用いられたものも見られる。その帰属時期は大きく15世紀前半代と15世紀後半から16世紀前半にかけての時期に分かれるが、最終的な縄張りに改修されたのは、15世紀後半から16世紀前半と考えられている。また、曲輪2の土塁2と横堀1、堅堀1は土層の観察から同時に整

備された可能性が考えられている。そのため、東側斜面の豎堀 12～19 が先行して存在し、後に横堀 1、豎堀 1、土塁 2 が構築されたと判断される。また姫野々城跡などの事例も踏まえて、西側斜面の豎堀 6・7 や東側斜面の豎堀 17～19 のような U 字形の豎堀は天文年間が想定されている。

(8) 伐株山城（大分県玖珠町）<sup>8</sup>（第 3 図（8））

伐株山城は玖珠城、高勝寺城ともいい、山頂部分がなだらかな伐株山にある。第 1 土塁から第 7 土塁までの方形の土塁囲みの曲輪が点在する。このうち第 1 土塁の西側に 4 本の空堀群があり、このうち 2 本でトレンチ調査が行われている。空堀群自体が発掘された希少な事例のひとつ。調査面積が狭いため、出土遺物は確認されていないが、付近の曲輪面での調査では 16 世紀代と思われる染付や青磁、白磁が見つかっており、この頃に年代を推定したい。空堀群断面の観察によると、地山面を掘り込み、その土を左右へ盛ったと考えられる盛土層が確認されており、構築方法がうかがえる貴重な事例である。

(9) 牛の皮城跡（広島県御調町）<sup>9</sup>（第 3 図（9））

牛の皮城跡は山頂の標高約 230 m にある南郭群と、標高約 160 m の北郭群に分かれ、両方あわせると大きな城となる。この両郭群で畝状空堀群が導入されている。発掘調査は北郭群で行われ、調査範囲内では 9 条、調査外を含めると 27 条の豎堀が確認されている。調査区内の 9 条は上部が横堀により結ばれ、調査区外の 5 条の豎堀ともつながっている。豎堀 3～6 は長さや堀幅、深さや、堀と堀の間隔も同質で、この 4 本と他の堀とは少し間隔が空いたり、長さが短いなどの相違がある。また土層の確認により、豎堀間には盛土があったことが確認されている。遺物は遺構の掘り下げ中に青磁の盤の破片が出土している。遺構の年代は出土した土師質土器では 15 世紀から 16 世紀初め、輸入陶磁器が 15 世紀から 16 世紀末頃までと考えられるため、概ね 16 世紀代と判断される。

(10) 三の宮東城跡（京都府京丹波町）<sup>10</sup>（第 3 図（10））

三の宮東城跡は小規模な盆地に面した城で、標高 280 m の山頂に位置し、ほぼ全面が発掘調査された。畝状空堀群は曲輪 1 の虎口脇にある曲輪 2 の南側に 6 本確認されている。曲輪 2 には礎石建物（SB5）や石列が確認されている。この石列は小規模な土塁状となり、長さ 5 m ほどで曲輪全体を巡らない。同様の石列が曲輪 1 でも確認されており、塀などの基礎と考えられている。この塀の下部の豎堀は掘りが浅く、それ以外は深いという対応が見られる。城全体では枳形虎口や石積みのほか、排水溝が整備されるなど、小規模城館ながら整った城である。出土遺物から 16 世紀前半を中心に中ごろまで使用されたと考えられる。いわゆる小規模城館だが、各曲輪の役割が明確で虎口や石積みが見られる整った城である。畝状空堀群の上部には、塀の存在が確認され畝状空堀群との対応が想定される例である。

(11) 大俣城跡（京都府舞鶴市）<sup>11</sup>（第 3 図（11））

大俣城跡は谷部にあり、標高 80 m の位置にある。小規模城館であるが、主郭のまわり

を一周するように帯曲輪が巡り、虎口や畝状空堀群が確認されている。堅堀は計 11 本確認されているが、そのうち曲輪 3 の南側と西側に 3 本ずつ確認されている。曲輪 3 は西から南にかけて土塁が L 字状に曲がっている。また、東側の下部へ降りる通路から土塁とつながるように柵が確認されている。出土遺物は 15 世紀から 16 世紀後葉のものを含んでいるが、16 世紀第 3 四半期のものが最も多い。大俣城跡も三の宮東城跡と同じく小規模城館でありながら、虎口が明確で整った城跡である。曲輪 3 の土塁や柵と畝状空堀群とが対応関係が確認できる事例である。

(12) 御飯山城跡（福岡県福岡市）<sup>12</sup>（第 3 図（12））

御飯山城跡は、標高 91 m の山頂にあり、麓の里城と長大な堅堀で繋がれた壮大な城である。全面的に発掘調査が行われ、主郭、小郭、堀切、虎口、通路とともに、17 条の堅堀が確認されている。畝状空堀群と評価できるのは、主郭西北側の二重堀切から連続する堅堀 6・8・9 と、南東側の堀切 3 と繋がる堅堀 12・14・15・16 である。主郭では、7 棟の堀立柱建物跡が確認され、虎口では門・櫓の痕跡が確認されている。出土遺物からは 16 世紀第 4 四半期のものが見られ、空堀群の年代もこの最終段階に求めてよいと思われる。16 世紀第 4 四半期という年代観は、従来から言われている畝状空堀群の年代観に合うものである。また堅堀内や斜面などから投石用の石があるのも特記される。

(13) 香春岳城跡（福岡県田川郡香春）<sup>13</sup>（第 4 図（13））

香春岳城跡は香春岳（一ノ岳、二ノ岳）に築かれた城で、一ノ岳と周辺は石灰岩の採掘により破壊されている。遺構は二ノ岳を中心に残されている。山の地質が石灰岩の岩山のため、随所にその石を用いた土塁が設けられている。発掘調査により明らかとなった畝状空堀群は一ノ岳に続く鞍部分で行われた。尾根に沿って 2 本の土塁が設けられており、そこでは建物跡などは確認されなかった。この鞍部の西側斜面に道路によって破壊されているが、一ノ岳側に 8 本、二ノ岳側に 9 本の堅堀が確認されている。戦前の空撮写真によると 22～23 本が確認できる。堅堀の長さは 20 m に達する。一ノ岳側には堅堀上に曲輪があり、土塁が構築されている。また集石遺構が確認されている。出土遺物から 16c 後半の陶磁器類と 15 世紀前半の備前焼壺が確認されているので、16 世紀代に機能したと考えられる。

(14) 石山城跡（福井県おおい町）<sup>14</sup>（第 4 図（14））

石山城跡では尾根上に掘られた堀切の前面に、2 本の堀切とその外側に堅堀 6 本の畝状空堀群が確認された。文献上では元亀元（1570）年に破却との研究があるが、畝状の確認された調査区 E 区出土遺物による関係では、16 世紀代半ばから後半に位置づけられる。堀切から連続して城域の内側に連続するタイプの畝状空堀群の事例が地表面観察から確認されることも多いが、このように堀切の外側に放射状に展開する事例として確認できる。

(15) 平山城跡（京都府綾部市七百石町）（第 4 図（15））

平山城跡は標高 298 m の高城山の北西部裾部を掘り切って独立丘陵とし、その頂部に

築かれている。昭和61年62年度の発掘調査で第1郭、第2郭の1部が発掘調査された。この調査で14条の畝状空堀群が確認された。位置的には第2郭の西側側面にあたる。発掘調査では堀切も含めて14条の畝状空堀群が確認されている。堀切から城域の内側に展開するタイプで、畝状空堀群の上部を横堀でつなぎ、堅堀の規模も大きく小規模城館での敷設の最終発展的な事例として確認できるものである。

(16) 城山城跡（島根県松江市）<sup>15</sup>（第5図（16））

城山城跡は宍道湖西南岸に位置し、標高約70mの山頂にある。発掘調査により6本の堅堀が明らかとなり、その他、地表面の観察から2本確認され、合計8本の堅堀がある。調査区内の堅堀1～7のうち、2、3、4を横切るように横堀が構築されている。土層からは堅堀との前後関係は確認されなかったが、堅堀4との交差部分や堅堀内部に人頭大の石が集積されていることから、横堀が後から設置されたと推測される。堅堀2からは青磁碗の底部が出土している。この青磁碗をはじめその他出土遺物から、15世紀代から16世紀のものと考えられる。畝状空堀群のみの敷設から、横堀をともなう遺構への改変が確認できる事例として貴重であり、横堀や堅堀ないから集石が確認されているのも、畝状空堀群の利用方法を考える上で重要である。

(17) 上林城跡（京都府綾部市）<sup>16</sup>（第5図（17））

上林城跡では西の曲輪で堀切から連続して、3条の堅堀が検出されている。上部の曲輪ではU字状の溝が掘られ、3本の堅堀の外側2本が小溝でつながれている。また一番南側の堅堀は途中で途切れて、やや屈曲している。この溝は排水の可能性もあるがつまびらかでないが、この曲輪の造成、溝、堅堀の構築は同時期とみてよく、堀切も同様であろう。また堅堀がある南東側斜面では多量の土砂が堆積しており、人為的なものと考えられている。報告書では2段階の造築を想定している。第1段階は堅堀+曲輪上の溝の構築時期、第2段階は曲輪を削平し堀切、堅堀などを埋め、曲輪面積を拡大した時期である。これから検討すると、堅堀上部の溝は他の類例でも見られる横堀の基底部の可能性もある。

(18) 元城跡（愛媛県大洲市）<sup>17</sup>（第5図（18））

元城跡は発掘調査段階で既に道路工事によって大半が消滅していたが、過去に作成された縄張り図によって発掘調査によって明らかになった5本の他に8本の堅堀があったことがうかがえる。畝状空堀群はE区内で5本確認され、これらの堅堀は全て横堀から落ちるものである。各堅堀は概ね同じような規模であるが、堅堀3・4は横堀との接続点近くでは堀底がV字状を呈するが、下部ではU字状となっている。堅堀5では堀底がステップ状になっている箇所が認められ通路として使用されて可能性が指摘されている。また横堀のうち第2土塁の部分では大きな岩盤が露出しており、横堀の幅を狭めている。この岩盤の西側には集石遺構が確認されている。各堅堀間には土塁があるが、横堀の堀底からは1.6mの高さがある。注目されるのは横堀が堅堀2で合流し終わっており、その先は一段掘り下げている。そしてその南側には1段高くテラス状の小曲輪が附属し横堀を

俯瞰するような位置にある。南側はさらに豎堀 1 で遮断している。

(19) 亀崎城跡（広島県広島市<sup>18</sup>）（第 6 図（19））

主郭を中心に西に第 2 郭、北東側に第 3 郭が存在し、そのまわりに地表面観察も含めて 7 本の豎堀が確認されている。そのうち発掘調査された豎堀は 3 本である。そのうち第 2 郭の豎堀は、報告書で堀切とされる堀と接合しているが、等高線に沿ってあることから横堀状になっていると判断できる。この上部に位置する第 2 郭は 6 つの段に区画されるが、河原石の集石遺構が確認されている。第 3 郭北東側の豎堀 2 本は傾斜の緩い豎堀で、ほぼ同様の形態の豎堀である。堀の形態は箱堀で三ツ城跡や三重山城跡と類似点が見られる。全体的に斜面部分の調査がなされていないため、豎堀の詳細については不明な点が多いが、出土遺物から 16 世紀代と判断される。

(20) 長野城跡（福岡県北九州市小倉南区<sup>19</sup>）（第 6 図（20））

畝状空堀群の事例として最も有名なものの一つである。248 本の空堀があり全国有数の数である。長野城跡の主要部分は本郭、二の郭、三の郭に分けられるが、本郭の南側の畝状空堀群でトレンチ調査が行われると共に、上部の曲輪でも発掘調査が行われている。堀からは遺物が検出されていないため、年代を確定するものではないが、曲輪での調査で焼失した建物の跡や、15～16 世紀の遺物が確認されている。詳しい年代の特定には至らないが、堀の形状が確認できたのは大きい。

(21) 国重城跡（広島県広島市<sup>20</sup>）（第 6 図（21））

発掘調査により柵列 2 カ所、石垣 1 カ所、礎石建物跡 1 軒分が確認されている。空堀群は第 4 郭で確認された。豎堀は 1～3 が確認され、他に 2 本が想定されている。豎堀 1 と 4 で第 4 郭の南北を固め、間に豎堀 2 と 3 が配置され密に連続せず間隔を置いている。豎堀 4 は崩落のため詳細な調査が行われていないが、第 3 郭の南側の空堀と連結する可能性がある。遺物から 15 世紀～16 世紀と考えられている。

(22) 高江城跡（佐賀県玄海町<sup>21</sup>）（第 6 図（22））

高江城跡は主郭を中心に北東側に 2 本の堀切と、副郭とされる曲輪が存在する。畝状空堀群は主郭の北から西側にかけて地表面観察により 10 本が確認され、北側のものは途中で帯曲輪が入るため上下 2 段になっている。発掘調査は主郭を中心に副郭や堀切部分などで行われ、畝状空堀群の部分は発掘調査されていない。しかし主郭北東側にある土塁と堀切部分のトレンチ調査により、土塁内部から 16 世紀前期から中期の遺物が出土している。土層の観察により、この土塁は堀を盛って造成されたとされている。このことから現状見られる縄張りは 16 世紀中ごろから後半頃のものだと判断される。畝状空堀群については、年代の特定は出来ないが、この堀切と土塁の造成された時期を大きく下るものではあるまい。

(23) 三重山城跡（福井県吉田郡永平寺町<sup>22</sup>）（第 6 図（23））

三重山城跡は主郭の南北に堀切を設けまわりには帯曲輪状に緩斜面が存在する。東側の緩斜面では造成や水道管敷設工事などにより攪乱され豎堀の一部が確認されているが

つまびらかでない。西側緩斜面では4本の堅堀が確認されている。4本は3m間隔を保ち設置され、土層から同時期に敷設されたものと考えられる。遺物は確認されていないため年代については不明だが、堀切に連続し緩斜面をつぶす意図と考えられる事例としてあげておく。

### 畝状空堀群の構造

ここでは畝状空堀群の構造について検討する。

#### 堀の形状

堀底の形状は断面図(第7・8図)を見ると、箱型(大俣城)、U字型(牛の皮城)、V字状(平山城)など様々な形状が確認できる。空堀と空堀の間は土塁状になるが、盛土された部分は発掘調査でも明らかにされた事例は少ない。数少ない事例のうちのひとつに伐株山城がある。土塁部分はいくつかの盛土された層が確認でき、空堀を掘った土を両側に盛った形跡が確認できる。しかし多くの場合、盛土された土は空堀内に流出したと考えられる。大俣城でも空堀内の土層を観察すると、土塁部分の土が空堀内に流出したと判断される。これらのことから土塁部分の盛土は、けしてしっかりと構築された構造物ではないと考えられる。そのため経年変化によって盛土の大半が失われたと考えられる。このことは畝状空堀群は、基本的に空堀部分に構築の重点が置かれ、土塁部分の普請に十分力が払われていないことを意味する。ただ空堀構築に伴い簡易的に構築された土塁部分の盛土上は歩きにくく、それそのものも意図したものかもしれない。

#### 構築位置

牛の皮城、石山城、元城では地形が緩やかになった(等高線の間隔が広い)部分に畝状空堀群が構築されている。緩やかな傾斜の地形を使用不能にする目的と考えられる。しかしこのままでは空堀内を登ってきた敵はそのまま城内へ侵入されてしまうため、空堀群上部を横堀状や切岸に加工され、傾斜を強くしている。こうすることで傾斜は遮断されるのである。

香春岳城、平山城、上林城などでは、堀切に連続する形や、曲輪と曲輪の結節点に位置し、曲輪側面への回り込み(横移動)を阻止する目的と考えられる。これに関連して、登城路の周辺に構築されることも多い。牛の皮城、飯ノ山城、三の宮東城では登城路周辺に多く畝状空堀群が見られ、敵兵が移動できる範囲を限定する役割を担っている。

### 畝状空堀群と横堀との関係性

畝状空堀群上部の横堀は地表面観察段階では埋没している可能性を指摘したが、具体例をあげて検討する。

城山城跡は松江市宍道町佐々布中と荻田の境界の丘陵に所在し(第10図)、突端は佐々布川に面する。宍道湖の西南端から1.5kmほど南の位置にあり、城の付近には「弓場」「的場」「座在」「殿ヶ市」「矢迫」「土居」などの地名が存在する。城山城から東へ延びる尾

根上には土居郭群と呼ばれる遺構がある。

平成9年度に島根県教育委員会が実施した城館調査で、地表面観察による縄張り図の作成が行われており<sup>23</sup>、平成10年に主郭をはじめとした城の中心部分が発掘調査されている(第11図)。城の中心部分であるIV区では、主郭を含む6つの曲輪が確認され、それらを繋ぐ通路や畝状空堀群、堀切、集石遺構、井戸などが確認されている。調査範囲外でも虎口と推定されている遺構が地表面観察により確認されている。畝状空堀群は主郭の北側斜面に構築され、発掘調査により6本が確認されている以外に、竪堀3と4の間に竪堀7が、竪堀1の西側に1本の竪堀が地表面観察により確認されている。畝状空堀群上部は調査前の地表面観察では表現されず、発掘調査によって横堀状の通路と評価される遺構がはじめて確認された。

調査によって明らかにされた遺構のうち、郭1と4は盛土が行われ、2段階の時期が指摘されている。畝状空堀群の部分では通路2(横堀)が堀として機能し、投石用の礫群も確認されている。報告書では遺構の状況から畝状空堀群が敷設された城から、通路をかねた横堀を用いた城への改変を指摘されている。しかし、土層の状況からは畝状空堀群と堀との共存関係は否定出来ず、むしろ畝状空堀群単体であったものから、一部の空堀を破壊し、1郭から通路2(横堀)と畝状空堀群、通路3から5郭とを結ぶラインで防御する、新たな城へ改変された可能性もある。

投石用の石は通路2(横堀)と竪堀4から見つかっており(第14・15図)、両者は同時期に機能していたことは、報告書の指摘するとおりであるが、発掘調査前の地表面観察段階でも畝状空堀群は確認されているので、横堀を作った段階でも畝状空堀群はそのまま存在した可能性が高い。横堀によって城の防御ラインを画定していくのは、16世紀後半の特徴だが、畝状空堀群と横堀が共存する事例も多数ある。そのため投石用の石の存在から考えても両者が共存したと考える方が妥当だと考える。

それではこれまで見てきた見解を踏まえて、再び城山城跡について検討してみたい。城山城跡については、山根正明氏の詳細な検討がある<sup>24</sup>。城山城跡のふもとは土居郭群があり居館跡と推定されている。また城山城跡について「基本的に単郭で普請も粗大な小規模山城」と評価し、「主郭とその四方に配された腰郭は、いずれも不定形で削平も不十分」としている。城山城跡の近くには佐々布氏の佐々布要害山城、宍道氏の宍道要害山城跡があるが、分布調査により佐々布川左岸の低丘陵に築かれた遺構が確認され、この地域が三刀屋、頓原、赤名を経て、安芸国へ向かう陸路と、宍道湖、大橋川、中海に連なる水路との結節点に位置することから、毛利氏が雲芸攻防戦の初期段階から中継地として利用し、これら低丘陵に駐屯地を設けたと推測した。山根氏はこの考えのもと、城山城跡も毛利氏により改修されたと推定している。

報告書では畝状空堀群の時代と、横堀の時代と2段階の縄張り図が示されているが(第12・13図)、竪堀7が通路2(横堀)より高いコンターまで描かれているため、その修正も含めて改めて横堀+畝状空堀群の2段階目の城の縄張りを図化した(第16図)。

これにより城山城跡は畝状空堀群単体であった城から、横堀と畝状空堀群を組み合わせた城へと改修されたと考えられる。

## 第2節 時期ごとの遺構の変化

第1節での事例検討を踏まえおおよその年代の傾向を探る。

**第1段階** ①園田浦城跡や③西本城跡のように14世紀から15世紀にかけては、堅堀の本数も少なく、堀切から連続するものが初現的なものとして把握できそうである。また14～15世紀にはすでに堅堀を連続させる志向は存在するが、本数が少なく間隔も開くことは指摘されている<sup>25</sup>。

**第2段階** 事例番号④⑤が該当する。15世紀半ば以降、本数が増えていく過渡的な傾向が読み取れる。

**第3段階** 16世紀に入ると、いわゆる「畝状空堀群」という、群としてまとまりを持った防御施設としての成立期と見ることが出来る。有井城跡のように主郭に用いられる例もあるが、多くは主郭の下位の曲輪で用いられている。また西山城跡で見られるように、もともとあった畝状空堀群を補強する形で南北に新たに堅堀や横堀を設けて画しているように、16世紀前半くらいまでは、まだまだ不十分であったようである。高知県では西山城跡の堅堀6・7や、堅堀17・18・19のようなU字に落とす堅堀は古い段階に位置づけられるようである。事例番号(6)～(11)が該当する。三ツ城跡については、土師質土器をはじめ草戸千軒町遺跡での編年を活用しながらの再検討によって、14世紀の改修を経て14世紀末から15世紀初頭までに廃絶したとの見解もあるが、三ツ城跡では伴東城跡と共通して緩斜面をつぶす意図とも解せられるので第2段階に繰り上がる可能性も持つ。

**第4段階** 16世紀後半以降を成熟期としてとらえることが出来る。代表的なものとして香春岳城跡、平山城館跡、長野城跡などがあげられる。この時期には畝状空堀群の上部に横堀が設けられ、各堅堀と接続したのが見られるようになり、堀の形状や間隔なども企画的となる傾向がある。事例番号(12)～(20)が該当する。

その他、関連として畝状空堀群の上部の曲輪において、土塁や柵が設けられている例が散見され、大俣城跡、城山城跡、西山城跡、御飯山城跡、香春岳城跡、元城跡で確認されているように、集石遺構がある例も見られる。これらは畝状空堀群の利用方法とも関わってくるもので興味深い。従来から畝状空堀群の利用のされ方として、上部の曲輪から堀内を登ってくる敵兵を投石などで攻撃することが想定されていたが、これを裏付けるものと言えるであろう。また、畝状上部の横堀への横矢に関して、平山城跡と元城跡で具体的な事例を確認した。平山城跡では横堀と曲輪の間に土塁を設け、元城跡では一段堀を深くする状況が看取できた。

堀と堀の間の土塁については、平山城跡や長野城跡などにおいて一部盛土の痕跡が見

られた程度で、高い盛土の痕跡が確認できるものは少なかった。これについては、堅堀を掘った土を左右に掻き上げて土塁としたもので、突き固めたりするような構築方法でなかったために、その多くが流失してしまった可能性もあるが、今後検討する必要があると思う。また全体を通して、畝状空堀群が設けられる場所として、少なからず登城路に近接して設けられている例が見られる。登城路から曲輪の側面への回り込みを防ぐ意図から、堅堀が掘られさらに本数を増やして発展したものと捕らえることも可能である。三の宮東城跡などはその典型と捉えられる。

これらをふまえて、畝状空堀群は地域によって盛行時期は異なると推定されるが、発掘事例であげた平山城跡などを最終発展段階と位置づけるならば、概ね14世紀段階で堅堀を連続させる萌芽が見られ、15世紀は過渡的傾向、16世紀にいわゆる畝状空堀群としての成立をみると考えられる。

第1節では主に西日本の事例をもとに紹介したが、畝状空堀群のある城跡で発掘調査が実施されている例は枚挙に暇がないが、畝状空堀群の部分を発掘した事例というのは意外と少ない。また、ここにあげた事例だけで安易に編年を行うことは難しいが、ある程度傾向を見いだすことは可能である。また第1節でも少し触れたように、この施設単体で検討するのではなく、上部曲輪の土塁や柵、集石遺構なども合わせて検討することで、畝状空堀群の役割や能力が明らかになると考えられる。そこでこの節では、比較的事例の集中が見られる近畿北部の事例を参考としながら検討したい。

近畿北部では16世紀前半の三の宮東城跡を取り上げる。この城は小規模城館であるが主郭には虎口、礎石建物跡が確認され、曲輪2、3、4と下がっていき、登城ルートもこれらの曲輪を経由するように設置されている。畝状空堀群は曲輪2の斜面に6本設けられている。6本のうち堅堀1、2、6は幅も深さもあるが、堅堀3～5は浅いものである。これらの堅堀に時期差は確認出来ないが、堅堀6は曲輪1と2の結節点に設けられ、曲輪6から曲輪1、2の南側斜面へ回り込ませないためと考えられ、堅堀1や2は曲輪2の西側の登城ルートからの回り込みを防ぐねらいと考えられる。そして堅堀3～5はこれらの補強として設けられたことが予想される。それを査証しているのが堅堀4、5の上部の塀の基礎と考えられている土塁状の石列の存在である。このことから、本来の堅堀としての機能は堅堀1、2、6が果たし、そこに堅堀3～5が補助されたことで結果として、畝状空堀群となったと推定される。そのためいわゆる畝状空堀群として、当初計画（改修計画）で群をもって設置したものとは峻別できるであろう。同じく大俣城跡も同様である。この城も三の宮東城跡と同じく小規模城館で主郭、帯曲輪を中心として、虎口や横堀が導入され、コンパクトながら高い機能が導入されている城である。畝状空堀群は三の宮東城跡とおなじく虎口の外側に設置されている。曲輪3の東側に3本、南側に3本存在する。堅堀1～3は帯曲輪南側の横堀と土塁の空間との間を分断する目的で設けられてもので堅堀4～6も堀幅などの規模は一定せず、登城ルートから側面へ回り込みを防ぐ目的で数を増やしたものと推定される。

これら2城は畝状空堀群が導入されているものの、基本的には曲輪の結節点などに設けられた堅堀の延長、補強と考えられ、前節でみた第3段階ではあるものの、まだ畝状空堀群としては過渡的な要素も見られるものである。

次いで、石山城跡を見る。発掘調査されたE地区主郭から北と東へ尾根が延びている。畝状空堀群は東へ延びる尾根で確認されている。大規模な堀切Aを設けその外側に小規模な堀切Bがある。BはAの補助的存在である。その外側は傾斜が20度台半ばとやや緩やかであるため、4本の堅堀をならべ、さらに堀切Bと平行に2本の堅堀を落としている。このように緩斜面をつぶすような形で畝状空堀群を構築する例は、福井県の三重山城跡、広島県の牛の皮城跡でも見られ、古くは伴東城跡でもあるように、比較的早くから見られる傾向であるが、16世紀後半にいたっても使用されている技術であることが確認できる。

平山城跡は畝状空堀群のもっとも発展した形態と位置づけることが出来る例である。報告書では位置、堀の形状、規模からA～Dの4グループに分類しているので、これをもとに検討する。

A 堅堀1 斜面の裾から第2郭までつながるもので、堀の形状は「U」字状をしている。

B 堅堀2～7 この堅堀群は第1郭のレベルから少し下がったレベルから掘り込まれている。それぞれ長さ20mの規模で、堀の形状は「U」字状である。この堅堀グループの上部には第1郭より曲輪状に張り出している。

C 堅堀8～13 第1郭のレベルとほぼ同じ高さから掘り込まれ、長さ30mの規模を持つ。堀の形状は「V」字状をしている。この堅堀グループの上部には横堀が設けられ、これら堅堀群と連結している。

D 堅堀14 第1郭のレベルより高い位置から掘り込まれ、堀の形状はやや底が広い「U」字状をしている。

このなかで特にBとCのグループに着目すると、それぞれ同じような幅や形状でそろえられており計画的に施工されている様子がうかがえ、堀切から連続させて強固な遮断線を構築すると共に、下からみると威圧感さえ漂わせている。Cグループの上部には横堀が構築されている。このように横堀を構築することで上部の曲輪の斜面が鋭角になる効果がある。またこの横堀に達せられてしまうと容易に横移動されてしまうため、これを防ぐためにBグループの上部の第1郭から延びた小曲輪の存在がある。この小曲輪は横堀部分との間に第2郭から土塁状に延びた部分があり、これを障壁として横堀に対して横矢が利くように配置されたものと考えられる。元城跡で確認された横堀の西端が掘り窪められ、その脇に小曲輪が附属するものも、横堀に対する横矢掛かりと考えられ類例と判断される。遺構の年代としては、第1郭、第2郭の両方で焼土層が確認されており、出土した土師器から16世紀～17世紀初頭と考えられ、同じく越前焼中甕も16世紀末～17世紀初頭とされ、この焼土層は1600年頃のものとして推定されている。このことから既存の堅堀や堀切に補強を行った結果、畝状空堀群となったものではなく、計画的に施工さ

れたものと考えられ、16世紀後半に最も整備された畝状空堀群の形態と評価できる。

上林城跡では、主郭西側の曲輪で堀切と3本の堅堀が確認されている。北側斜面は崩壊により確認されていないが溝がめぐることから堅堀の存在が推定されている。この調査で確認された溝は浅く堀とは言えないが、東側斜面の堆積土の確認により、人為的に上から大量の土砂を落とした形跡が確認された。それにより2時期の造成が想定されている。第1次は堀切と堅堀群と溝が設けられた時期、第2次は曲輪部分が削平され、堅堀などが埋められた時期と想定されている。このことから第3図のような2時期の遺構断面図が想定されている。このことから横堀と堅堀の下部が遺存していると見られ、本来は横堀と堅堀が接合して敷設されていたと考えられる。また横堀が北東側で東へ平山城跡で見られた横堀への横矢掛かりの可能性も考えられる。いずれにせよ、これらの遺構は最終的に堅堀が必要なくなり曲輪面積の拡大のために埋められたと考えられているため、これ以上詳細な検討は難しいが、断片的ながらも16世紀後半の様子をうかがえる事例である。

### 第3節 分布と地域性

ここでは従来の縄張り研究の成果から、全国的な分布を検討する。これまで各都道府県単位や個人レベルで行われてきた成果による分布では、山形県、秋田県、新潟県、福井県や京都府北部（丹波北部、丹後）、兵庫県北部（但馬）、南部（播磨）、高知県、島根県、広島県、福岡県を含む九州北部などで、密な分布が報告されているが、おおむね16世紀半ばから後半に盛行するという見方である。これまで畝状空堀群の分類については、おおむね各堅堀の規模や堀間の粗密、土塁の有無、横堀との接続の有無、堅堀が2段になるものや、設置場所の傾斜角度、その位置などによりさまざまな分類が行われ、<sup>27</sup> 筆者も試みたことがあるが、<sup>28</sup> 畝状空堀群の上部は埋まりやすく、時期の判断などの根拠のひとつでもある横堀の有無を明らかにしにくい点がある。

北部九州では全国的に畝状空堀群の代表例として知られている長野城をはじめ、数多くの畝状空堀群の事例が紹介されている。文献の研究成果を加味して、1478年（文明10）頃には設置され、1601年（慶長6）までは防御施設として採用されたとし、その分布が秋月氏の勢力範囲を越える地域からも検出されていることから、大内氏や毛利氏などの中国地方の勢力により持ちこまれた技術が、福岡県下を中心とした中世山城の技術として<sup>29</sup> 発達したという説や、畝状空堀群の発生を天文年間に畿内で発生し、島根県勝山城跡の例をあげて中国地方で利用され、九州北部へ導入されたという考えを改め、毛利氏が月山富田城攻めで勝山城に畝状空堀群を導入したのと同時期に導入されたとする<sup>30</sup> 説、畝状空堀群を積極的に用いたのは秋月氏、一万田系高橋氏、城井氏、野仲氏、らの豊前、筑前西部、筑後北部で、また大友氏についても拠点城郭クラスで見られ、特に秋月氏の城郭では幅と長さが均質で間隔も均等な堅堀で構成され、技術的習熟の高さが見

られるとする説<sup>31</sup>、秋月氏の城郭を検討する中で、畝状空堀群が本拠である秋月（古処山城跡、荒平城跡）と、敵対する領域と境目を接する地域に見られ、秋月種実が隠居したという益富城跡にのみ見られるという説がある<sup>32</sup>。

中国地方では広島県で堀についての調査事例の集成<sup>33</sup>が行われている。島根県の事例では分布状況などから、畝状空堀群は石見地方に多く、これらは毛利氏に対抗した在地勢力によって改修されたと推定するとともに、少なくとも元亀年間までは、急速に領土を拡大した毛利氏は築城技術の指導、強要をすることが難しい体制であったとする<sup>34</sup>。また畝状空堀群の本数や構築状況により分類すると、城域全面使用や10本以上の大規模な導入例は、出雲地方では勝山城跡、京羅木山城跡に限定され、石見地方でも局所的にまとまりが見られ、それが点在して分布する様子<sup>35</sup>がうかがえる。これらの成果から広島県南西部、島根県西部で数多くの事例が確認できるが、島根県西部では津和野城跡や七尾城跡のような拠点城郭での使用も見られるが、必ずしも積極的な導入とは言いがたい。むしろ規模としては小規模な部類の城に導入例が見られ、山吹城跡や勝山城跡のような例は少ない。広島県でも規模的には小規模な城での導入例が多い。

東北では山形県や秋田県などで事例の集中が見られる。山形県では村山、新庄最上、庄内に濃密に分布し、置賜に少ないという特徴が見られ、最上、武藤、小野寺、伊達氏などの、まさに境目の地の交通の要衝に多く分布しているという。また文献史料から、神室山麓の畝状空堀群は天正14年から16年にかけての整備とする見解を示している<sup>36</sup>。松岡進は最上郡の城館における畝状空堀群について、郡域や地域の境目を固める城館で使用され、自然発生的な成立・伝播ではなく、より上位の権力の介入を推定している。周辺地域でも仙北の小野寺領で多数の全面的な使用が確認され、庄内や村山地域でも事例は少ないが、最上郡域とつながるルートの出入りを抑えるような地点で確認されることから、最上郡域での分布状況との関連を指摘している<sup>37</sup>。

高知県では岡豊城跡、吉良城跡、久礼城跡、姫野々城跡など拠点城郭の他、音竹城跡、有岡城跡、岡本城跡などにもみられる。松田直則によると、西山城跡では16世紀項半の遺物が見つかっていないことから、その遺構は長宗我部氏の関与は認められず、一条氏家臣団の関与の可能性を示唆し、これらの城郭構築技術は、永禄から天正年間にかけて長宗我部氏の岡豊城跡に取り入れられ、長宗我部氏が支配を拡大していく過程で、各地の拠点城郭に再構築に取り入れられたと考えている<sup>38</sup>。また大久保健司氏によると、四万十川流域でも伊予側を意識した山間部に多く分布しているという<sup>39</sup>。

中部地方では、武田系城郭で「放射状堅堀」と呼称される遺構がある。これは白山城跡を代表例としてあげることができ、一定間隔で設けられた放射状の堅堀である。筆者は武田氏の城郭には疎いが、いわゆる通常の畝状空堀群も真篠城や竜ヶ崎城などで見ることができる<sup>40</sup>。

京都府北部でも地域別に見ると、丹後東部の舞鶴市、丹波北部の綾部市、福井県西部の若狭地域の若丹国境地域に密に分布すると考えられていた。その分布の契機としては、

福島克彦氏、高屋茂男の研究がある。この地域での軍事的緊張が高まったのは、永正年間の細川政元・若狭守護武田元明による丹波・加佐郡侵攻と、永禄年間の丹波守護代内藤宗勝による加佐郡・若狭西部への侵攻がある。これまでの畝状空堀群の研究による年代観を踏まえて、永禄年間を想定している<sup>41</sup>。しかし近年の京都府教育委員会による城館分布調査により、丹後半島での畝状空堀群の新たな事例の検出により従来の分布に対するイメージも変わってきた<sup>42</sup>。永恵裕和氏は形態を塹堀が基本のもの（A）と塹土塁が基本のもの（B）の2種に分類し、Aが丹後東部、Bが丹後西部に集中することから、Aを天文から永禄頃、Bを永禄から天正頃と推測している<sup>43</sup>。福井県では越前朝倉氏の拠点城郭である一乗谷城跡への導入がよく知られ、朝倉氏の最終防衛ラインの重要な城に築かれたとされる。若狭でも後瀬山城跡など国内最大級の城でも導入されている<sup>44</sup>。

幸いこの地域では、畝状空堀群の発掘調査の事例がまとまって確認できる。石山城跡、大俣城跡、平山城跡などの年代観からは、16世紀第3四半期から第4半期頃に想定される。和暦では概ね永禄から天正年間あたりとなる。しかし三の宮東城跡のように16世紀前半から中頃に位置付けられるものもあることから、16世紀前半には既に技術的には存在し、永禄から天正の軍事的緊張の高まりによって、集中的に分布するようになり、横堀と畝状空堀群が共存し発展したと見るべきであろう。京都府北部における地表面観察における研究では、京都府綾部市の日置谷城跡、位田城跡、梨ヶ岡城跡などの個別城郭を基にした研究がある<sup>45</sup>。

この他但馬でも多くの事例が報告され、千田氏のいうI類が天正3～5年、II類が天正6～8年と推定している<sup>46</sup>。

第1節で見たように畝状空堀群は、堀切や塹堀から派生したものであり、松岡進が指摘するようにポピュラーな遮断系の技術であり、どの地域でも盛行する下地はあった。また第2節で見たように、近畿北部では強大な権力を保持した勢力の中核的な城より、むしろ小規模城館での使用例が多いこともそれを査証している。また北部九州のように長野城跡をはじめ大規模な城、拠点城郭でも使用される技術であることも指摘できる。このことから畝状空堀群は、小規模から大規模城館まで普遍的に使用された技術といえる。

また畝状空堀群の技術的伝播を想定した研究も古くから存在する<sup>47</sup>。北部九州でも永禄年間に大友氏側の立花山城を毛利氏が攻撃した際の陣城や、播磨・上月城の尼子残党を攻撃する際の毛利氏の陣城と言われる仁位山城などの畝状空堀群について、毛利氏による畝状空堀群の敷設が指摘された。しかし北部九州では近年では秋月氏による敷設として天正後期に時期をすえている例が多い<sup>49</sup>。しかし織豊系城郭のように畿内、中国、四国、九州といった広範囲に伝播する技術というより、各地域における勢力同士の軍事的緊張の高まりの中で、発達と分布が説明できるのではなかろうか。これについては岡寺や松岡進の指摘のように領国や国の境目に集中的に分布する傾向が見て取れ、政治的意図が働いているのは明かであるし<sup>51</sup>、秋月や大友といった大名系統の理解を離れ、境目域の戦

術的選択として解釈する考えもある<sup>52</sup>全国的に分布状況や第2節で見た傾向などを踏まえると、極度の軍事的緊張の高まりの中で、境目と称される領域抗争圏に多く生み出されている施設と見ることができる。

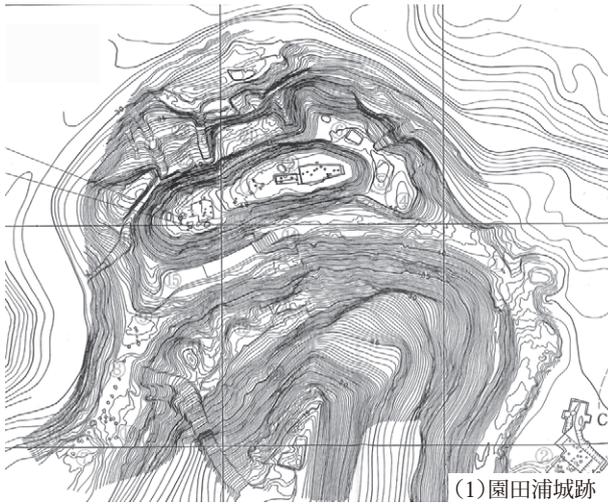
## おわりに

畝状空堀群はその設置される位置が斜面に位置するため、堀と堀の間の土塁部分などは崩れやすく、土層の観察を行っても盛土の痕跡を見いだすことは容易ではなかった。畝状空堀群の分類として、斜面を引っ掻きただけのタイプと、掘った土を掻き上げて土塁としたものなどのように分けることも考えられたが、土層の観察からはこれを行うことが出来なかった。推測の行きを出ないが、このことは逆説的に、堀間の土塁部分の構築手法に由来するのかもしれない。つまり堅堀を掘った土を掻き上げるが、曲輪縁辺部などに設けられる土塁のようにしっかりと構築されたものではなく、掻き上げただけのため時間と共に崩れ去り痕跡が残りにくいのではないかと考えられる。

また、今回触れることは出来なかったが、破城と畝状空堀群との関係も指摘できる。島根県・本城跡は連続堀切が多数導入された城だが、主郭部分も多数の堀切による寸断されている。江戸期の言い伝えを記した文書によると、毛利氏がこの城を攻め倦んだため、落城後二度と使用できないように城をことごとく堀切にしたという<sup>53</sup>。このような事例は山形県・湯田川館群<sup>54</sup>でも見られるし、破城の問題とも関連付けて検討すべき要素もある<sup>55</sup>。その他倭城での報告もあり検討課題が多い<sup>56</sup>。

- 1 (財) 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1999
- 2 (財) 静岡県埋蔵文化財研究所 2010
- 3 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999
- 4 広島市教育委員会 1989
- 5 広島市教育委員会 1987
- 6 (財) 広島市歴史科学教育事業団 1993
- 7 高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008
- 8 玖珠町教育委員会 1984
- 9 (財) 広島県教育事業団 2005
- 10 京都府教育委員会 2012
- 11 京都府教育委員会 1997
- 12 福岡市教育委員会 2000
- 13 香春町教育委員会 1992
- 14 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005
- 15 島根県教育委員会・日本道路公団中国支社 2000
- 16 綾部市教育委員会 1980
- 17 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター 2002
- 18 広島県教育委員会 1977
- 19 北九州市教育委員会 2000
- 20 広島市教育委員会 1982
- 21 玄海町教育委員会 2003
- 22 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006
- 23 島根県教育委員会 1998
- 24 山根正明 1987、山根正明 1991
- 25 中井均 2009
- 26 吉野健志 2004
- 27 中世城郭研究 1986
- 28 高屋茂男 2004
- 29 中村修身 2000
- 30 千田嘉博 2000
- 31 中西義昌 2001
- 32 岡寺良 2006、2012
- 33 花本哲志 1997
- 34 寺井毅 1991
- 35 高屋茂男 2012
- 36 保角里志 2001
- 37 松岡進 2002
- 38 松田直則 2012
- 39 大久保健司 2010
- 40 数野雅彦 1999
- 41 福島克彦 2002・2009、高屋茂男 2014
- 42 京都府教育委員会 2012

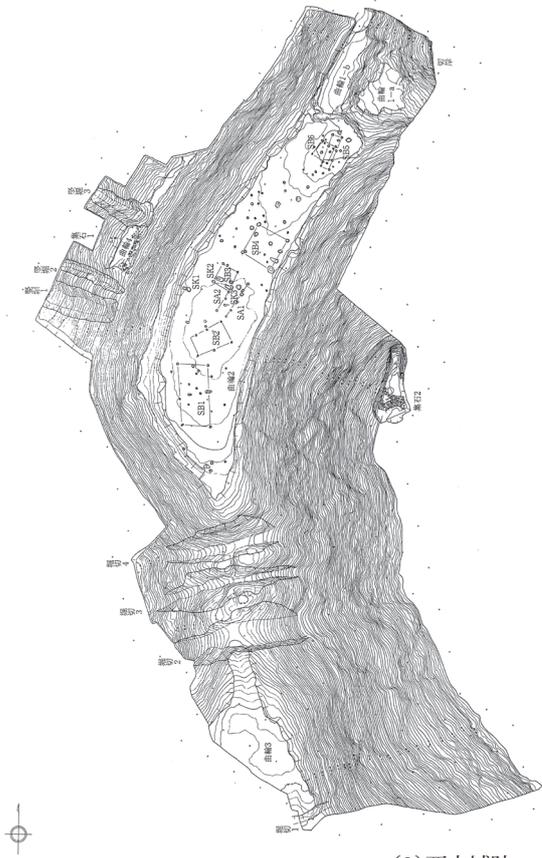
- 43 永恵裕和 2012
- 44 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1998、近年では南洋一郎氏によって詳細な検討が行われており、朝倉氏が一律に構築させたというより、滅亡後に一乗谷にいた前波吉継が、一斉蜂起によって押し寄せた一揆勢に対して籠城のために設けたとの見方も提示されている。
- 45 高屋茂男 2000a、2000b、2014b、2015a
- 46 西尾孝昌 2001
- 47 松岡秀夫 1985
- 48 中村修身 2000
- 49 中井均 1987
- 50 岡寺良 2017
- 51 岡寺良 2006
- 52 多田暢久 2009
- 53 森岡弘典 2009 の他、南洋一郎 2016 においても破城として畝状空堀群の使用を検討している。
- 54 村田修三 1987a
- 55 吉川弘文館 2001
- 56 堀口健弉 2005a



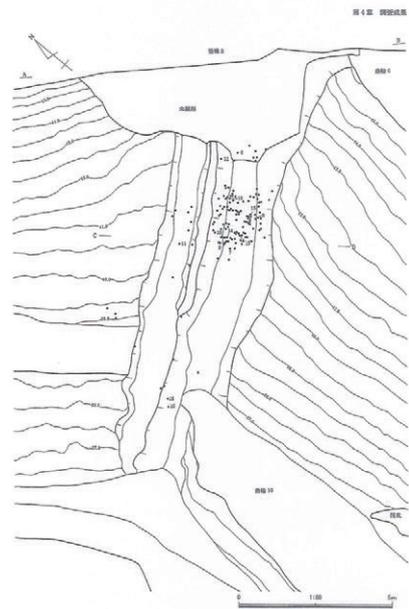
(1) 園田浦城跡



(2) 庵原城跡

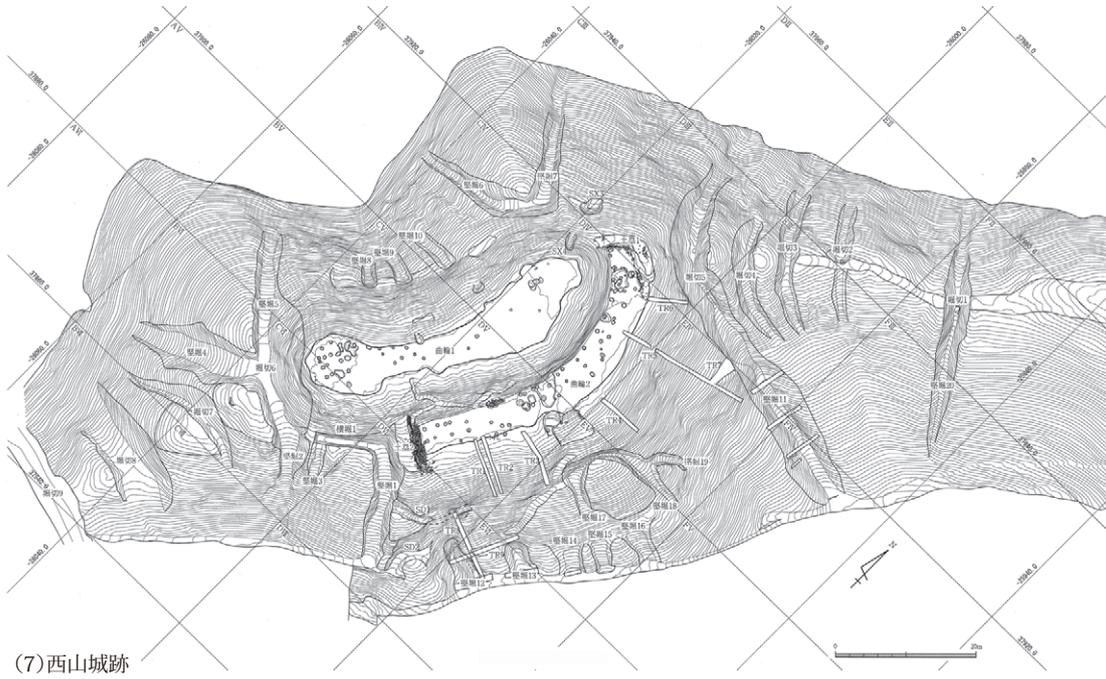
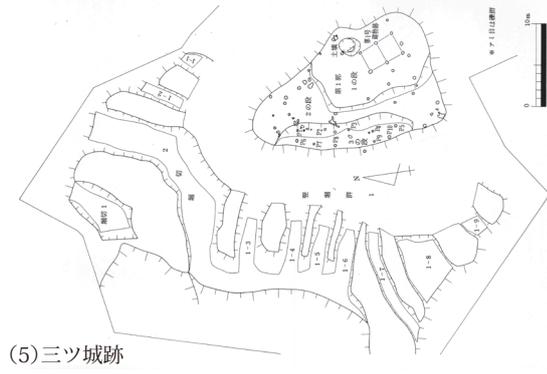
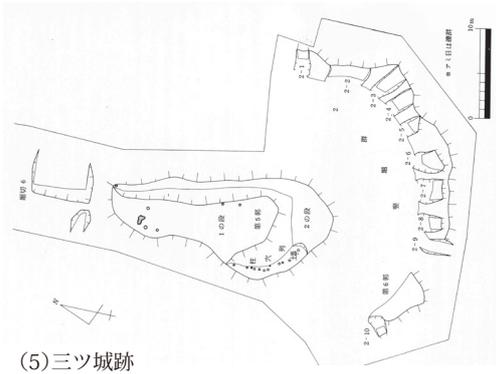
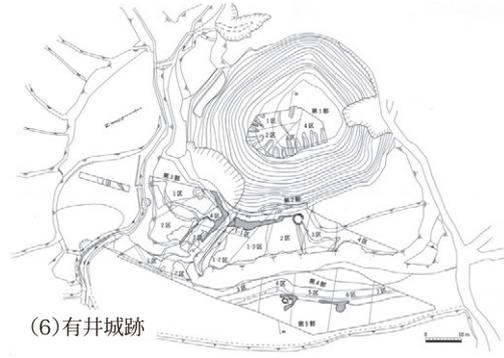


(3) 西本城跡

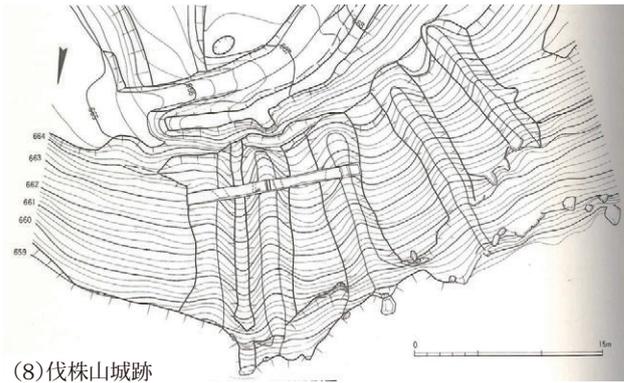


(2) 庵原城跡

第1図 城館遺構図1



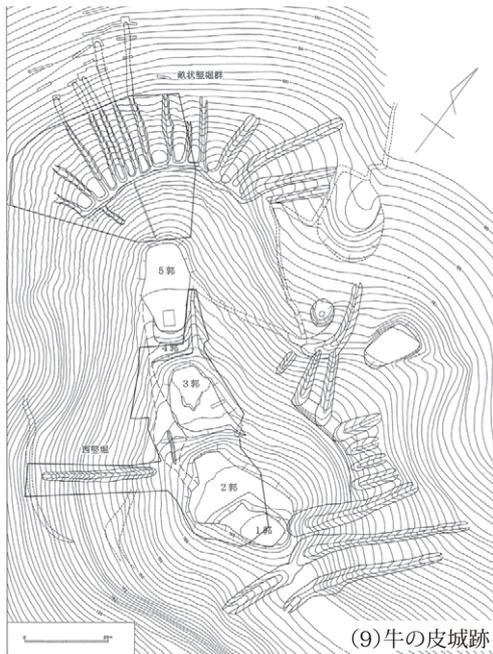
第2図 城館遺構図2



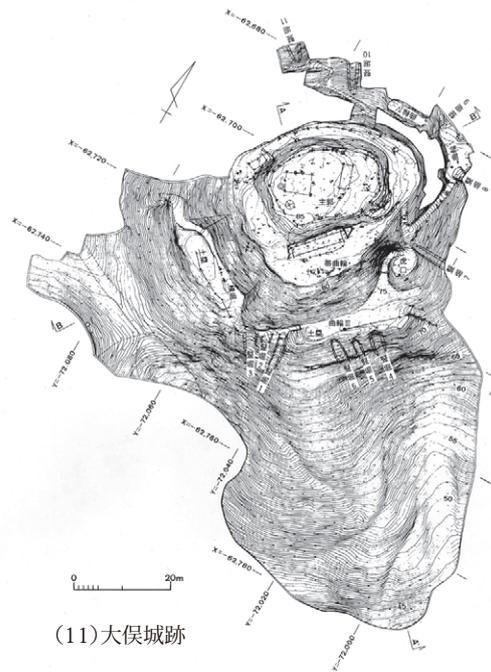
(8) 伐株山城跡



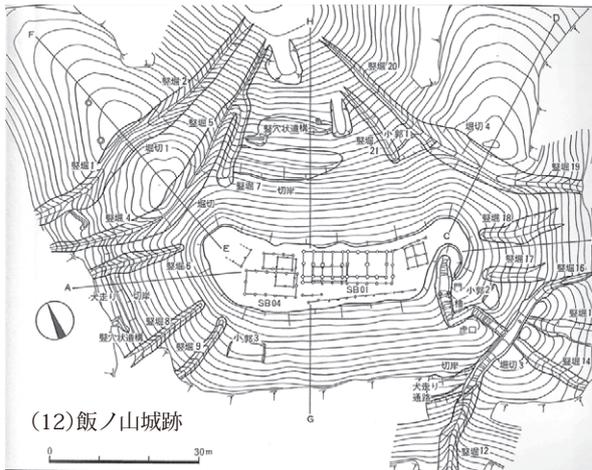
(10) 三の宮東城跡



(9) 牛の皮城跡

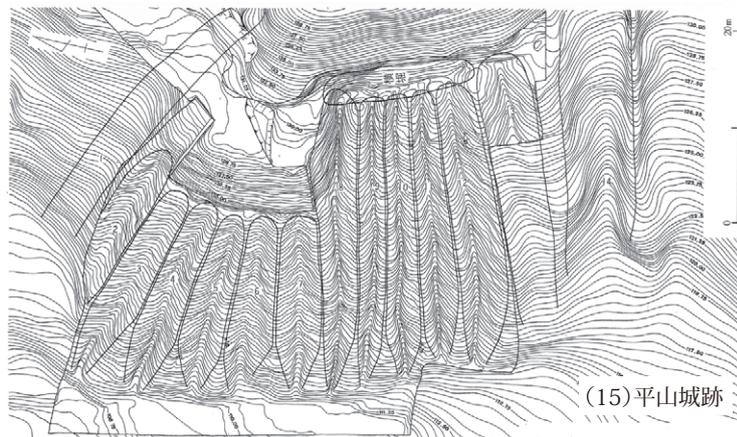
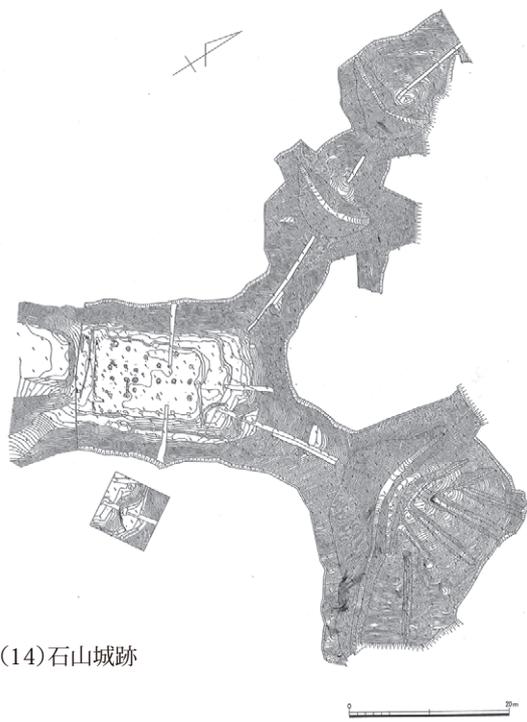
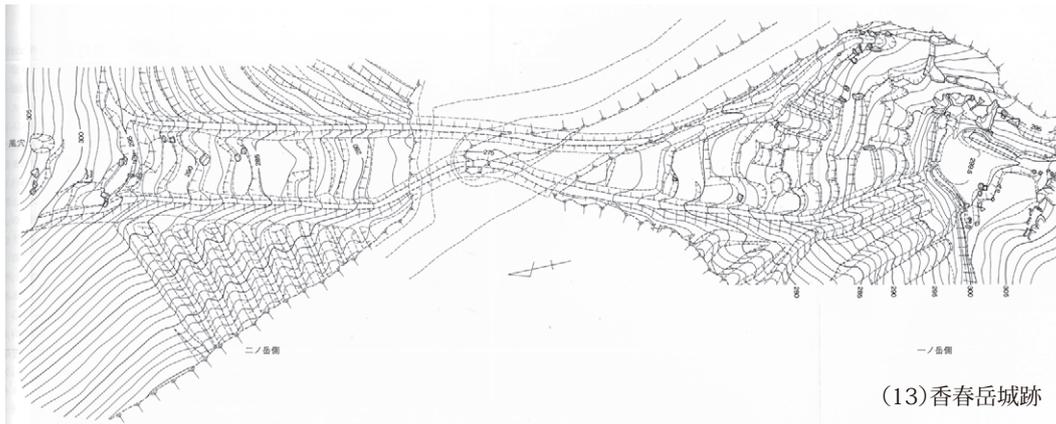


(11) 大俣城跡

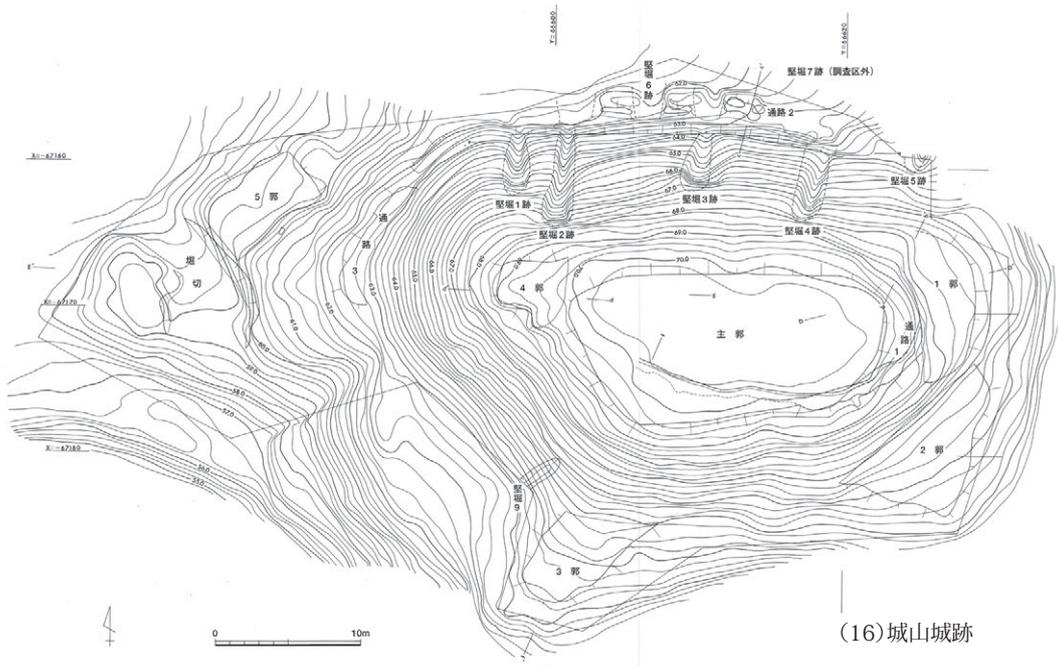


(12) 飯ノ山城跡

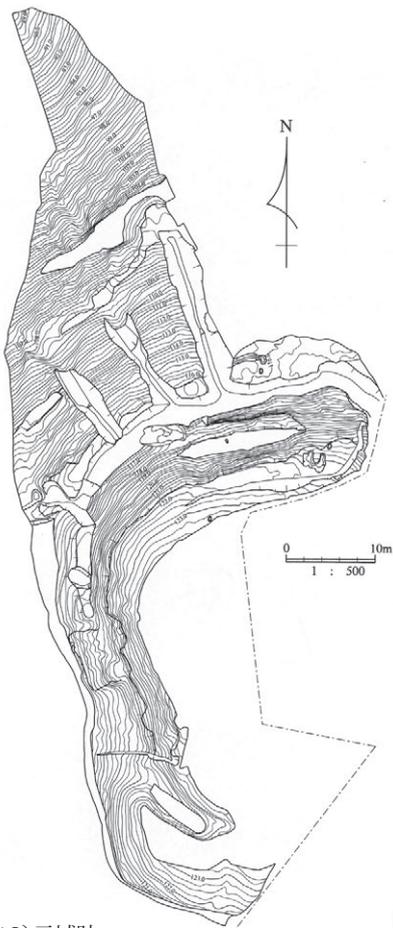
第3図 城館遺構図3



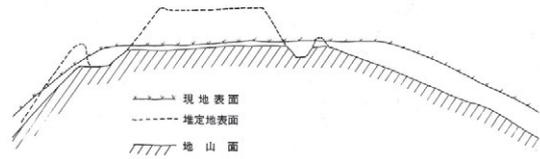
第4図 城館遺構図4



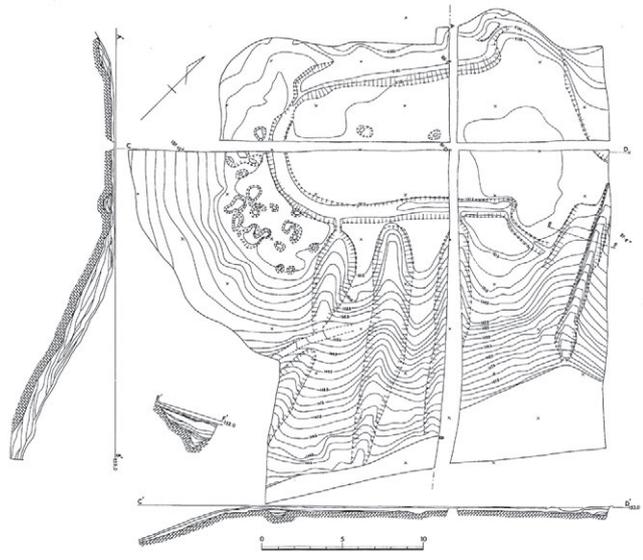
(16)城山城跡



(18)元城跡



(17)上林城跡(断面図)

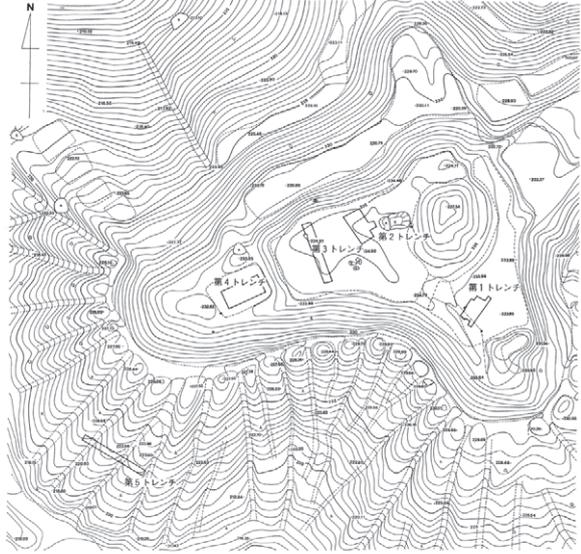


(17)上林城跡

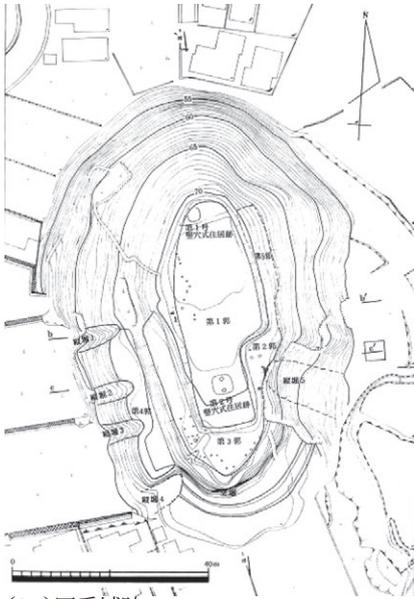
第5図 城館遺構図5



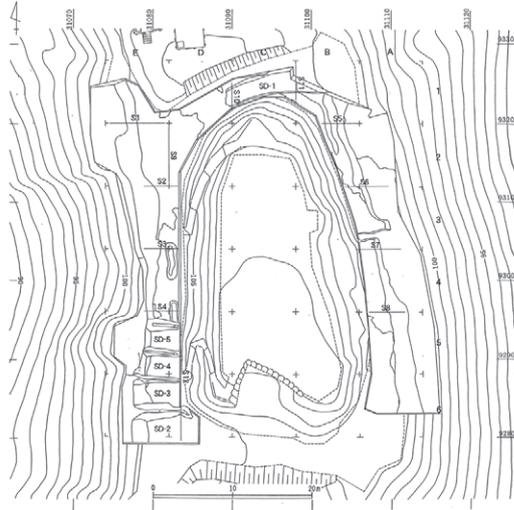
(19) 亀崎城跡



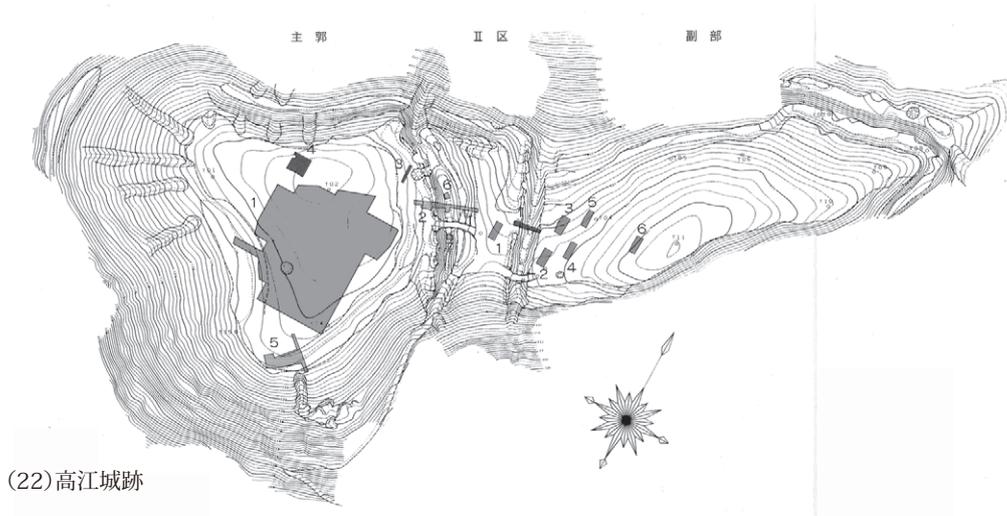
(20) 長野城跡



(21) 国重城跡

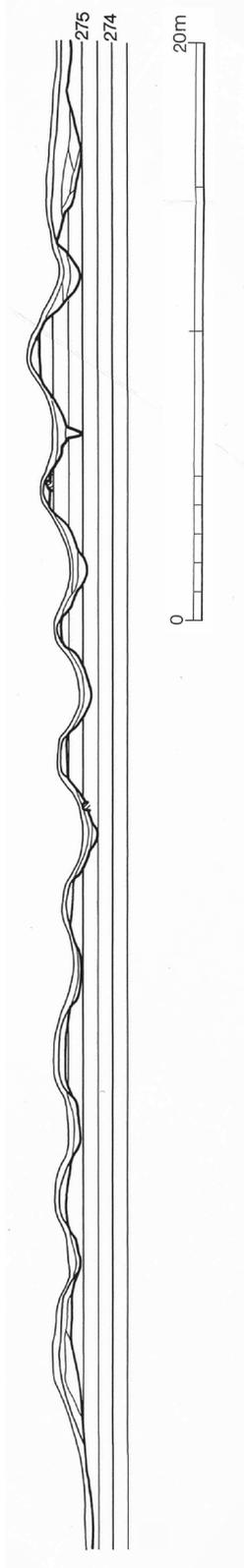


(23) 三重山城跡

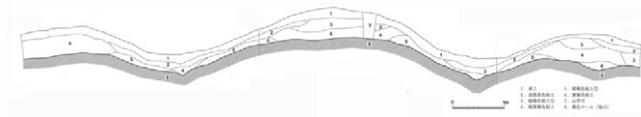


(22) 高江城跡

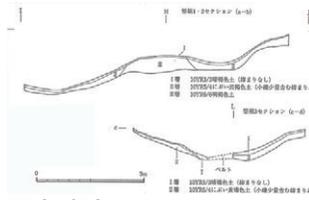
第6図 城館遺構図6



香春岳城跡

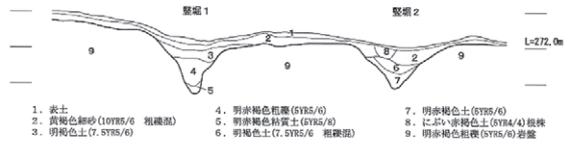


長野城跡

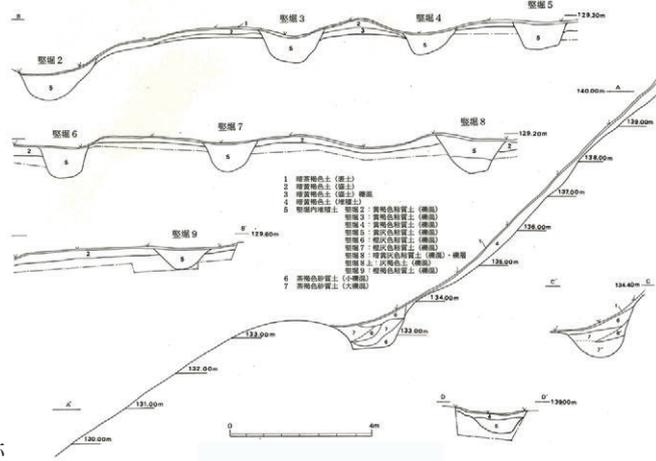


大俣城跡

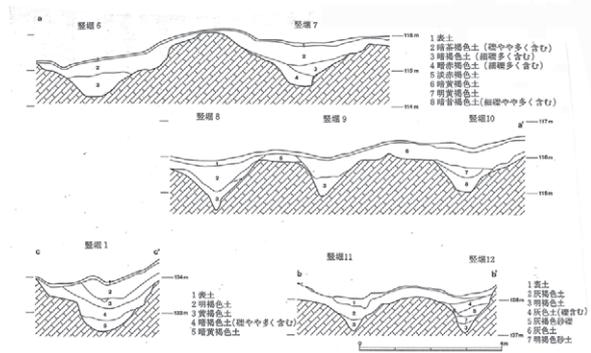
西本城跡



三の宮東城跡



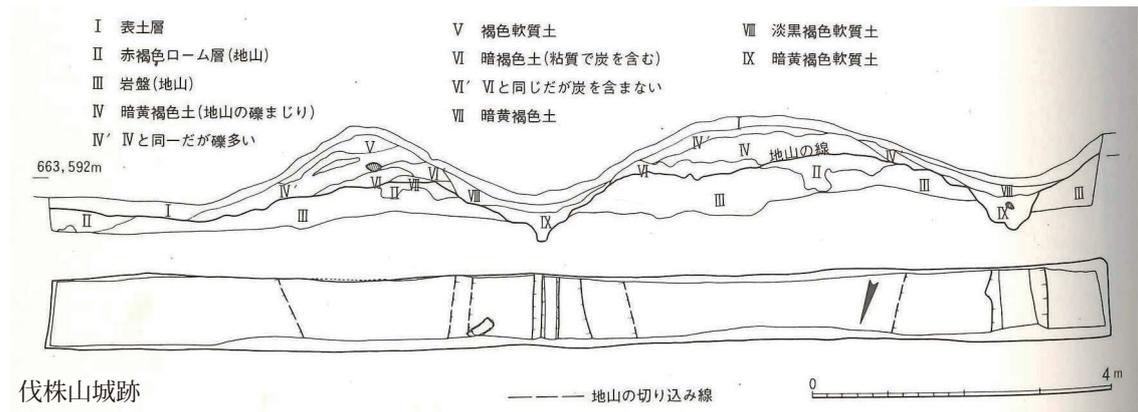
牛の皮城跡



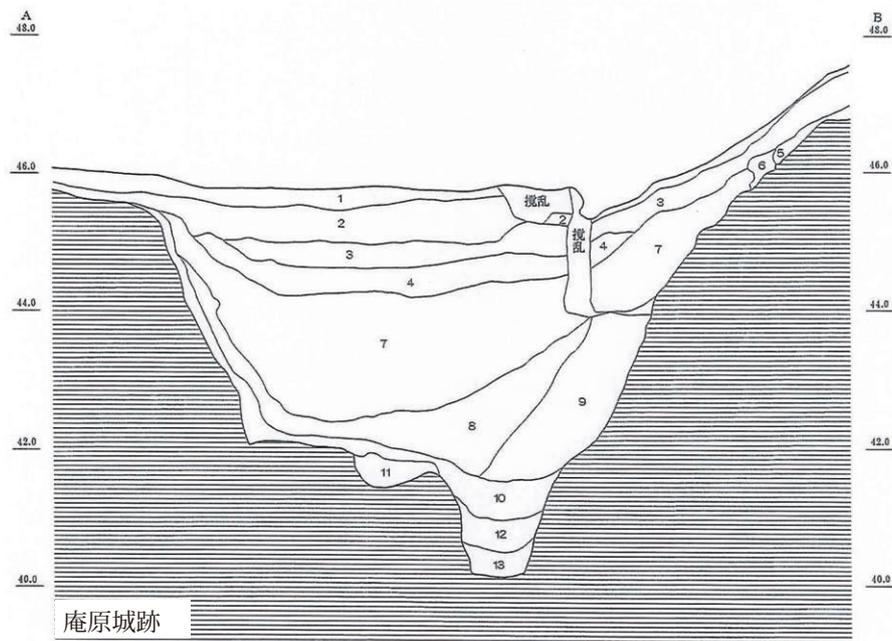
平山城跡



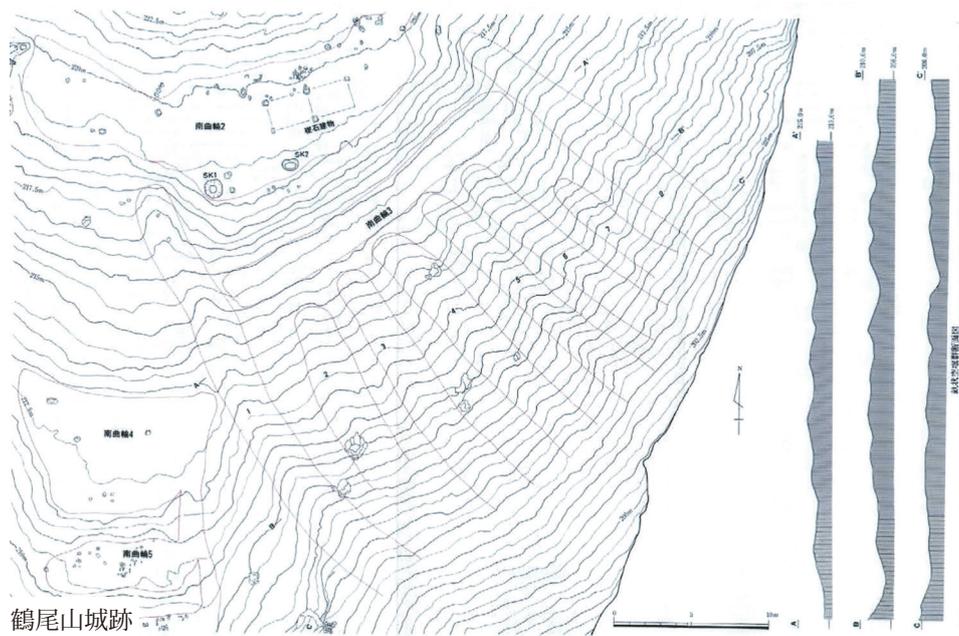
第7図 畝状空堀群断面図1



伐株山城跡

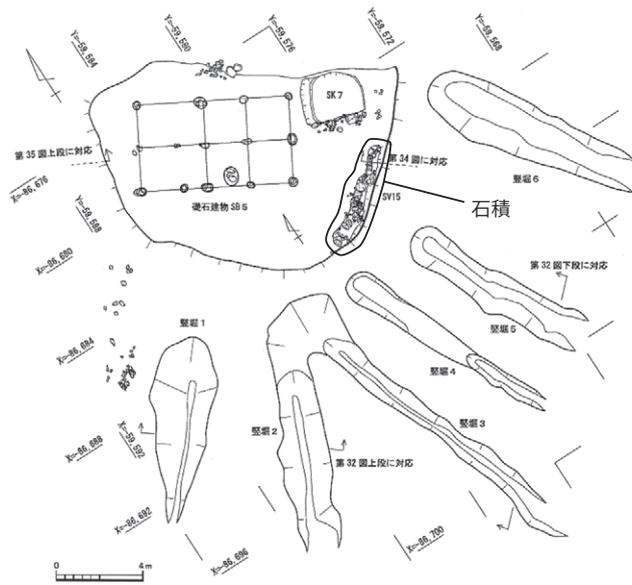


庵原城跡



鶴尾山城跡

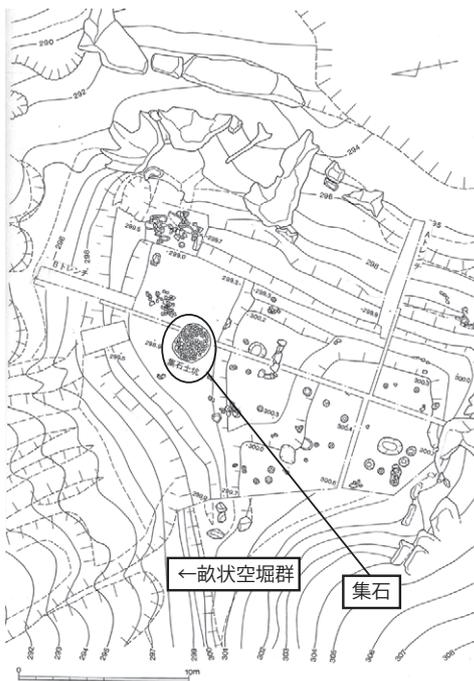
第8図 畝状空堀群断面図2



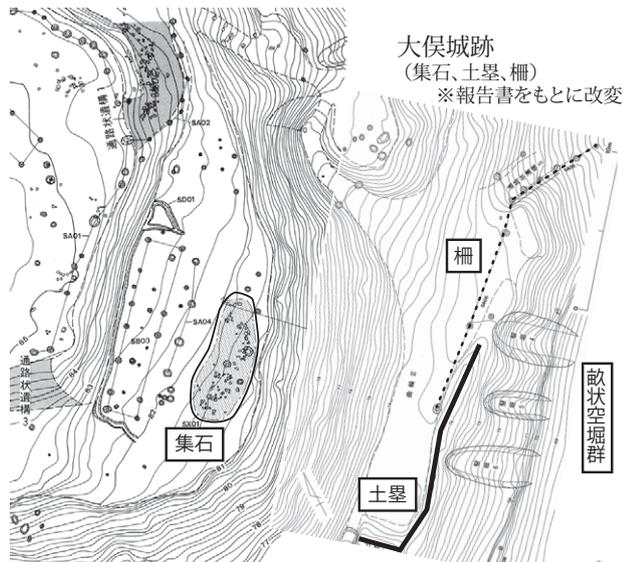
三の宮東城跡(竅状空堀群上部の石積)



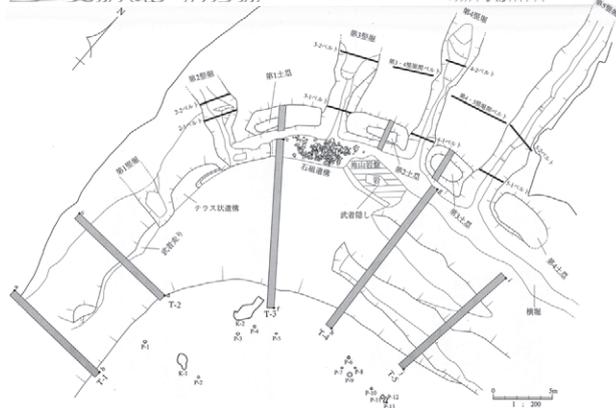
城山城跡  
(竅堀、横堀内部の集石)



香春岳城跡(集石)  
※報告書をもとに改変



大俣城跡  
(集石、土塁、柵)  
※報告書をもとに改変

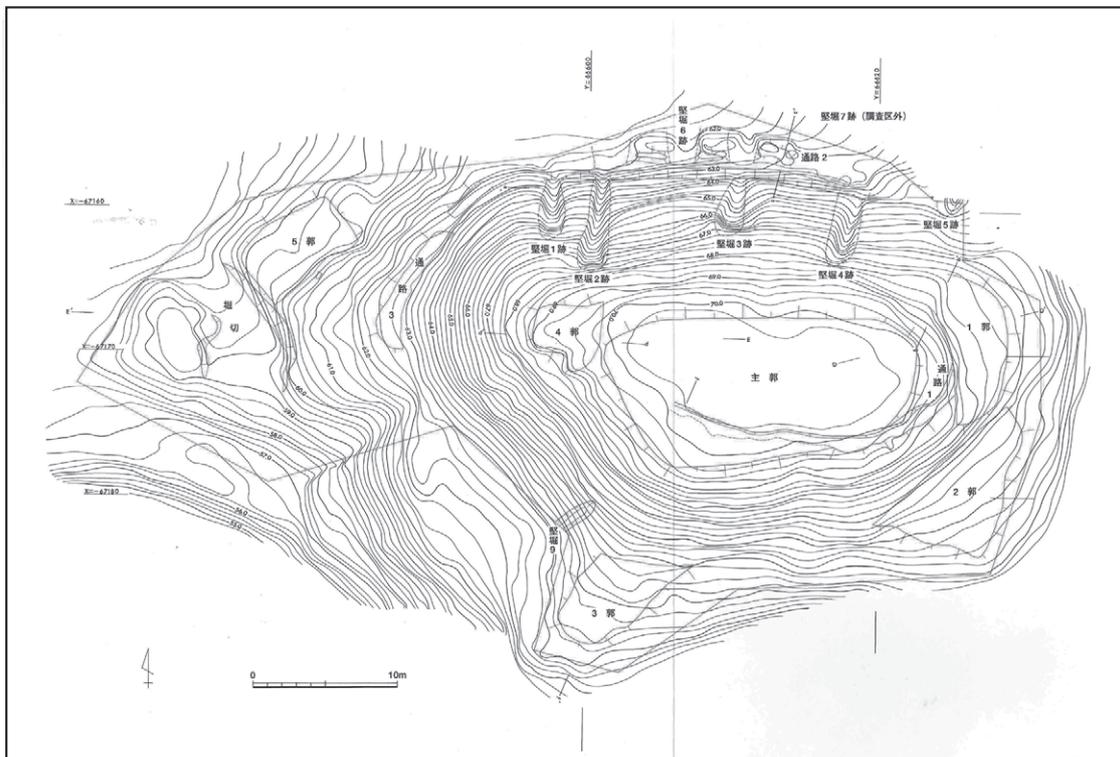


元城跡  
集石、柵

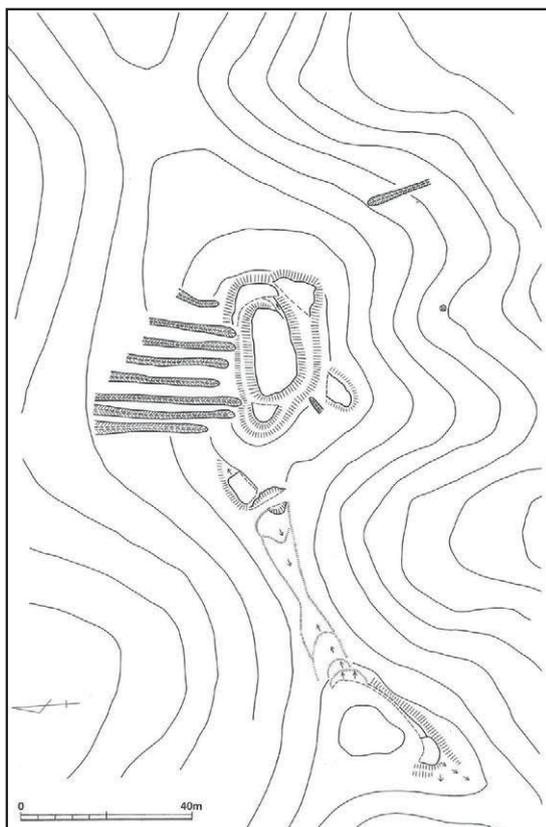
第9図 竅状空堀群周辺における集石・柵・土塁



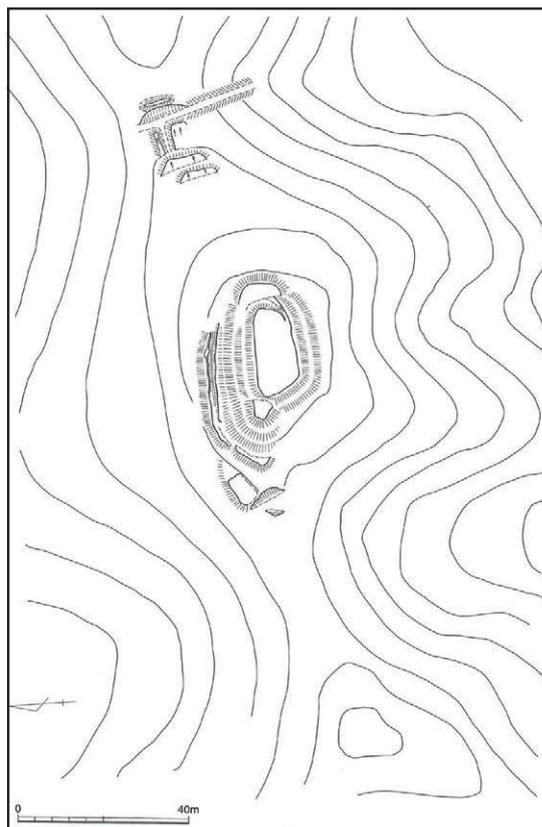
第 10 図 城山城跡位置図



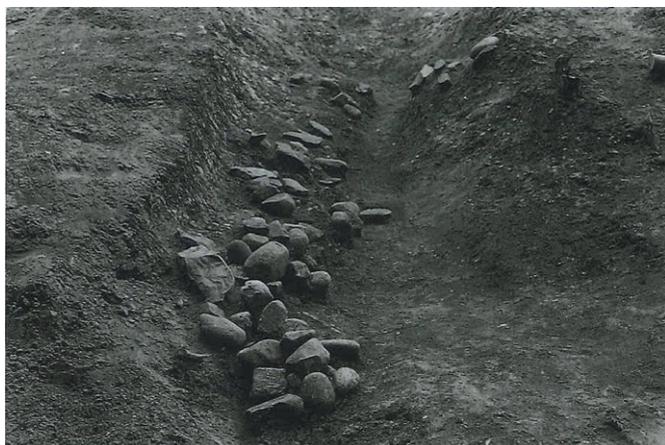
第 11 図 城山城遺構図



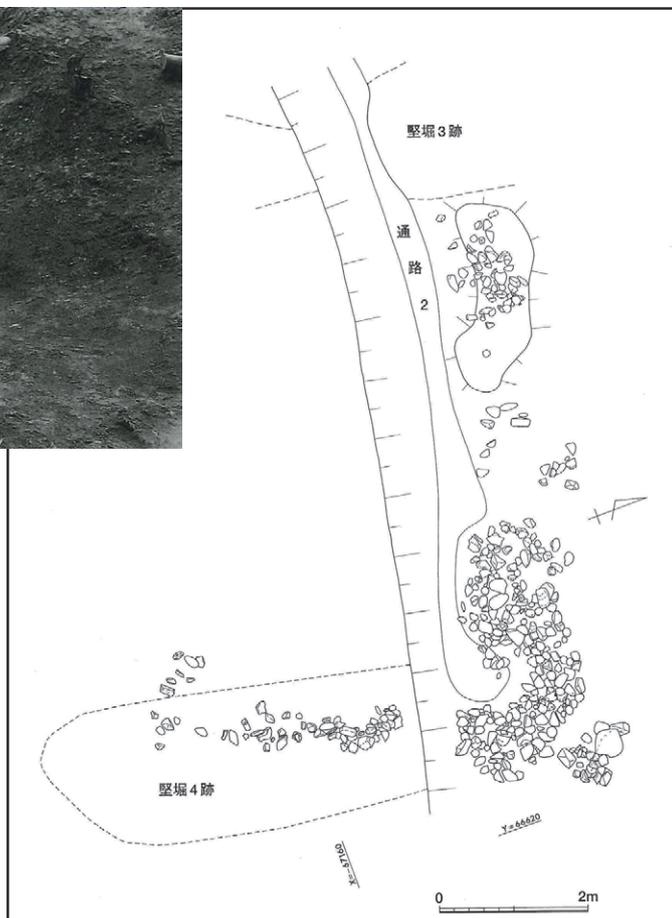
第12図 報告書で示された第1段階図



第13図 報告書で示された第2段階図



第14図 堅堀4内の飛礫石の出土状況



第15図 堅堀4・通路(横堀)内の飛礫石の出土状況



第16図 第2段階縄張り図(改定)

## 第3章 畝状空堀群の地域的特質に関する検討

### はじめに

中世城館の分布調査は1970年代に始まり、80年代に本格化する。その後2000年代に入り多くの自治体で調査が行われた。2018年現在、岡山県で実施されており、未実施の自治体についてはごく一部となった<sup>1</sup>。未実施であってもそれを代替するような書籍が刊行されているところもある<sup>2</sup>。初期に実施されたものは、現在の研究レベルから見れば、見劣りのするものも多いが、畝状空堀群の全体の傾向を把握できる状態になってきた<sup>3</sup>。また近年、個人や自治体史、研究会などで特定地域の城館を紹介する書籍も刊行されている<sup>4</sup>。このような調査成果から本章では主に近畿から中国地方にかけての畝状空堀群を取り上げ、その分布状況と意味することを検討したい。

第2章で分布と地域性について、全国的な見地から方向性を見出したが、本章ではさらに丹波・丹後、出雲・石見を取り上げて詳細に検討したい。

本章では第2章で城山城（島根県）について検討したように、畝状空堀群の上部の横堀は埋没することも多く、地表面観察による調査では十分把握できないこともありえる。そこで畝状空堀群の導入レベルを広域に検討する方法として、単純に本数を取り上げ検討したい。また遺構の変化の検討では堀切と連続するものが初源と見られ、その後16世紀に入ると大規模な敷設に移っていく傾向を踏まえ、3つのランクに分類したい。その意図としては10本以上を敷設し、城域の全面あるいは曲輪側面全体に用いているAランクに該当する事例を抽出することを第一儀とする。次いでそれに準ずるものをBランクとし、規模の小さいものをCランクとする（第1図）

### 第1節 丹波・丹後における畝状空堀群

丹波は現在では京都府側（船井郡、何鹿郡、天田郡）、兵庫県側（多紀郡、氷上郡）に分かれており、丹後は京都府に含まれる。京都府では2012年から2015年にかけて分布調査報告書が刊行され、全体像が把握できるようになった。そのため京都府側の丹波と丹後を中心に検討を行う。

#### 事例検討

Aランク（塹堀本数10本以上、城域全面使用、曲輪側面全体使用）

代表事例として丹波では梨子ヶ岡城（綾部市）、余部愛宕山城（舞鶴市）、日置谷城（綾部市）、位田城（綾部市）、丹後では宇谷城（舞鶴市）、京田城（舞鶴市）をあげる。主郭などの曲輪を1周するようなものや、側面全体に敷設するものである。なおかつ本数を

10本以上とすることで、大規模に設置しているものを抽出する。このランクでは堀の幅も大きく均一化され、長さも長く一定に近い。

Bランク（本数5本以上10本未満、曲輪側面限定使用）

代表事例として丹波では栗城（綾部市）、大戸城（南丹市）、丹後では志高城（舞鶴市）をあげる。城域全体をめぐらない部分的な使用例を抽出する。堀切と連続するものも含むが、Cランクよりは堅堀の間隔が狭く、やや計画的なもの。

Cランク（本数5本以上10本未満、堀切から連続、曲輪側面限定使用）

代表例として丹波では黒田城（南丹市）、嶋間城（綾部市）、桐村城（福知山市）、丹後では大俣城（舞鶴市）をあげる。堀切から連続して設置され補助的役割を担う。また随時追加して掘削されたと考えられ、まとまった本数を計画的に設置したAランクと大きく岐別される。

事例1 梨子ヶ岡城（綾部市）ランクA 第2図

梨子ヶ岡城は綾部市口上林に所在する小規模な城館である。曲輪は主郭を中心に小さな曲輪が3つ存在するが、ほぼ単郭に近い構造である。南の山側に3本の堀切、北に1本の堀切があり、東西は全て畝状空堀群で埋め尽くし、堀切を含めるとすべての斜面に堀が存在する構造である。畝状空堀群の中にはU字型になるものも含まれる。

事例2 余部愛宕山城（舞鶴市）ランクA 第3図

余部愛宕山城は舞鶴湾に面した山に存在し、同一山稜上には余部下村城、余部上城などがある。最も標高の高い地点が主郭と目されるが、曲輪の削平状況が悪く、まとまった広さをもつ曲輪はない。東へ伸びる尾根を2重堀切で仕切り、それより北側と南側に堅堀群連続する。北側に堀切を除いて13条、南側には不明確ながらも5条の堅堀がある。曲輪から少し距離をおいて設置されている。

事例3 日置谷城（綾部市）ランクA 第4図

西側斜面に畝状空堀群が多用されている。まず主郭北西斜面をみると、堀切から連続するタイプのもので4条確認でき、主郭西側に位置する曲輪の北側斜面にも堀切から連続して3条確認できる。この空堀群の上部空間に設けられた小曲輪は、若干のくぼみを持っており、堀状になっている。日置谷城では西側斜面で畝状空堀群が多用される反面、東側斜面や城域の南側では横堀の発達が著しい。畝状空堀群と横堀が共に発達した事例として注目される。

事例4 位田城（綾部市）ランクA 第5図

位田城は標高260mの山頂にある「高城」と、その西方に位置する「低城」とに大別される。畝状空堀群は「高城」「低城」の双方で確認できる。「高城」の主郭群南側のものは堀切に接続する形で設置される。主郭群から西へ下った曲輪の北側に6条の畝状空堀群がある。ここからさらに西へ下った曲輪は、全面と背後を堀切で遮断し、曲輪側面をほぼ畝状空堀群で埋めている。

次に「低城」をみると、主郭北東の「高城」側から北へ伸びる尾根にかけて、堀切状になっ

たものを含めて15条の堅堀が確認できる。主郭の北西には空堀群と対応した土塁があり、主郭東側には小曲輪が畝状空堀群の端に接して付属する。この小曲輪は堅堀を越えて主郭側面に回り込む敵を防ぐ意図があると考えられる。

#### 事例5 宇谷城（舞鶴市）ランクA 第6図

3つの曲輪とその周りに小規模な曲輪を配しており、主郭では北側を除いて土塁が使用されている。畝状空堀群は西側の堀切から南側の堀切へ至り、東側の斜面へ少し回り込む形で設置されており、北側斜面でも小規模なものが6条と5条確認できる。一見乱雑に配置されているように見えるが、西側から南側にかけては緩傾斜のため、堀切、横堀を用い、東側にかけては空間を埋め尽くすように堅堀を配し、一部にそれらを横につないでいるものや、曲輪面まで切り込んでいるものもある。

#### 事例6 京田城（舞鶴市）ランクA 第7図

京田城は後世の改変により主郭へ至る通路は確証に欠けるが、それほど大きな改変は見受けられない。西側は2重堀切で遮断しており、北側斜面へ長く伸びている。主郭より北側へ一段下がったところにある曲輪の北側斜面に堀切から連続して11条の堅堀がある。

#### 事例7 栗城（綾部市）ランクB 第8図

栗城は大槻氏の居城と伝えられる。その構造は山城と居館部分が堅堀によって一体化となるように指向されている。畝状空堀群は主郭北側斜面に堀切から連続して設けられている。また主郭より西方へ曲輪群が続くが、西端の曲輪から南へ伸びる曲輪には土塁、下方に横堀が敷設されている。そしてその下方に少し距離を置いて3条と2条の堅堀があり、これも畝状空堀群と評価できる。

#### 事例8 大戸城（南丹市）ランクB 第9図

城域は大きく山頂と中腹の2つに区分できる。中腹部分は鍛冶屋敷と呼ばれ、土塁枡形虎口や櫓台状遺構が設けられ特長的な遺構である。山頂部分は中腹の遺構に対して、枡形や櫓台などの施設はない。畝状空堀群は北側の堀切より東側斜面に連続して4条確認できる。

#### 事例9 志高砦（舞鶴市）ランクB 第10図

西南方向にある志高城から派生する尾根上にあり、距離も少し離れていることから別城として取り上げる。曲輪は小規模な曲輪が輪郭状に広がっており、東南斜面に途中小曲輪を挟んで11条が確認される。この畝状空堀群はA、B、Cの3つの地区に区分できる。注目されるのはA、Bの上部を横堀でつないでおり、A、B間の小曲輪より横矢掛かりを意識している点である。

#### 事例10 黒田城（南丹市）ランクC 第11図

江戸期の山陰道と園部より篠山へ至る街道の眼下に望む位置にある。主郭AよりY字状に尾根が伸び、B・Cの曲輪に分かれる。曲輪Cの東側斜面に堀切より連続する空堀群がある。各空堀群の間隔は少し開いており、規格性を伴った形状ではなく、上部の曲輪

とも少し離れている。

#### 事例 1 1 嶋間城（綾部市）ランク C 第 12 図

1995 年に北側の曲輪Ⅱを中心とした部分が発掘調査された遺構である。城域の南端に畝状空堀群が 3 条確認でき、うち両端のものは上部の横堀から派生している。横堀は主郭の北側から西側を廻り一部は土塁を伴いながら南側まで達している。横堀と畝状空堀群が並列して使用されている事例として確認できる。

#### 事例 1 2 桐村城（福知山市）ランク C 第 13 図

主郭より 4 方に尾根が延びるが、そのうち西南に延びる尾根では、堀切はないが 5 条の堅堀が放射状に展開している。北側に延びる尾根では 3 ヶ所の堀切があり、主郭よりの堀切に接して、西側斜面に 2 条の堅堀があり畝状空堀群を構成する。また西側も堀切に接して堅堀がある。南東に延びる尾根では堀切と少し間隔が開くが 2 条の堅堀がある。全体的に曲輪と接して用いられず、少し距離を開け緩斜面となることや、堀切側面を防御することに主眼があると考えられる。

#### 事例 1 3 大俣城（舞鶴市）ランク C 第 14 図

1995 年に発掘調査された小規模城館である。虎口を出た所に L 字状に曲がった土塁を伴う曲輪の側面と、下方に 3 条の畝状空堀群が確認されている。側面のものは主郭南側の堀切を越えて脇へ回り込む敵の横移動を防ぐ役割と考えられるが、その上部空間に対して横矢掛かりを意図したのと考えられる。また下方のものに対して土塁越しに攻撃できる形態となっている。

これらの事例を通して C ランクに属するものは、堀切や登城路の周辺に設けられているものが多い。B ランクに属するものは堀切に連続しながらも、城域側面など面的に敷設している。A ランクは城域全面や、複数の地点に畝状空堀群を敷設している。今回の事例検討では取り上げていないが、将監城（綾部市高津町）では Y 字広がる城域の外側全面に畝状空堀群が設けられている。等高線から傾斜がゆるくなった地点を中心に設けられている様子<sup>5</sup>がうかがえる。

### 分布による考察

丹波地方での畝状空堀群の分布状況は第 27 図の分布図に示した通り、北部に多く分布する<sup>6</sup>。これは福島氏の指摘しているように、南部ではある程度規模の大きい城で用いられている。これに対して、分布の多い北部では中小規模の城館での使用例が多い。分布図を参照すると由良川上流域の綾部市上林谷から綾部市市街地を経て、福知山から舞鶴市の下流部に密集して分布する様子<sup>7</sup>がうかがえる。

この他、丹波では大規模城郭（八木城、八上城、黒井城）では見られないことが注目され、明らかに、丹波では中小規模の城郭で多用される施設であるのが分かる。このような分布状況について、全国的にみても、ある特定の地域に集中的に畝状空堀群が分布する傾向が見られる。その理由として、軍事的緊張が高まった時期に、集中的に設

置されたという見方が強い。このように丹波では畝状空堀群の分布状況から、一郡レベルあるいはそれを越える勢力の居城ではほとんど使用されず、小規模勢力で多用された状況が見出せる。

ここで、分布状況を詳細に見てみると、東舞鶴では若狭との国境付近では見られず、市街地の西から南にかけて見られる。西舞鶴でも市街地の西から南側及び西の由良川沿いに分布が多い傾向がある。綾部地域みると、位田城は延徳の国一揆の中心地として知られ、栗城は大槻氏の居城で、いずれもこの地域を代表する城郭で、舞鶴地域とは少し異なる様相を示す。

このように分布状況から、綾部市から舞鶴市にかけて集中的に分布する様子がかがえたが、その理由について検討する。丹波では丹波国守護代を勤めた内藤氏の居城である八木城、山科言継日記である『言継卿記』のなかで、「丹波守護」と表される波多野氏の居城である八上城、明智光秀の丹波攻略に立ちはだかった荻野直正の居城である黒井城などのように、大規模城郭、あるいは一郡以上の地域に影響力を誇る勢力の居城では一切使用されていない。ここでは、この綾部市から舞鶴市にかけて集中的に展開する理由について検討する。この地域において軍事的緊張が高まるのは、つぎの3点が考えられる。

1 延徳年間（1490）の丹波国一揆

2 永正・大永年間（1504～1527）の細川政元・若狭守護武田元明による丹波・加佐郡侵攻

3 永禄3年（1560）の内藤宗勝による加佐郡・若狭西部への侵攻

1については、延徳年間に位田城を中心として蜂起したものだが、何鹿郡・加佐郡の境においての合戦の事例はみえないので、展開の理由としては考えにくい。2は永正年間初期に加佐郡が武田氏の支配下に置かれたことに端を発するものだが、永正年間後半には加佐郡内において激しい合戦が行われており、分布状況と符合する。3は永禄3年を中心に八木城の内藤宗勝が加佐郡へ侵攻したもので、分布状況と符合する。とすると、2か3のいずれかが、畝状空堀群の展開と関わりが深いと推定できるわけだが、2については疑問が残る。それは永正4年より細川政元と武田氏による丹後進侵攻は始まり、その影響は永正・大永年間を中心に継続するが、この地域の中心的城郭である賀悦城（加悦町）、今熊野、阿弥陀ヶ峰城（宮津市）、倉橋城（舞鶴市）やその周辺での畝状空堀群の分布が見られない点である。また天文7年（1588）には武田勢が加佐郡由良川下流の由良浜・水真村で合戦するがここでも分布は見られない。これにより現在の所、福島氏が指摘するように、永禄3年に起こった内藤宗勝と若狭武田氏との加佐郡での合戦に伴って、在地側の軍事的緊張により広がったとするのが妥当なところであろう。

## 第2節 出雲・石見における畝状空堀群

島根県は旧国では出雲、石見、隠岐の3ヶ国が存在するが、隠岐国は離島で畝状空堀群は存在しないので、ここでは出雲と石見を扱う。島根県では1997、98年に分布調査報告書が発刊されているが、全ての縄張り図が掲載されているわけではなく、調査担当者によって精粗もある。筆者は出雲、石見の山城について概要をまとめた<sup>9</sup>が、その中でも畝状空堀群について紹介している。これらによって県内全体を概観することは可能で、石見地方では大田市から江津市にかけての海岸部では分布が少なく、浜田市から益田市、吉賀町にかけて、美郷町、川本町周辺に密に分布している。

### 事例検討

A ランク（堅堀本数10本以上、城域全面使用、曲輪側面全体使用）

代表事例として出雲では勝山城跡（安来市）、京羅木山城跡（安来市）、石見では鳶巣城跡（浜田市）、山吹城跡（大田市）、飯の山城跡（川本町）、角井城（益田市）をあげる。

B ランク（本数5本以上10本未満、曲輪側面限定使用）

代表事例として出雲では伊秩城跡（出雲市）、城山城跡（松江市）、石見では温湯城（川本町）、松山城跡（江津市）をあげる。

C ランク（本数5本以上10本未満、堀切から連続、曲輪側面限定使用）

代表事例として出雲では茶臼山城（松江市）、石見では矢懸城（浜田市）をあげる。

事例1 勝山城（安来市）ランクA 第15図

勝山城は尼子氏の居城、京羅木山から富田城側へのびる尾根ピークに所在する。毛利元就の本陣と伝えられ南北には柵形虎口が設けられ、北側斜面全体に畝状空堀群が敷設されている。一部曲輪の墨線に折れも見られる。背後の京羅木山城にも畝状空堀群は見られるが、勝山城ほど整然と計画的に敷設されている事例は出雲では見られない。

事例2 京羅木山城（安来市）ランクA 第16図

京羅木山城は尼子氏の居城、月山富田城より標高の高い位置に存在し、大内氏や毛利氏の富田城攻めの際に利用され、畝状空堀群と土塁が特徴的である。最高所のAが中心となる曲輪である。東西に小規模な曲輪と連ね、北側でこれらを結んでいる。東は土塁囲みとなっている。これより東に延びる尾根にも削平のあまい細い曲輪状の遺構が見られる。Aより北に延びる尾根には尾根に沿って土塁が両側に存在し、西側緩斜面に堅土塁が伸びており、その間は細い段状遺構となっている。Aと小曲輪の回りには畝状空堀群が西南をのぞき、ほぼ全周するように取り巻いている。

事例3 鳶巣城跡（浜田市）ランクA 第17図

鳶巣城跡では北側斜面に集中的に導入されている。その中でも東側のものは地面を彫り込んだだけのものであるが、aの部分は堀と堀の間の土塁がコブのように高まっている。

この部分は斜面の傾斜角度が緩やかになっている。

#### 事例4 山吹城跡（大田市）ランクA 第18図

山吹城跡は石見銀山を守る城のひとつ。南側斜面に16本と3本の畝状空堀群が存在する。これらの堅堀は整然と並べられ、1本1本追加していったというより、まとめて普請したと考えられる。主郭の北側の曲輪には石積みも確認できるが、畝状空堀群とは年代が異なると考えられる。

#### 事例5 飯の山城跡（川本町）ランクA 第19図

飯の山城は石見随一の河川である江の川を眼下に見下ろす位置にある。川の対岸は現在川本町の中心地となっているが、この南に近接する形でこの地に勢力を張った小笠原氏の居城である温湯城がある。城主には福屋氏や小笠原氏と伝わっている。構造はAとB地区に大きく分かれ、A地区は小規模ながらも前後を堀切で遮断し、片側全体を畝状空堀群で埋め尽くしている。B地区は作りは粗雑で削平も悪い。画者の間は緩やかな傾斜を残している。つまりA、B地区はこの緩斜面を取り囲むように配置されており、この空間は駐屯地区で陣城であると判断される。『陰徳太平記』によると永禄元年(1558)によると、尼子方が小笠原長雄の対岸の温湯城の救援のため、尼子晴久の援軍が飯ノ山城へ800人の軍勢が入ったという記録があり、そのため尼子方による改修の可能性<sup>11</sup>がある。

#### 事例6 角井城跡（益田市）ランクA 第20図

石見随一の畝状空堀群の事例である。城はY字状に曲輪が広がっており、主に南側斜面と北側斜面に畝状空堀群が展開している。南側斜面には41本、北側斜面には16本、間に谷部分にも5本確認できる。北側曲輪群の先端部分には高津川がせまっており、こちらから城へ取りつくのは難しく、南曲輪群の先端部分も角井川が山裾まで入り込んでいたと考えられることから、この部分には堅堀を少し配置する程度である。谷の奥部分に集中的に畝状空堀群を配置し防御を固めている。

#### 事例7 伊秩城（出雲市）ランクB 第21図

城域はYの字のように尾根上に曲輪が配置されている。主郭は最高所のAと考えられ、現在は休憩小屋などが建設されている。主郭大きく3段に分かれ、西側には低い土塁が付いている。北側へは斜面をくの字に折れながら下の曲輪に降りるようになっている。主郭より南へ下がっていくと井戸のある大きな曲輪があり、この南側は急斜面となり、緩斜面となったところに畝状空堀群がある。現状は熊笹に覆われていることや、遊歩道によって削られていることもあり判別しがたい部分もある。

#### 事例8 城山城跡（松江市央道町）ランクB 第22図

城山城は発掘調査が行われ7本の堅堀が確認され、当初堅堀だけであったものが、後に上部が横堀によって分断されていることが明らかにされた（島根県教委2000）城域の片側全体ではないものの、主郭の部分に限れば片側が全て畝状空堀群となっている。また横堀で堅堀上部が壊されている点も年代を推測する手がかりとなる。

#### 事例9 温湯城跡（川本町）ランクB 第23図

温湯城跡は主郭より四方に曲輪が展開し、それぞれ堀切で嚴重に防御している。特に東側は多重堀切となっている。畝状空堀群は山麓の館跡と考えられる部分と山城部分の間に展開している。6本の畝状空堀群が北側斜面にあり7本の堀切によって両者は分断されている。つまり麓から山城へ上がる部分に限定して使用されている。

#### 事例10 松山城（江津市）ランクB 第24図

松山城は江の川を見下ろす位置に存在し、石見国人・福屋氏が毛利氏に抵抗し最後に拠った城と言われる。畝状空堀群は主郭Aの北側に位置する曲輪Bの北側斜面と、Aから西へ延びる尾根の南斜面に展開している。いずれも山麓の清泰寺側からの登城路に位置し、特にBの北斜面は緩斜面となっており、その処理のために敷設されたとみられる。Aの東側も緩斜面があるがこちらには敷設されていないので、登城路をかなり意識した構造である。

#### 事例11 茶臼山城跡（松江市山代町）ランクC 第25図

茶臼山城は松江城下町の南東に位置し、古代には神名樋野と呼ばれた山にある。主郭からは360度全ての展望が開け、南方は毛利氏が尼子氏を攻める際に利用した星上山から京羅木山への山並みが見渡せ、北東には中海、西は宍道湖、北は両者を結ぶ大橋川が見渡せる。現在北東には松江城天守閣も見ることができる。宍道湖から中海にかけては水上交通が発達し、重要な交通ルートであった。茶臼山城はこれを全て見渡せる状況にあり、軍事上重要な城と考えられる。城の構造は曲輪が4つと小規模な城だが、主郭へ至るルートは北側を迂回させるようになっており、堀切もかなり規模が大きい。畝状空堀群は東側の堀切から連続して設けられている。小規模な城館ながらも立地や政治状況、縄張りの丁寧さなどから、最終段階では毛利氏が使用したと考えられる。

#### 事例9 矢懸城跡（浜田市弥栄町）ランクC 第26図

矢懸城跡は当地の国人永安氏の居城である。主郭より西へ延びる尾根に展開する曲輪の先端部分で使用されている。4本の畝状空堀群が確認できる。堀切に連続して設置されており、堀切を越えて側面を回り込み遮断する目的と考えられ、また大手と推定される登城路に接して設けられている。

これらの事例を通して検討すると、ランクCに所属するものは、堀切や曲輪の結節点に掘られた堅堀を補強するように本数を増やしたものと考えられる。ランクBはさらに本数を増やしたものと見られる。これらランクBCとランクAは決定的に異なる部分がある。それは10本、20本という単位でまとめて普請していると考えられ、設置当初から群として設置することで視覚的効果を狙っているものと判断される。また鳶巣城跡でも見られるように、緩斜面の防御方法としても用いられ、同様の形態が七尾城跡や井野城跡、内田要害山城跡などでも見られる。このような大規模に畝状空堀群が設置されるのは、16世紀後半段階と考えられ、まさしく毛利氏が石見へ侵攻した時期と重なる。

## 2 分布による考察

前項の分類をもとに分布図に落としたものが第 28 図であるが、調査に精粗がある可能性も否定出来ないが、畝状空堀群自体は県内全体に分布するものの、大田市、江津市周辺では分布がやや少ない<sup>12</sup>。またランク別によると、出雲地方では A ランクに属するものが少なく、BC のものが大半である。これに対して石見地方では A ランクに属するものが大半である。また尼子氏の居城である月山富田城では使用が見られず、使用されているのは周布氏、益田氏、福屋氏などの地域領主の城郭や、城主名の不明な城館ばかりである。城館規模も大規模なものではなく中規模以下が多い。津和野城や七尾城といった石見を代表する城館でも使用されているが、津和野城の場合、城の中心部分ではなく中荒城とも呼ばれる、尾根先端の部分である。七尾城も城中心部での使用ではあるが、城域全体から見れば少ない<sup>13</sup>。

前節の事例検討であげた飯の山城は、毛利氏が小笠原氏の温湯城を攻めた際の陣城の可能性を考えたが勝山城も富田城を攻めた際の毛利氏の本陣が置かれたと伝わる。また一覽にあげた事例の中にも城主が伝わらない城も多く、陣城での使用例が多いのも特徴である。

これは畝状空堀群は上から下に向かって掘っていき、掘り上げた土を横へ播き上げていけばよいという構築方法が関係すると考える。つまり短期間で普請できる特徴を持ち、それゆえに地域の小規模城館でも積極的に導入され、急を要する陣城での使用も多いと考えられる。また出雲と石見を比較すると、出雲地方では A ランクに属するものがほとんどなく、石見に集中している。全国の研究成果に学ぶと、軍事的緊張の高い地域で畝状空堀群が導入されている事例が見受けられるが、島根県を例にとって考えると、軍事的緊張が高いと考えられるのは、大内氏と毛利氏による 2 度に包囲戦が繰り返された富田城周辺と、石見銀山の攻防<sup>14</sup> に関係する山吹城を含む大田市大森町周辺であろう。しかしこれらの地域では、山吹城や、勝山城での事例はあるものの、分布数としてはそれほど多くない。

出雲、石見の政治状況を概観すると、1540 年には尼子氏により毛利氏の吉田郡山城が攻められ、翌年には逆に大内氏の勢力に尼子氏の富田城が攻められている。その後、1562 年から 66 年には毛利氏による出雲攻略があった。石見銀山を取り巻く情勢も、3 勢力による攻防が繰り返されている。しかし 1560 年代に入ると、毛利氏により石見が統一され安定支配に向かう。石見西部では長らくの益田氏と吉見氏による対立があったが、この頃には益田氏は毛利氏と結び表向きは対立が収束した<sup>15</sup>。このように石見地方は常に尼子氏、大内氏、毛利氏の 3 勢力の狭間に置かれた地域である。その中で石見西部の地域領主である吉見氏、益田氏、福屋氏などはある一定の勢力を維持しており、畝状空堀群の分布が対応している。石見東部で A ランクの分布が少ないのは、石見銀山周辺における 3 勢力の争奪戦が繰り返され、これらの影響力が強いためと考えられる。出雲は尼子氏の本国で 1541 年に大内氏によって富田城が攻められているが、16 世紀前半は尼子氏が最大版図を築いた時期で、比較的に出雲は安定していた時期と考えられ

る。そのため出雲、石見の畝状空堀群の主な構築時期は16世紀中頃までと予測される。

考古学的にも畝状空堀群は16世紀に入ると本数が増え、後半には上部に横堀を伴うものや堅堀の幅や長さの均一化、計画性が高まる傾向が看取<sup>16</sup>できるため、矛盾はないと考える。

### 第3節 畝状空堀群の分布と大名勢力

第1節から2節にかけて近畿北部から山陰地域の事例を検討してきた。ここでは周辺地域での分布の様子も探りながら、今後の見通しを示す。第29・30図は近畿北部から中国地方における畝状空堀群の分布状況をしめしたものである。

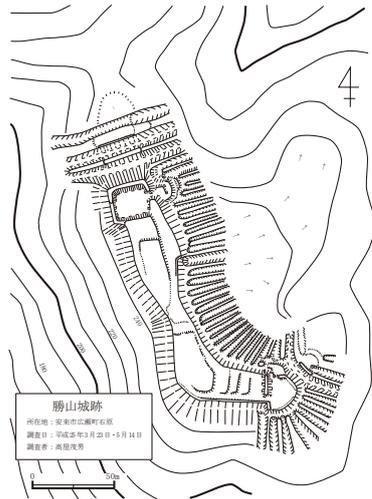
今のところ伯耆ではほとんど事例が確認できず、因幡で少し確認できる<sup>17</sup>。伯耆は尼子氏の勢力下で、毛利氏の出雲攻略にあたっては出雲よりも先に毛利氏によって攻略された<sup>18</sup>。因幡は富田城攻略後、毛利氏と織豊勢力との境目の地域となった。安芸ではかなりの分布が確認されている<sup>19</sup>。安芸は毛利氏の本国であるが、毛利氏は1555年に陶晴賢を破って勢力を拡大したが、それまでは安芸の一国人であった<sup>20</sup>。

丹波、丹後では守護所が置かれる船井郡では少なく、北部の何鹿郡・天田郡が多い。丹後では守護所のある与謝郡ではなく、東部の加佐郡に多く、丹後半島では散在的に多い。丹後の守護は一色氏であるが、国内には延永氏や石川氏など有力国人が存在し、一色氏も分裂している状況であった。『丹後国御植家帳』からも丹後各地に有力国人がおり、城を構えている様子が伺える<sup>21</sup>。

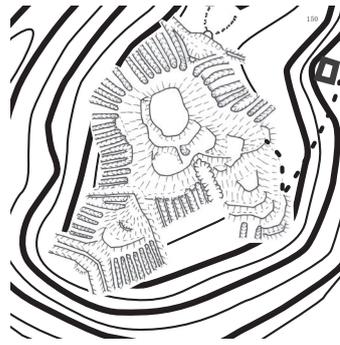
美作でも多くの事例を確認できている<sup>22</sup>。美作も周辺勢力の狭間に置かれた地域である。これらのことから、16世紀前半から中頃にかけて、戦国大名の強い影響力下に置かれた地域では畝状空堀群が少なく、長く中小規模の地域権力同士で抗争が繰り返されたような地域が多いことが指摘できる。

このように見てくると、畝状空堀群は一時的な軍事的緊張下では陣城など限定的な使用がなされ、ある一定の期間、軍事的緊張が続き、なおかつ中小規模の国人が並列的な勢力関係を維持している地域で導入が目立つ傾向がある。

- 1 表1参照、山口県では2017年3月に長門国編、2018年3月に周防国編が刊行され、すべての報告が終了したが、今回の検討の中にはその成果を含めることができなかった。今後に期したい。
- 2 例えば神奈川県では西股総生・松岡進・田嶋貴久美 2015、大阪府では中西裕樹 2015などのように、多数の縄張り図を掲載している。
- 3 表1参照
- 4 近畿・中国地方では中西裕樹 2015、西尾孝昌著 但馬歴史文化研究所編 2012、2013などのように、個人による長年の成果の他、城郭談話会 2014、2015、2016、2017、2018の取り組みでは950ヶ所の城館が掲載されている。これには現地を歩いて調査した各地の研究者の成果が集約されている。また高橋成計 2018では数多くの陣城が掲載され、陣城の特徴を導き出している。その他甲賀市史編さん委員会 2010のように自治体史の中でも城館を1巻で取り上げるものもあり、分布調査成果を補っている。
- 5 京都府教育委員会 2013
- 6 城館名、位置については表2を参照
- 7 福島克彦 2002
- 8 八木城＝村田修三編 1987、八上城＝篠山市教育委員会 2003、黒井城＝春日町歴史民俗資料館 1994
- 9 島根県教育委員会 1997、1998
- 10 高屋茂男編 2013、2017
- 11 高屋茂男編 2017
- 12 城館名、位置については表3を参照
- 13 高屋茂男編 2017
- 14 目次謙一 2012
- 15 数多くの研究があるが、例えば山本浩樹 2000などに詳しい。
- 16 高屋茂男 2014
- 17 鳥取県教育委員会 2002、2004
- 18 山本浩樹 2007
- 19 広島県教育委員会 1993、1994、1995、1996
- 20 秋山伸隆 1998
- 21 橋本勝行 2004
- 22 美作国の山城 2011、高橋成計 2014のほか、近年の調査状況については米田克彦氏からご教示頂いた。

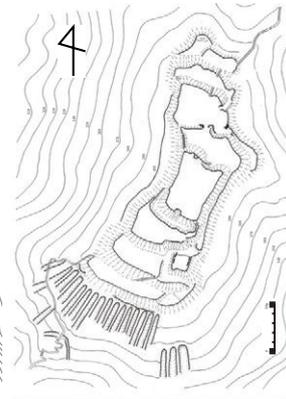


勝山城跡（安来市広瀬町）

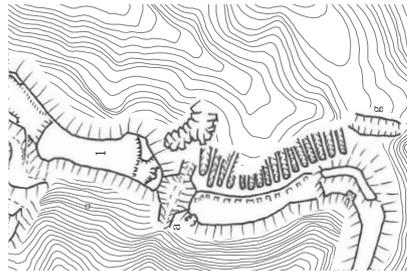


井野城跡（浜田市三隅町）

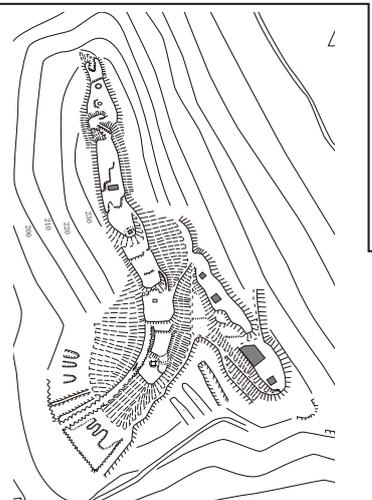
Aランクの城



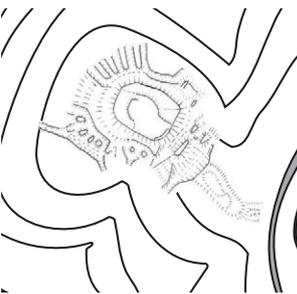
山吹城跡（大田市大森町）



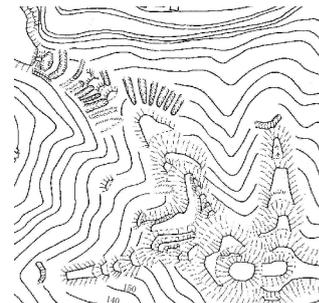
七尾城跡〔部分〕（益田市七尾町）



伊秩城跡（出雲市佐田町）

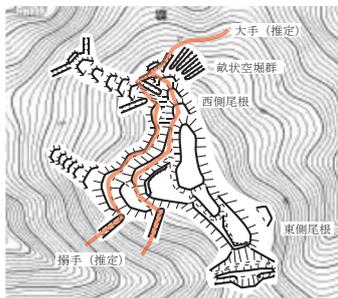


立花城跡（出雲市佐田町）

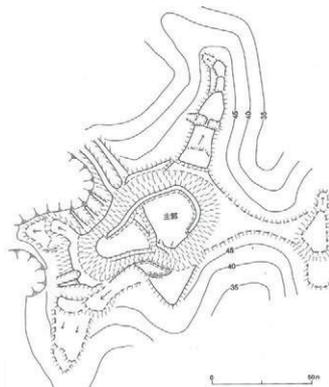


温湯城跡（邑智郡川本町）

Bランクの城



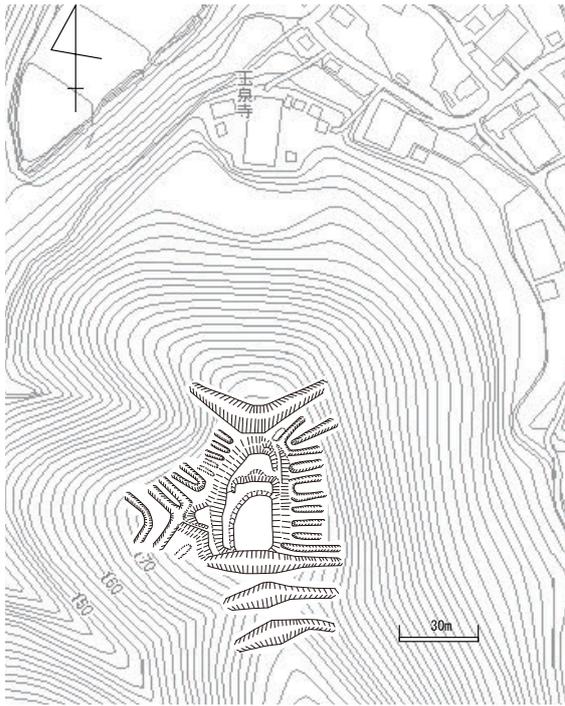
矢懸城跡（浜田市弥栄町）



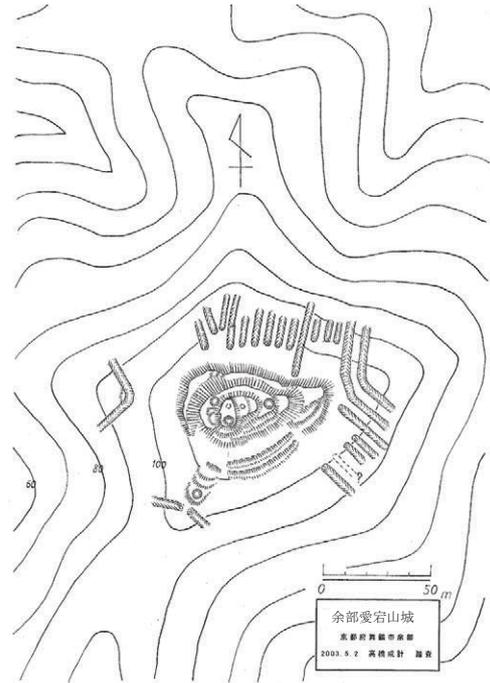
半分城跡（出雲市上塩冶町）

Cランクの城

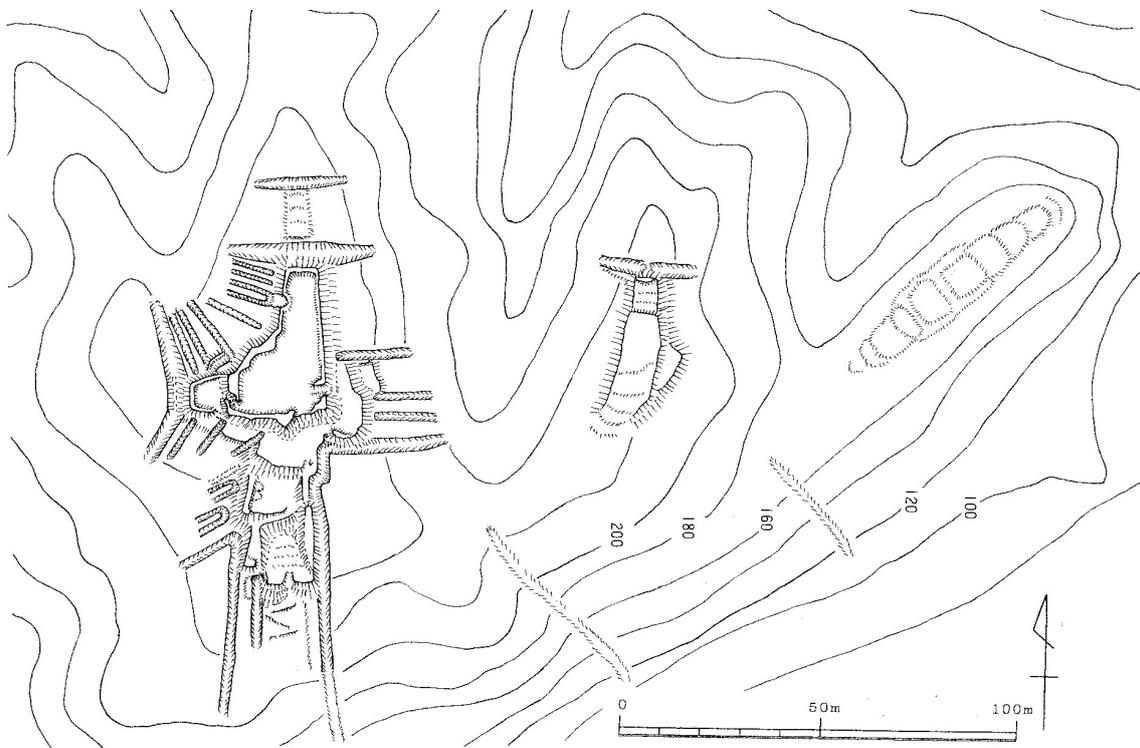
第1図 畝状空堀群の城の代表例



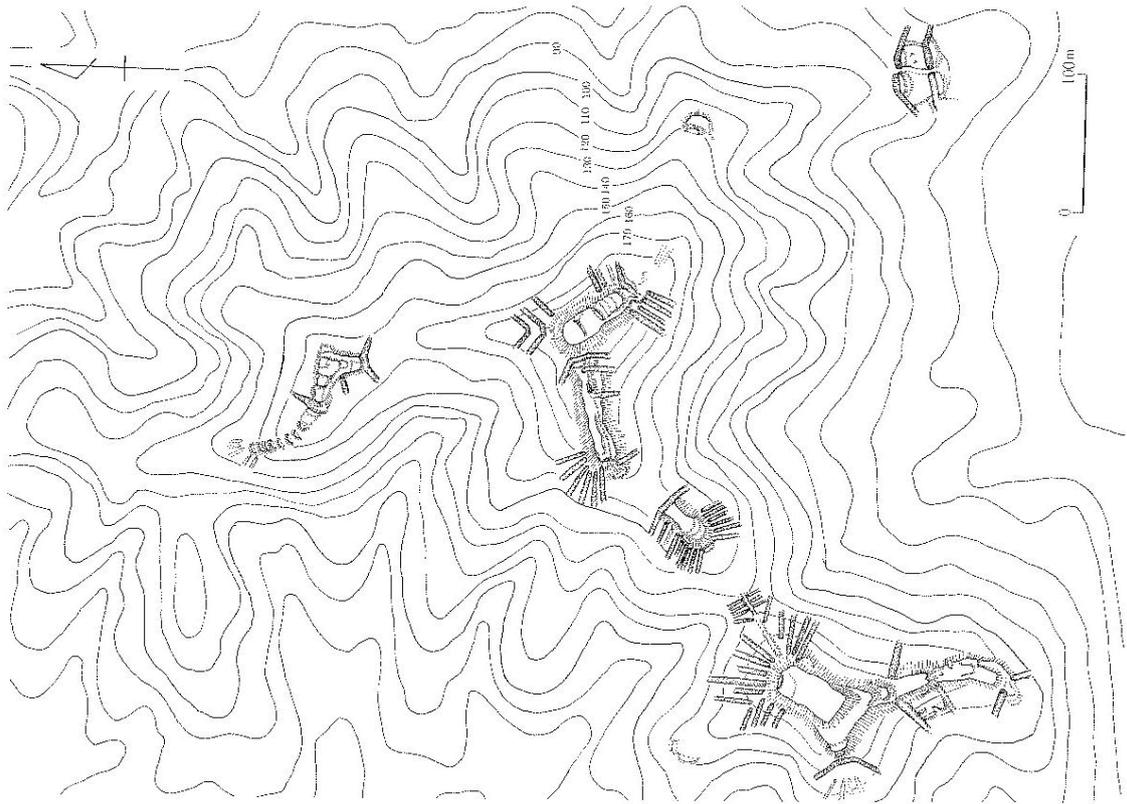
第2図 梨子ヶ岡城



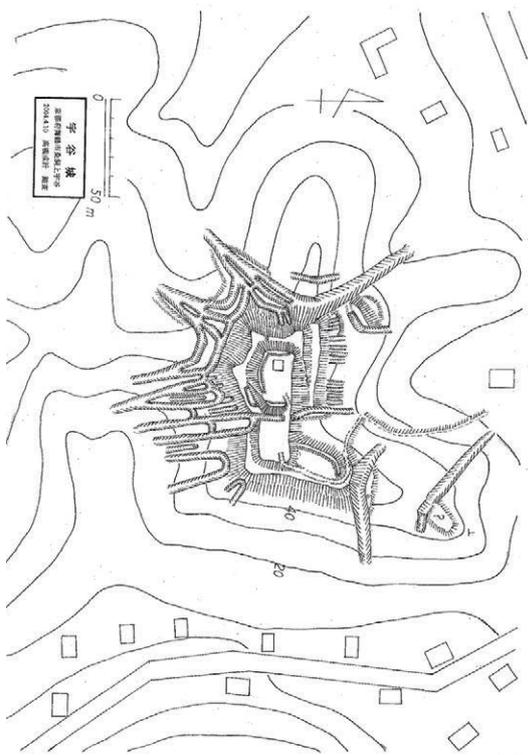
第3図 余部愛宕山城（高橋成計氏作図）



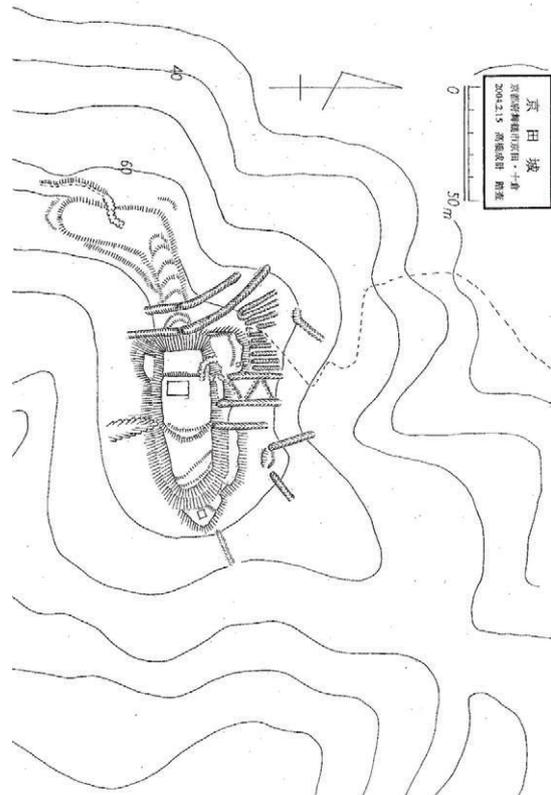
第4図 日置谷城



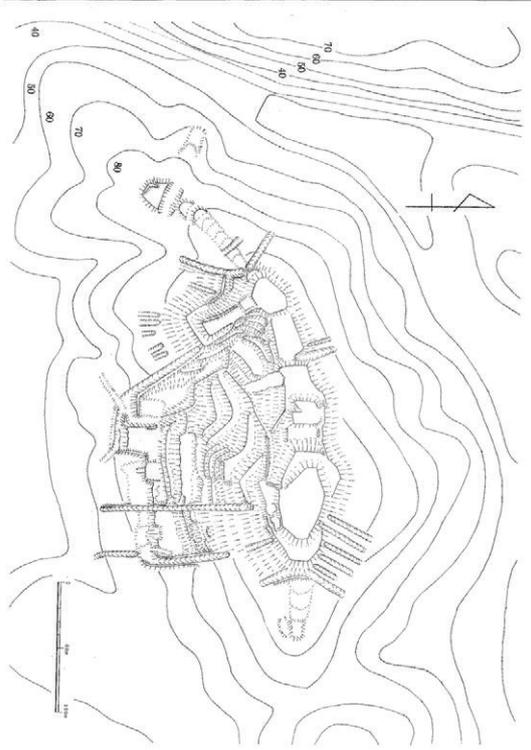
第5図 位田城



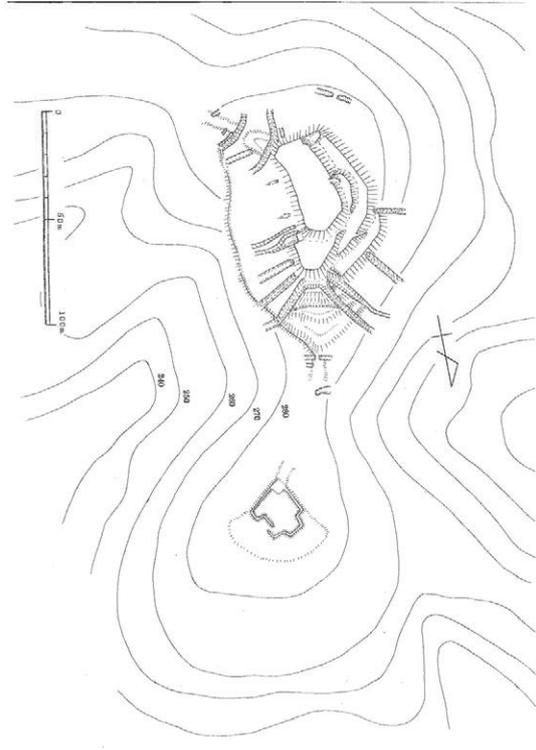
第6図 宇谷城 (高橋成計氏作図)



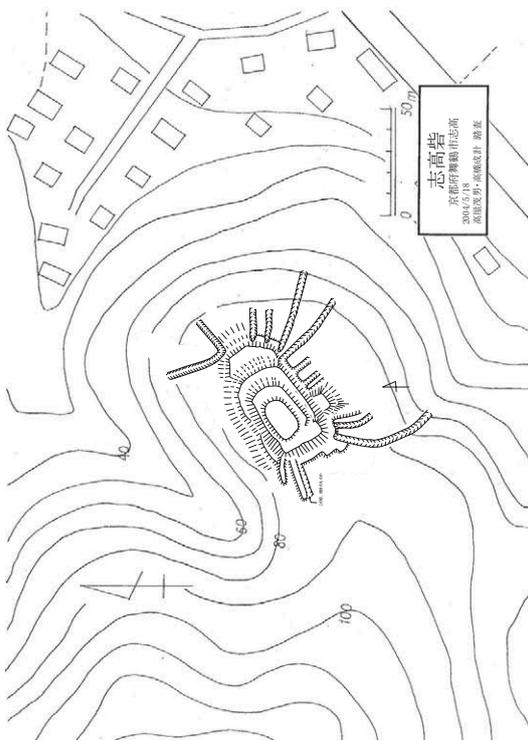
第7図 京田城 (高橋成計氏作図)



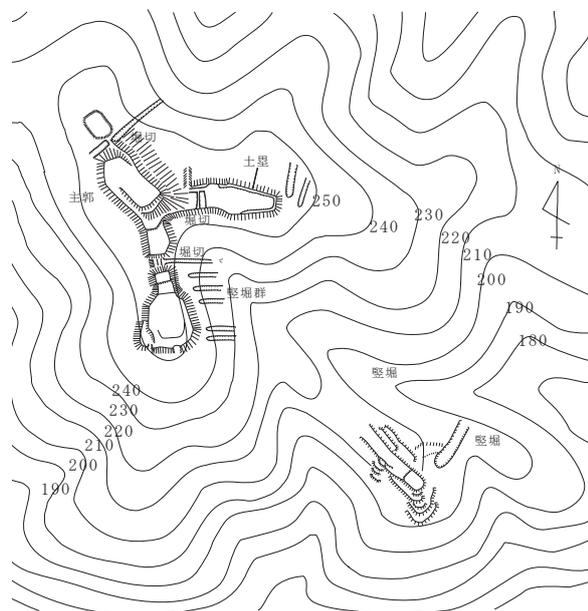
第8図 栗城城



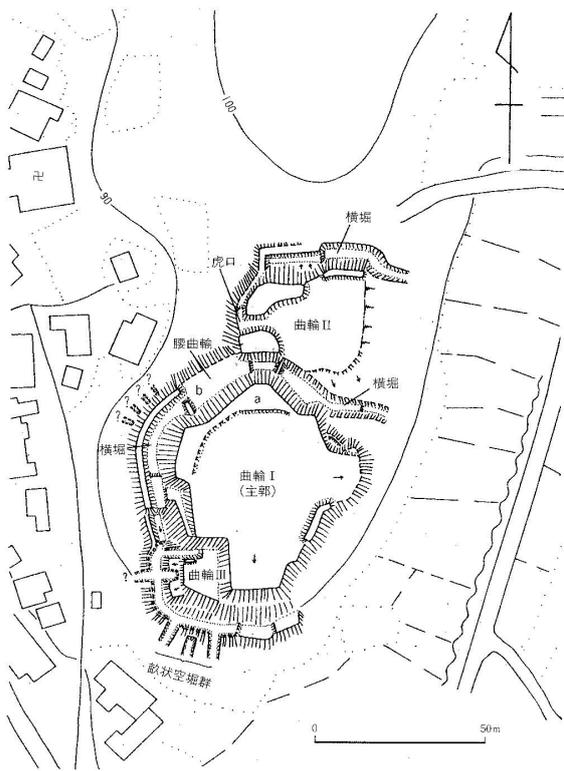
第9図 大戸城



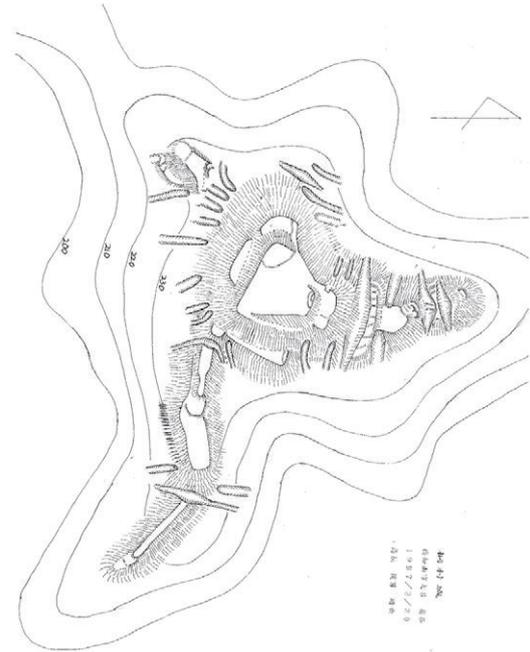
第10図 志高砦



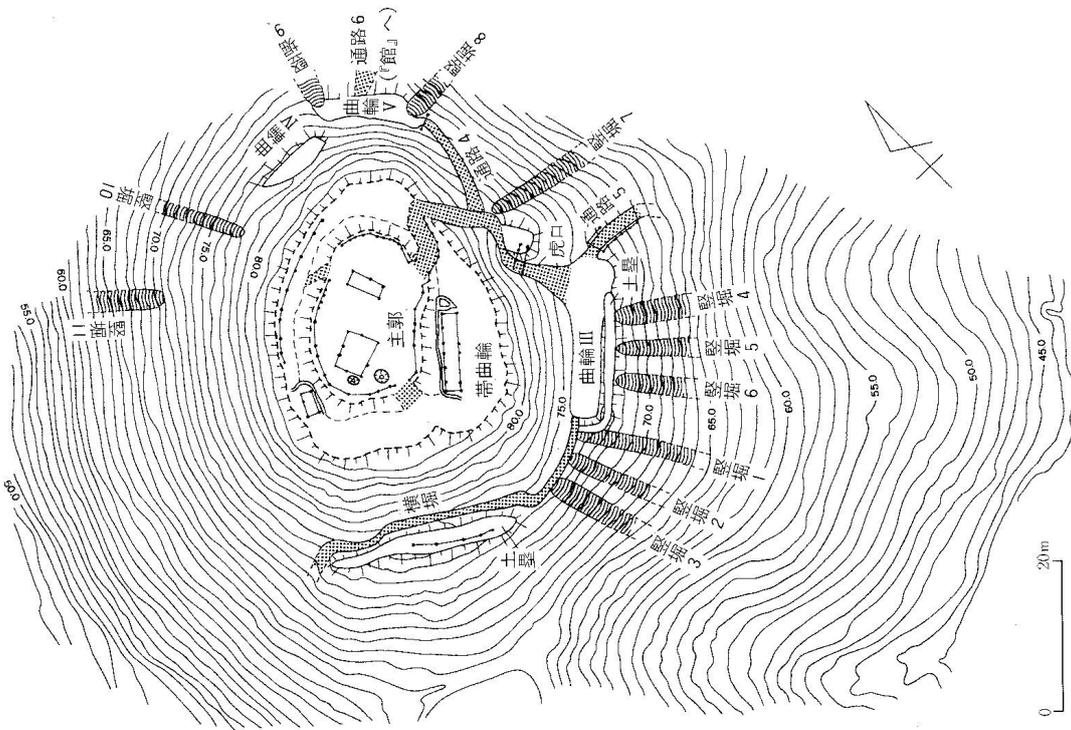
第11図 黒田城



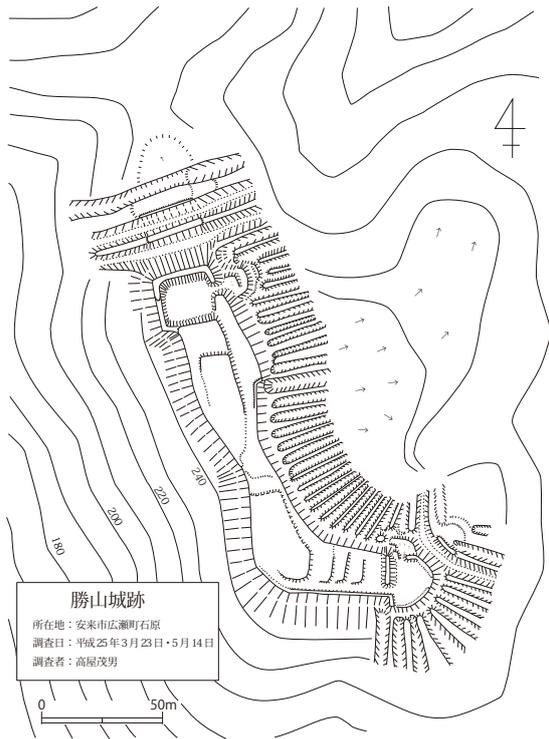
第12図 嶋間城 (福島克彦氏作図)



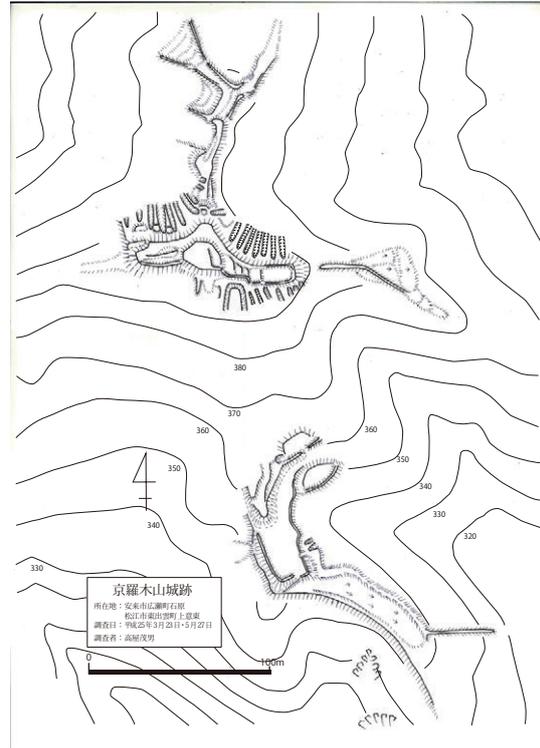
第13図 桐村城



第14図 大保城



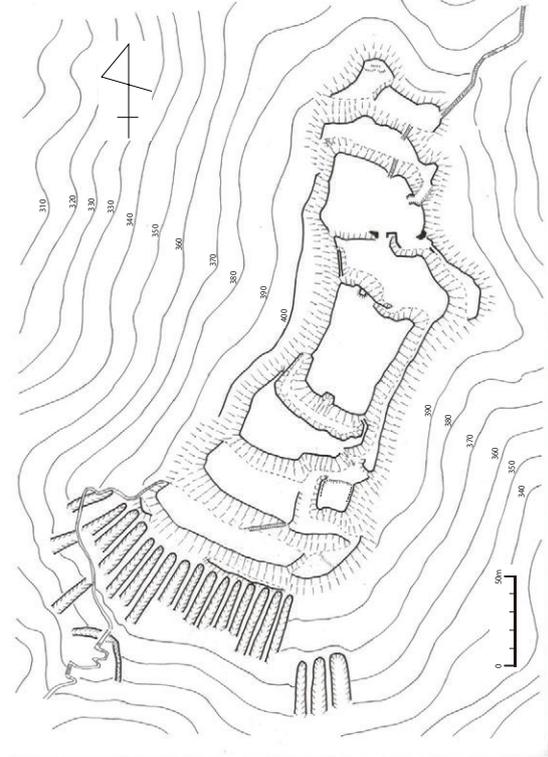
第15図 勝山城



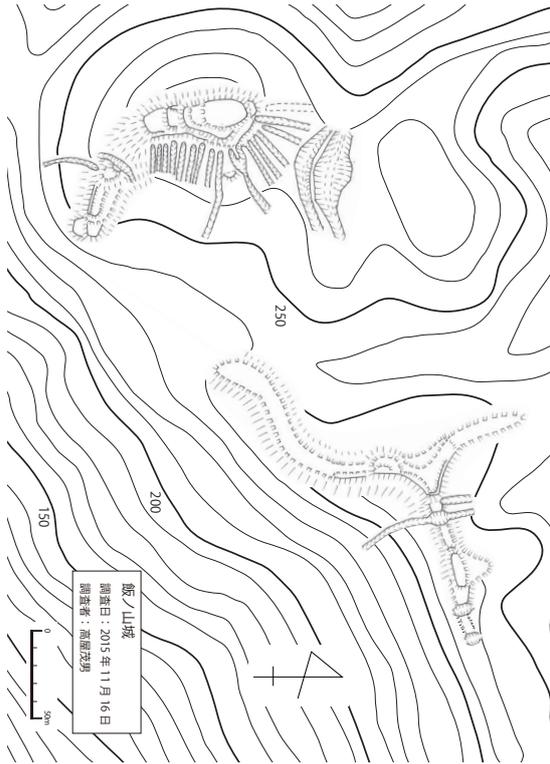
第16図 京羅木山城



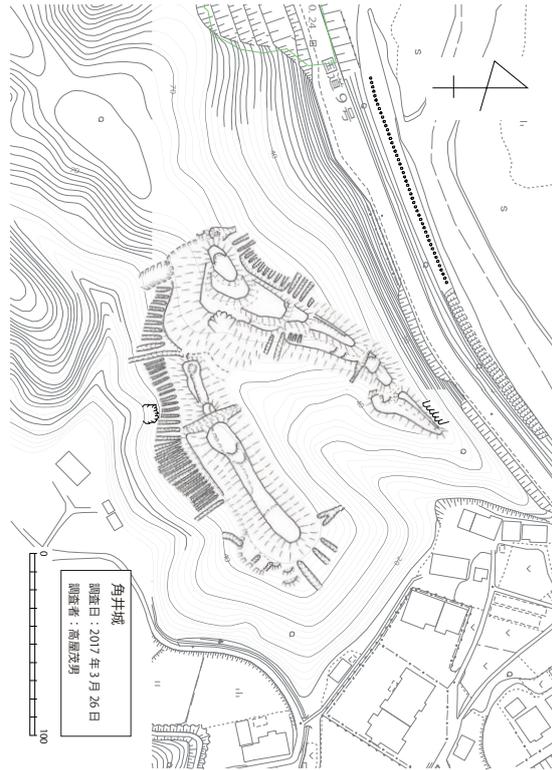
第17図 鳶巣城



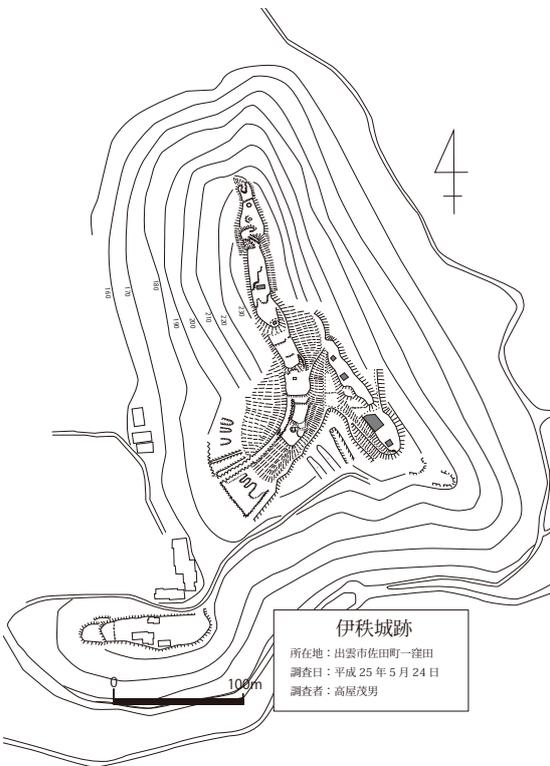
第18図 山吹城



第19図 飯の山城



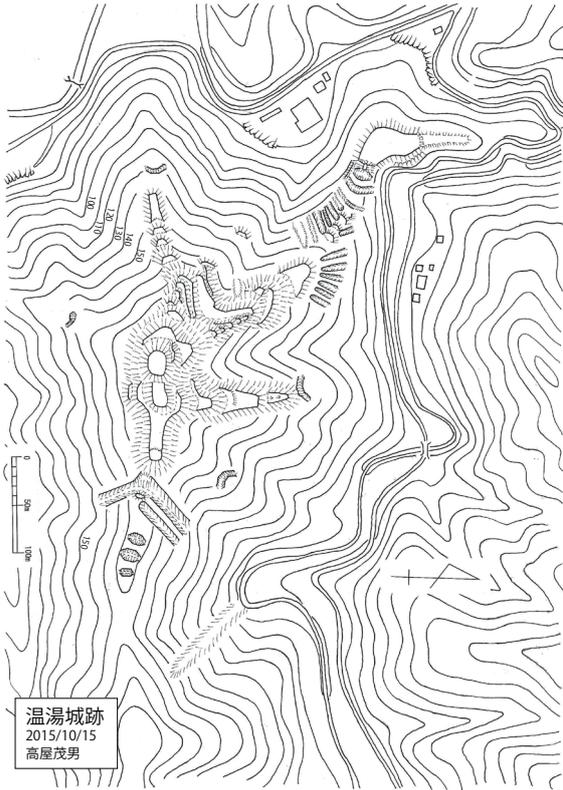
第20図 角井城



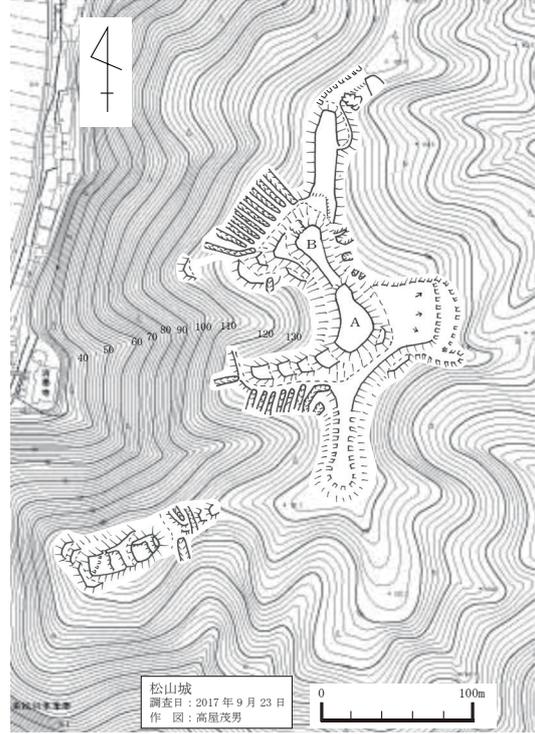
第21図 伊秩城



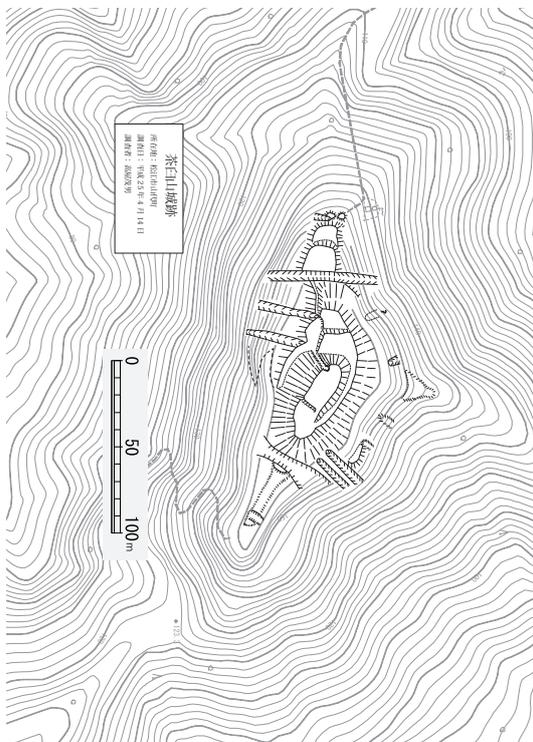
第22図 城山城



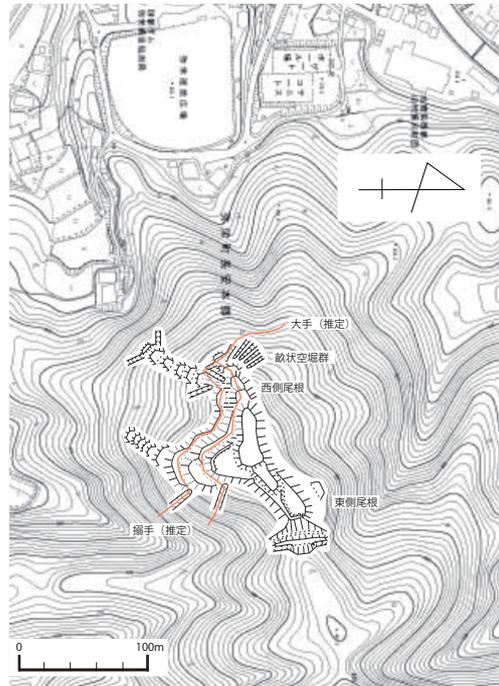
第23図 温湯城



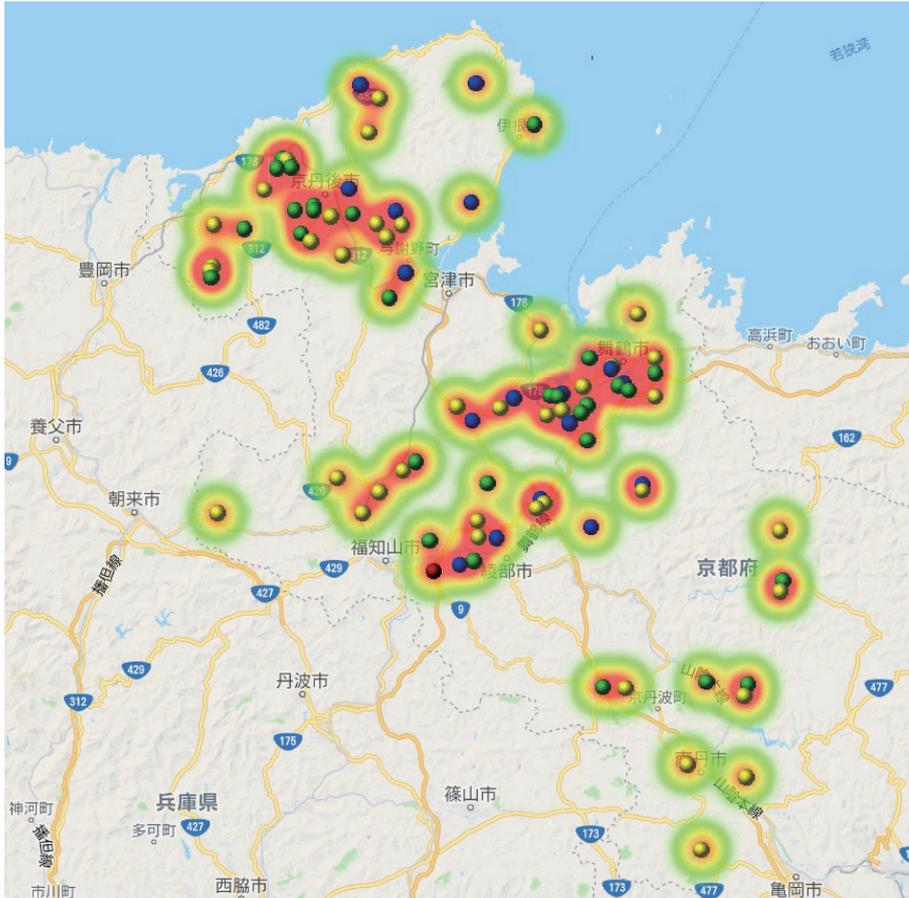
第24図 松山城



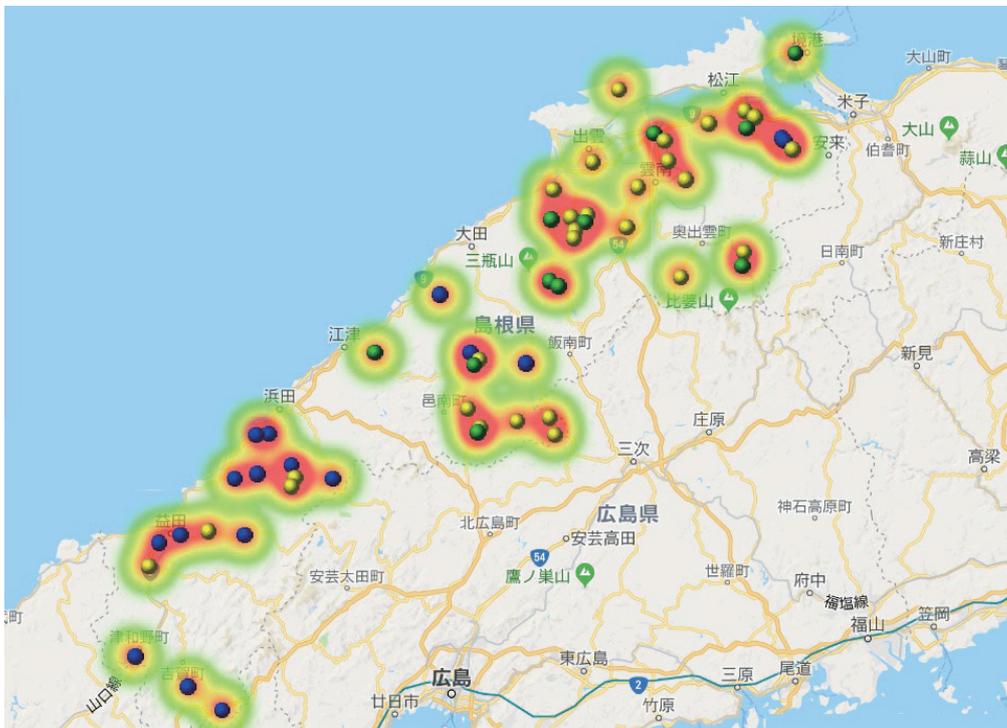
第25図 茶臼山城



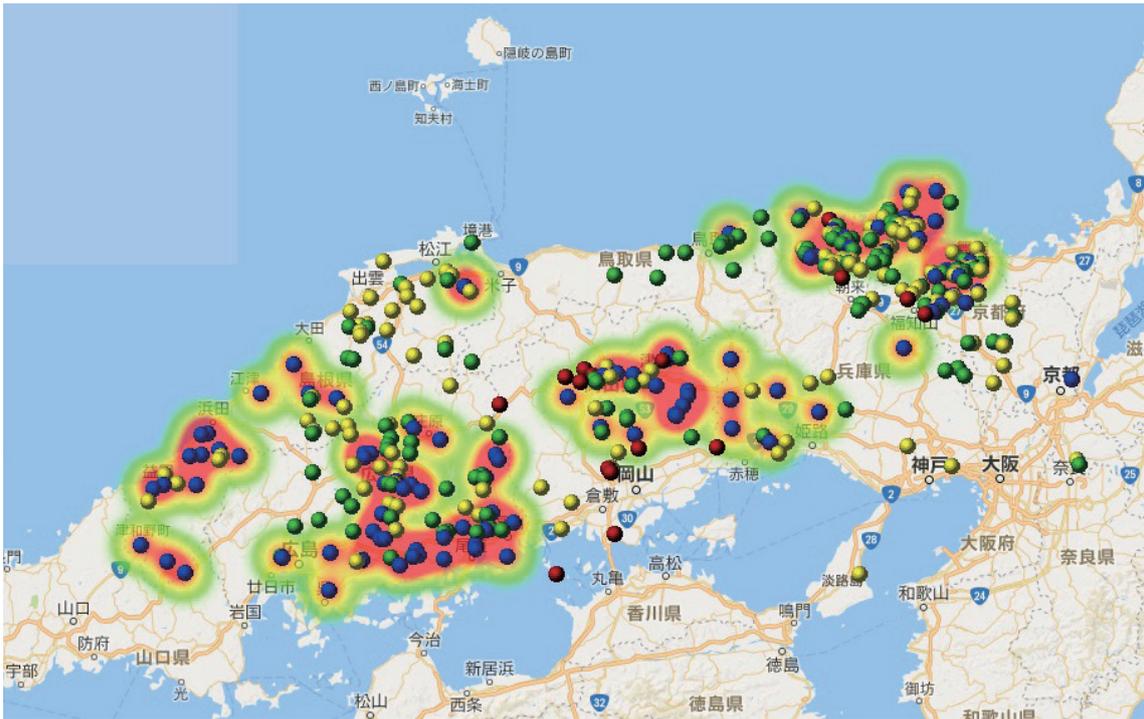
第26図 松山城



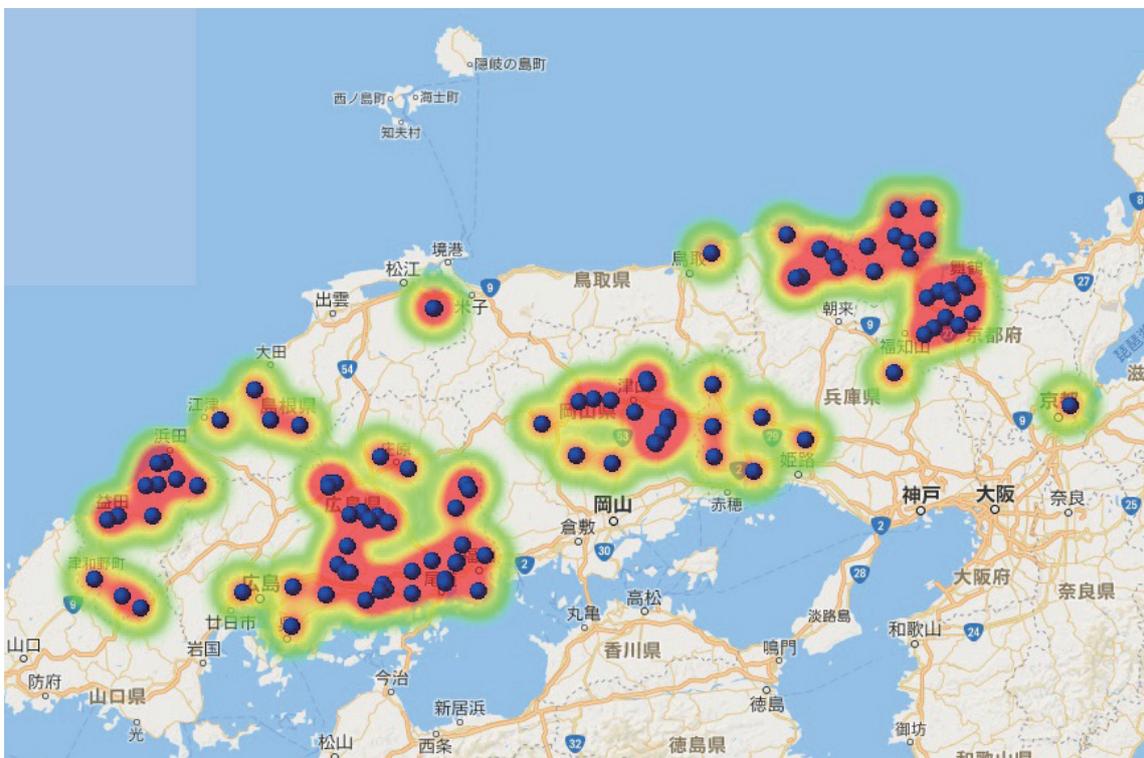
第 2 7 図 丹波・丹後の畝状空堀群分布



第 2 8 図 出雲・石見の畝状空堀群分布



第29図 近畿北部から中国地方の畝状空堀群分布 青＝Aランク、緑＝Bランク、赤＝Cランク  
山口県はのぞく、岡山県は現段階で知れたものをプロットした



第30図 近畿北部から中国地方の畝状空堀群分布 (Aランクのみ)

表 1

全国城館分布調査報告書			
番号	都道府県	文献名	西暦
1	北海道	都道府県別日本の中世城館調査報告書集成 1	1983
2	青森県	青森県の中世城館：青森県文化財調査報告書	1983
3	岩手県	岩手県文化財調査報告書 第 82 集 (岩手県中世城館跡分布調査報告書)	1986
4	宮城県		
5	秋田県	秋田県文化財調査報告書 第 86 集 (秋田県の中世城館)	1981
6	山形県	山形県中世城館遺跡調査報告書：置賜地域 第 1 集	1995
7	山形県	山形県中世城館遺跡調査報告書 第 2 集 (村山地区)	1998
8	山形県	山形県中世城館遺跡調査報告書 第 3 集 (庄内・最上地区)	1997
9	福島県	福島県文化財調査報告書 第 197 集 (福島県の中世城館跡)	1988
10	茨城県		
11	栃木県	栃木県の中世城館跡	1982
12	群馬県	群馬県の中世城館跡	1989
13	埼玉県	中世の城館跡 埼玉県北足立・南埼玉・北葛飾地方	1990
14	埼玉県	中世の城館跡 埼玉県入間・比企地方	1987
15	埼玉県	中世の城館跡 埼玉県大里・北埼玉地方	1989
16	埼玉県	中世の城館跡 埼玉県秩父・児玉地方	1988
17	千葉県	千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 1 旧下総国地域	1995
18	千葉県	千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書 2 旧上総・安房国地域	1996
19	東京都	東京都の中世城館	2006
20	神奈川県		
21	新潟県	新潟県中世城館跡等分布調査報告書	1987
22	富山県	富山県中世城館跡総合調査報告書	2006
23	石川県	石川県中世城館跡調査報告書 1	2002
24	石川県	石川県中世城館跡調査報告書 2	2006
25	石川県	石川県中世城館跡調査報告書 3	2004
26	福井県	福井県の中・近世城館跡 (福井県立朝倉氏遺跡資料館)	1987
27	福井県	若狭の中世城館	1979
28	山梨県	山梨県の中世城館跡：分布調査報告書	1986
29	長野県	長野県の中世城館跡	1983
30	岐阜県	岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第 1 集	2002
31	岐阜県	岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第 2 集	2003
32	岐阜県	岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第 3 集	2004
33	岐阜県	岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第 4 集	2005
34	静岡県	静岡県文化財調査報告書 第 23 集 (静岡県の中世城館跡)	1981
35	愛知県	愛知県中世城館跡調査報告 . 1 (尾張地区)	1991
36	愛知県	愛知県中世城館跡調査報告 . 2 (西三河)	1994
37	愛知県	愛知県中世城館跡調査報告 . 3 (東三河地区)	1997
38	愛知県	愛知県中世城館跡調査報告 . 4 (知多地区)	1998
39	三重県	三重県埋蔵文化財調査報告 . 30	1976
40	三重県	三重の中世城館補遺	1981
41	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 1	1983
42	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 2 甲賀の城	1984
43	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 3 旧野洲・栗太郡の城	1985
44	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 4 旧蒲生・神崎郡の城	1986
45	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 5 旧愛知・犬上郡の城	1987
46	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 6 旧坂田郡の城	1989
47	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 7 伊香郡・東浅井郡の城	1990
48	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 8 高島郡の城	1991
49	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 9 旧滋賀郡の城	1992
50	滋賀県	滋賀県中世城館部分調査 10 全県地名表・分布図・索引	1992
51	京都府	京都府中世城館跡調査報告書 - 第 1 冊 - 丹後編	2012
52	京都府	京都府中世城館跡調査報告書 - 第 2 冊 - 丹波編	2013
53	京都府	京都府中世城館跡調査報告書 - 第 3 冊 - 山城編 1	2014
54	京都府	京都府中世城館跡調査報告書 - 第 4 冊 - 山城編 2	2015
55	京都府	京都府中世城館跡調査報告書 別冊	2015
56	大阪府		
57	兵庫県	兵庫県の中世城館・荘園遺跡：兵庫県中世城館・荘園遺跡緊急調査報告	1982
58	兵庫県	上郡町史 第 3 巻	
59	奈良県		
60	和歌山県	和歌山県教育委員会『和歌山県中世城館跡詳細分布調査報告書』1998	1998
61	鳥取県	鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布調査』第 2 集 (伯耆編)、2002 年	2002
62	鳥取県	鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布調査』第 1 集 (因幡編)、2002 年	2002
63	鳥根県	出雲・隠岐の城館跡	1998
64	鳥根県	石見の城館跡	1997
65	岡山県		
66	広島県	広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第 1 集	1993
67	広島県	広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第 2 集	1994
68	広島県	広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第 3 集	1995
69	広島県	広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第 4 集	1996
70	山口県	山口県中世城館遺跡総合調査報告書 長門国編	2017
71	山口県	山口県中世城館遺跡総合調査報告書 周防国編	2018
72	徳島県	徳島県の中世城館	2011
73	香川県	香川県中世城館跡詳細分布調査概報 平成 9 年度	1998
74	香川県	香川県中世城館跡詳細分布調査概報 平成 10 年度	1999
75	香川県	香川県中世城館跡詳細分布調査概報 平成 11 年度	2000
76	香川県	香川県中世城館跡詳細分布調査概報 平成 12 年度	2001
77	香川県	香川県中世城館跡詳細分布調査概報 平成 13 年度	2002
78	愛媛県	愛媛県中世城館跡分布調査報告書 1987	1987
79	高知県	高知県中世城館跡分布調査報告書 1984	1984
80	福岡県	福岡県の中近世城館跡 1 (筑前地域編 1)	2014
81	福岡県	福岡県の中近世城館跡 2 (筑前地域編 2)	2014
82	福岡県	福岡県の中近世城館跡 3 (豊前地域編)	2016
83	福岡県	福岡県の中近世城館跡 4 (築後地域・総括編)	2017
84	佐賀県	佐賀県の中近世城館 佐賀県中近世城館跡緊急分布調査事業概要 (佐賀県文化財調査報告書 第 165 集)	2005
85	佐賀県	佐賀県の中近世城館 第 1 集 (文献史料編) (佐賀県文化財調査報告書 第 192 集)	2011
86	佐賀県	佐賀県の中近世城館 第 2 集 各説編 1 (三養基・神埼・佐賀地区) (佐賀県文化財調査報告書 第 201 集)	2013
87	佐賀県	佐賀県の中近世城館 第 3 集 各説編 2 (小城・杵島・藤津地区) (佐賀県文化財調査報告書 第 204 集)	2014
88	佐賀県	佐賀県の中近世城館 第 5 集 各説編 4 (佐賀県文化財調査報告書 第 213 集)	2016
89	長崎県	長崎県中近世城館跡分布調査報告書 1 (地名表・分布地図編) (長崎県文化財調査報告書 第 206 集)	2010
90	長崎県	長崎県中近世城館跡分布調査報告書 2 (詳説編) (長崎県文化財調査報告書 第 207 集)	2011
91	熊本県	熊本県文化財調査報告 第 30 集 (熊本県の中世城館跡) 1978	1978
92	大分県	大分県文化財調査報告書第 159 集 大分の中世城館 第 1 集	2002
93	大分県	大分県文化財調査報告書第 160 集 大分の中世城館 第 2 集	2003
94	大分県	大分県文化財調査報告書第 161 集 大分の中世城館 第 3 集	2003
95	大分県	大分県文化財調査報告書第 162 集 大分の中世城館 第 4 集	2004
96	宮崎県	宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 1 (地名表・分布地図編)	1998
97	宮崎県	宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書 2 (詳説編)	1998
98	鹿児島県	鹿児島県の中世城館跡 (鹿児島県埋蔵文化財調査報告書：43)	1987
99	沖縄県		
		2018 年 9 月 12 日現在確認したもの。誤脱があればご教示いただきたい。	

表 2

京都府・畝状空堀群所在城郭一覧

name	address	rank
一乗寺山城跡	京都府京都市左京区一乗寺	A
鹿背山城跡	京都府木津川市鹿背山鹿曲田	B
鳶城	京都府木津川市山城町神童子、加茂町西西山	C
永留城跡	京都府京丹後市久美浜町永留蔵ノ谷	C
竹藤城跡	京都府京丹後市久美浜町竹藤中村	B
金谷本丸城跡	京都府京丹後市久美浜町金谷	C
金谷城跡	京都府京丹後市久美浜町畑城地	C
六体城跡	京都府京丹後市久美浜町布袋野	B
日和田城跡	京都府京丹後市網野町日和田大谷	C
糠谷城跡	京都府京丹後市弥栄町黒部虎山・糠谷	C
大山宮ヶ谷城跡	京都府京丹後市丹後町大山宮ヶ谷	A
谷垣城跡	京都府京丹後市丹後町是安谷垣	C
新庄 A 城跡	京都府京丹後市網野町新庄ムコウア	B
新庄 D 城跡	京都府京丹後市網野町ヒジリ谷	C
新庄 E 城跡	京都府京丹後市網野町新庄	B
船山城跡	京都府京丹後市網野町船山	B
奥吉原山城跡	京都府京丹後市峰山町小西頼光・皆谷	B
水尾城跡	京都府京丹後市峰山町新治蔵之谷	B
新治城跡	京都府京丹後市峰山町新治目谷	B
五箇城跡	京都府京丹後市峰山町五箇船岡	B
内記城跡	京都府京丹後市峰山町内記惣山	A
新町城跡	京都府京丹後市峰山町深谷	B
木積山城跡	京都府京丹後市大宮町周枳外尾	C
城ノ上城跡	京都府京丹後市峰山町長岡当日	C
大門城跡	京都府京丹後市峰山町滝ノ本	C
奥大野（倉垣）城跡	京都府京丹後市大宮町奥大野城山	C
久住別城跡	京都府京丹後市大宮町久住日ヶ谷	A
高森城跡	京都府京丹後市大宮町延利池地	C
森本城跡	京都府京丹後市大宮町森本當城	C
石川城跡	京都府与謝郡与謝野町石川舁方	B
日置上城跡	京都府宮津市日置上城山	A
倉梯山城跡	京都府宮津市須津倉梯山	A
野村城跡	京都府伊根町野村袋谷	A
大原城跡	京都府伊根町大原丸山	B
宇谷城跡	京都府舞鶴市桑飼上宇谷	A
大俣城跡	京都府舞鶴市大俣洞中	C
油江小谷城跡	京都府舞鶴市油江小谷	C
志高砦跡	京都府舞鶴市志高館	C
三日市城跡	京都府舞鶴市三日市因福谷	A
下福井城跡	京都府舞鶴市下福井向山	B
山上城跡	京都府舞鶴市城屋キノク	C
愛宕山北（鳶取山）城跡	京都府舞鶴市紺屋紺屋町	A
愛宕山城跡	京都府舞鶴市引土高畑	B
高野由里城跡	京都府舞鶴市高野由里引土	C
京田城跡	京都府舞鶴市京田城跡	A
万願寺城跡	京都府舞鶴市万願寺上ノ山	B
佐武ヶ嶽（大内山）城跡	京都府舞鶴市万願寺スコ谷	B
高迫（新藤山）城跡	京都府舞鶴市上安高迫	C
和田城跡	京都府舞鶴市和田小向	B

余部下村城跡	京都府舞鶴市余部上中カイほか	C
余部愛宕山城跡	京都府舞鶴市余部上後山	A
池下城跡	京都府舞鶴市池内下ツカモト	B
中田城跡	京都府舞鶴市中田片山	C
臼の目（十倉山）城跡	京都府舞鶴市森舟越	B
森（藁谷）城跡	京都府舞鶴市森池ノ谷	A
行永青山城跡	京都府舞鶴市行永青山	B
殿村（上与保呂）城跡	京都府舞鶴市与保呂生水	C
堂奥城跡	京都府舞鶴市堂奥上ノ山	B
小倉姥ヶ谷城跡	京都府舞鶴市小倉姥ヶ谷	C
波美城跡	京都府福知山市大江町波美城山	B
蓼原城跡	京都府福知山市大江町蓼原谷堀	C
夏間城跡	京都府福知山市天津ハツ山	C
秋葉城跡	京都府福知山市夜久野町大油子家の奥	C
桐村城跡	京都府福知山市大呂奥谷	C
湯里東城跡	京都府福知山市牧湯里	C
高蓮寺城跡	京都府福知山市川北	B
ひらいあげ坂城跡	京都府福知山市長田野町	不明
天王山城跡	京都府綾部市志賀郷町城山	B
丸山城跡	京都府綾部市大島町丸山	C
栗城跡	京都府綾部市栗町城山	C
位田城跡	京都府綾部市位田高城	A
甲ヶ岳城跡	京都府綾部市大島町岡ノ段	B
将監城跡	京都府綾部市高津町菅谷	A
高城城跡	京都府綾部市七百石町高城	C
平山城館跡	京都府綾部市七百石高城	A
嶋間城跡	京都府綾部市中筋町宮ノ谷	C
梨子ヶ谷城跡	京都府綾部市武吉町梨子ヶ岡	A
日置谷城跡	京都府綾部市八津合町本城	A
上林城跡	京都府八津合町古城山	C
橋爪城跡	京都府船井郡京丹波町橋爪	C
三ノ宮城	京都府京丹波町三ノ宮	B
大戸城跡	京都府南丹市日吉町上胡麻奥	B
田原城跡	京都府南丹市日吉町田原	B
片野城跡	京都府南丹市日吉町縄手	C
新庄城跡	京都府南丹市八木町船枝城山	C
殿城跡	京都府南丹市美山町殿岡	C
中村城跡	京都府南丹市美山町静原	B
島城跡	京都府南丹市美山町島	C
黒田城	京都府南丹市黒田	C
神尾山城跡	京都府亀岡市宮前町	C

表 3

島根県・畝状空堀群所在城郭一覧

	name	address	rank
1	勝山城跡	安来市広瀬町石原	A
2	茶臼山城跡	松江市山代町	C
3	春日城跡	松江市東出雲町春日	C
4	京羅木山城砦跡群	安来市広瀬町石原ほか	A
5	禪定寺城跡	松江市八雲町西岩坂	B
6	金山要害山城跡	松江市宍道町白石	C
7	城山城跡	松江市宍道町佐々布	B
8	横田山城跡	松江市美保関町森山	B
9	三笠山城跡（下横田城跡）	奥出雲町横田	B
10	烏見城跡	奥出雲町上阿井	C
11	高麻城跡	雲南市大東町	C
12	角井城砦跡群（頓原）	飯南町頓原角井	B
13	半分城跡	出雲市上塩冶	C
14	八幡山城跡（平田）	出雲市平田町野石谷町	C
15	高櫓城跡	出雲市佐田町反辺	C
16	伊秩城跡	出雲市佐田町一窪田	B
17	石宇城山城跡	出雲市佐田町朝原	C
18	立花城跡	出雲市佐田町宮内	B
19	茶磨山城跡	出雲市佐田町大呂	C
20	八幡山城跡	出雲市佐田町大呂	C
21	明星寺・塩谷城館跡群明星寺・塩谷城館跡群	安来市広瀬町	C
22	玉造要害山城跡	松江市玉湯町	C
23	藤ヶ瀬城跡	奥出雲町横田町横田	C
24	三刀屋じゃ山城跡	雲南市三刀屋町	C
25	多久和城跡	雲南市三刀屋町多久和	C
26	森脇山城跡	飯南町頓原志津見	B
27	要害山城跡	大田市富山町山中	C
28	山吹城跡	大田市大森町銀山	A
29	松山城跡	江津市松川町市村	A
30	高梨城跡	美郷町都賀行	A
31	琵琶甲城跡	邑南町下口羽	C
32	温湯城跡	川本町井原	B
33	赤城山城跡	川本町川本	C
34	飯の山城跡	川本町谷戸	A
35	要害山城跡（浜田）	浜田市内田	A
36	鳶巣城跡	浜田市周布町	A
37	波佐一本松城跡	浜田市金城町波佐	A
38	高城跡	浜田市三隅町三隅	A
39	井野城跡	浜田市三隅町井野	A
40	千穂山城跡	浜田市弥栄町	A
41	七尾城跡	益田市七尾町	A
42	角井城跡	益田市須子町	A
43	丸茂城跡	益田市美都町丸茂	A
44	四ツ山城跡	益田市美都町朝倉	C
45	陣賀城跡	吉賀町有綱	A
46	向日真城跡	吉賀町抜月	A
47	津和野城跡	津和野町後田	A
48	槇尾城跡	邑南町上田	C
49	観音城跡	邑南町雪田	C
50	二ツ山城跡	邑南町鱒淵	C

51	本城跡	邑南町田所	B
52	雲井城跡	邑南町井原	C
53	矢懸城跡	浜田市弥栄町長安本郷	C
54	矢川城跡	浜田市弥栄町大坪	C
55	向横田城跡	益田市向横田	C
56	志源京城跡	雲南市三刀屋町須所	C
57	都賀東城跡	美郷町都賀本郷	C
58	嶽城跡	益田市遠田町	C



## 第2部

### 中近世移行期における城館構成の変容と地域社会

# 第1章 丹波国何鹿郡上林谷における事例検討

## はじめに

京都府では長らく中世城館の研究は立ち遅れた感があった。そのような中、市町村レベルでは加悦町（現与謝野町）で『加悦町の中世城館跡<sup>1</sup>』が発刊され、京都府では先駆的な報告となっている。その他亀岡市では、亀岡市文化資料館で企画展「中近世の考古学」が開催され、展示図録で民間の研究者である若江茂氏が「亀岡の中世城館・居館について<sup>2</sup>」として、長年の悉皆調査の報告をしている。その後『新修亀岡市史 史料編第1巻<sup>3</sup>』の発刊で、当地における詳細が把握出来るようになった。この他『三和町史<sup>4</sup>』でも同様に若江氏の調査によって、城館所在地と縄張図が掲載され、平面プランの検討の素材が提供された。宮津市では、『宮津市史 史料編第1巻』でも城館についてまとめられている。このように全国的にも市町村史に城館跡の章を設け、縄張図の掲載と共に、文献や地名からの検討、発掘調査の成果などを交え、総合的な研究がなされる傾向にある。

近年、ようやく京都府でも中世城館の悉皆調査が行われ、府下全域で城館の所在地、縄張り図の掲載が行われており、今後、更に研究が進んでいくことが期待される<sup>5</sup>。またこのような経緯の中、近年の城郭ブームが後押しとなり『【図解】近畿の城郭』『近畿の名城を歩く』などのシリーズが刊行され<sup>6</sup>、学術的な観点でも重要な城郭が選定され、図面と解説が掲載されている。

筆者は1998年に綾部市教育委員会より発刊された『綾部市遺跡地図<sup>7</sup>』に先立つ分布調査に関わることができ、40ヶ所近くの城館の調査をする機会が得られた。その成果についてはこれまでに公開してきたが<sup>8</sup>、特に綾部市上林地域の城館については、それ以前に知られていた城館の他に<sup>9</sup>、数ヶ所の存在を確認し、この地域における城館の分布状況を把握することが可能となった。

上林谷地域は、丹波から若狭、舞鶴方面へ抜けるルートとして重用され、22ヶ所の城館が確認できた（第1図）。この地域の城館に関する研究としては、上林城が昭和53年度以降数度にわたり発掘調査が行われており、この調査では石垣や3条の空堀群が確認されている。また日置谷城は特徴的な城郭遺構として藤井善布氏、福島克彦氏によって考察が行われている<sup>10</sup>。福島氏は虎口形態や土塁、横堀の対応関係から織豊期の陣城と推定している。また筆者は梨子ヶ岡城が小規模城館ながら全周に畝状空堀群をもち、その使用について検討する素材として報告した<sup>11</sup>。

上林地域は中世には上林氏、渡辺氏が土豪として存在し城館を構えていた。上林氏のもとへ永禄十二年（1569）に、連歌師里村紹巴が訪れるなど<sup>12</sup>、中央とのつながりを持ち、この地が丹波から若狭へ抜ける重要な街道となっていたことがうかがえる。上林氏は天正年間に、この上林谷からは姿を消し、山城国宇治において茶業を営み現在に至るが、

上林氏が居城とした上林城では、16世紀代には石垣が構築され、建物の構造も変化する。その背景には連歌や茶の湯などが果たした役割がある<sup>13</sup>。本論では上林谷における城館分布や構造変化を通して、中近世移行期の城館について検討する。

## 第1節 上林地域の城館分布

### 1 上林地域の城館分布

ここでは、分布調査によって得られた個別城館のデータを示す。

#### (1) 赤坂城跡（十倉志茂町赤坂、第2図（1））

山腹に位置し円形の土塁状遺構を伴うもので、面積も非常に狭小である。城館遺構というより寺庵などの可能性もあるが、『丹波志何鹿郡之部』<sup>14</sup>によると渡邊氏の城郭として「赤坂城」が伝えられており、今後周辺での更なる調査が必要である。

#### (2) 沼ヶ谷城跡（十倉中町沼ヶ段・池の谷、第4図（2））

沼ヶ谷城は上林川下流域の十倉中町に所在し、赤道城や赤坂城と共に渡邊氏の城と伝えられる。城跡は標高200mの所にあり、連郭式に曲輪を配置し削平は良好である。主郭の西には高さ4mほどの土壇があり、主郭の南北に土塁が付随している。主郭の北東部分に下の曲輪へ降りる通路がある。この曲輪には南西に虎口があり、主郭へはこの郭を経由して進入するようになっている。虎口より下っていくと道にそって堅堀がある。麓には細長い郭が数段あり、現在墓地となっているところがあるが、最下方に比較的広い平坦地があり、ここが居館とも推定出来るため、今後表面採取で遺物が拾えるか確認したい。

#### (3) 赤道城（十倉向町イヤ谷、第4図（3））

赤道城は沼ヶ谷城とは川を挟んで反対側にあり、『丹波志何鹿郡之部』によると沼ヶ谷城とともに渡邊氏が城主と伝え、勢力範囲を示していると思われる。立地は十倉地域の北側を見渡せる位置にある。遺構について見てみると、4つの曲輪が連郭式に配置され削平は良好である。最高所の曲輪は現在神社となっており、これにより西端が通路となり、改変されているようである。その北側の曲輪には東西の両側面に土塁が存在する。西側の土塁の方が少し長くなっている。その北に2段の曲輪が続き、一番北側曲輪の西北部分に虎口らしき遺構があり、東西斜面に堅堀が2条存在し、曲輪と曲輪のつなぎの部分に掘られている。全体的に削平は良く北方を意識した構造となっている。

#### (4) 梨子ヶ岡城跡（武吉町梨子ヶ岡・猪ノ谷、第2図（4））

梨子ヶ岡城は武吉町の玉泉寺の背後の山に存在する。標高は190mで、比高90mの位置にあり、この位置からは武吉町、個町は見渡せるが十倉地域への視界は悪い。遺構は城の周囲に畝状に空堀を配置し、前面に1本、背後に3本の堀切がある。主郭は15m×20mの広さで、北から西に帯曲輪がある。さらにこの帯曲輪の北側には東端に

虎口を持つ15m×8m程の曲輪がある。また西側にも小さい曲輪がひとつある。

小さい城であるが、城の全面に畝状空堀群を配しており、小さいながらも進んだ縄張りを取り入れられている。このような小規模城館で、畝状空堀群を積極的に用いられている事例は周辺では見られない。

城主としては坂田氏と伝えられ、城下に小字「坂田屋敷」があり城主の屋敷所在地である可能性が高いが、圃場整備が既に終わっており、現況から遺構を確認することは不可能である。周辺では梨子ヶ岡城のように小規模城館でありながら、全面に畝状空堀群を使用している事例は無く興味深い事例である。

#### (5) 井根砦(井根町奥山、第2図(5))

井根砦は十倉名畑町より北方へ伸びる谷の正面奥に所在する。標高230mの地点にあり、麓の集落からの比高は60mである。この位置からは井根町の谷筋がまっすぐに見通せる。

遺構は背後に堀切を配し尾根を遮断している。曲輪は堀切に近い部分が5mの広さで、南へ下るにつれ幅が広がり、広い所で12mあるが削平状況は悪く自然地形で西南へ続く。堀切寄りの東側斜面には幅1m程の小曲輪が付属する。麓には日円寺が存在し、周辺で一字一石経が出土しており、中世の遺跡の存在が想定できる。

#### (6) 折山城(忠町雨乞、睦合町(第一区)向山、第2図(6))

折山城は睦合町と忠町の境の尾根先に位置しており、北東から南西に流れてきた上林川がこの尾根先で蛇行し忠町、個田町、武吉町と流れ、十倉向町より街道に沿って流れる。折山城の北側には集落が無く、南東側に忠町の集落がある。忠町の集落は上林川と山の間の空間にあり、折山城の尾根が街道側と集落を遮断する形となっている。そのため2地区にわかれる折山城の中央部分を断ち割って、忠町から街道へ出る道が通っている。

折山城は東地区と西地区に分けられる。東地区では25m×10mの細長い主郭があり、その東端には古墳状隆起を少し削り取る形で小さな祀が祭られている。主郭より西へは小曲輪が3つ連なり、その先に小規模な堀と土塁がある。主郭の東側は高い切岸となっており、それを下ると堀切とその東に土塁が付随する。東地区の特徴として、各曲輪の周囲に放射状に堅堀が用いられている点である。これらの堅堀は主郭の東端の両サイド、曲輪と曲輪の接続部分附近、西へ下っていく通路附近というように、無造作に構築されているのではなく、必要箇所に用いられているのがうかがえる。

西地区では、東側に両サイドに堅堀を落としたものが2ヶ所あり、その間に一部土塁状隆起があるが、東と西地区の間の道より、鳥居や階段などの神社へいたる施設が存在し、これに伴う改変の可能性もあり、安直に土塁とは認められない。先端部分には幅5m程の堀切がある。概して西地区は東地区に比べ曲輪の削平も不十分である。

#### (7) 東中山城(忠町スロ、個町魚ヶ谷・岩尾、第2図(7))

東中山城は忠町、佃町の境附近の山頂に位置する。城はほぼ単郭に近く、主郭西側は切り立った切岸となっている。南西部分に虎口があり、これを下った部分を堀切で切断

している。東側は一部幅が広がったL字状の土塁で遮断し、東へは不十分な削平地が続き二重の堀切で遮断する。この堀切の北側斜面では並行して堅堀があり上部を堀切につなげている。主郭北側には両サイドに土塁を伴う、小曲輪があり北へ続く尾根には堀切がある。主郭から東へ続く曲輪の北側には犬走り状の細い削平地がある。また主郭東の曲輪には一部段差をもつ部分があり、それより南へ下る尾根部分には小曲輪と堅堀がある。主郭部分を中心に土塁を用い、要所を堀切で遮断する特徴が見出せる。

( 8 ) 佃城(忠町スロ、佃町魚ヶ谷・岩尾、第2図(8))

佃城は東中山城より南東へ伸びる尾根を下り、再び登ったピークに所在する。位置的に佃町への侵入を防ぐような場所にある。遺構については地図上には現れていないが、実際は2つのピークがあり、北地区と南地区に大別することが出来る。北地区には、ピークの部分を無削平で残し、北側に2つ曲輪がある。堀切は尾根を挙がり始めたところに掘られている。ピークより北東方面へも伸びており、自然地形で下っていった先に2段の削平地が存在する。南地区もピークの部分をほとんど削平せず、南側に2つ曲輪を設けている。これより東西に尾根が伸びており、それぞれ削平地と堀切がある。全体的に曲輪群にまとまりが無く散在的である。

地形的に忠町、佃町、武吉町は一つのまとまりを持った地域と考えられ、宝永6年(1709)に始まると伝える金刀比羅講はこの3村によって行われているのはこれを示している。曲輪の削平状況は悪く、ピークと堀切の内側のように、要所のみ削平して使用しており、臨時的な使用状況が想定できる。

( 9 ) 大谷城(陸合町(第一区)大谷・天王)(第2図(9))

大谷城は陸合町清林寺背後の山稜にある。西側には井根町からの峠道があり、東側の峠道は蓮ヶ峯を經由して、於与岐町下村へ抜けられる。大谷城はこの2ルートの中に所在する。遺構は東西に土塁のある主郭と帯曲輪のみの簡素なものである。西側の尾根部分には堀切がなく防御が弱い。東側も少し岸を切っているが、その東は自然地形で下っている。立地や城の向き等から城下の清林寺のある集落を意識したものというより、東側の於与岐町へ至る峠を意識したもののように思われる。ただこのルートが重要性を帯びる軍事的緊張があったのかは今のところ不明である。大谷城に関する文献はないので上林地域の城館、および周辺地域の動向を踏まえて検討したい。

( 10 ) 土野(肘野)城跡(陸合町(第一区)肘野、第2図(10))

土野城は北から街道側に伸びる丘陵端に立地する。標高150m、比高は約10mである。伝承では土野氏が城主と伝えるところであるが、遺構は前方と両側面が切り立った岸となっている他は、特に城に関する施設は見られない。現在、現地は墓地となっており、改変を受けている可能性がある。

( 11 ) 真野城跡(陸合町(第一区)三ツロ・丸山、第2図(11))

真野城は標高273m、比高約130mの山上に位置する。北側にはほぼ同レベルで尾根が伸びている。現在は建物が倒壊している神社があり、それにより前面は改変を受け

ている。しかし全体的に削平が悪く、地形がなだらかであるため改変を受けている箇所も同じような状態であったのだろう。防御施設として北側に高さ1.5m程の土塁があり、東斜面に堅堀がある。その北側はなだらかな地形が続き、明らかに背後に対する防御が弱い構造となっている。典型的には大谷城と類似するタイプである。真野城に関する伝承などは無い。

(12) 日置谷城跡(八津合町(日置谷)本城・(片山)村奥、第5図(12))

日置谷城は、比高80mほどの地点に位置する。東側には小さい谷が2つ入り入り込みであり、ピークが3つに分かれ、各ピークに城館遺構が確認出来る。この城については藤井善布氏や福島克彦氏によって紹介されているが<sup>15</sup>、なかでも福島氏は詳細に遺構について考察している。福島氏の成果に依拠しながら、簡単に遺構の概要を見ていくとA・B・Cの3つの地区に分類出来る。

まずA地区を見ると、Iが主郭で周囲に土塁が使用されている。虎口が東と西の2ヶ所設定されており、共に檜台状の土壇を伴い、西側は食違い虎口となっている。さらにI、Iの部分虎口の前方の空間、「馬出」と評価できる。そしてTVの南側にV、VIと続くが共に側面に土塁を伴い、Vは西に畝状空堀群、東に横堀が付随し、VIはともに横堀が付随する。V、VIは削平も不十分でI～IVの曲輪とは一線を画すことが出来る。横堀についてはIの部分から発しており、部分的に「折れ」を見せながら、南へと伸びていく。このように城域を画定していくような動向は織豊系城郭の特質として評価される。このような点から日置谷城は織方系の城郭として評価される。

次にB地区は曲輪が2段確認でき、北側を掘切で遮断する。C地区は小さい曲輪が一列に並んでいるが、古墳である可能性もある。

(13) 片山砦跡(八津合町(片山)片山、第3図(13))

片山城は上林中学校の西北の小さい尾根上にある。立地は街道より少し奥まった位置に所在する。この位置からは展望が利かず、麓の集落が見渡せる程度である。遺構は2.5m程の主郭があり、土塁で囲んでいる。南側で土塁が開口し虎口を形成している。虎口の部分の土塁が少し広がっており、虎口を出た西側に削平の悪い曲輪が付随する。背後は上辺10m程の堀切が所在する。立地は奥まったところにあり、決して軍事上有利とは言えない場所に立地している。

(14) 姥ヶ城跡(五津合町(遊里)向上山、第3図(14))

姥ヶ城は比丘尼城の北側の奥まった位置に存在する。この位置からは北側への眺望はきかない。遺構について見てみると、北側は掘切で遮断し、内側に土塁を持っている。西側には掘切から地続きで横堀となり南へ下っている。南端は堀が浅くなり、帯曲輪となり東側へ回り北へ続いていく。曲輪内は北側が東方へ張り出して少し削平されている他は、大方自然地形で、南端部分に少し幅の広い土塁がある。西側斜面に細い曲輪と堅堀のようなものがあるが、後世の改変の可能性もあり、その性格はよく分からない。曲輪内はあまり削平をせず、横堀と帯曲輪を回り配す単純な構造で、一部曲輪が広がり張

り出す部分があるが、企画性のあるものではなく、自然地形による制約のためと思われる。

( 15 ) 比久尼城跡(五津合町(弓削)皿田、第3図(15))

比久尼城は中上林地域より東舞鶴へ至る街道と福井県および京都府美山町へ至る街道の分岐点の東側丘陵端に位置する。この地点からは八津合町、睦寄町の方面を見通すことが可能で、重要な立地である。集落からの比高は20mほどで、斜面の傾斜はかなり急であり、天然の切岸を形成している。遺構について見てみると、城内には6基の古墳が確認されており、この古墳群をそのまま城の防御に取り込むような形となっている。ほぼ中央に大きな土塁が存在し、南側でL字型に折れている。現在中央部を破壊道が通っているが、当時は土塁が存在し続いていたと見られる。この土塁の東西では様相を異にする。西地区においては土塁が南側で折れており、その脇に堀底道からの通路が続いている。そして土塁で幅をせばめ虎口を形成している。西端部分には腰曲輪が付随し、その北に横矢を意識した土壇のようなものがある。これに対し東地区は小さな谷が2つ入り組んでおり、その横に削平地を数段設けている。谷の部分は現在、墓地となっており、改変を受けていると見られる。全体的に古墳を改変せずそのまま利用し城域に取り込んでいる。そして中央部の土塁の規模は、上林地域のみならず綾部地域においても異色の存在である。

( 16 ) 弓削城跡(五津合町(弓削)東山、第3図(16))

弓削城は志古田と弓削の集落の間の突き出た尾根先に存在する。北麓に上林川が流れ、山すそにあたり蛇行している。遺構は中央部分を2本の堀切で寸断されている。北側の曲輪は45m程の長さがあり、先端側はなだらかに下って堀切に至る。堀切は大きく上辺12m～13mはある。その先にも細い堀切があり、さらに東側斜面にもう一本堅堀がある。南側の曲輪は2段の曲輪で構成され、南へ下ると堅堀が1条存在する。北側の曲輪の東側斜面に通路らしき遺構があり、西側斜面を降りると、細い堅堀と曲輪がある。この曲輪の東端に通路があり、中央の堀切と接続しているようである。このことから志古田側と弓削側の両方に通路があった可能性がある。『丹波志何鹿郡之部』によると「一の丸」、「二の丸」の名称があり、江戸期においても城跡として認識されていたのがうかがえる。

( 17 ) 瀬尾谷城(八津合町(瀬尾谷)後ヶ谷・(大町)兵衛ヶ迫・(弓削)西山、第3図(17))

瀬尾谷城は上林城の東方1kmの地点にあり、北側の城下で上林川と畑口川が合流している。東舞鶴よりこの地域へ入ってくると正面に瀬尾谷城が見える。瀬尾谷城の遺構は西地区と東地区に分けられ、両者の間はほぼ自然地形である。西地区は約18m×13m程の主郭と西側と東側にそれぞれ2段の小さい曲輪が存在する。現在主郭にはNHKのアンテナが建てられているが、それ程改変は無いようである。注目に値するのは東地区へ通じる尾根部分である。狭い範囲だが曲輪の端に土塁を用い通路に折れを加えている。次に東地区について見てみると、主郭は約15m×13m程で、曲輪が東側に1、西北側に3ある。また主郭の南側には土塁があり、その南側には土塁があり、その南側に堀切がある。東側に落ちる堀は明瞭だが西側の堀は不明瞭である。全体的に小規模な城郭

ではあるが、東舞鶴への街道をまっすぐに見通すことができ、この方面への監視を目的としたものであることは想像に難くない。遺構は東西2地区に分かれているが、同じ2地区に分かれるタイプの睦寄町の長野城や口上林の個城より削平状況、虎口形態等の面で発達している。しかしこれが単に年代が新しいためか、同時期でも砦として重用されたため、進んだ縄張りとなったのか判断の材料が無い。

(18) 上林城(八津合町(石橋)古城山・城下、第5図)

昭和53年に発掘調査が行われた時点で、既に栗園造成のため南曲輪及び主郭側の堀切、堅堀は消滅していた。現在は公園となり虎口形態、曲輪の連絡方法は分からない。発掘調査報告書によると、曲輪は本丸、南の曲輪、東の曲輪、西の曲輪、馬掛曲輪、北西の曲輪に分類されている。北側斜面は絶壁となっているためか、曲輪群は南側へ意識が向いている。発掘調査により「西の曲輪」の南斜面より3条の堅堀が確認されている。また「本丸より半地下式の建物跡や石垣などが検出されている。また遺物から16世紀前半が上林城盛期と考えられるようである。

(19) 山内城跡(睦寄町(山内)在ノ向・在ノ下、第3図)

山内城は光明寺の参道の西の峰にある。立地は少し谷の奥に入った所にあるが、ここからは西方の中上林方面と東南の美山町へ至る街道を見通すことが出来る。遺構は10m四方の主郭を中心に北側に1つ、南側に主郭より少し広い郭が2つ存在する。主郭と北側の曲輪の西に細い犬走り状の細い曲輪があり、南側の曲輪と接続している。北端には堀切を有し西斜面に堅堀として落ちている。明確な虎口と言えるものは存在しないが、一番南側の曲輪に東に伸びる尾根へ出られるようである。

(20) 長野城(睦寄町(長野)泉山・(鳥垣)今飼ノ上、第3図)

長野城は福井県へ至る街道と美山町へ至る街道との分岐点の西南側の尾根頂に位置する。遺構は背後の両斜面に堅堀を落とす堀切を有し、曲輪は2地区に分かれている。北側の曲輪は全面のみ削平し、2段の曲輪となっているが、背後は自然地形でつながり、土塁で遮断している。南側の曲輪には西南部分に通路があり、下ると小さな曲輪がある。長野城の西側には小川が流れており、志古田の集落とは隔たれている。鳥垣の集落の東側の山には城の遺構は無いので、この集落との関連で考えたい。

(21) 有安城跡(睦寄町(有安)高風呂・釜戸、第3図)

有安城は上林川と草壁川の合流点の東側の山頂にある。頂は2ヶ所あり、西地区と東地区とに分かれる。西地区はほとんど削平されず、西側斜面に堅堀と細い長い削平地がある。東地区は南側に向かって小さい曲輪が数段あり、5郭程度に分けられそうである。背後には堅堀を両斜面に落とす堀切があり、東側にはもう一本堅堀がある。この堅堀と堀切の堀上げた土で、両者の間が堀のようになっている。全体として削平はよくなく、城域が2地区に分かれており、長野城と類似したタイプである。

(22) 神子谷城(故屋岡町(古和木)平垣上・シュリ・(小仲)神子谷上・坂本上、光野町カミスギ谷、第3図)

神子谷城は故屋岡町に所在し標高400m、比高200mの山頂に存在する。山頂部分

より尾根が四方に伸びており、遺構も広がりを見せている。現状はブッシュがひどく、削平状況も悪いため、主郭の範囲を確定しがたい。北側と西側に腰曲輪が認められる。これら中心曲輪より北東方面に6郭と西南方面に5郭の小郭群が続く。北東へ小曲輪群を越えて40mほど行くと平坦面があり、そこから北へ伸びる尾根に堀切がある。また中心曲輪より南方面へ尾根を伝っていくと削平の悪い小曲輪群と先端に低土塁囲みの曲輪がある。全体的に削平状況が悪く、曲輪群も散在的である。一般に古いタイプの城と言われるものであろうか。

## 2 城館の分布と構造

これまで、中世城館の研究の中心は、地表面観察による縄張図の特質から、16世紀後半の城館であった。上林地域では織豊系の築城技術の導入が考えられる日置谷城、戦国末期に使用されるようになった畝状空堀群が顕著に見られる梨子ヶ岡城がそれにあたる。また発掘調査が行われた上林城も当該期に当てはまる。しかし、このような特徴的な城郭遺構のみが取上げられ、それ以外の小規模な城館に対しては、集落との関係と結びつけ「村の城」と位置付けられることが多かった。上林地域の悉皆調査を行ったことで、城館の分布状況及び遺構が把握できるようになり、特徴的な城館遺構はさらにその存在意義を明確にすることができた。小規模な城館についても、単に「村の城」だけでなく様々な築城意図が推定出来るようになった。ここでは城館の遺構のなかでも、曲輪の削平状況に注目し、土塁や堀などのパーツのあり方に焦点をあて分類を試み、分布状況と絡めて考察を試みる。

まず地表面観察によって得られた情報の分類を試みたものが標1となる。

- IA 削平が良好で連郭式に曲輪を連ねる。堀切、土塁を持つ。
- IB 削平が良好で連郭式に曲輪を連ねる。堀切、土塁の他、斜面に畝状空堀群を持つ。
- II 削平は良好だが曲輪が大きく2地区に分かれる。
- III A 削平は良好だが小規模なため主郭中心にまとまる。堀切、土塁のほか、斜面に畝状空堀群を持つ。
- III B 削平は良好だが小規模なため主郭中心にまとまる。堀切、土塁を持つ。
- IV やや削平は良いが、小規模なため主郭中心にまとまる。背後に土塁を持つ。
- V 堀、土塁で囲むが、内部が未削平。
- VI 削平が悪く、小規模なため主郭中心にまとまる。
- V II 削平が悪く、曲輪が2地区以上に分かれる。

これに分布状況をからめると、大半の城館が街道筋に面して存在するわけだが、地元では一般に口上林・中上林・奥上林とに分けて呼ばれるが、これに従うと口上林が8、中上林が10、奥上林が4となる。しかし、城館の分布状況を見ると、A・B・C・Dに分けることができ、Aが4、Bが7、Cが10、Dが1となる。Cが最も多いが、この地域は

舞鶴、小浜、美山などへの分岐点にあたる。A・B・C・Dの城館の特徴をみると、A地区では沼ヶ谷城、赤道城が連郭式に曲輪を連ね、良好な削平状況のIAタイプがある。また梨子ヶ岡城は積極的に畝状空堀群を採用するIII AIAタイプで、A地区は整った遺構の多い。B地区は小規模なものが多く、さまざまなタイプの遺構が混在するが、街道の北側に所在する大谷城、真野城は背後を土塁で防御するが前面は明確な防御施設を伴わないIVタイプで、類似した特徴が見られる。C地区では日置谷城、上林城のように上林地域の中では規模の大きいIBタイプに属するものや、姥ヶ城、比丘尼城のように周囲を堀や、土塁、切岸で遮断しながらも内部の削平が未熟であるVタイプ、削平は良好だが主郭中心にまとまる片山城、山内城のIII Bタイプ、有安城や弓削城のように城域が2つに分かれるVIIタイプなど様々なタイプが混在する。D地区は神子谷城のみだが、当地域の中ではずば抜けて比高が高いという特徴が挙げられる。これら分布状況から考えられるのは、C地区のような交通ルート上重要な地域などでは、様々なタイプの城館が混在するという事である。このような地点は、合戦との関わりが強いため、その時々状況により必要な場所に適時、複数の城館が構築された可能性が考えられ、一概に「村の城」として位置付けるだけでなく、合戦にともない臨時に構築される陣城との想定も必要であろう。また山内城は中上林、口上林方面を見とおせる位置にあり、瀬尾谷城は舞鶴方面への街道を見とおせる位置にあることも見逃せない。上林城や日置谷城は明らかに戦国末期から織豊期までその最終使用年代を下らせることが出来るが、そのほかの小規模城館については、度重なる軍事的緊張により構築された陣城遺構の可能性もある。

以上を総合すると、A地区は削平が良く、連郭式に曲輪を連ねるものと、主郭中心にまとまりながらも、畝状空堀群の使用が見られるものが存在し、整った遺構が多い。これには、IAがこの地域に存在した渡漫氏の城と伝えることから、その影響が想定される。B地区は削平の良し悪しはあるが主郭中心にまとまるものが大半を占め、IVタイプがこの地区のみに存在する。C地区は削平の状況や、曲輪の連携の面でさまざまなタイプが混在し、地区としての共通性は見られない。しかし中上林、奥上林に影響力を持ったとされる上林氏の城とされる上林城あり、IBタイプに属する。またVタイプがこの地区のみに存在する。D地区は人家が少ないせいか、城館自体が少なく、削平状況、曲輪の連携ともに未整備で比高も高い。このようにIA、Bタイプは各地区で核となるタイプで、これが存在しない地区は、そのいずれかに従属する地区であるとの想定が可能で、渡漫氏や上林氏より1ランク下の築城主体が想定できよう。このことから、曲輪形態について、削平状況が良く連郭式に連ねることが、その地区内の拠点城館の条件であることがうかがえる。

## 小結

今回は悉皆調査の報告と分布状況から知り得たことを記述するに留め、曲輪の削平状況を軸として分類の試論を試みた。これまで上林地域では上林城、日置谷城、梨子ヶ岡

城に関する研究があるが、悉皆調査を行ったことで周辺の分布状況も分かり、今後さらに研究が深められればと思う。特に日置谷城の遺構に注目すると、城館遺構が集中する街道の分岐点の方角とは逆の西側に畝状空堀群が集中しており、東側から南側に横堀を多用している。このことは必ずしも畝状空堀群が軍事意識の向いている方向のみに、使用されるわけではないことを示している。

今後、さらに各遺構について詳細に検討して行きたいが、京都府下では近年城館の悉皆調査が行われた。これによりどのようなパーツで城館が構成されているのかなどを検討することができるようになった。

今回は、上林地域を素材として、地域内に存在する城館のデータを集積し不十分ながら検討を加えた。従来、小規模城館については、特徴の抽出が難しく、集落が近接する場合「村の城」などと位置付ける向きがあったが、交通ルート上重要な地域などでは、様々なタイプの城館が混在することを確認し、合戦に伴う陣城の可能性もあると考えられる。また遺構の分類と分布状況から、A地区では渡漫氏、C地区では上林氏の城館が、その地区内で主体的な位置を占め、その間にあるB地区に所在する城館は従属的な位置付けを行った。今後は文献史料とのつき合わせ、特に「光明寺再建奉加帳」にみられる奉加を行っている在地の有力者と城館の関係を見るなどの作業が必要である。これについては第5節で述べることとする。

## 第2節 日置谷城の構造と築城主体

### 日置谷城に関する研究

日置谷城については藤井善布氏の先駆的な報告がある<sup>16</sup>。その後、福島克彦氏によって改めて報告され<sup>17</sup>、柵形状の虎口や折れのある土塁などから、織豊系の陣城という評価を与えている。筆者は地名が「本城」ということや、上林氏が明智光秀に従っていたことが文献から明らかにできる点から、日置谷城は上林氏の本城で、虎口形態や曲輪の塁線などに新しい要素が取り入れられたのではないかと考えた<sup>18</sup>。しかしながら、日置谷城と上林城の関係については、十分に考慮すべき点もあり改めて考察する。

### 日置谷城の構造

日置谷城の遺構はA～Cの3つの地区に大別され、最も西側の遺構が注目される（第5図）。主郭は逆L字状の形をしており、ほぼ全周を回る形で土塁がめぐらされているが、西側と南側の土塁は幅が厚く構築されている。主郭の東と西に虎口があり、西側の虎口は折れ曲がり食い違いの形態をしている。この虎口のさらに西側には土塁囲みの空間が存在する。主郭東の虎口を出ると、小曲輪を経て主郭南側へ回り込む。主郭東西いずれも虎口も、虎口前面に空間を持つ構造であることが分かる。

主郭東西の虎口はいずれも、主郭南側の曲輪へ繋がっており、それより南側へ長い2本の堅堀に挟まれた空間が広がる。この部分は傾斜が緩やかになっており、西側では横堀状となっている。さらに南は開口して葛籠折れとなり山麓に至るが、その両側も堅堀で遮断している。

主郭の西と北側には堀切があり、北側は二重堀切となっている。この北と西の堀切の間の斜面には、8本の堅堀が連続する。西側から2・3本目の堅堀上部には小曲輪が付随する。その他東側や南西側斜面などにも堅堀が連続している。曲輪の塁線の屈曲や横堀、檜台状の高まりなど城郭としても新しい構成要素があり、南側の堅堀で囲われた空間などは織豊系の陣城との共通する部分があり、福島氏は陣城と評価している。しかし主郭西側と虎口は食い違いとなっているが、かなり小さく、人ひとり通るのがやつの規模であるし、全体的にテクニカルな縄張りであるものの、在地の城に新しい要素を加えて改修された可能性も考えられよう。畝状空堀群単独の使用ではなく、横堀や横矢意識の萌芽が見られ、年代的にも明智光秀の丹波攻略期前後の時期であることは是認できる。

### 文献から見る日置谷城と上林城

『丹波志』によると、「本城ト云古城」として「山ノ上ニ屋敷跡三段アリ」と記しており、遺構と符合することから、これは日置谷城のことと考えられる。また近年確認された「文字家史料」に城郭の現地調査に基づく絵図が残されている<sup>19</sup>（図6）。その中に上林地域の絵図も残され、「本城」「小山古城」「うばか段びくにか城」「藤掛山」などの記載が見られ、

それらの位置関係から「本城」は日置谷城のことと考えられる。

永禄十二年、京都を発った里村紹巴が近江朽木、若狭小浜、高浜、丹後加佐郡、天橋立などを経て、加佐郡安久から上林へ入っている。その後は丹波宮脇をへて京都へ戻っている。上林に入った初日に、「上林雲州館」に泊まり翌日「嫡孫城」に登ったと記している。「上林雲州」と「嫡孫」との関係については詳らかでない。

上林地域にある光明寺には再建奉加帳が残されている。天文二年以降の奉加が記載されているこの光明寺再建奉加帳には、上林新左衛門将監や上林孫九郎など複数の上林氏の名が見られるが、「雲州」に該当する人物は見られない。天橋立紀行に改めて目を通すと、安久を出て岸谷峠を越えると月になって上林雲州別館に入ったとする。岸谷峠が具体的にどの部分を指すか特定しがたいが、明治6年の地図をみると、安久は現在の西舞鶴市で伊佐津川の下流にあたる。ここから南へ伊佐津川沿いに入り、途中で池内川へ入りさらに上流へ遡り別所から東の谷あいへ入ると岸谷がある。岸谷からは山へ入りいくつかの山道が存在するが、綾部市睦志へ出るのが一番良い道である。ここから南へ下っていくと上林の中心を通る道に出る。この付近に比較的規模の大きい城館4つあるが、このうち日置谷城に関する記載で「本城」という記載や、上林城が上林氏の城といわれる点から勘案すると、「上林雲州館」と「嫡孫城」はこのどちらかである可能性がある。嫡孫の城は上林氏の当主の城と考え、別館とは嫡孫に対する対義語と判断すると先代の隠居城ともとらえることができる。このように考えると、日置谷城と上林城のいずれかが「上林雲州館」「嫡孫城」である可能性もある。しかし上林城麓にて大規模な土塁が見つまっていることから、上林城と麓の遺構が「別館」と「嫡孫城」のセットである可能性も残る。これ以上の推測はさけるが、いずれにせよ日置谷城、上林城ともに上林氏の城と判断したい。

先行研究によると、日置谷城が織豊系の陣城との意見がある。伝承の域を出ないが、元龜年間に明智光秀による侵入があった際に、北桑田郡の川勝氏が来援に訪れたという。

天正8年に明智光秀が山家城の和久左衛門尉を攻略した際、逃げた和久を捕らえるよう指示を和知の土豪に命じた下知状に「猶上林紀伊守可申候」と見え、この段階で上林氏の存在が確認できる。そのため積極的に明智氏による陣城には承服しがたい。以上から、日置谷城は上林氏の城郭として、織豊勢力の影響を受けながら、発展したものと考えたい。

## 史料

天橋立紀行 永禄十二年

安久の城より十町はかり過て立別、丹波さかひの岸谷峠は、月に成て上林雲州館に入、一日足をやすめ、嫡孫城などへあかりけるに、一折興行のあらまはありなから、人数などしかしかしからぬとて、発句所望に、

枕かす宿なくとも花野哉

二夜やとりけるあるし、廿はかりなるか、風雅に心さしありて鶏明よりおきいとなみ、人馬之心をそへられしゆへ、あまたの坂をこえて、宮のわきと云所に付ぬ

### 第3節 発掘調査成果からみた上林城の構造

#### はじめに

上林城は綾部市八津合町古城山に所在するこの地域を代表する山城である。別名八津合城、生貫山城、カタツ（フ）リカ城などがある。

上林氏は当地における最も有力な一族であるが、先行研究によると地元の伝承に残る君尾山光明寺を焼いた「赤井の乱」以降、赤井氏の一族である上林氏はこの地域に根付いたと言われる。その後上林氏の一族は宇治へ移り茶業を行ったという。天文2年(1532)からの光明寺再建奉加帳によると、上林谷の各地に上林氏の名が見られるものの、光明寺の「万聞書」によると、「君尾山光明寺ツリガネノ事、天正二年ミつとののいとし正月三日ニ上林下総守ヲ祖父ノゾンブントメハラヲキラセ ソレヨリ鐘ヲヲロシツチニウツミタリシヲ慶長九年きのへたつのとし三月十四日ニツル也」とある。その霊は八津合町西屋の八幡宮に祀られている。その後、わずかに天正8年(1580)の明智光秀文書に上林紀伊守の名が見られるものの<sup>21</sup>、その後はまったく上林氏の名は見られない。近世に入り『丹波志何鹿郡之部』に、「上林殿塚 市志村 村口に小屋ト云所ニ有四十年前侍体三人参詣ス 山城国宇治子孫有ト云」とあり、宇治へ移った上林氏の一族が墓参りに訪れているようである。

上林城はこの地域で唯一発掘調査が行われており、礎石建物跡、掘立柱建物跡、石垣、畝状空堀群など様々な施設、遺物が確認されている。しかし調査が行われた段階では、地域内の城館分布調査も行われたおらず、発掘調査の類例も少なかったことから、改めて検討することで、この地域における上林城の役割について検討したい。

#### 1 上林城の発掘調査成果

これまでに本丸、西の曲輪、山麓の藤懸氏陣屋部分、通称蔵ノ段において、4次にわたる発掘調査が行われている<sup>22</sup>。

本丸地区（第3調査区、第7～13）

昭和55年に発掘調査が行われ、本丸地区2370㎡に対して、990㎡の調査が行われた。

本丸では建物跡、石垣、集石遺構ほか、石組を施した遺構が検出されている。調査区北東隅で確認された建物跡SB01、SB02とそれにともなう溝SD01、SD02が確認されている。報告によると建物SB01、溝SD01が先行し、溝SD01が埋まった後にSB02の礎石が確認されている。SB01に伴うSD01からはふいごの羽口や鉄滓が見つかっており、鍛冶にともなう建物と判断される。SB02は北西側の残りが悪いが5×3間以上の建物と考えられ、この城の中心的建物であろう。

SB03、SB04はほぼ同じ位置で建て替えられた建物跡である。下層のSB03は南北11m、東西8mの建物で、深さ1mに掘り込まれている。南西部には不定形のピットがコの字状に並んである。SB03の床面からは小札が確認されている。この竪穴遺構の壁面直下では

周囲に礎石が確認され、中央部でも2石の礎石が確認されている。東日本では根城（青森県八戸市）や浪岡城（青森県弘前市）、金井城（長野県佐久市）などで事例が確認でき、寒冷地における平地城館の特徴として考えられている<sup>23</sup>。神奈川県鎌倉市では、床面や壁面に石を用いた竪穴遺構が確認されているが、これは半地下式の倉と考えられている。京都府ではシミズ谷城（京丹後市）において、15世紀後半から16世紀前半の竪穴遺構が確認されている<sup>24</sup>。ここでは鍛冶遺構と考えられる土坑も検出されており、城内で鍛冶が行われていたと考えられる。このような中世城館における竪穴遺構について検討した中井均は、「村の城」や「城籠り」などに関する研究を参照しながら、竪穴遺構をⅠ類とⅡ類に分類している<sup>25</sup>。根城、浪岡城での事例はⅠ類で、掘立柱建物に付随して竪穴遺構と井戸が付属しており、両者に主・従の関係にあることが分かる。

上林城で確認された竪穴遺構で確認されたコ字状のピットの具体的なことは判明していないが、埋甕の可能性もある。またSB03床面で小札が確認されていることや、周辺で埴塙やふいご羽口などが検出されており、倉庫あるいは作業小屋の可能性もある。

SB03の利用が停止後SB04構築までに、灰・炭交じりの層には多くの遺物が包含されている。特に土師器が多く、16世紀前半と判断される。この層からは播鉢や天目茶碗なども見つかり、天目茶碗の一部は、SD01埋土内の破片と接合し16世紀第2四半期と考えられ、SB01とSB03廃絶後にSB02とSB04構築されたと考えられる。SB04はSB03を0.7mほど埋め戻した後に礎石を置いて建てられたものである。

SX01の石組土坑は1.8m×0.8mの大きさで、石積み高は0.9mである。SB04に伴う遺構でも同形態と思われる石積みが確認されている。この土坑の内部や周りには柱穴が確認されず、屋外に単独で設置されていたものと判断される。類例としては三ノ宮東城跡（京丹波町）の曲輪1北側で石積土坑が見つかり、残存率は悪いが2.35m×1.8m、深さ0.2mの大きさで、貯蔵穴とみられている<sup>26</sup>。

本丸南端部分でも上層と下層に遺構が確認された。上層では円形に石が置かれ内部に焼土が認められる遺構が見つかり、焚火用の石組と報告では判断している。下層では3期の遺構が確認された。まずSA01のL字に曲がる石垣遺構である。北側は石垣が取り壊されているが、掘方が南へ曲がる部分があるため、南北4.8m、東西8mの長方形の檜台状の遺構である。その後、SA02とSD04が構築される。SD04に先行してSD03がある。そのため下層SD03→下層SA01→下層SA02→上層遺構の順となり、石垣の檜台状遺構を取り壊して、焚火の確認された遺構が最も新しいという結果となる。

その他、集石がSH01からSH10まで確認されているが、SH01・02は曲輪縁辺部で確認されており、石の大きさも30cm程度のものが見られるため礫石と判断され、SH03～05は曲輪中央部で確認され用途は不明である。SH04～09はこの城の最終段階のもので狼煙跡と推定されている。SH10は玉砂利状の石が敷き詰められ他の集石と様相が異なる。SA02とその東側の礎石とセットになっているとみられ、この建物への導入路に伴う集石と判断される。

これらの遺構とともに確認された遺物は、16世紀第2四半期に位置づけられ、一部越前焼大甕が16世紀後半に位置づけられる。この越前焼大甕は本丸南端の上層に伴うもので、石垣を伴う櫓台式遺構の後の時期に位置づけられる。その後は少量の国産陶器が確認され、江戸期にあった藤懸氏の先祖を祀る永勝神社に伴うものと判断される。

本丸北側では当初、掘立柱建物SB01と堅穴建物SB03が存在し、その後礎石建物であるSB02とSB04が築造されたと考えられる。

#### 西の曲輪（第2調査区・第14・15図）

この曲輪は本丸より10m下方に位置する。発掘調査により本丸側に上面幅約1m、深さ1mの堀切が確認された。この堀切に連続して曲輪南斜面において3条の堅堀が確認され、畝状空堀群を形成することが明らかとなった。これらの堅堀は幅2m～2.5m、深さ1m、長さ13～15mの大きさを持つ。一番西側の堅堀は途中で途切れ、屈曲している。曲輪上面ではU状に幅1.2m、深さ0.6mの溝が確認された。3条の堅堀のうち中央以外は、この溝と接続した状態であった。この堅堀が確認された南側斜面では多量の土砂が堆積しており、曲輪面を大きく削平して、堅堀のあった斜面に土砂を落としていると推定される。そのため畝状空堀群のあった頃は、曲輪の周囲に横堀が巡り、それと接続する畝状空堀群であったと推察される。つまり畝状空堀群のある曲輪から、それをつぶして曲輪を広げたことになる。

#### 藤懸氏陣屋（第1調査区）

石垣や礎石建物跡、土坑が確認されている。土坑は鉄滓とともに羽口、灯明皿が確認されている。この土坑の北側では、焼土を含んだピットが多数確認されおり、鍛冶工房と推定されている。この灯明皿は16世紀末から17世紀初と推定され、藤懸氏陣屋構築前の年代観が与えられている。その他藤懸氏の陣屋に伴うと考えられる、近世の井戸や建物跡、石垣が確認されている<sup>27</sup>。

#### 蔵ノ壇（4次調査）

ここでの調査は小規模のため詳細は不明であるが、南北方向に幅5m、長さ24mの土塁が検出された。この土塁東側には堀も確認された。遺構にともなう遺物は確認されていないことから、正確な年代については明らかにしえないが、通常このような大規模な土塁と堀は中世期に位置づけることが多い。土塁の東側に堀があるため、土塁の西側の台地上に館などが想定される。

#### 小結

上林城の評価を試み、小結にかえる。西の曲輪(第2調査区)で確認された畝状空堀群は、戦国期を代表する城郭遺構である。上林谷では日置谷城、梨子ヶ岡城で確認されている。それがある段階に埋められ、曲輪が大きく造成をされていることが確認された。本丸(第1調査区)では石垣が確認され、それが埋められた後、造成されて焼土の残る面が構築されている。この西の曲輪における畝状空堀群を埋め曲輪を造成した時期と、本丸にお

ける石垣破壊の時期が一致するかは明言しがたい。しかし16世紀中葉における上林城を取り巻く環境が大きく変化を受けたことを象徴していると考えられる。

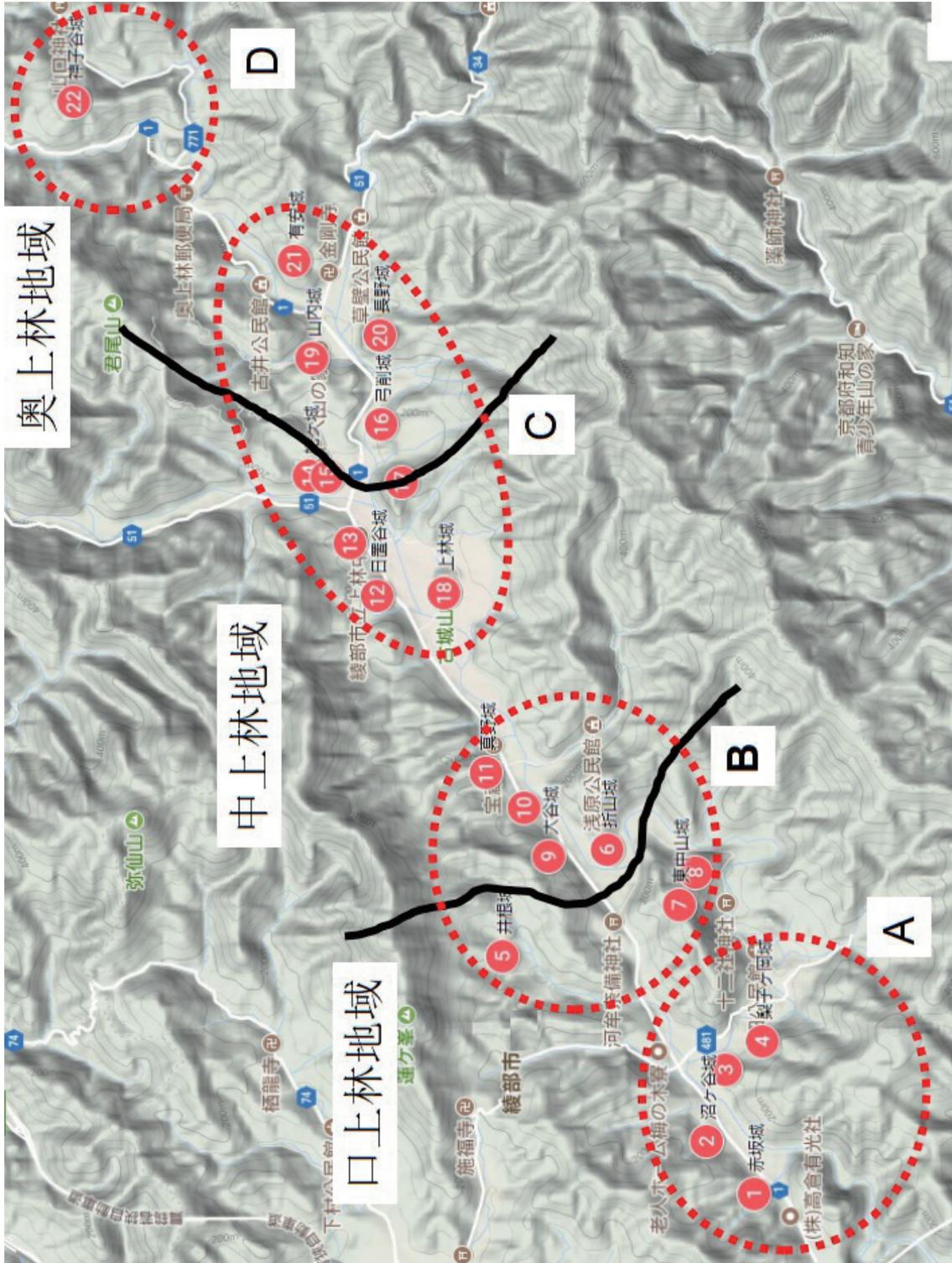
16世紀中葉というと、里村紹巴が京都を出発し、丹後天橋立を経て上林へやってきた永禄12年(1569)に該当する。その頃の上林城は石垣を伴う檜台状の遺構があり、蔵と想定される石組建物遺構などが存在した時期である。

里村紹巴の「天橋立紀行」では、「丹波さかひの岸谷峠は月に成て上林雲州館に入り、一日足をやすめ嫡孫城などへあがりけるに」とあるので、「上林雲州館」は低いところがあり、「嫡孫城」は山の上にあると推定される。そうすると、山麓で確認されている大規模な土塁と堀は「上林雲州館」である可能性もある。日置谷城が地元では「本城」とも呼ばれることから、こちらも考慮せねばならないが、別館という表現に着目すれば、日置谷城の「本城」に対して、上林城の「上林雲州館」「嫡孫城」という対比が成り立つかもしれない。いずれにせよ、上林城は畝状空堀群を伴う戦国時代特有の城から、石垣や蔵を伴う城郭へと姿を変えたのであろう。その後16世紀後半になり、この城に対する役割に大きな変化が生じ、石垣が壊され狼煙場として利用されるようになったのであろう。

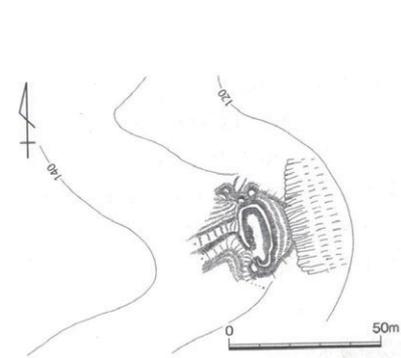
## おわりに

この上林谷には戦国期、数多くの山城が所在するが、その中でもA地区(口上林)では渡邊氏の沼ヶ谷城と赤道城、C地区(中上林)では日置谷城と上林城が地区内で主体的な位置を占めることを明らかにした。「光明寺再建奉加帳」では数多くの上林氏の名が見られるように、口上林地域を除く地域に、上林氏の勢力が広く広がっていたのであろう。その居城である上林城では西の曲輪で畝状空堀群を廃止し、曲輪を拡大することに重きが置かれ、本丸でも竪穴建物から通常の礎石建物へ変貌を遂げるなど、大きく城館の構造が変容している。その変貌はSB03 廃絶する16世紀第2四半期頃と考えられる。またこの時期、連歌師の里村紹巴がこの地域を訪れており、上林氏はこの地域の代表的な領主として、文化的教養を備えていたと考えられる。16世紀前半になると山城にて連歌会が開催されたり、接客する事例が散見され、上林城もこのような流れの中で構造の変化を示したものと考えられる。

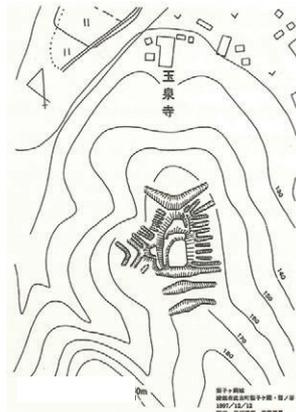
このように、上林谷地域では数多くの城館が存在し、その中で上林城、日置谷城が構造や規模で他を圧倒していることを示した。その上で里村紹巴の来訪時、「上林雲州館」と「嫡孫城」の二つの城があり、それは日置谷城と上林城である可能性を示した。つまり「嫡孫城」は来客時に連歌を行ったり接待を行ったりする城で、両者で役割が分かれていたことが推察されるのである。



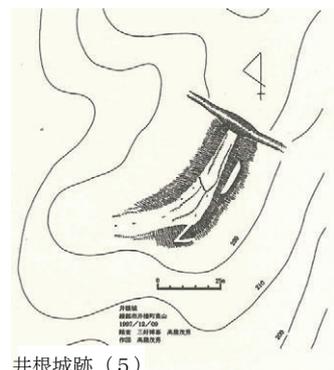
第1図



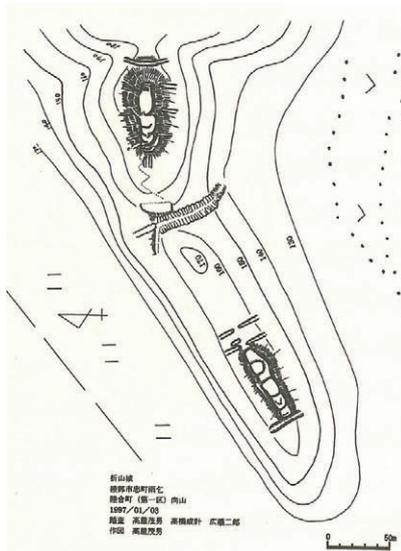
赤坂城 (1)



梨子ヶ岡跡 (4)



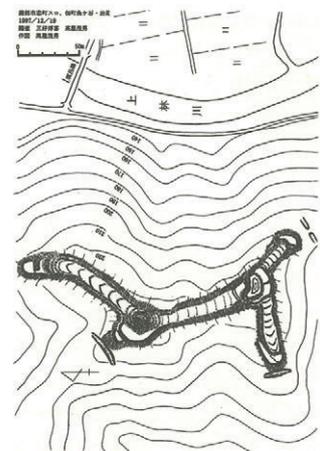
井根城跡 (5)



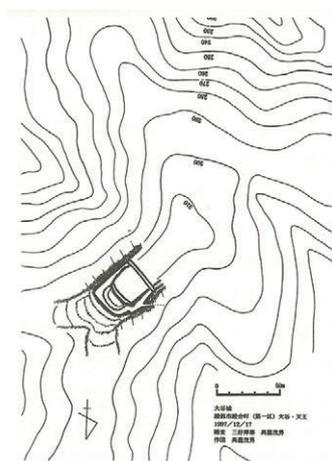
折山城跡 (6)



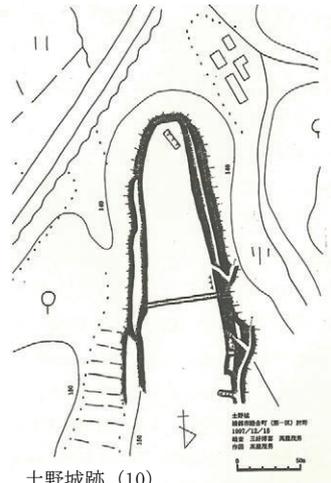
東中山城跡 (7)



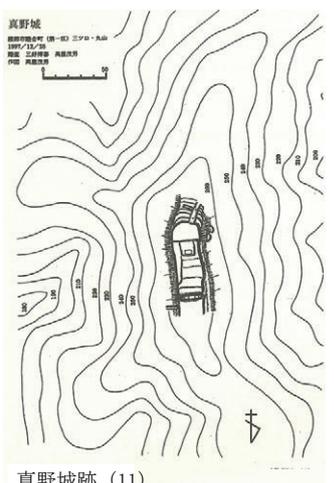
佃城跡 (8)



大谷城跡 (9)

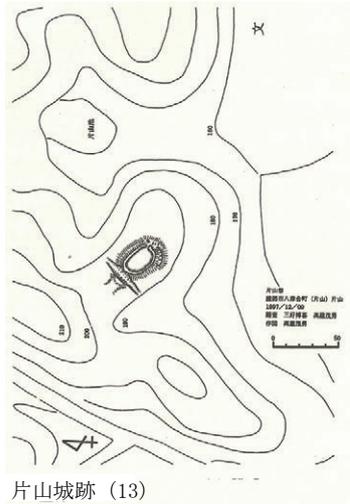


土野城跡 (10)

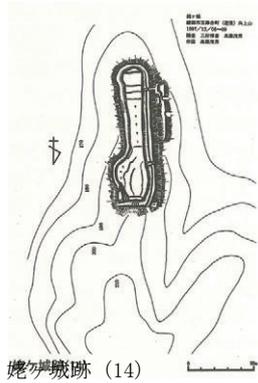


真野城跡 (11)

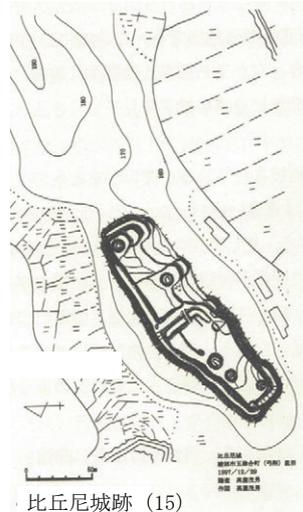
第2図



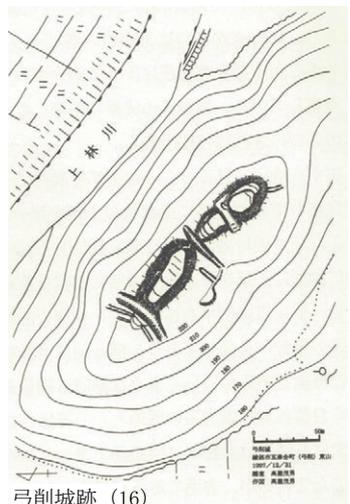
片山城跡 (13)



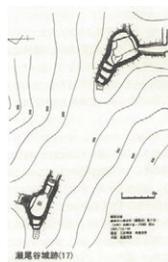
橿原城跡 (14)



比丘尼城跡 (15)



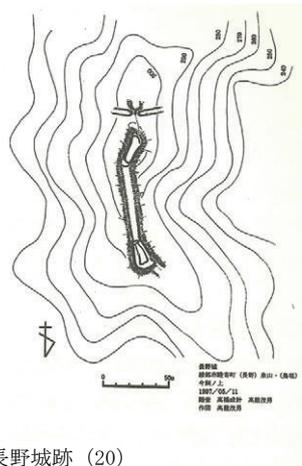
弓削城跡 (16)



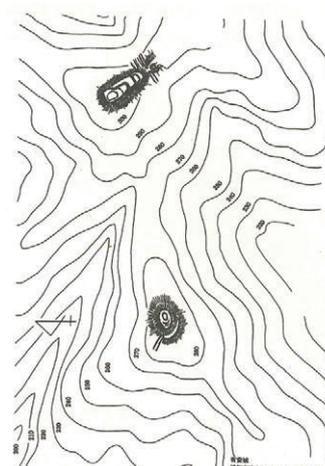
瀬尾谷城跡 (17)



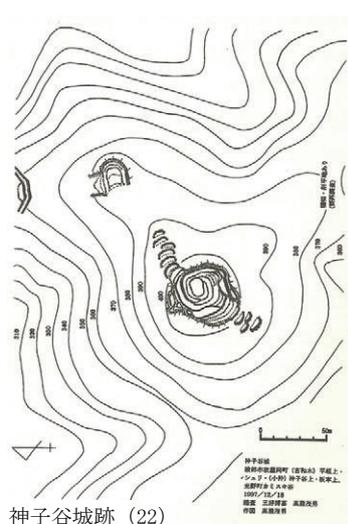
山内城跡 (19)



長野城跡 (20)

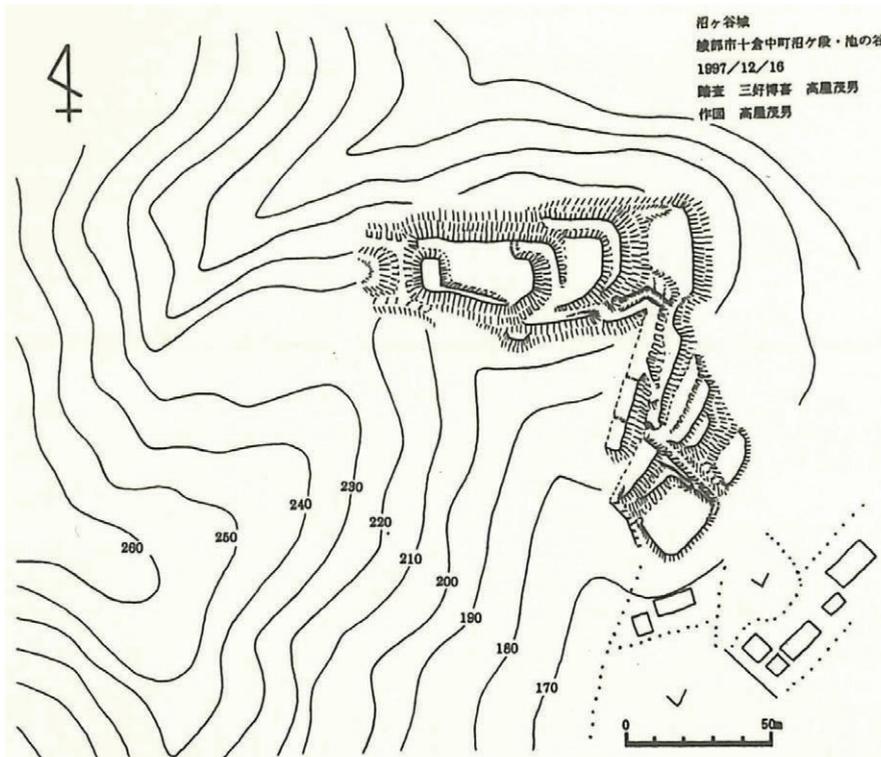


有安城跡 (21)

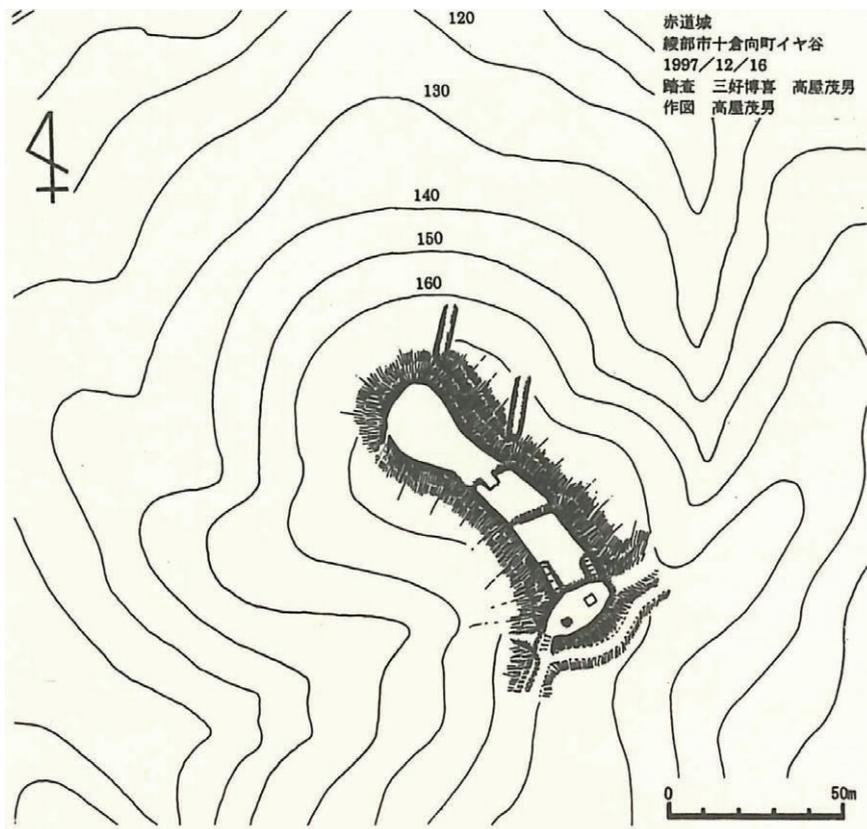


神子谷城跡 (22)

第3図

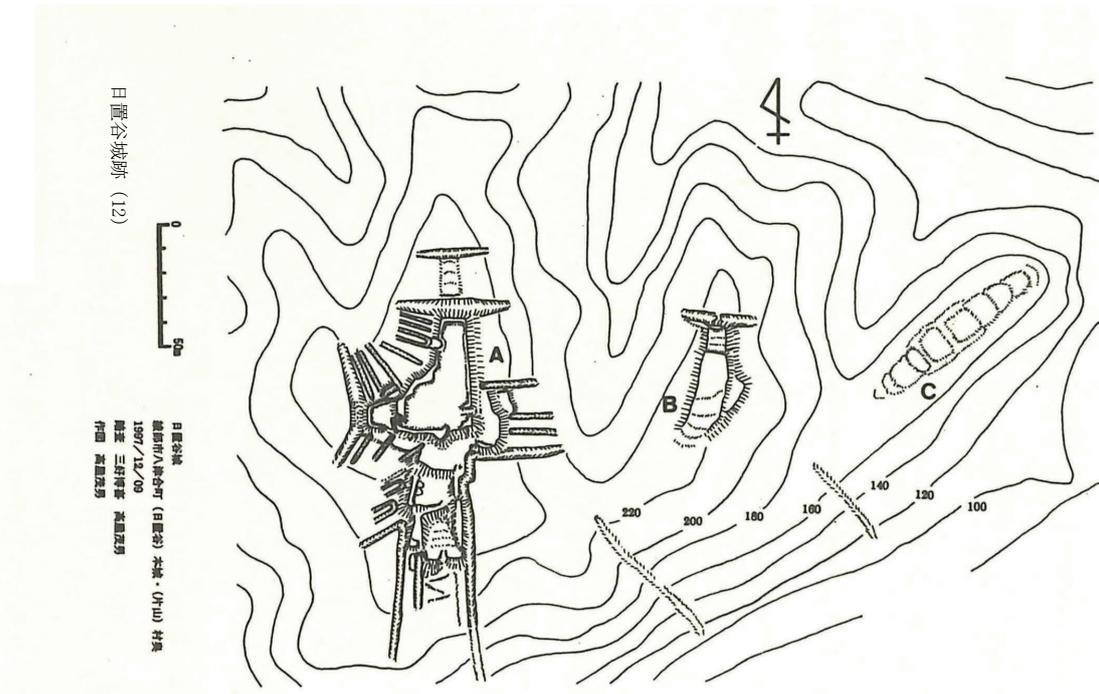
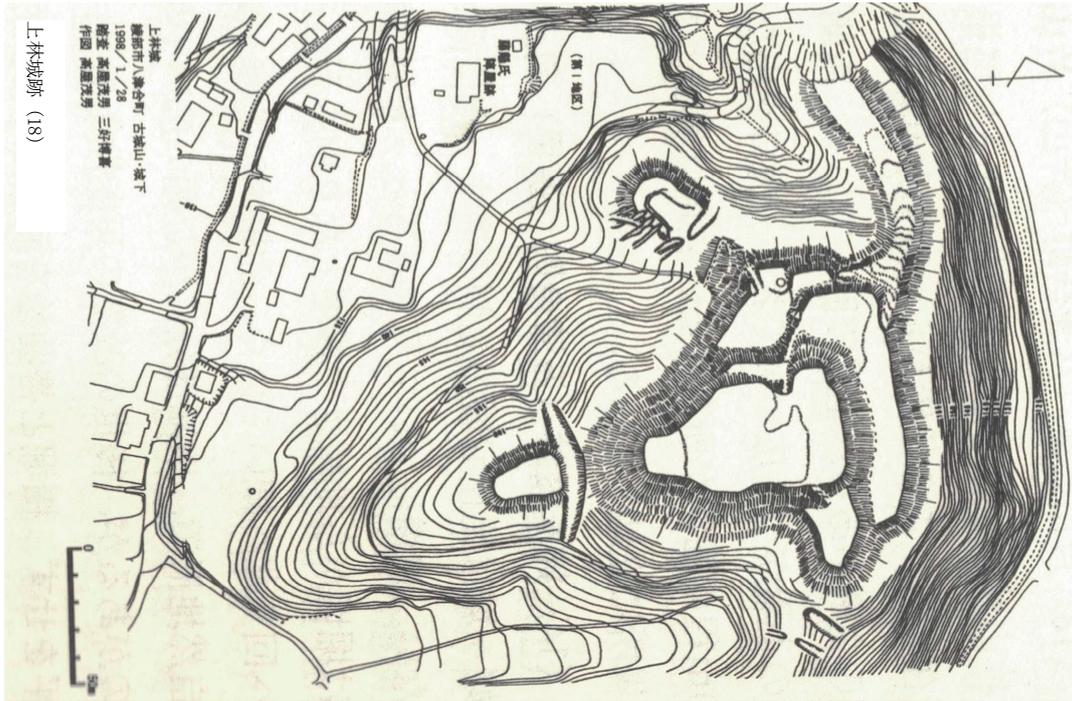


沼ヶ谷城跡 (2)



赤道城 (3)

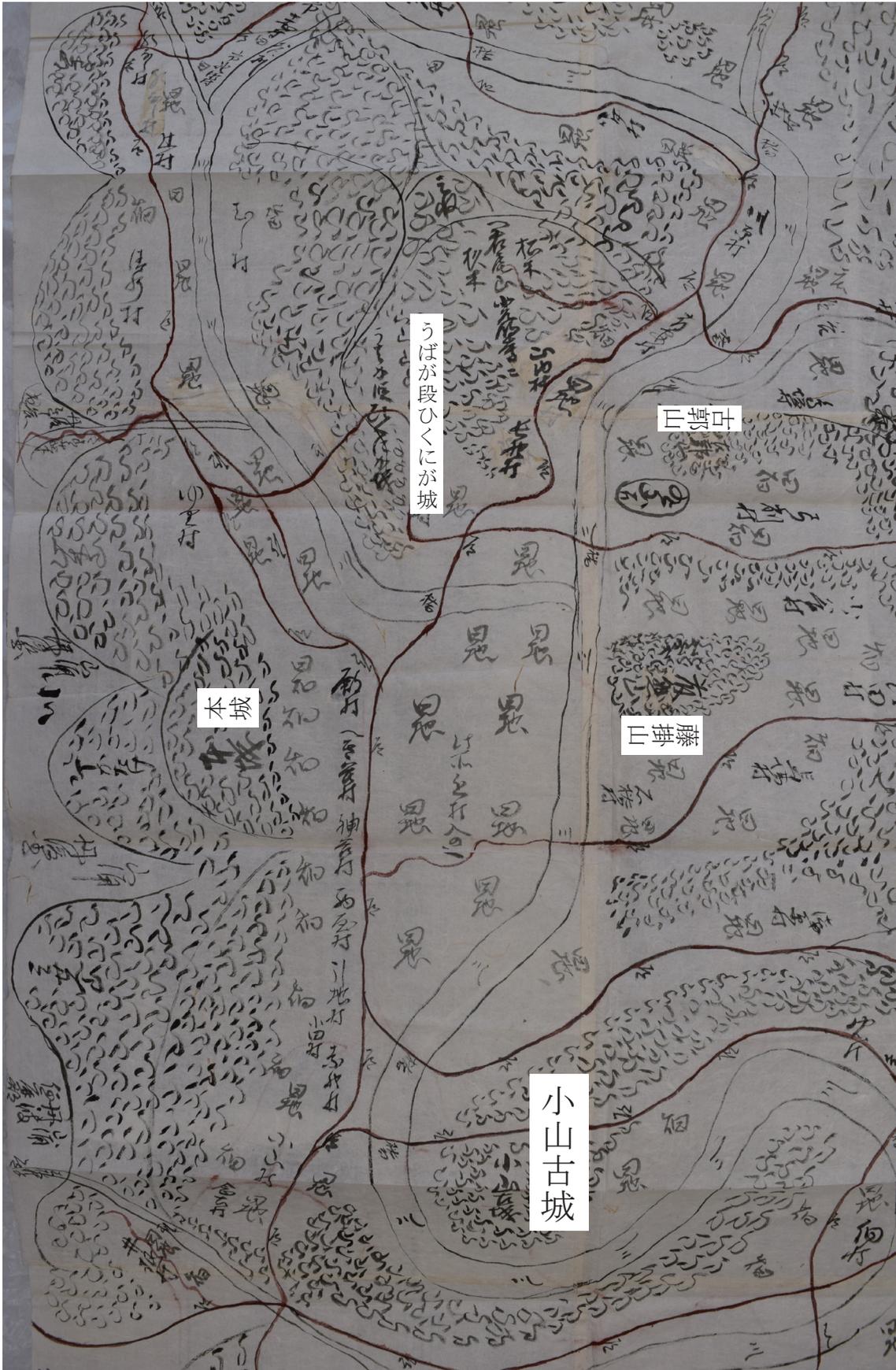
第4図



第5図

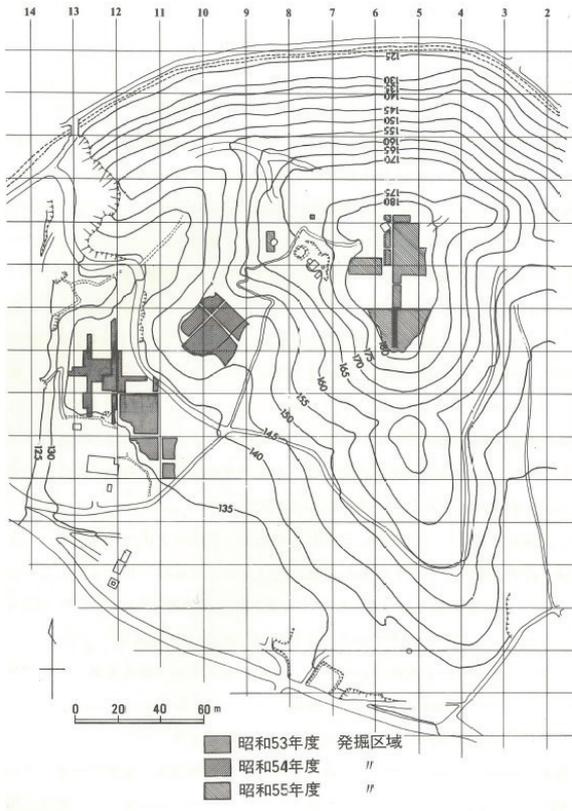
上林谷地域 中世城館遺構分類表										
	城跡館名	地区	比高	曲輪の削平	曲輪間の連携	堀切	土塁	斜面遺構	虎口	遺構の分類
1	赤坂砦	A	-	-	-	-	-	-	-	-
2	沼ヶ谷城跡	A	70	良	連郭式	有	有	豎堀	有	I A
3	赤道城跡	A	70	良	連郭式	有	有	豎堀	有	I A
4	梨子ヶ岡城跡	A	80	良	主郭中心	有	無	畝状空堀群	有	III A
5	井根砦	B	60	不良	主郭中心	有	無	無	無	VI
6	折山城跡	B	50	良	2地区	有	有	豎堀	有	II
7	東中山城跡	B	170	良	主郭中心	有	有	無	有	III B
8	佃城跡	B	100	不良	散在	有	無	無	無	VI
9	大谷城跡	B	160	やや良	主郭中心	無	有	無	無	IV
10	土野城跡	B	10	-	-	-	-	-	-	-
11	真野城跡	B	130	やや良	主郭中心	無	有	豎堀	無	IV
12	日置谷城跡	C	80	良	連郭式	有	有	畝状空堀群	有	I B
13	片山砦	C	50	良	主郭中心	有	有	無	有	III B
14	姥ヶ城跡	C	40	不良	主郭中心	有	有	無	無	V
15	比丘尼城跡	C	20	やや良	主郭中心	無	有	無	有	V
16	弓削城跡	C	70	良	2地区	有	無	豎堀	無	II
17	瀬尾谷城跡	C	110	良	2地区	有	有	無	有	II
18	上林城跡	C	70	良	連郭式	有	有	畝状空堀群	有	I B
19	山内城跡	C	80	良	主郭中心	有	有	無	無	III B
20	長野城跡	C	130	不良	2地区	有	無	無	無	VI
21	有安城跡	C	120	不良	2地区	有	無	豎堀	無	VI
22	神子谷城跡	D	200	不良	散在	有	無	無	無	VI

表1

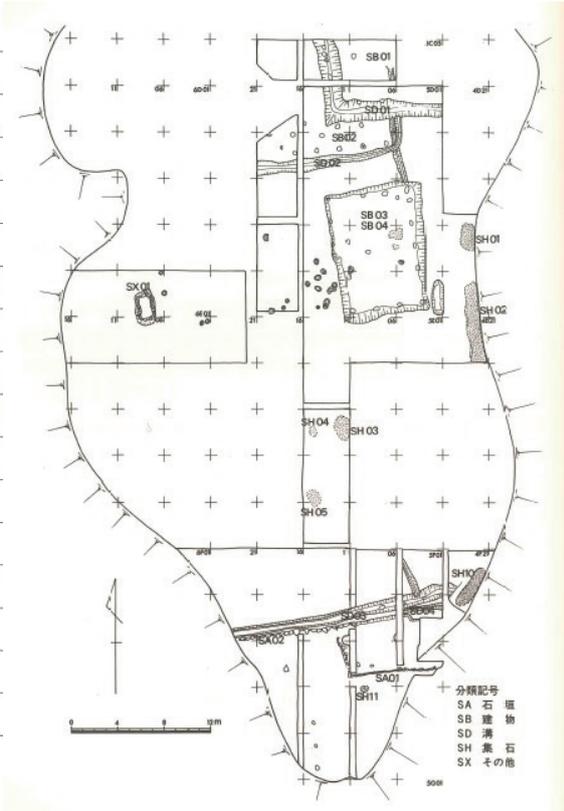


「上林図」(文字家文書・南丹市立文化博物館蔵)

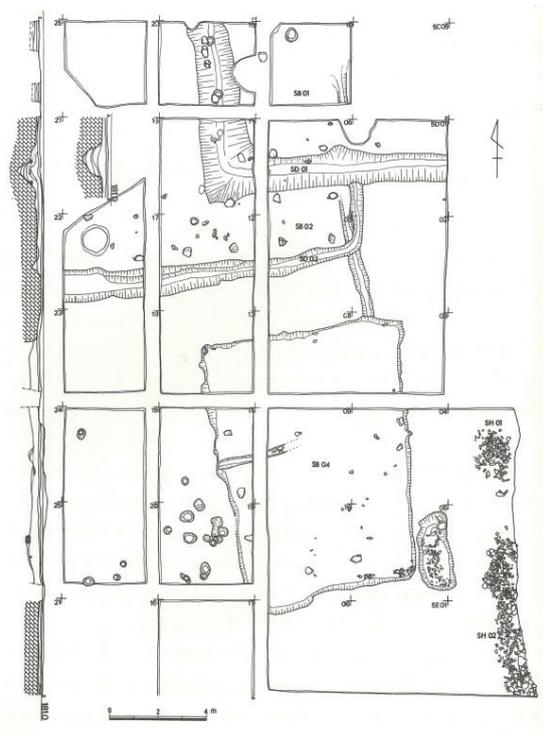
第6図



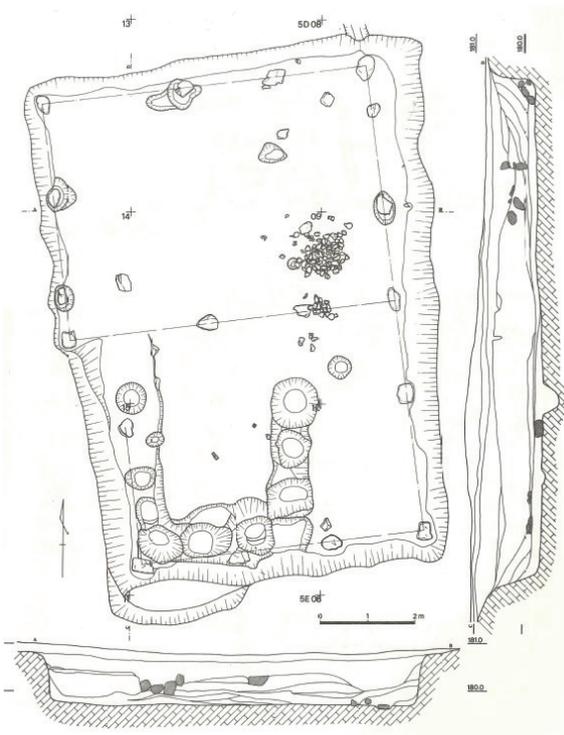
第7図



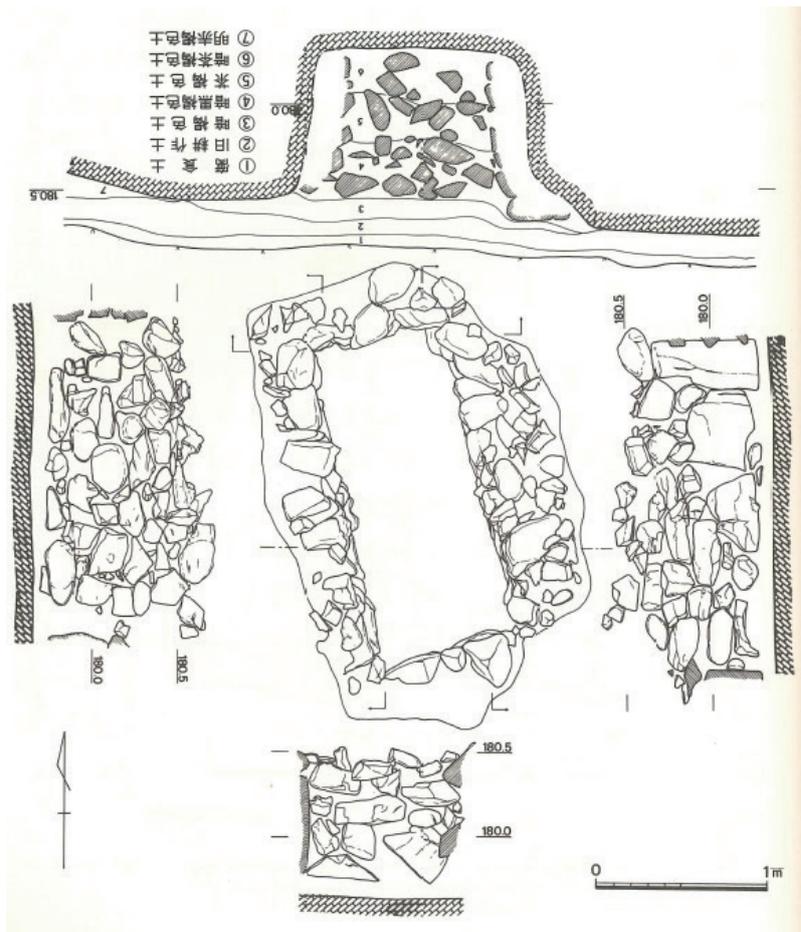
第8図



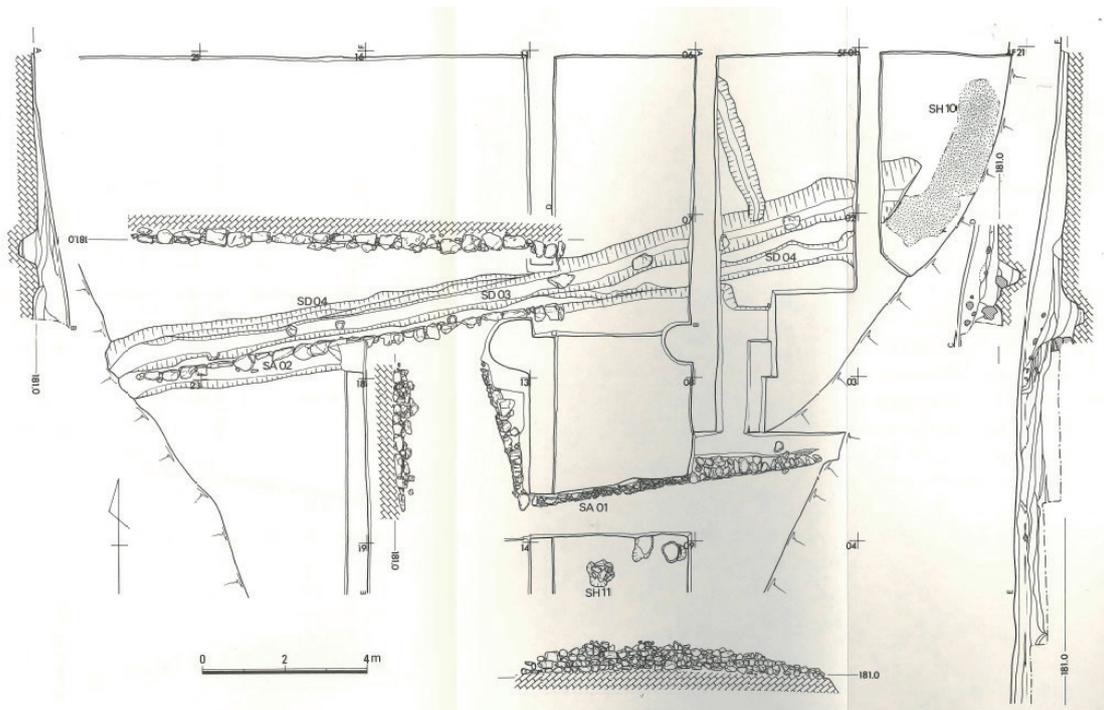
第9図



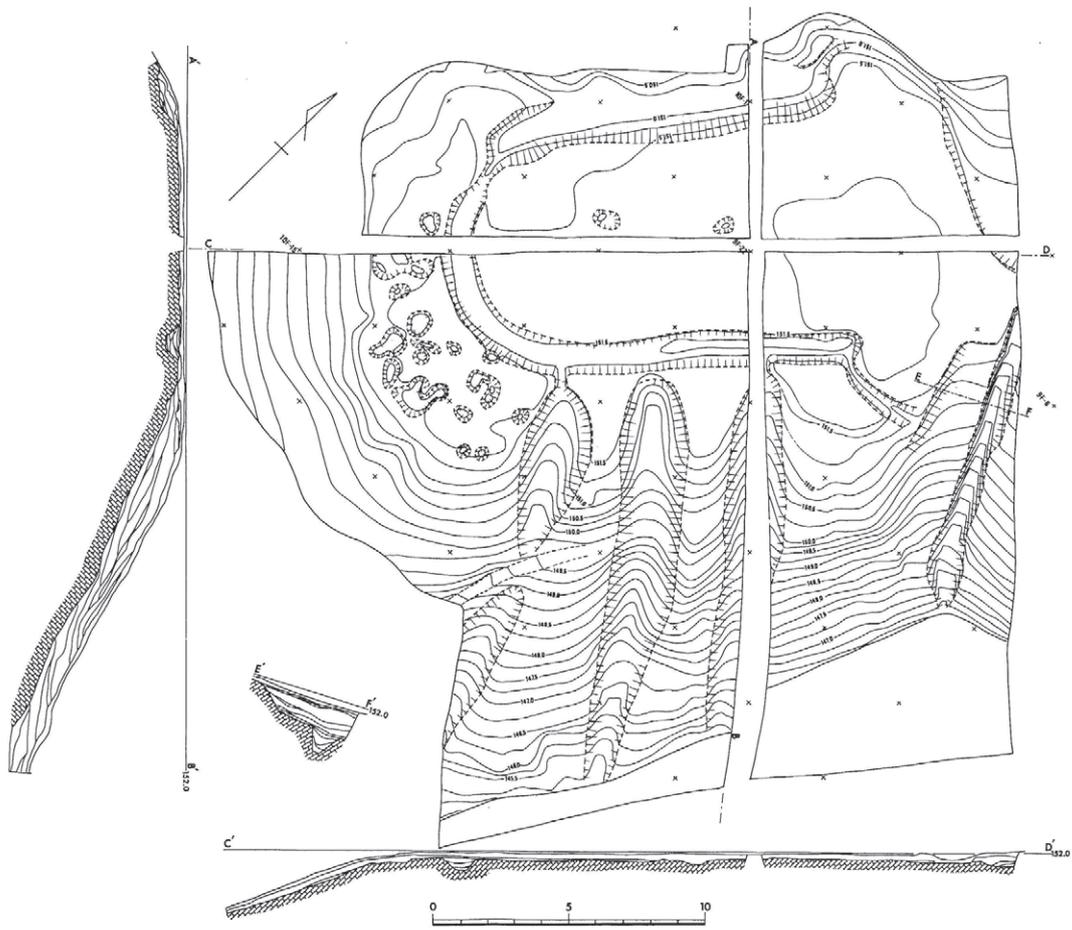
第10図



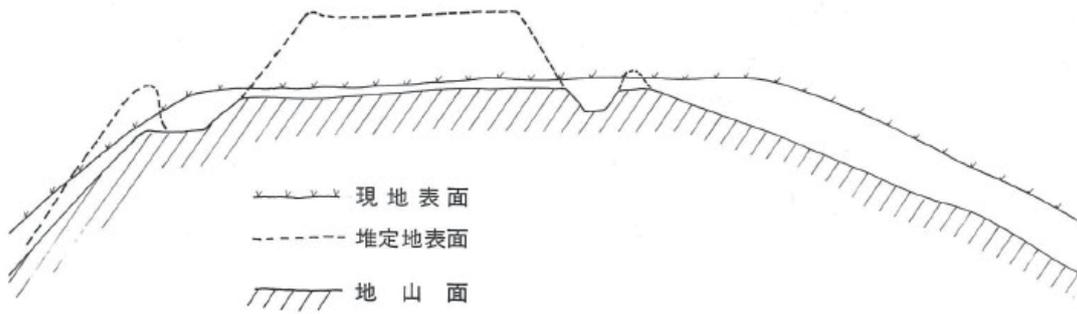
第 12 图



第 13 图



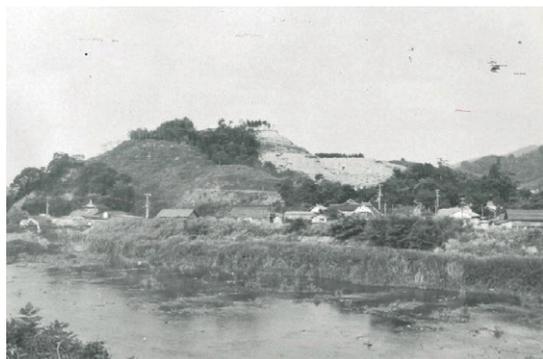
第 14 图



第 6 图 第 2 地区横断面模式图

第 15 图

写真図版 1



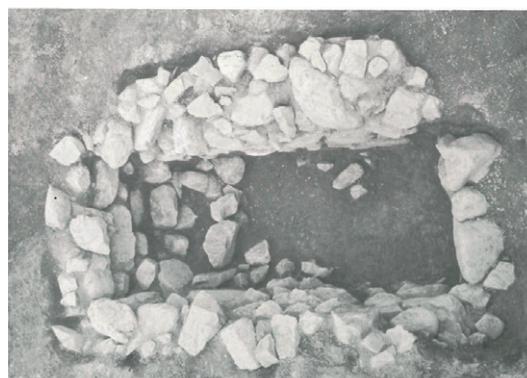
調査段階の上林城遠景



SB03 南から



SB03 床面から出土した小札



SX01



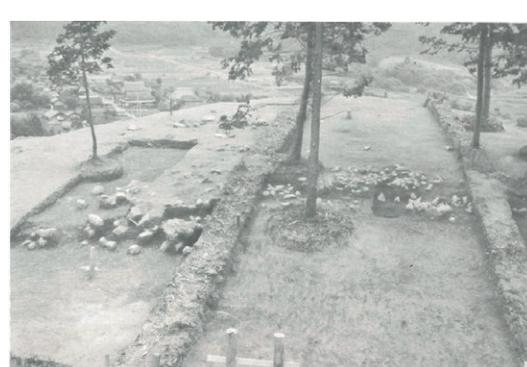
SA01 東から



SA01 南西から



SD03 と直上の礎石



本丸南端 表土除去後（北から）

- 1 松村英之、佐藤晃一 1994
- 2 若江茂 1992
- 3 福島克彦 2000
- 4 三和町 1995
- 5 京都府教育委員会『京都府中世城館跡調査報告書 第1冊：丹後編』、『京都府中世城館跡調査報告書 第2冊：丹波編』、『京都府中世城館跡調査報告書 第3冊：山城編1』、『京都府中世城館跡調査報告書 第4冊：山城編2』、『京都府中世城館跡調査報告書 別冊：分布図・索引』
- 6 仁木宏・福島克彦編 2015a、2015b
- 7 綾部市教育委員会 1998
- 8 高屋茂男 1998-a、1998-b
- 9 先行研究には川端二三三郎 1980 などがある。
- 10 藤井善布 1984、福島克彦 1993
- 11 高屋茂男 2000
- 12 奥田勲「紹巴天橋立紀行」について『国文学攷（通号 53）』1970年
- 13 林屋辰三郎 1975、石田雅彦 2005
- 14 『丹波志』は、福知山藩士古川茂正と篠山藩士永戸貞著が、丹波全体の地誌をまとめることを意図したものだが、氷上、天田、多紀の3郡のみで未完に終わった。しかし残る桑田、船井、何鹿についても調査が進められていたようで、写しが伝えられ何鹿郡については、(綾部史談会 1986)において刊行されている。
- 15 藤井善布 1984、福島克彦 1993
- 16 藤井善布 1984
- 17 福島克彦 1993
- 18 高屋茂男 2015b
- 19 その他絵図には、山や川の位置関係から折山城と考えられる「小山古城」、弓削城と考えられる「古郭山」、姥ヶ城と比丘尼城の「うばが段、びくに城」が見える。
- 20 梅原三郎 1987、川端二三三郎 1970 などの検討によると、最も古い年号は天文2年で近世初頭にかけての勧進が記されている。冒頭には「晴国（花押）」とあり、自伝によると上羽丹波守という。しかしながらこの天文2年頃に丹波で活動する人物として細川晴国がいる。高屋茂男 2002の検討の後、馬部隆弘 2013により、細川晴国の花押の変遷についても検討しているが、光明寺再建奉加帳の晴国の花押は、それ以降の細川晴国の花押とは全くことなるものである。
- 21 御霊神社文書
- 22 綾部市教育委員会 1979、1980、1981、1982
- 23 中井均 1994
- 24 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997、森島康雄 2001
- 25 中井均 1994
- 26 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2012
- 27 綾部史教育委員会 1980、中村孝行 1984

## 第2章 丹波国船井郡園部における事例検討

### はじめに

16世紀には数多くの城郭が築かれたが、豊臣期には一気にその数を減じた。元和の一国一城令を経て、基本的には複数の大名でひとつの令制国を支配する場合は領主ごとに一箇所、複数の令制国を一つの大名が支配する場合は、令制国ごとに一箇所の城郭（無城主各大名の場合は陣屋）となった<sup>1</sup>。このように城郭の分布も大きな変化をとげるが、城郭そのものの構造も中近世移行期には大きく発展する<sup>2</sup>。

16世紀末から17世紀初頭にかけて、内陸にあった拠点城郭を水運の利便性の高い海や河川下流などへ移す事例も見受けられる<sup>3</sup>。またこの時期、大名の転封も頻繁に行われた。新領主は既存の拠点城郭へ入城し改修する場合や、一旦入城した後、改めて新規模の城地選定する場合もある。また利用可能な城郭がない場合、寺などを宿所として新たな城地選定をする場合がある<sup>4</sup>。しかし多くの大名が改易されるなど盛衰があり、城地選定や入部時の詳細については不明な場合が多い。

元和五年（1619）、小出氏は但馬国出石より丹波国船井郡、桑田郡、何鹿郡を所領とする転封を命じられた。入部に当たり船井郡宍人（現在の京都府南丹市園部町宍人）の小畠太郎兵衛宅へ入ったことが『小畠文書』に見える<sup>5</sup>。

宍人は中世には北野天満宮領船井荘の中核として発展し、近世には小規模な宿場となった。園部川の中流に位置し、宍人より下流側には大西、船坂があり、船坂には七堂伽藍をそなえた九品寺があった。また小畠氏は言い伝えによると、出羽出身で北野社に仕え船井荘代官を務めたが、戦国期には細川氏の被官となっていた。後には明智光秀の家臣となっていたが、豊臣期には史料が激減するため詳細は不明だが、引き続き船井荘に存続していたことがうかがえる<sup>6</sup>。

宍人には三ヶ所の城館遺構（宍人城館群と呼称する）が残されており、先行研究により、A群＝小畠氏の居館、B群＝小出氏の仮館、C群＝小畠氏の山城と推定されている。その後城地選定の中で、宍人に陣屋を設ける案もあったが、園部村の小麦山山麓に築かれることとなった。通常城地選定にあたり複数の案が提示されたはずであるが、史料の残存の関係か今のところ宍人以外の案は管見に入らない<sup>7</sup>。

これまでの先行研究<sup>8</sup>では、小出氏入部に際し小畠氏の居住地である館と小出氏の仮館のみが議論の対象となっていた。しかし藩主のみが入部したのではなく、多くの家臣たちがいたはずであるので、それらがどこに滞在したかも想定せねばならないが、これまでの研究では触れられていない。

そこで地表面に残された城館遺構を図化し、そこから知りえる情報をもって城館遺構の性格を類推し、文献史料も援用しながら、大名入部段階における宍人城館群について

検討したい。

また最終的に園部陣屋が置かれた菌部村、当初小出氏が入部した宍人のほかに、室町幕府の御料所であった桐野河内荘がある。桐野河内荘には蟠根寺とその背後に蟠根寺城がある。戦国期には政所執事の伊勢氏が居住しており、当地方の重要な城郭であった。このような状況下、なぜ園部村の台地に陣屋が置かれたのであろうか。本章では陣屋成立前史を確認し、小出氏の園部入部経緯を通じて、近世初頭の城地選定を検討したい。

## 第1節 園部陣屋成立前史～中世菌部城の検討を通して～

南丹市園部町には現在40箇所前後の中世城郭の存在が確認されている<sup>9</sup>。そのなかでもこの地域の中心的な城として従来言われてきたのは中世菌部城である。

中世菌部城に関する研究としては竹岡林氏のものがある<sup>10</sup>。氏によると中世菌部城は小麥山麓に築かれた近世園部城の筆頭家老小出氏の屋敷跡一帯で、居館的色彩の強い平山城として築かれたものとされている。また『信長公記』に荒木山城守の居城が明智光秀等により水の手を切られ落城したとあり、これを中世菌部城であるとされている。その他荒木山城守の居城について記すものの多くが、その所在地を船井郡園部としている<sup>11</sup>。

しかし荒木山城守の居城を園部としているのは『靱井家日記』等の小説の類いの記録に見られる記述である。『信長公記』では荒木山城守の居城を菌部城とは記していないが、恐らく『靱井家日記』に代表されるような丹波地方の近世軍記物などの影響を受け、両者の記述が結びつけられたと考えられる。そのため中世段階に「菌部城」と呼ばれる城自体の存在も不審に思われる節がある。

荒木氏が波多野方として室町幕府の御料所である桐野河内村（園部町船岡周辺）へ押領を働いていることは、既に明らかにされている通りである<sup>12</sup>。ここで「荒木山城守の中世菌部城」が存在の有無が重要な意味を帯びていると考える。またその後、小出氏入部段階において、前段となる城郭が存在するかどうかは、城地選定の上で大きな問題となる。そこで改めて中世菌部城について検討してみたい。

### 中世菌部城の疑惑について

まず明智光秀等によって落城した荒木山城守の居城について見てみると、『信長公記』に「滝川、惟任、惟住両三人、丹波へ差し遣はされ、御敵城、荒木山城守居城取り巻き、水の手を止め、攻められ、迷惑致、降参申し退散。さて、惟任日向守人数、入れ置く」とある<sup>13</sup>。また「丹羽長秀書状」にも「丹州江相働、荒木山城守五間十間ニ取詰、水之手相止候条、落居可為五、三日中候」と同様の記述がある<sup>14</sup>。しかし、これが中世菌部城であるとは記されていない。荒木山城守の居城が中世菌部城とされる理由は、『靱井家日記』に波多野氏の家臣組織が記され、七頭家の六番目に「園部城主荒木山城守氏綱」とある

事<sup>15</sup>や、これを受けた『高城軍記』『波多野盛衰記』等の記述に端を發するものと考えられる<sup>16</sup>。

しかし従来から言われているように、『靱井家日記』は波多野氏の家臣、靱井五郎右衛門らが波多野秀治一族の興亡史をまとめたものだが、史実と明らかに異なる点も多く信憑性は低い。これを受けたその他の軍記物の類も同様である<sup>17</sup>。これらを根拠に『信長公記』「丹羽長秀書状」に見られる荒木山城守の居城を中世菌部城とするには根拠が薄い。

荒木氏の系図でも荒木氏綱が「園部城主」であったと記している<sup>18</sup>。しかし氷上郡の荻野直正を波多野氏の家臣であるかのように記しており、信憑性の有無を論じるまでもない。その所在地と推定されている園部町の小麦山山頂付近は地形の変貌が著しく、当時の様相はつかみがたい<sup>19</sup>。しかし山の地形は緩やかなお椀状をしており、根本的に中世城郭としてあまり適した地形とは考えがたい。また現地には切岸や堀などはまったく存在しない。

荒木山城守の居城は水の手を切られ落城したとあることから、数日間の龍城戦に及んでいるのがうかがえるが、小麦山周辺で龍城戦にまつわる伝承もない。「中世菌部城」という名称も近世園部城（陣屋）と区別するために便宜的につけられた名称で、近世園部城（陣屋）築城前に中世菌部城が存在したことを示す一次史料も皆無である。以上の事から荒木山城守の居城を中世菌部城としてきた従来の説に疑問を抱かざるを得ない。

### 中世の菌部村について

中世菌部城が存在したとされてきた時期の菌部村の状況を示す史料として『菌部村天満宮文書』がある。

今度於黒田山、竹内弥五郎忠節出無比類、当本役分出申候間向後可在知行候 謹言  
天文十九年八月晦日 秀信（花押）竹内孫五郎殿<sup>20</sup>

為菌部村下司跡目、貴所息虎満管領ニ給候、祝着至候、然者如下司時、作識諸賂等事、無別儀

申付候条、為後日 一筆令申候、恐々謹言

永禄十三年 三月十四日 田中下野守盛（花押）竹内満介殿進之候<sup>21</sup>

園部村天満宮は、現在生身天満宮と称し、近世園部城の築造にともない天神山山麓に移建された。上記史料より、竹内氏は菌部村の下司職にあり軍役にも服す立場にあった事がうかがえる。『丹波志』によると竹内氏は菌部村に住し天満宮に奉仕したとあり、園部城の郭内に竹内氏の古屋敷と天神の社地があったと記している<sup>22</sup>。

また江戸期に竹内善左衛門が園部藩士に宛てた「差上ケ口上覚」によると小出氏の入封に際し「私屋敷只今之所江被口仰付候」とあり、元いた場所は大田金左衛門殿の屋敷<sup>23</sup>

となったとしている。さかのぼって文明 5 年 3 月 3 日付の「小山村連署渡状」<sup>24</sup>においても竹内氏の存在が確認できる。現在、園部高校の東側の高まりに、桜ヶ丘記念会館があるが、ここが近世の大田金左衛門の屋敷跡で、中世においては竹内氏の屋敷跡である（第 1 図）。

#### 荒木山城守の居城の所在地について

前項で中世の菌部村の状況を確認し、竹内氏の存在を明らかにした。荒木氏による桐野河内村押領は天文年間であるので、竹内氏との関係を考えると、ほぼ同時期に荒木氏の居城が菌部村にあったとは考えがたい。周辺地域で荒木氏の居城とされる城としては、他に多紀郡の細工所城（荒木城、井串城）がある（第 2 図）。細工所城の遺構についてみると（第 3 図）、標高 400m 程の山頂にあり、街道の分岐点を見下ろす位置にある。主郭は 40mX20m 程の広さで、西側に 5mX5m の小さな段と 15mX12m の郭が続き、中心郭群を形成している。その西には三角形の郭があり、南側に虎口が存在する。主郭の東側にも 2 段を有しその先は葛龍折れの通路となる。

また中心郭群から四方へ郭が伸びている。西北側は斜面を切り落とし、通路を狭くしたり堀切で遮断している。最西北端部分には低土塁囲みの郭がある。東南側の郭は少し距離を置いており削平も不十分である。全体的に堅堀は多用せず、中心郭群のような高い切岸で防御しているようである。

では明智光秀の丹波攻略の動向を見てみると、天正 3 年 (1575) 12 月に荻野直正を黒井城に攻める<sup>25</sup>。翌天正 4 年正月に波多野氏の背反により光秀は敗北を喫し、いったん退却せねばならない状況になった<sup>26</sup>。再び丹波攻めが行われるのは天正 5 年からである。10 月に多紀郡靱井の館が落城し<sup>27</sup>、翌 6 年 3 月に長岡藤孝に対し氷上郡、多紀郡への道路の整備が命じられ、大軍による丹波攻略が迫っていることがうかがえる。そして翌 4 月に荒木山城守の居城が落ち<sup>29</sup>、同年 12 月に八上城が包囲されている<sup>30</sup>。光秀軍は八上城攻撃のため八上へ至る街道に接した波多野家臣の城を順次落としていったと見るべきである。

明智光秀等によって細工所城が落城した後、光秀の兵が入っているが、細工所城において特に織豊系の改修が加わった形跡はみられない。これはその後すぐに八上城を包囲したため、付城としても使われることがなかったためと考えられる<sup>31</sup>。

以上のことから荒木山城守の居城とは中世菌部城ではなく、細工所城とするのが妥当である。また細工所城の東へ谷を隔てること 600m のところに鉄砲丸という山がある<sup>32</sup>。『丹波志』によると光秀勢がここから細工所城めがけ鉄砲を放ったとされ<sup>33</sup>、明智方の構築した陣城と考えられる。このような地元の伝承においても激しい戦いが繰り広げられたことがうかがえることも、補足するものであろう。

#### 小結

以上のように、従来、荒木山城守の居城を中世菌部城とする説があり、当地域におけ

る中心的な城であるかのように言われてきた。しかし中世菌部城が存在したとされる地域には、菌部村下司である竹内氏の存在を明らかにした。荒木氏の桐野河内に対する押領行為は天文年間がピークであるので、ほぼ同時期、同地域に竹内氏の存在が確認できたことは、荒木氏の中世菌部城の存在説に否定的にならざるを得ない。またその周辺地域においても荒木氏の龍城に際して明智軍が陣を構えた伝承等も見当たらない。これらから『信長公記』や「丹羽長秀書状」にみられる荒木山城守の居城は多紀郡の細工所城とするのが妥当である。

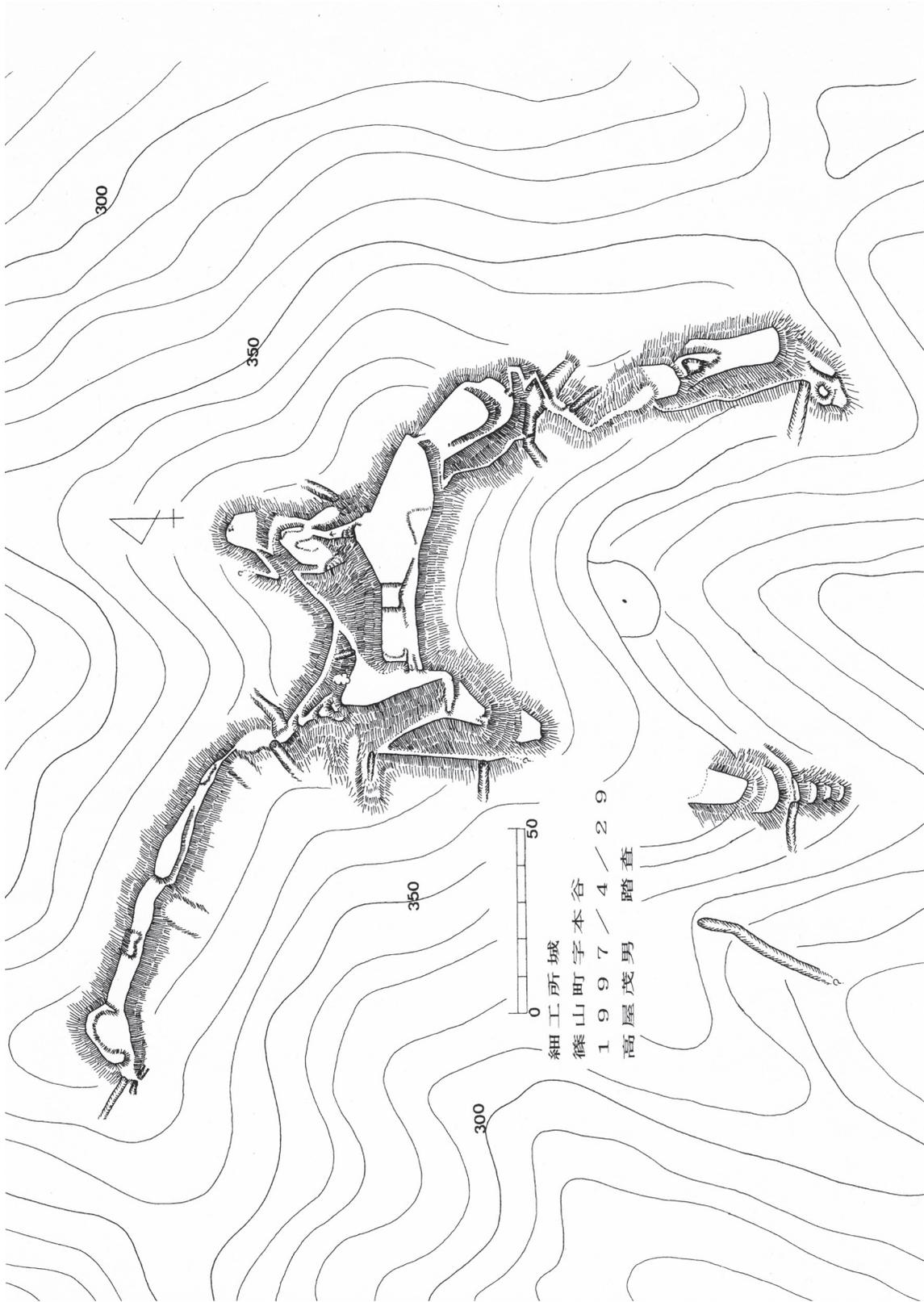
ただ竹内氏の屋敷が軍事的防御機能を持っていた可能性も残ることから、ここでは「荒木山城守の菌部城」はなかったとしたい。



第1図 竹内氏屋敷跡位置図



第2図 荒木氏関連城館位置図



第3図 細工所城縄張り図

## 第2節 丹波宍人城跡と小出氏の入部

### はじめに

宍人には三ヶ所の城館遺構（宍人城館群と呼称する）が残されており、A群＝小島氏の居館、B群＝小出氏の仮館（6 図）、C群＝小島氏の山城（5 図）と推定されている。しかし小出氏と小島氏の関係性に着目はされても、入部にあたって小出氏の家臣団の居住地については触れられることはなかった。本論では現地に残された遺構や、断片的ながらも残る文献をもとに検討したい。

### 小出氏の入部と小島氏

元和五年（1619）、小出吉親が但馬出石から船井郡、桑田郡、何鹿郡に主に所領を有する領主として転封が命じられました。上野国甘楽郡の既存の所領と合わせて3万石を有する園部藩が誕生する。入部に当たり小出氏は京都所司代で山城国奉行であった板倉勝重宛の小出吉親書状や、「後庄右衛門尉」（後藤光次カ）宛の吉親書状から、宍人の小島太郎兵衛を紹介されたことがうかがえる<sup>34</sup>。

『略史前禄草案』<sup>35</sup>には「当分完戸村処士小島太郎兵衛宅ニ御住居元和七年園部御普請造畢ニ付御移徙」とあり、小島太郎兵衛のところへ仮住まいしたことがうかがえる。さらに地元で入部時のことについて伝える近世文書<sup>36</sup>によると、「小出伊勢守吉親公儀、元和五己未歳八月五日丹波国船井郡上宍人村御假屋江御初入有之候、元和七年酉歳園部江御入城」とあり、仮館が営まれていたことがうかがえる。

新たに入部した船井郡を中心とする地域での拠点城郭というと八木城<sup>37</sup>がある。八木城は丹波守護代内藤氏の居城であったが、戦国期に滅ぼされ豊臣期には廃絶していたとみられる。山城自体を利用しなくとも、拠点城郭が存在する場所は交通の要衝である場合が多く、麓に陣屋を構える事例も見受けられ<sup>38</sup>、小島氏のもとへ入った小出氏の上記対応は興味深い。

城地選定にあたり複数の候補が挙げられていたはずであるが、今のところ『御家譜伝記』<sup>39</sup>（第7・8 図）に記されるように、当初上宍人村が候補となっていたようである。詳細な絵図が記載されており、「平野成」と呼ばれる場所で背後には山城があったことがうかがえる。城地となったところは緩やかな台地状の地形である。東の記載のところには「屋敷取有所へあたる」とあり、次節で触れる台地上の城館遺構のことを指していると考えられる。しかし上宍人村への築城は『御家譜伝記』に村人たちの野菜作りに差し障りが出ると記されている<sup>40</sup>。その後城地候補は現在の南丹市園部町中心地の小麦山とその麓の台地上地形に絞られたようである。

最終的に構築された園部陣屋は二重の堀に囲まれており、陣屋としてはかなり規模の大きいもので、「城郭構え」と呼べるものである<sup>41</sup>。『略史前禄草案』によると陣屋構築にあたり、酒井讃岐守忠勝へ絵図を見せ相談するものの、大規模な普請でその上、二重堀

に塀には狭間も設けられているので、その上櫓はやめた方がよいとの意見により、櫓の構築をあきらめたという。<sup>42</sup>

この陣屋の北側に陣屋町が広がっており、宮町・上本町・本町・若松町（裏町）・新町がある。本町と新町の境には枳形があり、元々はここが町への入口であったものが、町が東へ広がり新町が成立したと考えられる。上本町から新町までは山陰街道筋にあたり、これへ宮町が陣屋と街道とを結ぶ道筋に存在する。町の整備にあたり、園部川を北側へ大きく付け替えたと言われ、本来は現在の国道九号線のあたりを流れていたと言われる。現在でもその場所は用水路として名残を残している。<sup>43</sup>

### 南丹市園部町穴人にある城館遺構

穴人には現在三ヶ所の城館遺構が確認され、本論では穴人城館群と呼称する。ひとつは園部川支流の本梅川左岸の丘陵上にある大規模な堀と土塁が存在する遺構 A 群、そしてその北側に位置する遺構 B 群、これらの南西にそびえる山頂にある遺構 C 群である。

遺構 A 群には堀と土塁に囲まれた曲輪 I がある。北側には堀があり一部土橋とした虎口空間 a がある。I と虎口空間 a とは深い堀で遮断されているものの、土塁は a を含めて回っている。I の西側に土塁の切れ目があり、その先に堀の部分で屈曲する虎口空間 b が存在する。しかし曲輪 I の中央部分には昭和前期には II と III を分かつ土塁と同様の形状をした土塁があり、土塁の土を虎口空間 b 周辺の堀部分へ入れたとの話がある。<sup>44</sup> また平地に近いこともあり、後世畑として利用された形跡もあることから、遺構の評価については慎重であらねばならない。実際に III の北側の谷部分などは開墾などにより削られたと判断できる。

これに接して西側に屈曲をともなう土塁で囲われた曲輪 II、III がある。II と III の間は土塁で仕切られている。折れのある土塁が圍繞し一部に浅い堀は見られるものの、大規模な堀は確認できない。

曲輪 I を囲む堀や土塁の形状については、改変を受けている可能性があるが、全体として近世城郭的な墨線の折れは見られない。一部に櫓台的な高まりは見受けられるものの、外側に犬走り状の空間があり、効果的な位置となっていない。改変を受けていることを鑑みても、曲輪 I は台地先端部分を大きな空堀で遮断し土塁を設け、虎口空間 a のように新しい要素は見られるものの、きわめて中世的な遺構であると評価できる。

これに対して曲輪 II、III は墨線に折れが随所に見られ、その外側には浅い堀がめぐる。II と III の間には中央部分まで高さ 1.5 m、幅 1.0 m 程度の土塀のような土塁が存在する。曲輪 II、III に見られるような遺構は織豊期に築かれた陣城に類似する。また I と II、III の関係を見ると、II、III は I の付随的關係を見受けられる。また II、III の西北側にはさらに平坦な地形が続き、一部には土塁状に手が加えられている部分も存在する。

また遺構 B 群は A 群を見下ろすような高さに位置する。南側には櫓台があり、随所に墨線の折れが見られ、東と北には虎口と見られ遺構が確認できる。南から西北にかけて

は土塁が見られるが、現状では全周するには見受けられない。周囲に堀はあるが浅く実践的なものではない。平面プランは近世的な要素が多くみられるが、一般的な中世城館とは考えられない。

遺構C群は背後の山頂にある山城で、西側には土塁囲みの曲輪も見られるが、全体として曲輪の削平状況は悪い。目立った特徴のなり一般的な中世城館である。

### 宋人城館群の評価

これらの城館遺構に関して福島克彦氏の先行研究がある。<sup>45</sup> 福島氏は遺構A群の虎口空間a、bを「織豊系の虎口形態としては中途半端な形態」とし、「近世の防御施設を十分使いこなせていない状況」と評価する。曲輪Ⅱ・Ⅲは曲輪Ⅰに従属する関係とする。遺構B群は「規格性の高いプランと微高の土塁・堀の存在から、近世的な平面構造を指向している」とし、小出氏が一時的に入った仮館と想定している。そして両者の並立した関係から、新しく移封されてきた大名と、土着の土豪の関係に着目している。

しかし前節でみたように、虎口b付近は戦時中の改変が疑われるためその評価は慎重であらねばならないが、若江氏が指摘するように虎口a側の堀幅が参考としてとらえられ、土塁の外側の犬走状の部分は全くないか、かなり小さかったはずである。そのため虎口aについても現状の形態ではない可能性もある。虎口bの南東側に土塁が一部高まったところがある。本来虎口bに接する櫓台である可能性もあるが、ここでは積極的評価はしないこととする。

遺構B群は平面が長方形を呈し、南と西、東に墨線の折れが見られ、土塁、櫓台状の高まりが確認でき、福島氏が指摘するように陣城的要素が看守される。そのためB群を約2年間仮住まいをした小出氏の仮館と評価している。ただ福島氏は指摘していないがA群曲輪Ⅱ、Ⅲとは、低土塁、浅い堀、墨線の折れなど、要素としてはB群と共通する部分があると考えられる。このような遺構A群曲輪Ⅰと、A群曲輪Ⅱ、Ⅲ、B群とに分類でき、これは時期差・機能差を表していると考えたい。

前節で見たように、小出氏は「小島太郎兵衛宅」に居住したと考えられ、『略史前禄草案』には、小出氏入部の頃の話で家老の友松兵部が、東半田村塩田某方に寄宿し、そこが兵部屋敷と当時言われたことや、井戸を掘ったことで早魃に悩まされた住民が一村挙げて感賞したと記している。<sup>46</sup> 文献の上で家臣の居住地が確認できるのはこの一例のみで、時期も入部最初期のものであるのか詳しくわからない。しかしこれまでの研究では、小出氏と小島氏ばかりが注目され、随同行した家臣へは目を向けられていなかった。少なからず家臣も周辺に居住していたことが想定される。

A群、B群のなかで最も高所にあり方形を呈したB群の遺構が、先行研究が指摘するように小出氏の仮館にふさわしいと考える。またB群と近接した時期と考えたA群曲輪Ⅱ、Ⅲは小出氏の家臣の住まいと想定したい。しかし城館の構造（縄張り）からは、両者を一体の城館と見た場合、曲輪Ⅱ、Ⅲは曲輪Ⅰに付随する「下位」に位置づけられる構造

となる。しかしこのような特殊な事情の中では、曲輪相互の求心性や優位性の問題よりも、現場での可能な実態に合わせたとみるべきであろう。

つまり既存の小島氏の居館である A 群曲輪 I に隣接する形で小出家臣の居住区域、曲輪 II、III が造成され、見下ろす高台に小出氏の仮館が築かれたと考えたい。

### 小島越前守の墓について

穴人には小島氏の墓所が二か所確認できるが、遺構 B 群の南側に方形で中央が丸く盛り上がる遺構がある（第 6 図）。ここは「エチゼンバカ」と通称される場所である。「エチゼン」とは戦国期に明智光秀の家臣として活躍した小島越前守のことを指すと考えられる。<sup>47</sup>『略史前禄草案』<sup>48</sup>にも、「小島家伝云 其先ハ羽州人寛治年中移丹波 是乃子孫当国ニ住ス 穴人村西山村等累代之領地也ト云々 太郎兵衛寛永三年被 召出弍百五十石被下候也 小島越前守某古墟今猶残礎等有之」と記されている。また『小林久兵衛日記』<sup>49</sup>には寛政 6 年（1794）に「下役政七事小島越前守殿之墓印之枯木を伐候ニ付太郎兵衛様より村方江被仰付村を立退申候 火打谷八兵衛も御領分住居不相成厳敷申付候ニ付閏十一月廿一日村を立退」と記されており、寛政 6 年段階では小島越前守を祖先として敬っていており、管理された状態であったと見受けられる。この「エチゼンバカ」がいつ整備されたかは不明であるが、寛永 3 年（1626）に小島太郎兵衛は家臣として召し出されているので、その後に整備されたものかもしれない。なお「エチゼンバカ」の周囲には堀状にくぼんだ所などがあることから、江戸期に霊廟として整備した際の遺構かもしれない。また「エチゼンバカ」が小島氏の館の近くではなく、小出氏の仮館と推定したところと近接する位置にあり、やや不自然にも感じられる。やはり園部陣屋構築後、小出氏の退去後に整備されたものと考えたい。

### 小結

『御家譜伝記』には本論で検討した A 群、B 群の北の台地上の小字「平」に陣屋を築く案があった。現在もなだらかな地形が残るが、普請の形跡は見られない。そのため穴人での陣屋構築は着手することなく終わったと考えたい。また園部陣屋構築までの 2 年間、B 群に小出氏が仮館を営み、中腹に既存の小島氏の館とそれに隣接して家臣団の居住地が営まれたと考えた。

穴人に残された三ヶ所の穴人城館群と園部陣屋の事例は、近世初期の城地選定と築城（陣屋構築）、それに至るまでの仮住まいの状況を推測する稀有な事例で、今後さらに城地選定候補に関する新史料の発見に期待される。

史料1 板倉勝重宛小出吉親書状

以上

尊書忝拝見仕候如御意先日者種々御懇意之段忝次第ニ奉存候我等儀但馬出石へ罷下爰元へ去二月ニ罷越候、今度拝領仕候知行所一段と能所ニ御座候間御心安可被思召候然者当地小島太郎兵衛と申者之儀被懸御目候由尊書之通得其意奉存候如何様共如存仕間敷候我等儀今程太郎兵衛所ニ罷在事ニ御座候何も近日罷登万々可得尊意候恐惶謹言

小出信濃守

九月五日

吉親（花押）

（板倉勝重）

板伊州様

御報

史料2 後藤光次宛小出吉親書状

已上

尊書忝致拝見候、如仰其已来者久々不得御意御床敷奉存候貴様御眼病いまた然と共無御座候由無御心元奉存候手前何かと不得隙御無沙汰迄迷惑仕候然者我等拝領之内完人ニ在之小島太郎兵衛儀貴様被懸御目候由御書中通得共意存候如在仕間敷候間御心安可安可被思召候伊賀殿よりも御書中之通被仰越候何も近日罷上万々可得御意候猶期後音之時候恐惶謹言

小出信濃守

九月五日

吉親（花押）

後庄右衛門尉様

御返報

史料3 『略史前禄草案』（『園部町史』史料編Ⅱ）

一同五己未年 家譜伝 但馬出石を転口丹波ニ移ル領地如元ト云々 伝云 前年元和四吉親公丹波御拝領 翌五年八月五日丹波御初入也

（後略）

一吉親公丹州江御移之以後 当分完戸村処士小島太郎兵衛宅ニ御住居元和七年園部御普請造畢ニ付御移徒 但シ御普請出入三年ニ而造畢之由 此時御普請惣奉行ハ西宗兵衛

（中略）

一園部御普請ニ付絵図ヲ以酒井讃岐守殿江諸事御相談 出石之御城ヲ御引越ニ付櫓も可被仰付思召ニ候由被 仰入候所 讃岐守殿被仰候ハ 大分之御普請被 仰付 其上式重堀ニ而堀ニ狭間モ有之候間 櫓迄ニ不及追而之儀可然旨御挨拶ニ付当分御延引被成候由右ハ 吉親公 御意之趣承知之面々申伝候也 稲本覚書

一元和年中園部御入部以後 大村且又東半田村亀山領ニ付岡部内膳正殿江御所望東加舎村ト御替地ニ相成候由

一小島家伝云 其先ハ羽州人寛治年中移丹波 是（より）子孫当国ニ住ス 完人村西山村等累代之領地也ト云々 太郎兵衛寛永三年被 召出式百五十石被下候也 小島越前守某古墟今猶残礎等有之

#### 史料4 『略史前録草案』（『園部町史』史料編Ⅱ）

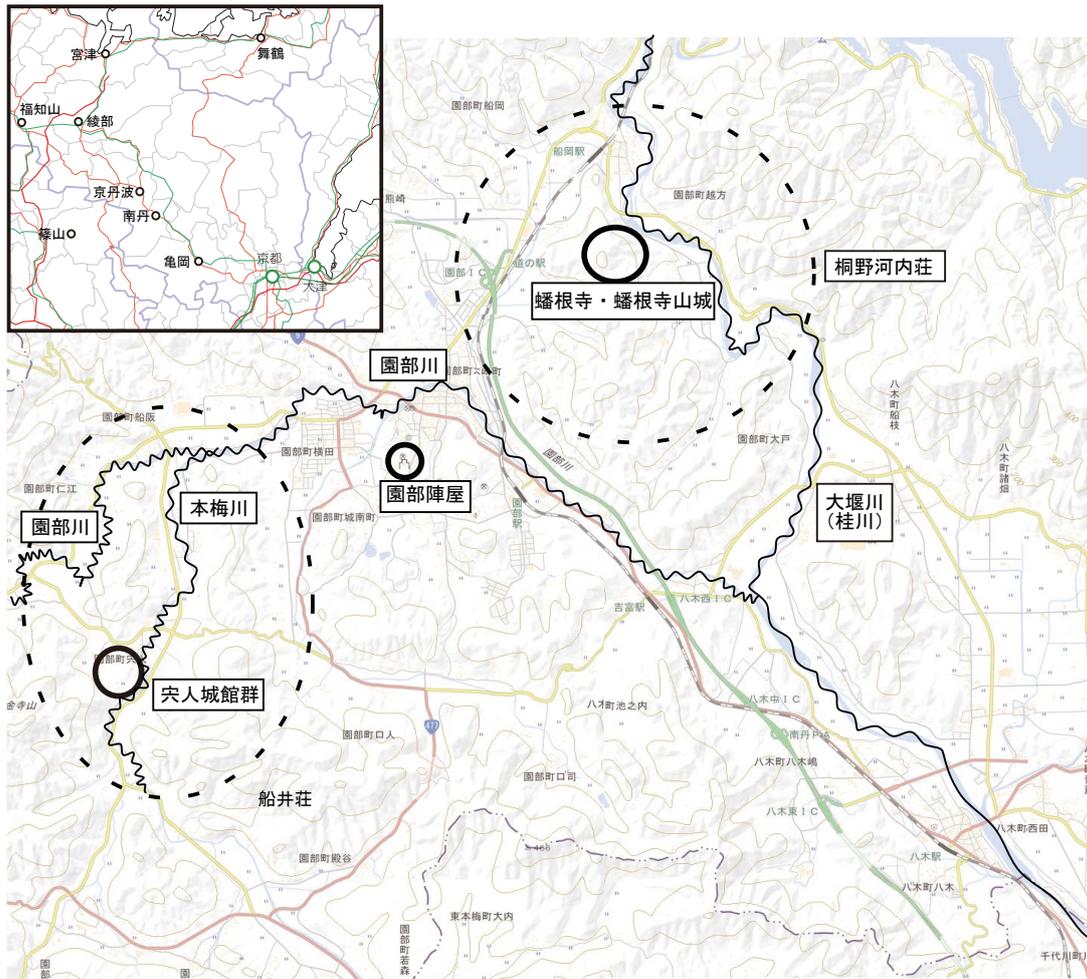
小川権左衛門初名久助吉親公御少身之節ヲ相勤其後御家老五百石被下候由且又友松兵部御家老之由此両家断絶

宣光伝承ニ付記ス

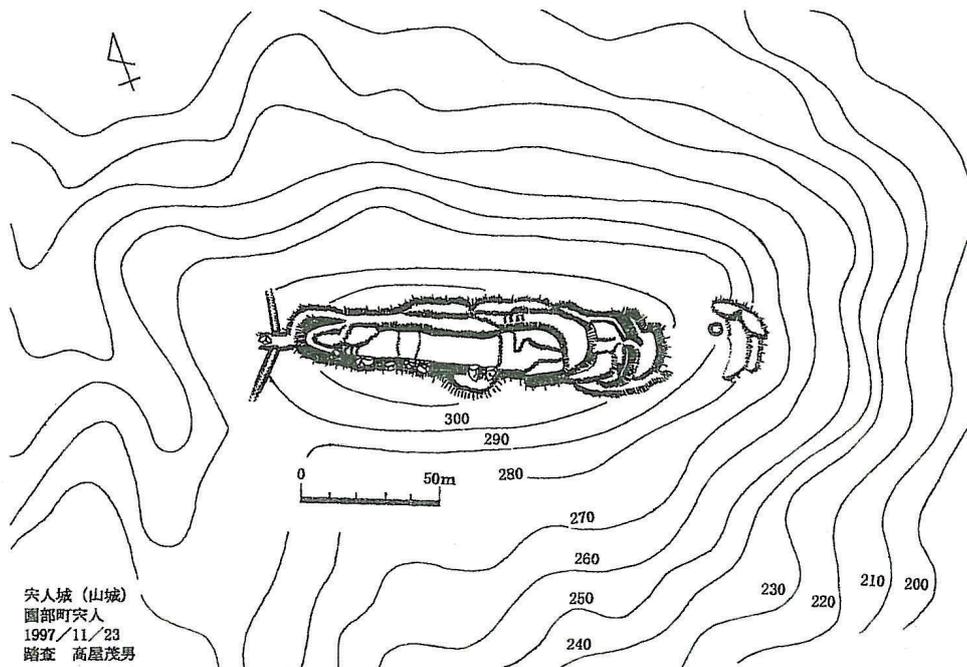
此兵部ハ吉親公園部ヲ御引移御普請出来迄完人村小島氏ニ被成御座候節東半田村塩田方ニ寄在之候由ニ而自今右之増田分ニ兵部屋敷とて其処残り在之其辺ニ井戸有之是も兵部井戸と申伝ふといふ右半田村ハ井水払底ニ付夏目旱魃ニハ及難渋ニ付後世之憂を深んとて水脈を考被為掘候処至極之水勢ニ而出候事如泉今以一村挙而感賞之云々

#### 史料5 『小林久兵衛日記』（『園部町史』史料編Ⅳ）

下役政七事小島越前守殿之墓印之枯木を伐候ニ付太郎兵衛様より村方江被仰付村を立退申候 火打谷八兵衛（より）も御領分住居不相成巖敷申付候ニ付閏十一月廿一日村を立退



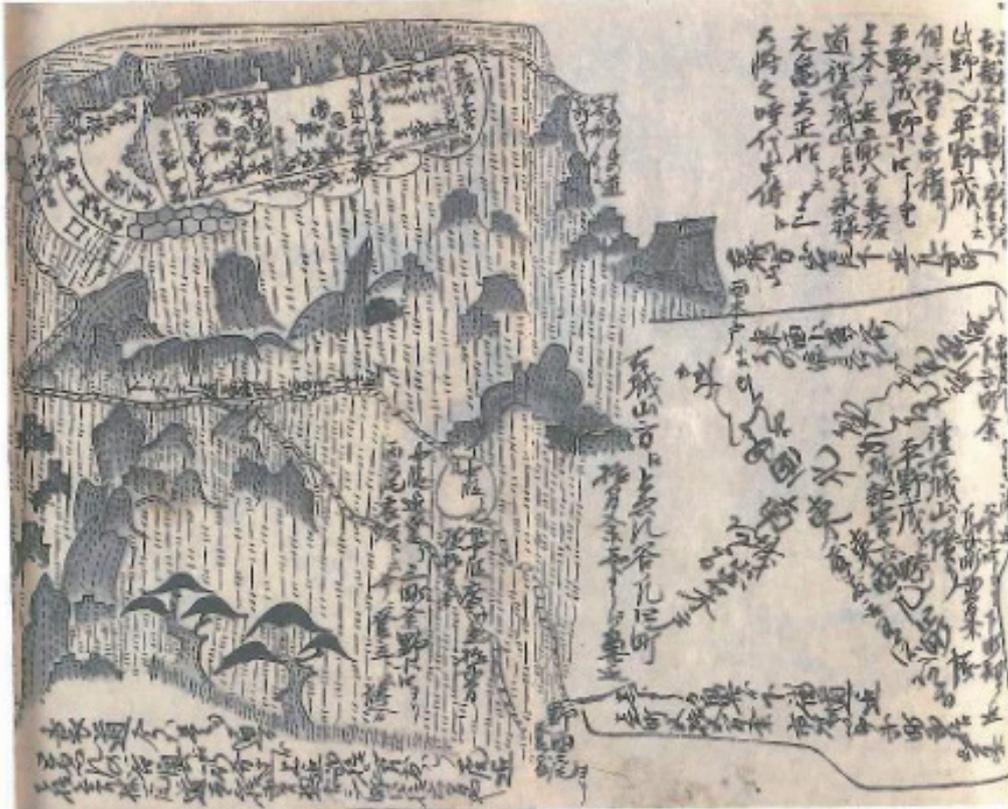
第4図 南丹市園部町関連地図



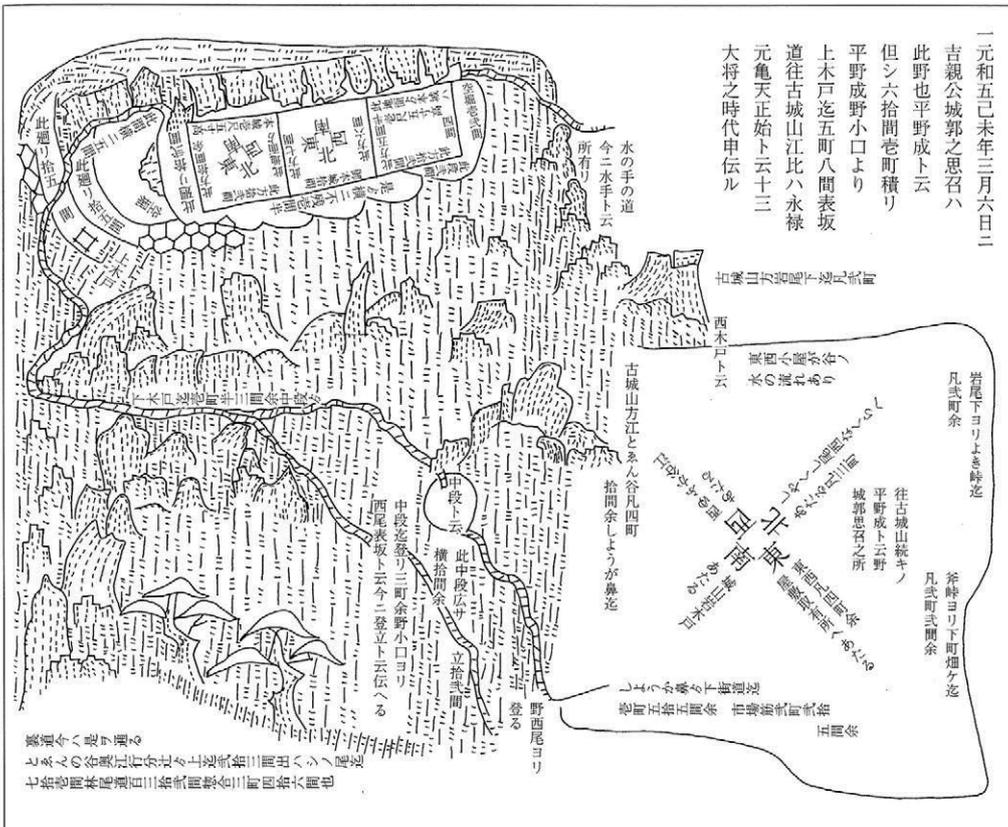
第5図 穴人城館群 (C群) 縄張り図



第6図 穴人城館群 (A群・B群) 縄張り図



第7図 『御家譜伝記』掲載城館図（園部文化博物館 2001aより転載）



第8図 『御家譜伝記』掲載城館図トレース図（園部文化博物館 2001aより転載）



A 群 I 北側堀切



A 群 I 檜台状遺構



A 群 I a 箇所



A 群 I b 箇所



A 群 II・Ⅲ間の土塁



A 群 II 西側土塁



B 群 東側虎口



B 群 南側土塁屈曲部

### 第3節 中世における園部周辺諸村

#### 園部陣屋・町成立前の園部村周辺

園部陣屋は二重の堀に囲まれており、陣屋としては規模の大きいものである。この陣屋の北側に町が広がっており、宮町・上本町・本町・若松町（裏町）・新町がある。本町と新町の境には枡形があり、元々はここが町への入口であったものが、町が東へ広がり新町が成立したと考えられる。上本町から新町までは山陰街道筋にあたり、これへ宮町が陣屋と街道とを結ぶ道筋に存在する<sup>50</sup>。町の整備にあたり、園部川を北側へ大きく付け替えたと言われ、本来は現在の国道9号線のあたりを流れていたと言われる。現在でもその場所は用水路として名残を残している<sup>51</sup>。

中世の園部村の様相については断片的にしか分からないのが現状である。現在園部町美園町にある生身天満宮は元々陣屋の郭内にあり、「略史前録草案」によると、慶安2年に現地に移し仮社殿を建て、承応2年に社殿を新しくしたとする。また陣屋町のうちの<sup>52</sup>一つ、宮町はこの天満宮に付属するもので、旧称に従って宮町と号すと記している。

生身天満宮には、室町時代末期のものと考えられる木造狛犬や、天神座像などが伝来しており、それなりの規模を持っていたと推測され、また永正13年「細川高国禁制」、天正3年「某久左衛門尉禁制」の2面の木製禁制札も残っている<sup>53</sup>。また普齋寺（園部町若森）鰐口銘には「大工園部村五郎兵衛宗次」の名も見える<sup>54</sup>。いずれも市・町の存在を垣間見るまでには至らない。

そこで少し園部村に関する史料をみると、慶長5年（1600）の「天満宮廻神事引付」によると、竹内氏、中原氏、大東氏、下司、頭屋から御幣をそれぞれ1本ずつ出して神事を行っている。また元和2年（1616）の「園部村大村山領定状」によると、園部村・大村の両村の山領争いに園部村の代官、村上三右衛門と、大村の給人である岡部内膳が奉行として入り、周辺の有力者が仲裁に入っている。その際の成敗を「そのべ川原」にて行っている。「そのべ川原」は宮町の北側に接するように流れる園部川の部分と推測される<sup>55</sup>。

この他、園部村に近接する木崎は京より丹波・丹後方面へ至る街道において重要な位置であつたらしく（第9図）、観応2年（1351）正月22日付の石塔頼房書状によると、斯波高経・千葉氏胤は・高師直が北国へ逃れようとするのを聞き近江坂本に向い、山名時氏・石塔頼房は丹波木崎へ赴いている。木崎が中継点となっていることを考えると、宿の存在も想定できるかもしれない<sup>56</sup>。また天文2年と推定される「細川晴国感状写」によると木崎において合戦が行われたのがうかがえる<sup>57</sup>。

#### 船井荘内における町

船井荘は室町時代、北野社の荘園としてよく知られる。荘域は史料上、「船井荘十一村」として、黒田・宋人・新江・船坂・大・横田・八田・岐幡・三戸・興田・熊崎が知られ、

現在の南丹市園部町の西部と京丹波町の一部にまたがる<sup>58</sup>（第10図）。このうち大・八田・岐幡・三戸・興田以外は、園部町内の字名として残る。大は現在の城南町、三戸は京丹波町水戸である。その他、興田（こうだ）は園部町口人のうち、岐幡（きはた）は仁江の小字に木畑、八田は園部町内に南八田があるが、船井荘内の摩気神社の祭神に京丹波町北八田が含まれることから、この方が妥当と考えられる<sup>59</sup>。

この船井荘の中で、真言宗御室派の九品寺がある船阪から、船井荘代官であった小島氏がいた宍人の本梅川西岸が中心的位置として注目される。

真言宗御室派九品寺は、現在は荒廃しているが重要文化財 九品寺楼門（大門）が残り、七堂伽藍を備えた寺院であったという。九品寺の境内やその門前の研究は未だ見ないが、地名などでは市・町に関するものは見えない。

船阪・宍人はともに本梅川西岸に位置するが、この地域が船井荘の中で中心的な地域であったことを伺わせる資料として大量出土銭がある（第11図）。

1つは船阪出土銭で、九品寺の門前より北へ約250mの地点で、下水道工事の際に見つかったもので、銭名を判読したのは全体の2割程度であるため、最新銭が下る可能性はあるが、概ね南北朝期あたりと考えられる。また九品寺より南へ約500mの地点では、大西出土銭が見ついている。こちらは発見後すぐに散逸しており詳細は不明だが、一部残存しており、開元通宝から永楽通宝が認められるため、室町後期に埋蔵された可能性が考えられる。このような大量出土銭は、丹波の事例では河川流域に多く認められるが、特にこの両者は同じ本梅川西岸に近接して存在し、埋蔵時期に開きが想定されるものの、この地域の経済活動に示唆を与えてくれる<sup>60</sup>。

船井荘の代官として、「北野社家日記」を中心に小島氏の名が散見される。この小島氏が城主と伝える城が、宍人地区に存在する。城は山城と館とに分かれている。またそれに近接して「市場」が存在する。しかしながらこの「市場」が中世以来のものか、近世以後のものかは現段階では特定しがたい。

小島氏の館に近接して、近世初頭に小出氏が入部した際に仮館を構えたと考えられる遺構が残っている<sup>61</sup>。

小島氏もこのような地域環境の中で、宍人を中心に地盤を固めていったものとも考えられる。小出氏は入部当初、宍人の小島氏の館（宍人城・館）に隣接して仮館を構えたと見られるが、小島氏の存在と本梅川西岸における、このような経済環境も関係を想定したい。

#### 室町幕府御料所・桐野河内郷と蟠根寺門前

桐野河内郷は、現在の南丹市園部町内林・曾我谷・瓜生野・熊崎・新堂・千妻・上木崎・船岡・越方・高屋・大戸・佐切などの地域に比定されている（第12図）<sup>62</sup>。

美山町に源を発する大堰川が郷内を流れ、大堰川の水運を用いた輸送は古代から行われているが、「丹波用木注文案」によると、瓜生野村・新堂村・曾我谷村・垣内村・木<sup>63</sup>

崎村・高屋いぬい方・片山方・泉福寺・菌部村等より材木が輸送されている。室町時代には幕府の供御料所で、蝮川家文書に多数見受けられる。

桐野河内郷が史料上確認できるのは、延元元年（1336）の後醍醐天皇綸旨である。この頃には神護寺領となっていたのがうかがえるが、以後神護寺領としての徴証はみられない。室町幕府の御料所として確認できるのは、康正2年（1456）以後である<sup>64</sup>。桐野河内郷は美濃田保（亀岡市）と共に、戦国時代まで続く重要な幕府の御料所であった。また政所執事であった伊勢氏と政所代の蝮川氏が関わりを持っており、「蝮川家文書」に散見される。その中で、桐野河内の公文として登場する高屋氏と片山氏がある。両者は上河内より西を片山氏、越方村・下村を高屋氏とに分けて担当していたようである<sup>65</sup>。

この桐野河内郷内には蝮根寺とその背後の山頂に蝮根寺城（別名・蝮川城）がある（第14図）。蝮根寺は中世には現在地とは異なり、北側の谷一帯にあった。そこには平坦地がいくつも広がり坊舎も数多くあったことが推察される。「龍安十境記」によると、「殿堂」「圓通宝殿」「選佛場」「香積院」「地藏殿」「曇翁骨塔」などの建物があり、その規模の大きさが忍ばれる<sup>66</sup>。

蝮根寺の門前には園部町高屋地区が広がる。ここは高屋氏や片山氏が屋敷を構え、周辺には寺社関係の地名が多数みられる（第13図）。同じ高屋地区に禅福寺があるが、高屋地区を上下で分けると上村に蝮根寺、下村に禅福寺が存在することになる。この禅福寺周辺にも、大門、両念などの地名が残る。また片山氏の屋敷の付近には「土井ノ内」の地名がみられ城館関係地名として注目される。

高屋地区は山麓に南北に細く広がる集落だが、その北端、南端の境界にほど近い場所に両公文が屋敷を構え、それぞれ規模は違えど、寺院、城郭が付随する<sup>67</sup>。

天正11年（1583）10月6日付「松下之綱丹波国船井郡知行目録」<sup>68</sup>によると、八木・園部・日吉の大堰川筋の村々が見え、松下之綱が丹波から京・大坂への材木輸送に関わっていたことが推測される。この事実は『駒井日記』文禄3年4月14日条においても見える<sup>69</sup>。慶長11年（1606）に角倉了以が保津峡を開削し、大堰川水運は盛んになり、近世以後は園部町船岡（近代以前の上河内）に市場や宿ができ発展する<sup>70</sup>。

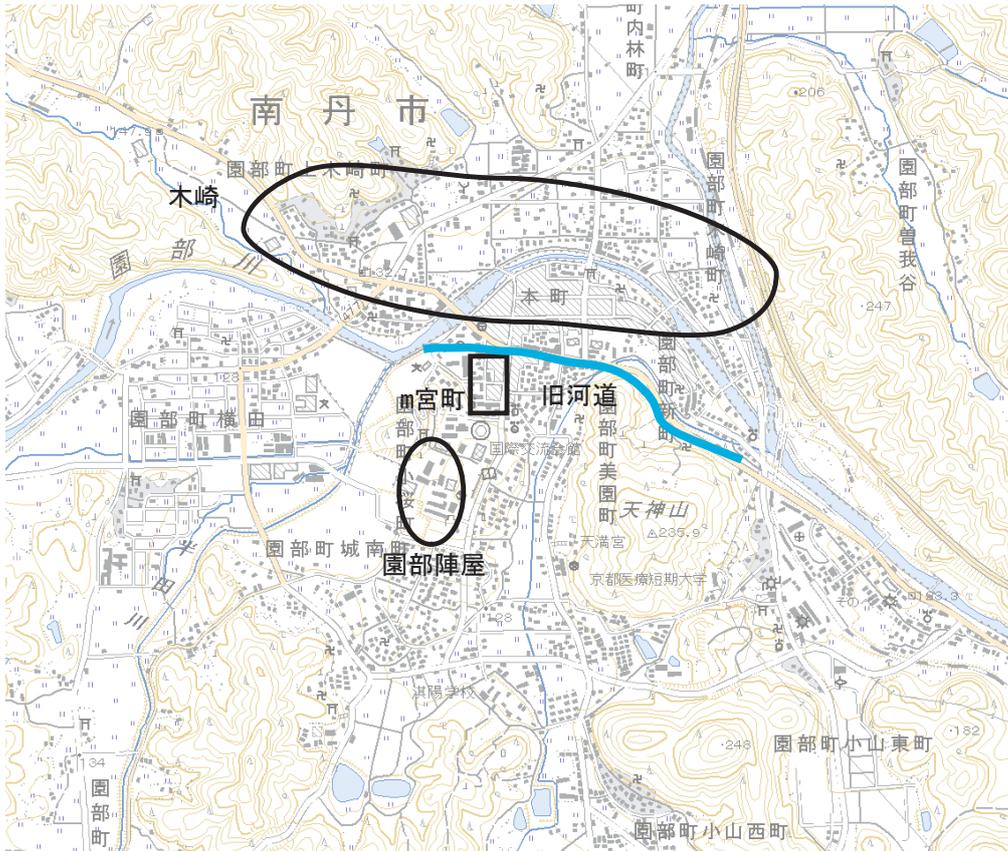
蝮根寺の門前を含む高屋地区の具体的な様相について、従来の研究では明らかとなっていない。しかし桐野河内の中心的位置を占めることは疑いない。天文14年（1545）7月24日付「細川晴元禁制案」<sup>71</sup>によると、細川晴元は丹波への軍事行動に際して、幕府料所桐野河内・美濃田保（亀岡市）に対する軍勢らの違乱を停止する禁制を下している。

## 小結

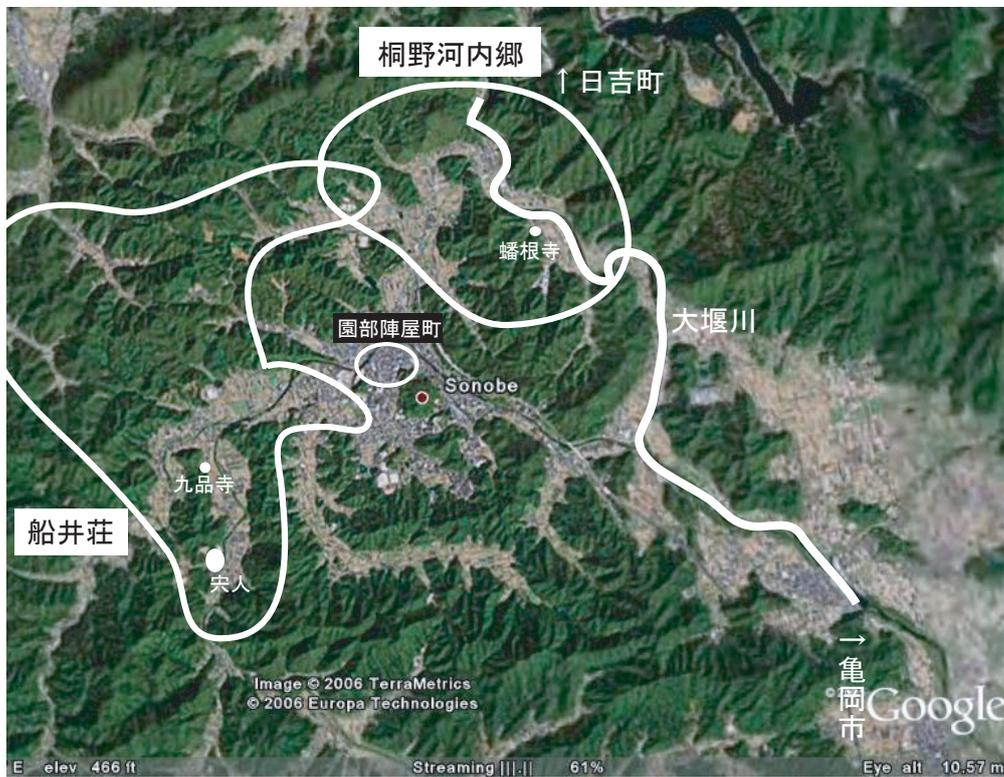
いずれの事例も断片的で、なおかつ調査不足の感が否めないが、小出氏は当初、船井荘の中心的位置を占めた穴人周辺に陣屋を置くことも想定したが、近世に発展する水運を考慮して、水深が確保できる下流の園部川に存在する中世菌部村・木崎近辺に陣屋を置いたと考えられる。

古山陰道方面には普齋寺があり、付近には門前町などの地名も存在し、街道沿いには園部町埴生など、近世に宿場町として発展する地区もある。しかし普齋寺の鰐口が菌部村の大工が製作していることを考慮すると、中世段階での菌部村の優位をくみ取ることも出来る。

園部陣屋は中世段階における菌部村天満宮に付随する門前町や、それに近接する宿的要素を備えた木崎などを下地として、周辺の小規模商業地区を包摂し、近世山陰道を町へ引き込むことで成立したと考えたい。



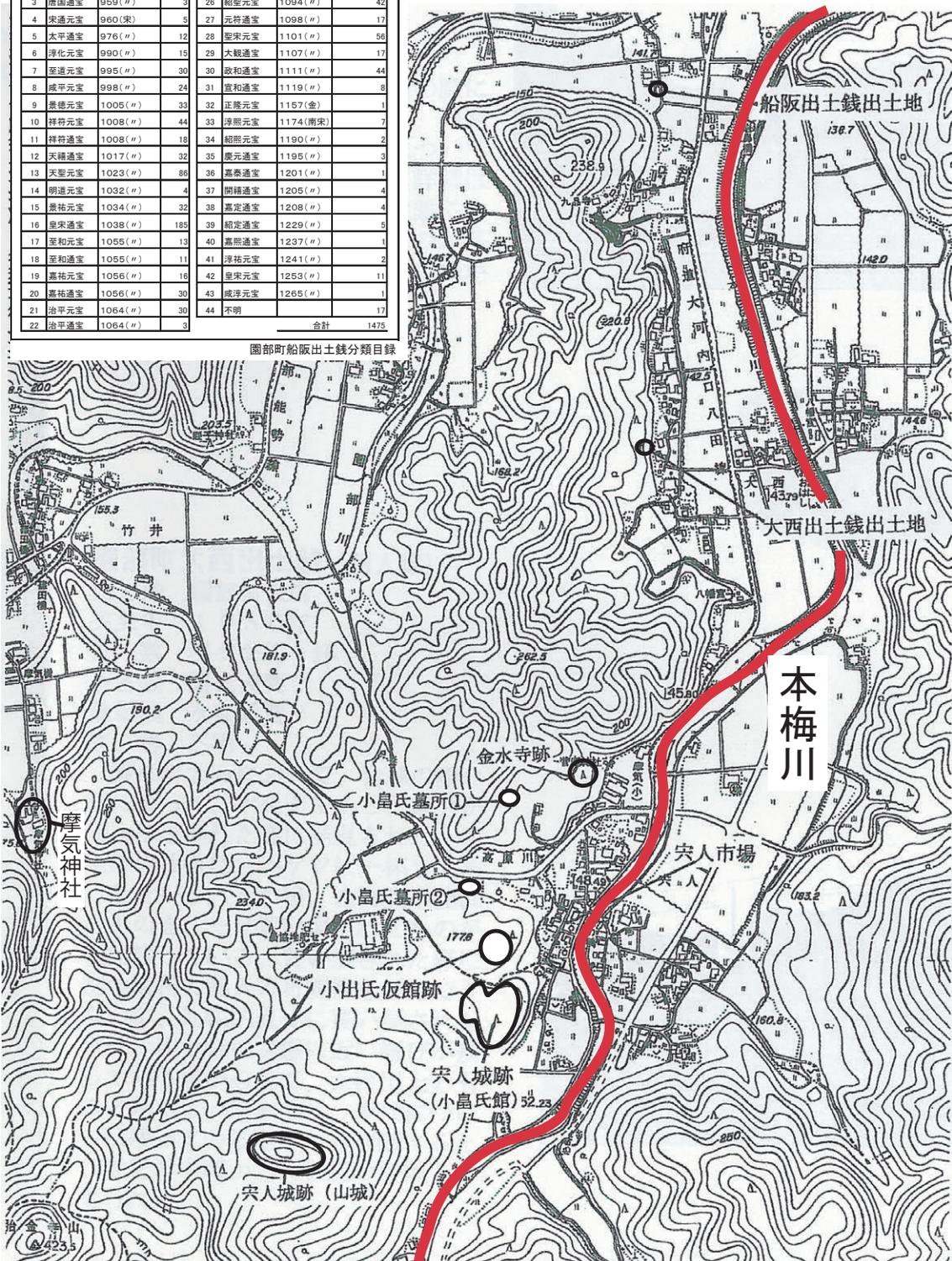
第9図 宮町・木崎位置図



第10図 莊園位置図

銭名	初铸年	枚数	23	1068(元)	119
1 開元通宝	621(唐)	160	24 元豐通宝	1078(元)	174
2 けん元康宝	759(元)	9	25 元祐通宝	1086(元)	144
3 唐国通宝	959(元)	3	26 紹聖元宝	1094(元)	42
4 宋通元宝	960(宋)	5	27 元符通宝	1098(元)	17
5 太平通宝	976(元)	12	28 聖宋元宝	1101(元)	56
6 淳化元宝	990(元)	15	29 大觀通宝	1107(元)	17
7 至道元宝	995(元)	30	30 政和通宝	1111(元)	44
8 咸平元宝	998(元)	24	31 宣和通宝	1119(元)	8
9 景德元宝	1005(元)	33	32 正徳元宝	1157(金)	1
10 祥符元宝	1008(元)	44	33 淳熙元宝	1174(南宋)	7
11 祥符通宝	1008(元)	18	34 紹熙元宝	1190(元)	2
12 天禧通宝	1017(元)	32	35 慶元通宝	1195(元)	3
13 天聖元宝	1023(元)	86	36 嘉泰通宝	1201(元)	1
14 明道元宝	1032(元)	4	37 開禧通宝	1205(元)	4
15 景祐元宝	1034(元)	32	38 嘉泰通宝	1208(元)	4
16 皇宋通宝	1038(元)	185	39 紹定通宝	1229(元)	5
17 至和通宝	1055(元)	13	40 嘉熙通宝	1237(元)	1
18 至和通宝	1055(元)	11	41 淳祐元宝	1241(元)	2
19 嘉祐元宝	1056(元)	16	42 皇宋元宝	1253(元)	11
20 嘉祐通宝	1056(元)	30	43 咸淳元宝	1265(元)	1
21 治平元宝	1064(元)	30	44 不明		17
22 治平通宝	1064(元)	3			
		合計			1475

園部町船阪出土銭分類目録



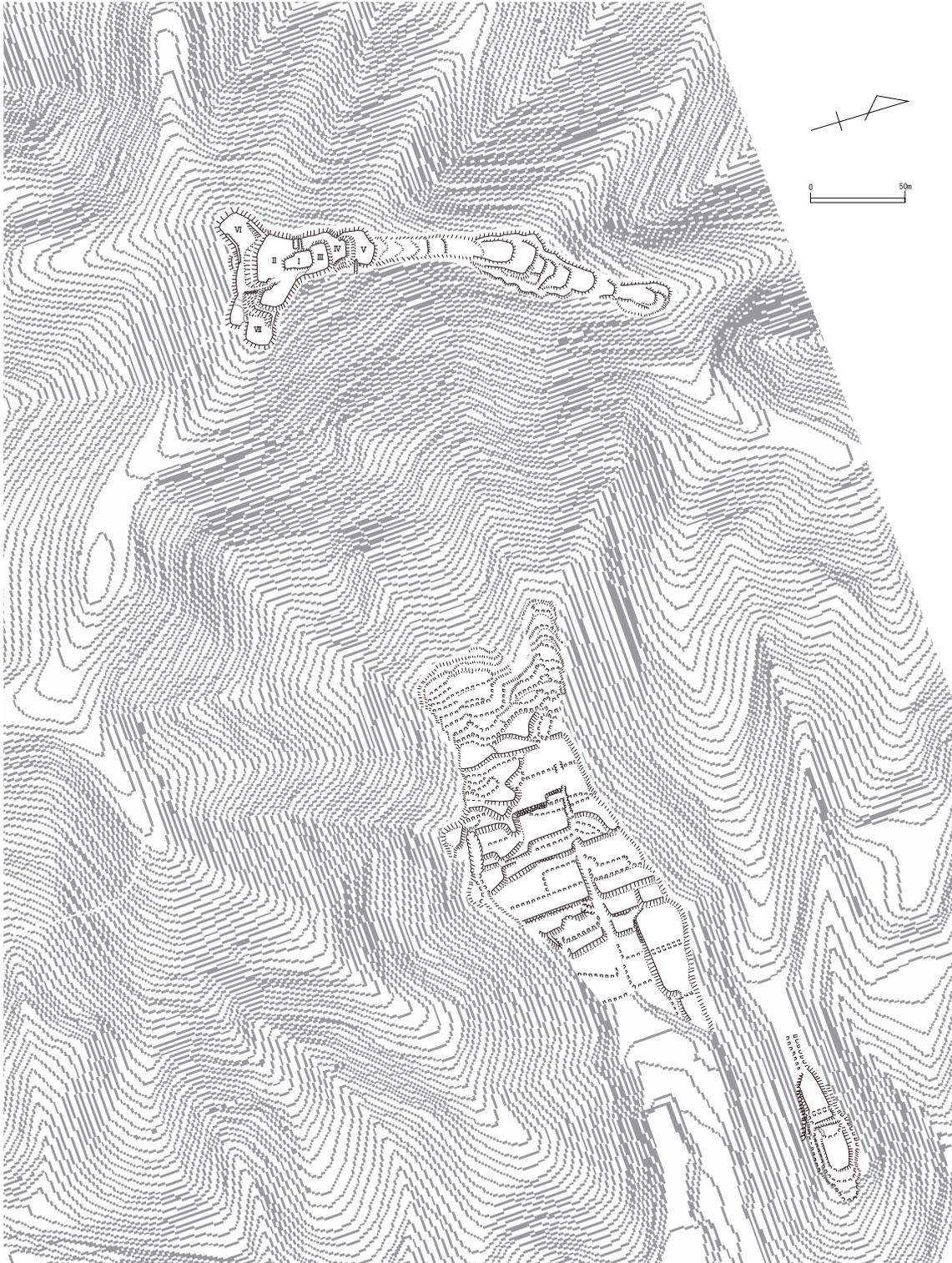
第11図 本梅川西岸関係地図



第12図 桐野河内郷関係地図



第13図 高屋地区地名図



第14図 蟠根寺城と蟠根寺縄張り図

## 第4節 園部陣屋・町の成立

### 園部陣屋の建設

元和5年に小出氏は最終的に園部に陣屋を置くことを決め、元和7年に陣屋完成後穴人より移ったという。恐らく当初は園部以外にも複数の候補をもって、幕閣と相談したと考えられるが、現在その他の候補については明らかでない。園部陣屋の成立については、福島克彦氏の検討がある<sup>72</sup>。福島は関連史料を精査し、園部陣屋構築前に小島氏居館の隣接地に仮住まいをしたが、現地に残る遺構の検討や、関連史料を精査し陣屋構築過程を明らかにしている。また陣屋町については大場修や水本邦彦の検討がある。本稿ではこれらの先行研究に導かれながら、改めて園部陣屋及び陣屋町成立について検討する。

園部陣屋構築にあたり地元の村落間で協議したことについては、『園部町史』史料編Ⅱや、福島克彦らの先学によって行われている。その中で用いられているのが下の文書である。

「城地交換証文」(『武部弘家文書』『園部町』史料編Ⅱ、1981年)

大村上野西原小麦山之西原小出信□□□御屋敷ニ被成候故、其替ニそのベノくせわら、ハなしば、大かハなの谷、北のひらのみねの平いわを境ニ仕候、尾□□をさかい右ノ替ニ請取申処正実也、若屋かた何方へ成共御引被成候て、先々のことくたかいニ替札可申候、其時以来ノ申分仕間敷候、但あれ田ノみなミのしば作道ノためニ式尺道小麦山之祢方へ道ヲ付可申候、為其二両所ノしばヲ残置申候、

元和五年	大村
霜月七日	小兵衛 (花押)
	藤右衛門 (略押)
園部村	小山村
惣百姓中	十左衛門 (花押)
参	半田村
	安右衛門尉 (花押)

この史料から園部陣屋構築にあたり、大村が「上野西原小麦山之西原」を失う代わりに、園部村から「そのベノくせわら、ハなしば、大かハなの谷、北のひらのみねの平いわ」が小山村、半田村の立会いのもと引き渡されている<sup>73</sup>。「差上ケロ上覚」<sup>74</sup>によると園部村の竹内善左衛門は天神社の宮司の立場で、その屋敷が陣屋の向かい側のあたりにあった。しかしそこは家老の大田金左衛門の屋敷となっていることがわかる。つまり園部村の土地も陣屋構築にあたり提供されたと考えられるのである。そのため園部村が大村へ土地を割譲しなければならなかったのか詳細は不明であるが、何らかの特典があったと考えられる。

### 園部川の改修伝承

地元で伝わる伝承として、小出吉親が入部当初、現在の国道9号線あたりを流れていた園部川を堤防を築き大きく北へ迂回させ、町場を拡張したという話がある<sup>75</sup>。しかし現在のところを文書でそれを具体的に記したものは確認されていない。しかし地形として、現在園部小学校がある小麦山北麓の台地は、西側斜面は東流してきた園部川の攻撃斜面となっている。またその北側の南丹警察署、園部郵便局がある土地も、上本町や本町などと比べると少し高い位置にある。警察署の西側は地元では「運上(うじょう)」と呼ばれ、絵図でも船小屋が描かれている(第18図)。

吉親が普請した堤防は号に因み「意閑堤」と呼ばれており、園部川・大堰川流域にはその堤防の痕跡を留める箇所がある。南丹市八木町大藪の堤防では昭和28年の洪水で破損した際に、堤防の赤土が小麦山のものであるとのことで、修復にも小麦山の土が使われたという<sup>76</sup>。

小出吉親入部段階の地形を推測することは難しいが、現状残された痕跡から探ると、園部川は園部小学校西側斜面でぶつかり北流する。その後、現在の流路を含めて本町や若松町あたりも河川の流路となり、河原や湿地帯であったと推察される。小麦山の台地上に陣屋の構築や、堀を掘った土を堤防として使用し、入部の早い段階で本町、若松町などを町場として整備したのであろう<sup>77</sup>。

### 園部陣屋の構造

園部陣屋の構造については中西裕樹の検討がある<sup>78</sup>。「丹波国園部絵図」(第18図・個人蔵・南丹市立文化博物館寄託)を参照すると、小向山麓に築かれ、東麓には後に触れる浄教寺や妙光寺庚申堂の前身寺院などがあつた。他にも大乘寺(園部町上木崎町)、香林寺(園部町上木崎町)もこの周辺にあつたという<sup>79</sup>。また陣屋の郭内には天満宮の古地などがあつた。陣屋が置かれたところは高台にあたり西と南側には内堀(水堀)があつた。陣屋の南と東、北側には武家屋敷が置かれ、これらと小向山を囲う形で外堀が巡らされ、陣屋でありながら、さながら城郭の構えであつた。大村側には南門があつた。大手には櫓門、その外側には釘貫門があつた。大手門と釘貫門の間は長い六十間に及ぶ空間が置かれている。外堀は釘貫門付近には掘られておらず「的場」となっている。この場所は幕末期に園部陣屋が京都守衛のため築城されるに及び、改めて堀が掘られている。そのため小出吉親の陣屋構築時には櫓などの構築以外に、この場所に堀を掘り、外堀を全周させるかどうかで、「城」と判断するかの違いがあつたのであろう。

大手門から小向山の北側へ外堀が巡るが、ここは高低差がかなりあり、水堀ではなく空堀となっていた可能性がある。特に現園部小学校があるあたりはそうであったと考えられる。

陣屋内部はL字状を呈し南側に御殿などが置かれた。北側は天満宮の古地や、藩主小

出吉親、その父吉政、祖父秀政をまつる三崇社などがあつた。絵図などではこれらの曲輪はひとつの平面として描かれるものばかりであるが、近年の発掘調査によって曲輪内に空堀が確認され、堀立柱建物、柵列などが確認されている（第15・16図）。堀はL字状の曲輪の南北を隔てる形で掘られ、主に北側からの土入れにより埋められたと考えられ、その時期は出土遺物から幕末期と考えられている。発掘調査報告書によると、北側が南側より高くその土を削って空堀を埋めたと判断し、北側を本丸的な存在、南側の御殿が置かれたところを二の丸的な存在と見ている。しかし次項で見るように、北側の部分は生身天満宮の全身の天神社があつたところであるので、曲輪内に天神社を取り込んだものと考えられる。移転の理由として、「是宮地御館の郭内要害の地と成るニよりて神霊を穢さん事憚 思召故候」と記しており、中世城郭でも見られるが城内に祀られた神社と考えられる。そのため本丸、二の丸の関係というのは言い過ぎであるにしても、平面的な一つの曲輪ではなく御殿と背後の神社のある森という二つの区域に分かれていたと判断できる。これは安政6年に制作された「園部城略図」（第19図・南丹市立文化博物館蔵）と表題のあるものにも、北側の曲輪が黒く塗られている部分があり、同様のことがいえる。

#### 園部村天満宮の移転

園部陣屋構築前には、「天神社」が存在した。現在は東方にある天神山西麓にある生身天満宮である。『略史前禄草案』<sup>80</sup>によると、陣屋構築30年後に陣屋内に残されていた天満宮を現在地へ仮遷宮し、承応2年に正遷宮を行っている。ただ元の社地を古天神、あるいは天神の森と呼び、そこには山伏が居住したという。このことから小出吉親治世に断続的に陣屋や町の整備が行われていたと推測されるのである。

元社地では幕末の嘉永6年3月に「御館内御社」の再建が行われ、祭礼が執り行われている。<sup>81</sup>これに参詣できたのは、帯刀を許された者や、村々の役人、70歳以上の老人などの人々であった。

前項で見たように発掘調査によって陣屋曲輪内にあつた南北を区画する空堀が、幕末期に北側の土入れによって埋められたことを見たが、嘉永6年に10代藩主小出英尚が「新建三崇社碑」を建造し祭典を行っている。恐らくこの時に空堀が埋められ社殿や碑が整備されたものと推定される。

#### 『略史前禄草案』

△慶安二己丑年

一小向山の麓 天神社今年台山之南東山之麓ニ遷座今の天神山是也 是宮地御館の郭内要害の地と成るニよりて 神霊を穢さん事憚 思召故候元の社地を古天神と云 此時宮地神宮寺ニ固有坊と云山伏居住すると云々

(中略)

館下宮町ハ古昔 天神宮ニ付属す炊旧称ニ随て宮町之号有之

(中略)

慎テ考慶安二年今ノ社地ニ遷座仮ノ御造営其後承応二年今ノ宮社新ニ御建立カ

『寺社類從』

○一産神天満天神宮

雖未考其勸請、而自往古鎮座於天神

之森旧矣、其森今也、有園部郭内、

承応二癸巳年有故而使安鎮之当山

### 園部陣屋町の構造

園部陣屋町は山陰道沿いにあり、河原町から小山口まで約 1.5 km の長さがあり、平入りと妻入りの家屋が混在した街並み<sup>82</sup>をしている。この園部陣屋及び城下町の絵図江戸期に描かれたものや、明治初期に描かれたと考えられるものなど多数存在する。しかしこれらの絵図が、元和 5 年の小出吉親入部直後までさかのぼれるかという疑問である。小出吉親は園部陣屋、町を整備したほか、園部川の付け替えの伝承も残る。これについては園部川堤防に吉親の号である「意閑」をつけた「意閑堤」というものが存在することからも事実と認めてよいと思われる。『略史前録草案』の吉親の時代に、今も町名として残る宮町（一部袋町）、上本町、本町、若松町（裏町）、新町、大村町など全ての町も成立していたと記されている。しかし本町と新町の境に柵形があり、さらに東の端に小山口の柵形が存在することから、新町の成立はその他の町より後出する可能性も考えられる。しかしこれまでの研究では、このことについて言及したものは皆無であるので、これについて検討することは無意味であるまい。

『略史前録草案』は園部藩士間嶋元暁によって「小出系図」「高田旧記」「稲本覚書」「瓜生伝」「御仕置方古案」「松本旧記」と古老の口伝を参考に編集されたものである。元暁は正徳元年（1711）に家督を継ぎ、享保元年（1716）に年寄役になっていることから、およそ正徳から享保年間に編纂されたものと考えられ、それを文化 2 年に家老大田宣光が借用して書写したものである。この史料の元和 3 年の項に「御館下町積并家数大略」という見出しがあり、宮町、本町、上ノ町、新町、裏町、袋町、大村町が見える。しかしこれは元和 5 年当時の姿というより、18 世紀前半に間嶋元暁が『略史前録草案』を編纂した頃と考える方が妥当であろう。

園部陣屋町は北西側から園部川を渡って上本町に入り、以後本町・新町と続く京街道沿いのヨコ町<sup>83</sup>に対して、本町の札ノ辻から陣屋へ向かう宮町というタテ町を形成している。山陰道沿いには 3ヶ所の柵形が設けられている。北の木崎口と南の小山口、そして本町柵形である。新町の範囲は小山口から本町柵形までであるので、柵形に挟まれた範囲が新町と言える。町名が示すように新町は既存の町より後からできた新しい町と考え

られる。つまり当初は本町柵形より北側の範囲が当初の町の範囲だったと推察される。

### 寺社創建・移転伝承からの検討

参考に陣屋周辺に置かれた寺社の開創年や移転年を『寺社類従』<sup>84</sup>をもとに確認してみると、寺院は教伝寺・宝福寺・浄教寺・妙光寺が陣屋町に存在する（第17図・20図）。

教伝寺と宝福寺は元和5・6年に開創され、小出氏入部とほぼ同時に開創されている。やや遅れて浄教寺が宮町（袋町）から遷され、妙光寺も新町へ移転し正徳2年に宮町の庚申堂が合祀されている。それぞれの位置を確認すると教伝寺は宮町と本町が交わるあたり、「札ノ辻」と呼ばれる交差点少し東側で、陣屋町の中心的な場所にあり重要な位置を占めている。また「園部町大村町帳」<sup>85</sup>によると、宝永2年に「広小路」が教伝寺道と屋敷になったとしている。このことから宝永2年以前には教伝寺の京街道側には「広小路」と呼ばれる空間が存在していたことがうかがえる。教伝寺の本尊は高さ30センチほどの阿弥陀如来像で、護持佛として城内にまつられていたと伝わり、園部唯一の浄土宗寺院である。

続いて札ノ辻をさらに北へ進むと園部川に至るが、その手前に宝福寺がある。宮町から続くタテ町の構造が、札の辻周囲では京街道に沿ってヨコ町となっているが、宝福寺の周囲の地割の一部は宮町同様タテ町となっている。

浄教寺は新町と本町を区切る柵形近くにある。宝福寺と浄教寺は裏町を東西方向に通る道に両側に対になるように配置されている。これらに対して妙光寺だけは柵形や交差点付近ではなく新町の通り沿いにある。

つまり教伝寺と宝福寺は小出氏入部直後に開創されており、陣屋の釘貫門（北門）から山陰道との交差点である札ノ辻を抜けて園部川に至る直線の通りが、小出氏入部当初に元々あった天満宮の門前町を軸として整備されたのであろう。当初は宝福寺北側の園部河原へ出る道が重要視された可能性がある。宝福寺周囲に一部残るタテ町の構造はその名残であろう。後に京街道沿いにヨコ町が展開し、釘貫門から宝福寺へ続いていたタテ町構造が分断されたと推定できる。

当時宮町周辺には妙光寺に後に移される庚申堂や天満宮、浄教寺などがあり、さらに園部町上木崎町にある大乘寺、香林寺もこの周辺にあったと寺伝で伝える<sup>86</sup>。これら宮町周辺にあった寺社は慶安から承応にかけて整理されていく。慶安3年に浄教寺が本町の最も東に置かれ、付近に柵形が設置されていることから、柵形の設置も近い時期と判断したい。新町の妙光寺はもともと園部町天引にあったものが慶安2年に移され、後には宮町の庚申堂が境内に祀られている。しかしその他の寺院と異なり、妙光寺は柵形や辻に隣接していない。そのため当初は新町の端に位置したものが後に新町の拡大に伴い内包されたのではなかろうか。新町の成立の時期を考えるにあたり、『略史前禄草案』に載せる「鐘衝ニ遣候米之覚」を検討する。これは寛文5年（1665）に、城下に時刻を知らせるため南陽寺に置かれた鐘衝堂にかかる費用を出させるものである。この中で

本町、上之町、宮町、袋町、裏町、新町、大村町が見え既に新町が成立しているのうかがえる。また本町枡形の新町側に本陣が置かれている。本陣の屋号は新屋（あたらしや）で「園部町大村町帳」に見える。「園部町大村町帳」は、元禄13年（1700）から宝永5年（1708）にかけての町名主や街並みの道幅や間口を記したもので、これ以降も張り紙をつけながら使用されたものであるが、この中で付箋が張り付けられていない部分で、「北側枡形方東江 一同式間半八寸 寛文八年戊申年八月 同 新屋 弥平衛」と見える。本陣としての記載はないが、枡形の外側にあり新町の成立をこれより前に推定できる。「園部町大村町帳」の表紙には元禄13年と記されていることや、惣家数の記載として「惣家数四百五拾四軒半」と記し、貼紙で「寛文改 四百拾軒 元禄改 四百五拾四軒半 明和改 四百八拾六軒半」とあることから、寛文年間までには新町が成立していることをうかがわせる。

さらに陣屋町から園部川を渡り西へ進むと河原町がある。街道沿いに町屋が並び最も西には大樹観音堂と呼ばれる仏堂がある。ここで道は二手に分かれ、道標が存在する。これには「左 はりま ささやま」「右 たんご たじま」と記されており、山陰道と篠山街道の分岐点となっている。この観音堂は園部藩4代藩主小出英貞（天和4年2月16日（1684）～延享元年（1744年））が、徳川家康の孫で伊予西条藩主松平頼純の娘を迎えた際に、その稔侍仏を本尊として祀ったものという。鰯口には「寛延四年未九月吉日木崎村観音堂」の銘<sup>87</sup>があり、屋根瓦には「寛延4年八月の上旬畑清太郎作」とある。また教伝寺で所蔵される狩野派の絵馬6面も寛延4年（1751）9月の銘<sup>88</sup>があり、元はこの観音堂に掲げられたものであるため、18世紀前半までに河原町まで町が広がっていたと推測できる。ちなみに『寺社類従』の成立年である元文5年（1740）には、まだ観音堂は登場せず、「川原町」に「大木下蛭子社」が見える。この蛭子社は現在存在しないが、この地に観音堂が創建された可能性がある。

## 小結

これまで園部陣屋町は『略史前録草案』などの記載をもとに、園部陣屋町は小出吉親の頃に整備されたと単純に語られることが多かったが、詳細に検討するとその中でもいくつかの発展過程を見出すことができる。園部陣屋町の景観について記したものに、元禄2年（1689）に出版された貝原益軒の紀行文「西北紀行」（『諸州巡覧記』<sup>89</sup>）がある。ここでは「町長く民屋良からず」と記されている。つまり貝原益軒の目線では17世紀後半の園部陣屋町は見劣りする様子だったことが分かる。このことも踏まえながら、先に検討した内容を改めて整理し、園部陣屋町の発展過程を以下のように推定したい。

第1期陣屋町成立期（元和5年（1619）の小出氏入部初期）

小出吉親入部初期にあたり釘貫門周辺から宝福寺までの通りで、天満宮の門前町を中心とした町。

第2期 陣屋町整理期(慶安(1648年から1652年)～承応(1652年から1655年)  
浄教寺、妙光寺や境内の庚申堂が新町に移転し、生身天満宮が陣屋の郭内から現在地へ移転する時期。すでに第1期から始まっていたであろうが、京街道沿いにヨコ町が整備され宮町、本町、上ノ町(上本町)、新町、裏町、大村町の6町の成立が確認できる時期。

第3期 陣屋町拡大期(17世紀後半～18世紀前半)

宝永2年(1705)には本町の広小路が教伝寺道及び屋敷地となっており、町屋が増えている状況が看取できる。正徳2年(1712)に宮町の庚申堂が新町妙光寺へ移される。寛延4年(1751)には河原町大樹観音堂が建立されている。また寺伝によると園部町上木崎にある大乘寺、香林寺も元は宮町にあったと伝え、その移動時期は確認できないが、第2期から3期にかけてのものと判断される。

第1期と2期は初代小出吉親の治世下にあたり、吉親段階で陣屋町の基本構造が出来上がっていたことが確かめられる。園部川に係る大橋の架橋年や意閑堤などの成立年は全く不明であるものの、恐らく6町が成立する第2期に至る過程で京街道の整備が行われたのであろう。さらに第3期において町屋の数が増加し、河原町などへも広がりを見せるようになる。

## おわりに

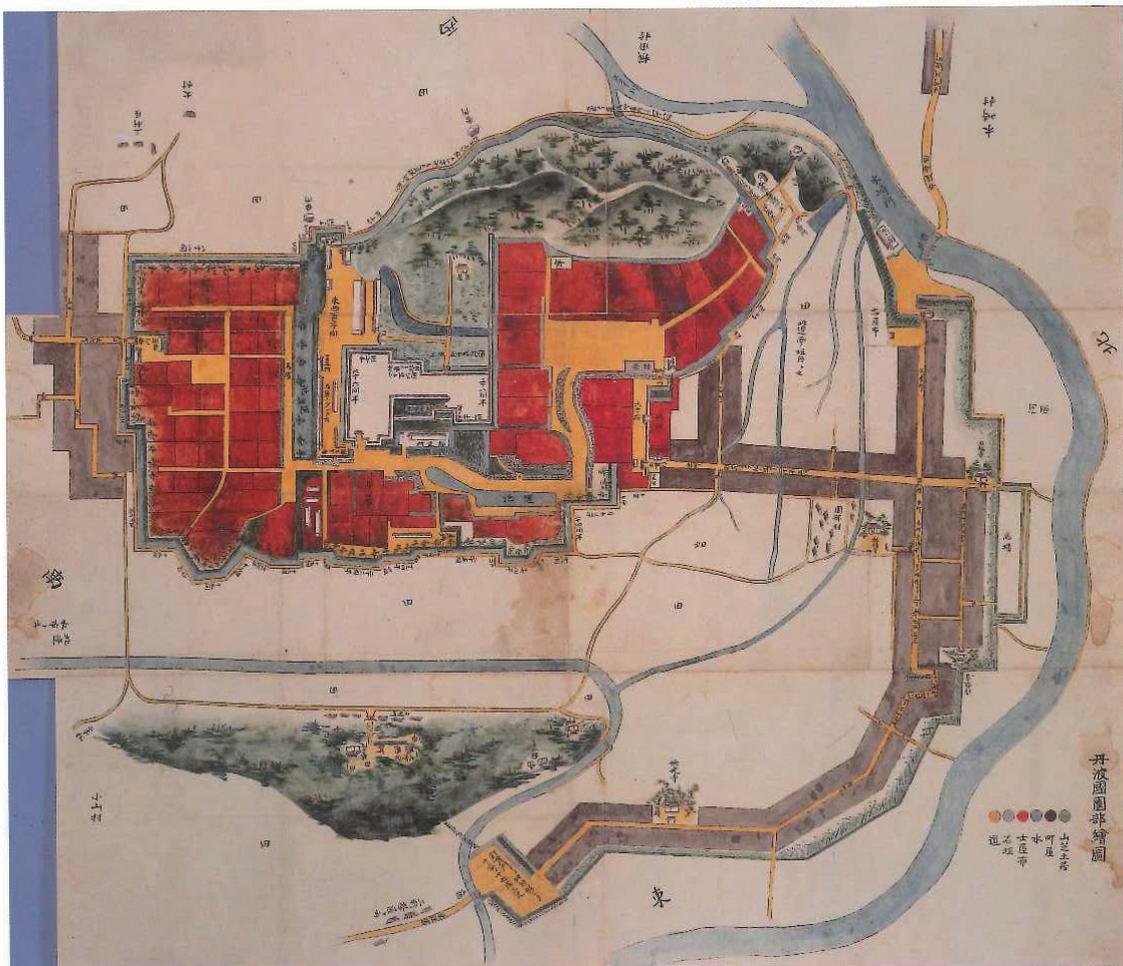
小出吉親は当初幕閣との相談上、一旦宍人の小島氏を頼って陣屋構築の構想を計画したが、水運などの交通の利便性なども考慮して下流へ改めて候補地を検討したものと見られる。その上で候補となる当地における経済、交通上の重要地点として、大堰川に面した桐野河内、天満宮の門前町的景観であった園部村などについて本章で検討した。陣屋構築にあつては地元調整の上決定されたが、園部川の付け替えを行った上で陣屋町を整備した。その成立過程について第1期から3期までを推定したが、このように水運などと密接に結び付け陣屋と町を整備できる場所として園部が選ばれた。陣屋構築にあつては旧来の城郭を利用する場合もあるが、園部の場合はそれにとらわれず新規に構築したと考えられる。最後に桐野河内にあった蟠根寺城(蜷川城)に関する伝承を紹介し、園部陣屋の選地について検討する参考としたい。

蟠根寺城については本章第2節でも検討したが、地元では江戸時代に入っても城が残っており、寛永13年(1636)に取り壊されたという伝承が残されている<sup>90</sup>。城を取り壊すことは破城と呼ばれるが、元和一国一城令後に全国的に行われるが、当初徹底したものではなく寛永期やそれ以降にも行われていることが明らかとなっている<sup>91</sup>。天草・島原の乱を経て改めて破城される事例も散見される。天草・島原の乱は寛永14年～15年であるため、蟠根寺城の伝承も多少年号が間違っている可能性もあるが、このような緊迫状況の中で破却された可能性も考えられよう。この蟠根寺城は園部陣屋とは指呼の距離にあり、改めて破城されたとも考えられる。

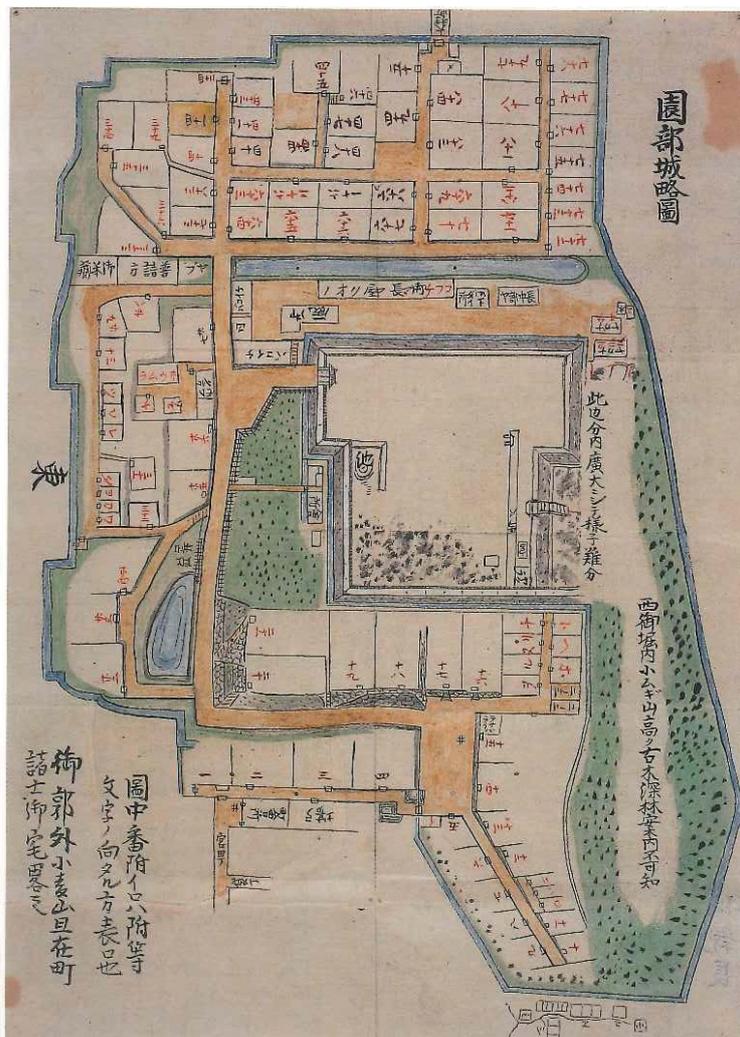


寺院名	開創年、移転年	宗派	備考
教伝寺	元和5年(1619)	浄土宗	本堂、庫裡、廊下、観音堂、元和5年建立
宝福寺	元和6年(1620)	浄土真宗(東本願寺)	
妙光寺	寛永3年(1626)・慶安2年(1652)に新町へ移る	日蓮宗	元は南丹市園部町天引にあり、庚申堂は袋町にあり山伏千手院が守り後に新町に移り山伏千住院が守っていたのを、正徳2年に寺内に安置し、山伏宝積院が守った。
浄教寺	寛永5年(1628)・慶安3年(1653)に新町へ移る	浄土真宗(西本願寺)	元は宮町にあり、慶安3年に寺地を賜る
南陽寺	不明	曹洞宗	稻荷宮 元和7年建立、元は小山西町にあった
天満宮	慶安2年(仮)(1652年) 承応2年(正)(1654年)		園部陣屋内に元は所在

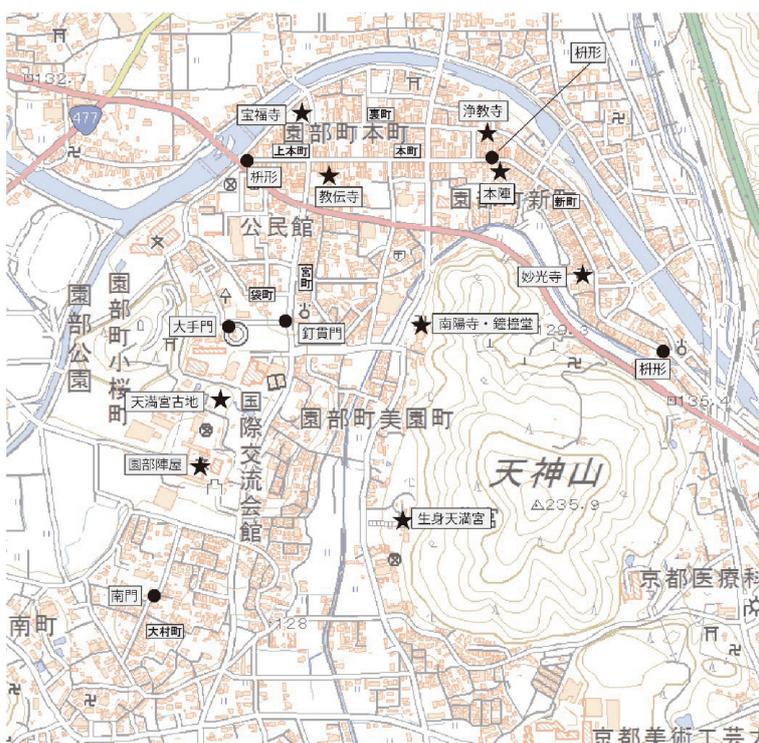
第17図 園部陣屋町における寺院創建年代図



第18図 丹波園部繪圖 (井戸田家文書・南丹市立文化博物館 2008より転載)



第19図 園部城略図（南丹市立文化博物館 2008より転載）



第20図 園部陣屋町内寺院位置図

- 1 丹波では亀山藩、綾部藩、福知山藩、篠山藩に加え、山家藩、柏原藩など数多くの藩に分かれていたため、数多くの城、陣屋が存在する。
- 2 織豊系城郭、織豊期城郭に関する研究は多数あり、ここで詳細に触れることはできないが、丹波に関する城郭研究では若江茂氏の長年にわたる現地調査の成果があり、その成果は『丹波』や私家版の『口丹波城郭総覧』などで公表されている。また高橋成計氏による成果もある。『丹波』誌面や八上城研究会『戦国・織豊期城郭論』の中で、数多くの縄張り図を掲載している。その他織豊系・織豊期城郭では、福島克彦 1994、同 1990 などがある。
- 3 ここですべての事例について検討するわけにいかないが、例えば長岡藤孝が丹後を拝領した際は、宮津八幡山城へ入り後に宮津城、田辺城を築城している。丹波では八木城が守護所であったが、内藤氏が没落し明智光秀の支配時に亀山城が築城されている。
- 4 加藤貞泰が文禄四年（1595）に美濃黒野四万石へ移封となった際、教徳寺を仮館とした例や、豊後岡城へ入り大規模な修築を施した際は、「滋賀湖左衛門親次が旧居に御住居」（『中川史料集』）などがある。しかし仮館という性格上、必要がなくなれば廃棄されたり、別の目的に改変されその痕跡が残らないことが多いと思われる。
- 5 『小島文書』（『園部町史 史料編Ⅱ』所収）
- 6 南丹市教育委員会 2010
- 7 竹岡林氏は『新編物語藩史』第7巻「園部藩」の項、「丹波園部城」（日本古城友の会）で、「殿様御屋敷取節書付覚帳」（『武部能文家文書』）を引用し、小出氏の園部入部の際の記事を引用するも全文が不明で、今後の調査に期待される。
- 8 福島克彦 2005、若江茂 1999、京都府教育委員会 2013 など
- 9 若江茂・高橋成計らによる精力的な現地調査の成果があり、それらは園部町教育委員会 2002 や、京都府教育委員会 2013 などに反映されている。
- 10 竹岡林 1980、京都府教育委員会 1982 などに記載されるが、竹岡林 1976 で概ね提示されている。
- 11 高柳光寿 1958
- 12 一倉喜好 1959
- 13 『信長公記』天正6年4月10日条
- 14 「丹羽長秀書状」（『兵庫県史』中世2 408）
- 15 篠山毎日新聞社 1931
- 16 多紀史蹟研究会『高城軍記』、高田紅濤 1980 などが刊本として刊行されている。
- 17 芦田確次ほか 1973
- 18 吉田清 1979
- 19 江戸期には小麦山山麓に園部城が築造され、大幅に改変を受けている。また現在は小麦山山頂は公園となり、麓も開発を受け旧態を留めていない。
- 20 新人物往来社 1980
- 21 「園部村天満宮文書」（『大日本史料』第十卷之三）
- 22 森竹千代家文書『丹波志 姓氏部』（南丹市立文化博物館蔵園部町史編纂史料）
- 23 園部町教育委員会 1981
- 24 「園部村天満宮文書」（『大日本史料』第八卷之七）
- 25 「八木豊信書状」（『大日本古文書』家わけ九 吉川家文書之一 第九三号）
- 26 『兼見卿記』天正4年正月15日条
- 27 『兼見卿記』天正5年10月29日条

- 28 奥野高広『織田信長文書の研究』758号
- 29 『信長公記』天正6年4月10日条
- 30 『信長公記』天正6年12月条
- 31 八上城包囲に関しては、高橋成計 1988、後には八上城研究会 2000 などにおいても、八上城の付城について検討が加えられている。
- 32 高橋成計 1988
- 33 永戸貞著・古川茂正 1974、『日本城郭大系』第12巻
- 34 史料1・2『園部町史』史料編Ⅱ、及び福島克彦 2000
- 35 史料3『園部町史 史料編Ⅱ』所収
- 36 小林家本一家文書「元和年中己未年八月五日小出伊勢守吉親公上完人村江御初入節御名前覚書」(園部文化博物館『園部藩初代藩主 小出吉親』2001年所収)
- 37 南丹市八木町に所在で、丹波では有数の規模の城郭である。
- 38 近隣の事例では、綾部市の山家城と山家陣屋、同じく綾部市の上林城と藤掛陣屋などがある。
- 39 『御家譜伝記』は穴人の個人が所有する文書で、小出家の家譜と所有者の家の記録である。活字化はされていない。
- 40 園部文化博物館 2001a
- 41 園部町教育委員会 2005参照。なお園部陣屋は明治維新に際し櫓や釘貫門付近に新たに堀を設け、名実ともに「城」となっている。またその際大手の釘貫門周辺は堀は設けられていなかったが、幕末に新たに堀が掘られている。つまり大手周辺に新たに堀を掘ることが城として重用であったことがうかがえる。
- 42 史料3(『園部町史 史料編Ⅱ』所収)
- 43 園部町教育委員会 2005
- 44 若江茂 1999に「本丸入り口の左右の土塁の高さは丹波須知・上野城と同じく約3mあったが第二次世界大戦中に学校建設計画や芋畑のために土塁を削り取ったため現在は半分位の高さが残っている。この土砂は本丸と(仮)二ノ丸の間の空堀に一部埋め立てられ浅く狭くなっているが、現在、土橋の左右と本丸から(仮)北ノ丸へ渡る土橋付近が旧状を留めており、元は深さ3m、幅五～六mであったと考えられる」と記す。これは穴人在住で本会会員小林本一氏からの聞き取りで筆者も直接お話を伺っている。なお本丸は本論で言うA群曲輪Ⅰ、二ノ丸は曲輪Ⅱ、Ⅲ、北ノ丸は虎口aのある曲輪である。
- 45 福島克彦 2005
- 46 史料4『園部町史 史料編Ⅱ』所収
- 47 小島氏に関する研究としては、竹内秀雄 1968、中西裕樹 2001、南丹市教育委員会 2010などがある。
- 48 史料3『略史前録草案』(『園部町史 史料編Ⅱ』所収)
- 49 史料5『小林久兵衛日記』(『園部町史 史料編Ⅳ』所収)
- 50 水本邦彦 2001、水本邦彦 2002
- 51 小出吉親公憲章会 1987
- 52 園部町教育委員会『園部町史 史料編』第2巻 1981年、園部文化博物館 2002
- 53 園部文化博物 2002、京都府教育委員会 1983
- 54 京都府教育委員会 1998
- 55 図2参照、犬持雅哉 2004
- 56 高屋茂男 2005a
- 57 「細川晴国感状写」(波多野家文書『内閣文庫所蔵諸家文書纂』)、細川晴国は丹波から山城北西部

を中心に、天文2年頃に活発に活動している。木崎での合戦は、黒田城（園部町黒田）から上木崎城（園部町上木崎・河原町）にかけての山がかかっていると推察される。

- 58 図3参照、竹内秀雄 1968
- 59 高屋茂男 2004b
- 60 園部文化博物館 2001b、高屋茂男 2005b
- 61 福島克彦 2000、中西裕樹 2001、福島克彦 2005
- 62 図4参照、一倉喜好 1959、高屋茂男 2005c
- 63 「丹波用木注文書」東京大学史料編纂所影写本小野均氏旧蔵文書
- 64 高屋茂男 2005c、一倉喜好 1959
- 65 「片山孝繁書状」（『大日本古文書』蜷川家文書三）
- 66 現地は谷部分に石積みをともなう削平地が最奥部まで続き、谷の北東部には「道親山」と呼ばれる尾根があり、室町期と推定される宝篋印塔が残る。高屋茂男 2005c
- 67 若江茂 2004
- 68 松下文書『大日本史料 十一編五』
- 69 高屋茂男 2005d、富永公文 1984、富永公文 2002
- 70 日吉町郷土資料館 2000。藤田叔民 1973、亀岡市文化資料館 1987
- 71 「前田尊経閣文庫古蹟文徴」（八上城研究会 2000 所収）
- 72 福島克彦 2005
- 73 「くせわら」は現在の南丹市園部町小桜町1号に該当するため、その他の地名もその周辺に該当すると考えられる。
- 74 園部町教育委員会 1981
- 75 園部町教育委員会 1991、2005
- 76 吉田ちづ糸 2015
- 77 恐らく陣屋周囲に掘った堀の土を、町場の埋め立てに使用したものと考えがえられる。
- 78 中西裕樹 2001、園部藩主小出氏は幕末に城主格となり、その居所は園部城となった。それに際して櫓を築くなどしているが、大手門付近に堀を構築している。中西が指摘するように当初園部陣屋には大手門付近のみ堀が掘られておらず、この幕末の築城の際に掘削された。その詳細は吉田清 1999 にくわしい。
- 79 園部町教育委員会 1991
- 80 園部町教育委員会 1981
- 81 南丹市立文化博物館 2008
- 82 林野全孝・大場修 1988、大場修 1990
- 83 水本邦彦 2001
- 84 南丹市立文化博物館 2014
- 85 園部町教育委員会 1981
- 86 園部町教育委員会 1991
- 87 園部文化博物館 2003
- 88 園部文化博物館 2003
- 89 貝原益軒 1713
- 90 川辺小学校百周年記念誌編集委員会編集 1986
- 91 高橋哲郎 2001、花岡興史 2005

## 第3章 山陰における織豊期城館の展開

### はじめに

山陰地方は戦国期には尼子氏、毛利氏（吉川氏）の支配下であり、織豊政権側と熾烈な攻防が繰り返された。その中で特に羽柴秀吉による鳥取城攻めでは、周囲に数多くの陣城が築かれており、鳥取城が落城し備中高松城での攻防を経て、毛利氏の領域が西伯耆から備中のラインに決定された<sup>1</sup>。

山陰における織豊期城館の発掘調査では、若桜鬼ヶ城跡、鳥取城跡、鹿野城跡、江美城跡、米子城跡、富田城跡、丸山城跡、七尾城跡、津和野城跡などで行われているが（第1図）、調査件数は多いとはいえない<sup>2</sup>。また現地調査を基にした縄張り研究の蓄積はそれなりにあるが、考古学を主体とした研究では、土器・陶磁器の組成研究は先行研究があるもの<sup>3</sup>の、考古学的手法に拠った城郭研究では若桜鬼ヶ城跡や富田城跡など個別研究に限定される<sup>4</sup>。そこで毛利領国における城館の配置や改修について検討することを念頭に置き、山陰各国における歴史的概要の把握に努めるとともに、敵方の城を奪った後の改修と維持管理について、真山城（松江市）を取り上げ検討する。その他、伯耆において石垣を持つ城館であるにもかかわらず、石垣の詳細な検討が行われていない亀井山城（日南町）について検討することで、当該期の城館の在り方について検討する。

### 第1節 山陰の織豊期城館と研究史

#### I 地域別概況

山陰の領主は毛利氏の中国国分から元和初期まで領主がたびたび交代しており、現在地表面で観察できる遺構がどの段階のものか判断することが重要である。城郭の改修の契機が領主の交代や政治状況に大きく由来することから、本論では戦国期から元和年間まで織豊期全体を見据え、個別城郭の改修の契機や現状遺構を確認しながら、主に天正年間後半から元和年間初期までの城郭について検討することとする。まず、因幡、伯耆、出雲、石見の4地区に分け、領主の変遷を確認する。

#### (1) 因幡（第5図）

因幡には秀吉の鳥取城攻め以後、鳥取城には宮部継潤、若桜鬼ヶ城には木下重堅、景石城には磯部康氏がいいた。宮部氏が盟主として木下、磯部は因幡衆の一員として、備中高松の陣や九州島津攻め、小牧長久手、文禄の役に参陣している。

因幡では若桜鬼ヶ城跡で発掘調査が行われ石垣、瓦が確認されている。若桜鬼ヶ城跡の遺構は大きく木下氏段階と山崎氏段階に分けられる。ただし陶磁器類は16世紀中葉が

主体で、山崎氏段階では瓦が多量に見つかるものの、これに対応する遺物は確認されていない。瓦に関しては黒田慶一と山崎敏昭の研究がある<sup>6</sup>。これらの研究により、先行する木下氏段階の瓦のほうが、より新しい瓦当の製作技法、文様意匠を採用し、後から入部した山崎氏のものの方が旧態の技法・意匠を採用していることを明らかとなった。黒田は同等の大名であっても、政権との関係性により瓦製作技術が逆転することがあるとした。これに対し山崎は天正から慶長期頃までの2・3万石クラスの名大は、独自の瓦製作集団を抱えておらず、「地域ブロック支配」と定義づける大大名による領国支配と、複数の小大名を地域で「衆」として束ねる支配の並存を指摘し、関ヶ原後に入部した山崎氏は鳥取城の池田氏や、その一族が支配する播磨姫路との関係も見据えて考察している。

その他因幡では、景石城跡や鳥取城、鹿野城の存在が特筆される。景石城跡の石垣は天正8～9年と推定する意見もある<sup>7</sup>が、鬼ヶ城との関係も踏まえ今後詳細な調査が必要であろう。

## (2) 伯耆 (第6図)

東伯耆には南条元統が東伯耆3郡を安堵され、羽衣石城にはいったが、近年では打吹城へ移ったと考えられるようになってきた。出雲3郡、隠岐とともに西伯耆3郡が吉川広家の支配下となった。天正年間後半に両者の境は八橋城を毛利領の東端として境界が定められた。米子城は吉川広家段階に既に築城が始まっている。日野郡には石垣を伴う城郭として、金箔瓦が確認された江美城以外に、亀井山城、黒坂（鏡山城）が存在するも、考古学的資料は少ない<sup>8</sup>。関ヶ原の戦い後、伯耆には中村一忠が入るが、当初尾高城へ入り米子城の完成後移ったという。しかし中村氏が慶長14年に改易後は西伯耆は3分割され、米子城には加藤貞泰、八橋城には市橋長勝、黒坂城には関一政が入った。また亀尾山城でも瓦が採集されており、出土地点など検討が必要である<sup>9</sup>。

## (3) 出雲 (第7図)

出雲では吉川広家が天正19年に富田城へ入り、関ヶ原の戦い後、出雲・隠岐に堀尾吉晴・忠氏が入った。堀尾氏は当初富田城へ入るものの、慶長16年松江城を築城し移るが、近年堀尾氏の松江城築城後も引き続き富田城が利用されていたと考えられるようになってきた。富田城の主要な曲輪には石垣が築かれており、二の丸、三の丸の石垣は石材が小ぶりで、算木積を用いないのに対し、三の丸虎口や本丸奥の神社周辺の斜面、山中御殿、千畳平などでは、石材も大きく算木積が多用され、異なる時期に構築された可能性がある。軒丸瓦にはコビキAとBがあり、I-A類と同種のもので、松江城でも分銅文の瓦とともに出土している。軒丸瓦II-A及び軒平瓦B-1～3が織豊期と考えられ、B-3類は米子城でも出土している。堀尾氏は三刀屋城、瀬戸山城を支城として石垣造の城へ改修を行ったと考えられ、三沢城も石垣を伴う枡形虎口があり、堀尾段階の改

修が指摘されている<sup>10</sup>。

#### (4) 石見 (第8図)

石見は関ヶ原以前は毛利氏の支配下に属し、津和野城には吉見氏、七尾城・三宅御土居には益田氏が存在した。小笠原氏は天正11年に丸山城の築城を開始し、13年に完成したと伝わる。その後文禄年間に出雲神西へ移封されたという<sup>11</sup>。丸山城で山上の館的要素を持った城が構築され、吉川元春館との共通点も指摘されている<sup>12</sup>。山吹城は毛利氏の支配下にあったが、関ヶ原の戦い後、天領となって大久保長安が代官として入り、山吹城に代官所が置かれたという。本経寺墓地での調査では、17世紀初頭の遺物も確認され、鎗石突や銃弾なども確認されている<sup>13</sup>。七尾城・三宅御土居には益田氏がおり、七尾城跡の調査では、本丸北側で櫓門、南端で礎石建物、二の段北側で礎石建物が確認され、その他尾根先の曲輪でも瓦片が採集されている<sup>14</sup>。益田氏は関ヶ原の戦い後、毛利氏に従って萩へ移るため、それ以前の最終段階の様相をしめしているといえよう。津和野城には吉見氏がいたが、関ヶ原の戦い後、益田氏とともに毛利氏に従って萩へ移った。その後津和野城には坂崎直盛が入った。この時期に津和野城中心部が大きく改修されたが、従来津和野城中心部から南西尾根に位置する中荒城は、畝状空堀群が存在し吉見氏段階の遺構が良く残るとされてきたが、近年コビキB段階の瓦が確認され、曲輪も方形に成形され後世の手が加わっていることは明らかである<sup>15</sup>。

## II 時期的概況

ここでは山陰の織豊期城郭について、領主の変遷を軸に時期区分を行い考察を行うこととする。鳥取城落城の毛利氏と豊臣政権側とのいわゆる中国国分以前(～天正13年・I期)、国分後から関ヶ原の戦いまで(天正13年～慶長5年・II期)、関ヶ原の戦いから米子城主中村一忠の改易まで(慶長5年～19年・III期)、津和野城への亀井氏移封、池田氏入封まで(IV期)の4期に分け城郭の変遷を追い、若干の考察を加えたい。

#### (1) 毛利氏の中国国分まで(～天正13年・I期、第3図)

この時期は吉川氏が山陰を任され、但馬まで進出し興亡を繰り返した時期である。中国国分の交渉は難航したが、備前、美作、伯耆東三郡、備中河辺川(高梁川)以東を割譲で決着が図られたが、引き続き調整が図られ、伯耆八橋城、備中松山城が毛利方とすることで決着した。しかしその後、秀吉の四国攻めの際には南条元統が吉川領の西伯耆を奪取しようと出兵するなど不穏な動きもあった。因幡では鳥取城落城後、宮部継潤が鳥取城へ、若桜鬼ヶ城には木下重堅、景石城には磯部康氏が、鹿野城には亀井茲矩が入った。特に宮部、木下、磯部は秀吉配下の大名で、城郭の改修に着手した可能性がある。東伯耆では南条元統が本領を回復している。

石見では丸山城が特筆される。天正13年に小笠原長旌が入城したといわれ、石垣を用

いた特徴的構造を持っている。

(2) 国分後から関ヶ原の戦まで（天正13年～慶長5年・Ⅱ期、第2図）

毛利領と豊臣政権側の境界が画定し、改めて領域支配体制が設定された時期。毛利輝元は天正16年、小早川隆景、吉川元春を伴って上洛し、その直後に居城を広島城へ移している。これは毛利氏の豊臣大名化の表れと評価される。山陰では吉川広家は西伯耆、出雲3郡、隠岐を与えられ、安芸・日山城から富田城へ移動し、以後豊臣大名化した。因幡ではⅠ期よりそのまま領主が継続して配置されている。石見も毛利領としてⅠ期より継続する。

(3) 関ヶ原の戦から慶長14年の中村一忠の改易まで（慶長5年～14年、Ⅲ期、第2図）

関ヶ原の戦い後、西軍について木下氏、磯部氏、宮部氏は改易され、新たに鳥取城に池田長吉、若桜鬼ヶ城に山崎家盛、景石城に山崎の家臣が入った。姫路に長吉の兄・池田輝政がおり、山崎家盛も池田輝政の義弟にあたるため、因幡は播磨と密接なかかわりを持った。唯一鹿野城の亀井氏のみ2万4千石を加増された。

伯耆では中村一忠が一国を支配した。出雲には堀尾氏が入り富田城へ入った後、松江城を築城する。出雲では三刀屋城、瀬戸山城が広島の福島正則に対して支城として整備され、三沢城もその可能性が指摘される<sup>16</sup>。

(4) 中村一忠改易から元和3年の亀井氏移封、池田氏入封まで、Ⅳ期）

この時期は中村一忠が改易され、伯耆の領主に変化があった時期である。つまり米子城には加藤貞泰が入り、八橋城には市橋長勝、黒坂には関一政が入る。

### Ⅲ 第Ⅱ期における領主の性格と城郭

東因幡では豊臣秀吉の配下の大名が入部し、関ヶ原以前は宮部氏を中心に、木下氏、磯部氏といった小大名でブロック支配を行い、旧来の城郭の中心部に石垣を築いたものが多い。これに対して関ヶ原の戦い後に入部した池田氏・山崎氏は、宮部氏・木下氏・磯部氏段階と同様にブロック支配と評価されるものの、鬼ヶ城の調査では瓦が大量に見つかるものの、これに対応する遺物は見つかっていないため、城郭の利用状況に差異が認められる。鹿野城では関ヶ原後に3万5千石に加増され城の大改修を行い、主要部を山麓へ移し天主台や西の丸も整備したとされる。鳥取城も池田期に入って山麓の改修が指摘されるため、因幡での第Ⅲ期の傾向として、山上の城郭を維持しながらも、山麓への主要部の移動が推測できる。

東伯耆では南条氏の居城・羽衣石城は、近年では天正末年～慶長初年頃に打吹城へ移ったと考えられるようになってきた。打吹城には天主台や枳形虎口がありこの時期に整備

されたと考えられる。このように、因幡での豊臣旗下の大名では旧来の標高の高い山城の中心部を石垣化し瓦葺建物を築いており、同じ豊臣旗下の大名でも南条氏や亀井氏といった在来の国人とは異なる傾向を示している。

西伯耆では米子城が吉川段階から築城が始まるが、それ以外では日野郡に織豊期城郭が集中する。つまり金箔瓦が確認されている江美城と、山上中心部が総石垣の亀井山城である。江美城の金箔瓦について加藤は、規制緩和後の江戸期の使用を想定しているが、伊藤は吉川期と想定している<sup>17</sup>。これに対して、毛利領国下の出雲や石見では富田城において石垣化が見られ、七尾城では瓦葺建物が確認されるものの、基本的に織豊化は低調といえる。丸山城で山上の館的要素を持った城が構築され、吉川元春館との共通点も指摘されているのも、このような地域的環境が背景にあると考えられる。

つまり豊臣旗下の東因幡では盟主大名をもとに小大名を配置したブロック支配体制で、織豊城郭化が顕著にみられ、西因幡、伯耆については在地の大名による支配で、部分的な織豊城郭化にとどまり、毛利領国化では低調な傾向が看取できる（第4図）。

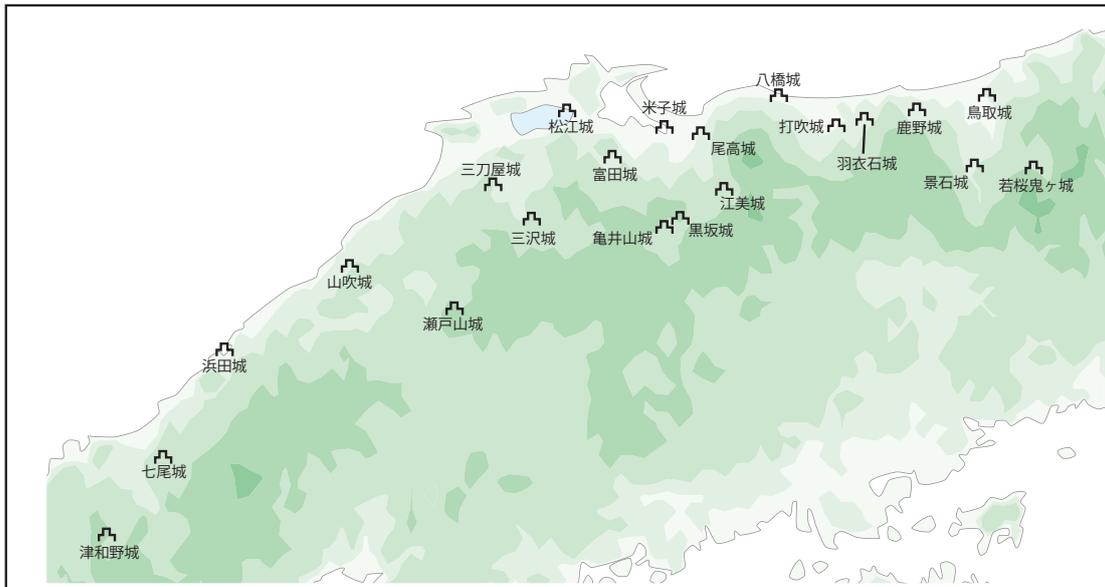
## 小結

最後に今後の研究の課題をあげる。山陰の織豊期城郭研究の課題をあげるとすると、富田城、米子城は今後さらに発掘調査が実施され、検討が進められていくと考えられるが、鍵をにぎるのは伯耆国日野郡の城郭をどのように考えるかであろう。つまり江美城、亀井山城、黒坂城である。この3城は非常に近接した位置に築かれているため、石垣の構築時期や改修時期について検討することが重要である。

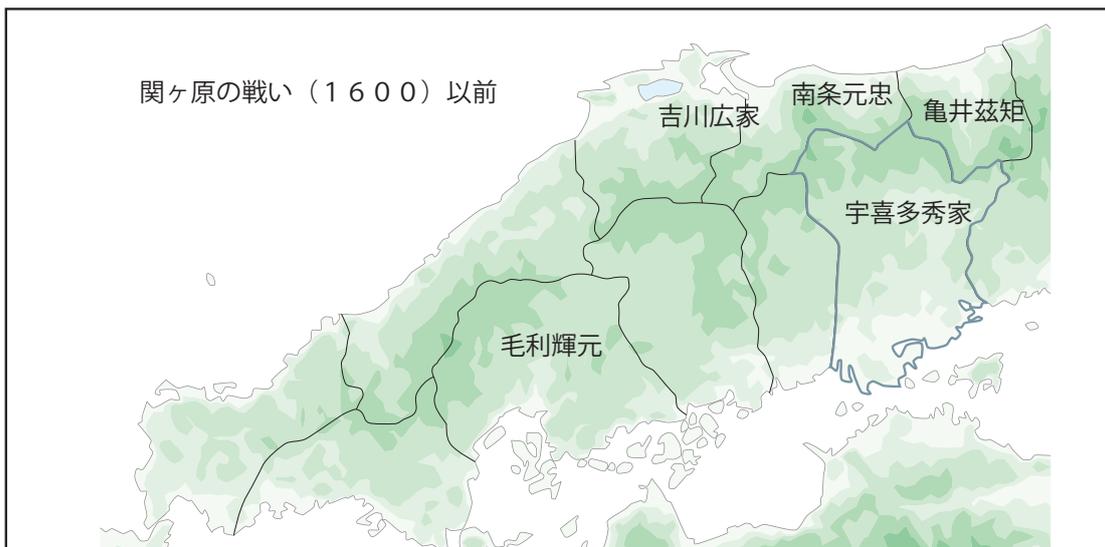
江美城では金箔瓦が出土しており、その評価も意見が分かれるが、富田城や米子城で今のところ金箔瓦が確認されていないことから、江美城の金箔瓦の年代比定については慎重であらねばならないと考える。その他、亀井山城の中心部分が、総石垣となっており、この石垣について詳細な調査が必要である。可能性としては出雲における堀尾氏の支城として三刀屋城、瀬戸山城などが整備されているため、中村氏による伯耆支配の過程で支城として整備された可能性もある。しかし文禄4年に亀井氏が日野銀山（日南町中石見銀山）を発見し、翌年その支配は吉川広家へ移されており、日野銀山の位置は亀井山城の南6 kmの位置のため、両者の関係も慎重に判断したい。

また慶長14年に黒坂へ関一政が入るが、当初亀井山城に入り後に黒坂へ入ったという。山上には土の城があり、麓に江戸期に陣屋がおかれたという曲輪があり石垣が見られる。関氏の旧領である伊勢での城郭との類似から<sup>20</sup>、山上の城郭も関氏によるものと見る説（高田2000）もある。しかし関氏が入部した慶長14年段階で土塁囲みの山城を構築するというのは無理がある。亀井山城から黒坂の地へ入り、黒坂城の麓（鏡山城）へ城を構え、関氏改易後に鳥取藩池田氏が陣屋をおいたと見るのが自然であろう<sup>21</sup>。

次節以降において、富田城跡、亀井山城跡について詳細に検討し、西伯耆、出雲における城郭について検討することとする。



第1図 城郭位置図



関ヶ原の戦い（1600）以前

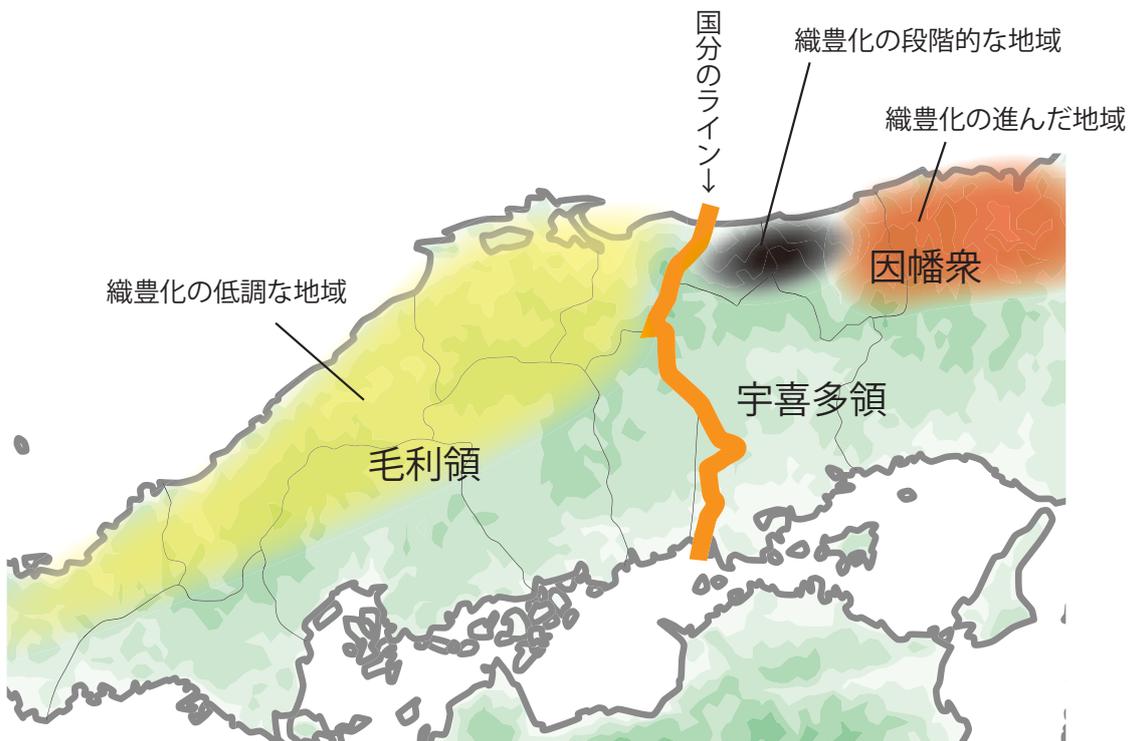
関ヶ原の戦い後



第2図 関ヶ原前後の大名配置



第3図 天正13年 中国国分頃の城郭位置図



第4図 山陰における織豊城郭化の傾向

西暦	和暦	鳥取城	若桜鬼ヶ城	景石城	鹿野城	浦富城
1580	天正 8					
1581	天正 9					
1582	天正 10					
1583	天正 11					
1584	天正 12					
1585	天正 13	中国国分				垣屋光成
1586	天正 14					
1587	天正 15					
1588	天正 16					
1589	天正 17					
1590	天正 18	宮部継潤	木下重堅	磯部康氏	亀井茲矩	
1591	天正 19					
1592	文禄 1					
1593	文禄 2					
1594	文禄 3					
1595	文禄 4					
1596	慶長 1	●	●	●		
1597	慶長 2					
1598	慶長 3	宮部長熙				
1599	慶長 4					
1600	慶長 5	関が原の戦い				
1601	慶長 6	●	●	●		●
1602	慶長 7					
1603	慶長 8	池田長吉	山崎家盛	山崎家臣		
1604	慶長 9					
1605	慶長 10					
1606	慶長 11					
1607	慶長 12					
1608	慶長 13					
1609	慶長 14	中村忠一改易			●	
1610	慶長 15					
1611	慶長 16					亀井政矩
1612	慶長 17					
1613	慶長 18					
1614	慶長 19	大坂冬の陣	●			
1615	元和 1	一国一城令	山崎家治			
1616	元和 2					
1617	元和 3	● ← ← ← ●	●	●	●	津和野城へ移封
1618	元和 4	池田光政				
1619	元和 5					
1620	元和 6					

第5図 因幡国領主変遷図

西暦	和暦	打吹城	羽衣石城	八橋城	米子城	尾高城	江美城	亀井山城	黒坂城
1580	天正 8								
1581	天正 9								
1582	天正 10								
1583	天正 11								
1584	天正 12								
1585	天正 13	中国国分							
1586	天正 14								
1587	天正 15								
1588	天正 16								
1589	天正 17								
1590	天正 18								
1591	天正 19								
1592	文禄 1								
1593	文禄 2								
1594	文禄 3								
1595	文禄 4								
1596	慶長 1								
1597	慶長 2								
1598	慶長 3								
1599	慶長 4								
1600	慶長 5	関が原の戦い							
1601	慶長 6								
1602	慶長 7								
1603	慶長 8								
1604	慶長 9								
1605	慶長 10								
1606	慶長 11								
1607	慶長 12								
1608	慶長 13								
1609	慶長 14	中村忠一改易							
1610	慶長 15								
1611	慶長 16								
1612	慶長 17								
1613	慶長 18								
1614	慶長 19	大坂冬の陣							
1615	元和 1	一国一城令							
1616	元和 2								
1617	元和 3								
1618	元和 4								
1619	元和 5								
1620	元和 6								

第6図 伯耆国領主変遷図

西暦	和暦	富田城	三刀屋城	瀬戸山城	三沢城
1580	天正 8				
1581	天正 9				
1582	天正 10				
1583	天正 11				
1584	天正 12				
1585	天正 13	中国国分 ●			
1586	天正 14				
1587	天正 15				
1588	天正 16		● 所領没収		
1589	天正 17				
1590	天正 18			●	
1591	天正 19	●			
1592	文禄 1				
1593	文禄 2				
1594	文禄 3				
1595	文禄 4				
1596	慶長 1				
1597	慶長 2				
1598	慶長 3				
1599	慶長 4				
1600	慶長 5	関が原の戦い			
1601	慶長 6	●	●	●	
1602	慶長 7				
1603	慶長 8				
1604	慶長 9	●			
1605	慶長 10				
1606	慶長 11				
1607	慶長 12				
1608	慶長 13		●		
1609	慶長 14	中村忠一改易			
1610	慶長 15				
1611	慶長 16	● → 松江城			
1612	慶長 17				
1613	慶長 18				
1614	慶長 19	大坂冬の陣			
1615	元和 1	一国一城令			
1616	元和 2				
1617	元和 3				
1618	元和 4				
1619	元和 5				
1620	元和 6				

第7図 出雲国領主変遷図

西暦	和暦	丸山城	山吹城	浜田城	七尾城	津和野城
1580	天正 8					
1581	天正 9					
1582	天正 10					
1583	天正 11	● 築城開始				
1584	天正 12					
1585	天正 13	中国国分 ● 入城				
1586	天正 14					
1587	天正 15	小笠原長旌				
1588	天正 16					
1589	天正 17		毛利		益田元祥	吉見正頼
1590	天正 18		(吉川)			
1591	天正 19		支配			
1592	文禄 1	● 出雲神西へ				
1593	文禄 2	移封か				
1594	文禄 3					
1595	文禄 4					
1596	慶長 1					
1597	慶長 2					
1598	慶長 3					
1599	慶長 4					
1600	慶長 5	関が原の戦い				
1601	慶長 6		●		●	●
1602	慶長 7					
1603	慶長 8		天領			
1604	慶長 9					
1605	慶長 10		大久保長安			
1606	慶長 11					坂崎直盛
1607	慶長 12					
1608	慶長 13					
1609	慶長 14	中村忠一改易				
1610	慶長 15					
1611	慶長 16	●				
1612	慶長 17	松江城へ				
1613	慶長 18	移転後も				
1614	慶長 19	大坂冬の陣				
1615	元和 1	一国一城令				
1616	元和 2	存続?				
1617	元和 3			古田重治		● 亀井政矩
1618	元和 4					
1619	元和 5			●		
1620	元和 6					

第8図 石見国領主変遷図

## 第2節 真山城跡にみる中世城館の改修と維持主体の関係性

はじめに

真山城<sup>22</sup>は毛利氏による出雲攻略から、その後の尼子勝久らによる尼子復興戦にかけて度々史料上に登場する城郭である。しかし毛利氏によって落城した後も、継続して利用されていたことがこれまでの研究によって明らかにされている<sup>23</sup>。

真山城の構造は堀切や堅堀はなく、土塁も一部に見られる程度で特徴的な遺構が存在せず、尾根上に曲輪が連なる縄張りである。そのため従来あまり積極的な評価はされていないように見受けられる<sup>24</sup>。しかし単純な縄張りながらも、それにも意味があり、史料上にも数多く登場することから、両者を対比して検討することは必要であろう。そこで本論では史料上の記載を確認しながら、縄張りについて今一度検討してみたい。

### 1 真山城の位置と構造

真山城は松江市法吉町に所在し、松江城より北へ約四キロの位置にある（第9図）。南側には尼子方として毛利氏に最後まで抗戦した松田氏の白鹿城がある（第10図）。白鹿城とは現在道路によって分断されているが、地形としては、真山城の北にある鳥ノ子山から西南に延びる尾根で続いている。真山城の方が白鹿城より高い位置にあり見下ろせる環境にある。そのため『雲陽誌』では吉川元春が白鹿城攻めに際して陣を置いたと記す<sup>25</sup>。

真山城の山麓から山頂へ向かう登山道には、山中鹿介の両親との伝説をもつ更科姫と相木盛之介の墓（昭和二年建立）や、Ⅱ郭には尼子勝久の碑（大正十二年）が設置されるなど、古い時期から地域の関心が高かったのが伺えると同時に、地形の改変も考慮しておく必要があるが現地調査の結果では、登山道以外ではそれほど大きな改変はなさそうである。

真山城の縄張りは、南北に細長く伸びる尾根上に曲輪を展開し、最南で二股にわかれている（第11図）。これらの曲輪群の中で最も高い標高にあるのはⅢだが、いずれも同じような標高に位置する。標高の上では明確な上下関係は決めがたいが、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵが比較的高い位置にある。面積ではⅢが最も大きく、Ⅱの東側からⅢの下を通り、Ⅳ・Ⅴへ至るルートが確認でき、Ⅲを通過しない構造になっている。縄張り全体からはどうやらⅢが最も中心的な存在の曲輪とみなされるが、Ⅴ・Ⅵは曲輪の形態が方形に加工され、Ⅴには石積、Ⅵには土塁、虎口が存在することから、他の曲輪より普請の度合いが高い。しかしそれぞれの曲輪には明確な上下関係を見出せず、むしろⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅵの曲輪は、それぞれが個々にまとまりを見せている。

城郭遺構としては、Ⅰの北側に唯一土塁が見られ、堀切、堅堀の類はⅥの南西側の尾根に二ヶ所ほど確認できるのみで、全体として曲輪、切岸が中心の城である。虎口も特徴的なものはないが、Ⅵに内枘形状にくぼみの見られる虎口があるのと、Cの位置に確認

できる。

## 2 文献に見る真山城

『雲陽軍実記』には平薩摩守忠度が真山に城を築いたとある。永禄6年（1563）に毛利氏によって白鹿城が攻撃された際には、吉川元春が真山城陣を置いたという<sup>26</sup>。史料上は白鹿城が落城後、山中鹿介らに擁立された尼子勝久による尼子復興軍が真山城へ入ってから頻繁にみられるようになる。元亀元年（1570）には真山城、高瀬城麓で稲薙が行われ、末次、勝間、羽倉山の三ヶ所に人数が入れ置かれている。この間、尼子勝久方は本庄（現松江市本庄）の中海側から、兵糧を入れようとするが毛利方に阻まれている。また毛利方は和久羅城（松江市朝酌町）や大勝間城（松江市鹿島町）などに兵を入れ、真山城を包囲した。

真山城は「勝久家城新山」と呼ばれ<sup>27</sup>、尼子方はここを拠点に、現状打開のため末次に城を築こうとしている。しかし毛利方は末次を取戻した上で普請を行い、在番を置き対抗している。元亀元年11月には高瀬城とともに真山城も焼かれている。元亀2年4月には高瀬城が落城し、籠城していた米原綱寛が真山城へ送り届けられている<sup>29</sup>。真山も間もなく落城すると見られたが、なかなか落ちず、8月24日に落城する。ただちに真山城には野村士悦が入城した。その後毛利元康が入城している<sup>30</sup>。

これらの戦いで、白鹿城より標高の高い位置にある真山城の重要性を毛利氏は把握し、尼子勝久らの退去後も番衆を入れ維持していた様子が見える。真山城は尼子籠城時に焼かれており、毛利氏はただちに普請を行っている。

元亀2年8月には毛利元康が真山城へ入り、多賀氏を「一所」として希望している（史料1）。元康同様に多賀氏を真山城に入城させたいということであろう。真山城の普請には、10月13日、普請奉行として井上源右衛門尉、野村信濃入道、新藤木工助が申しつけられている（史料2）。この普請は12月8日にはひと段落したようで、井上氏は一旦安芸・吉田へ帰ったようである（史料3）。史料1で登場した多賀氏は、史料4・5に見えるように多賀左京亮が在城し、修築を行っているのが見える。史料6によると、元亀3年5月、井上源右衛門尉に真山城に在城するよう富田城にいる天野隆重が口羽通良、福原貞俊に対して毛利輝元に披露するよう伝えている。この時、井上に「一丸御預ケ」るように述べている。また真山城は「大事之御山」なので、「城督」を置き、「加様之衆五人六人程者被置せ度」という<sup>31</sup>。「一丸」は「曲輪をひとつ」と解釈すると、曲輪ごとに城番が置かれていたと考えられ、五・六人の番衆を必要という。また「城督」はこれらの番衆を統括する寄親的存在の者と見られる。同月、吉川元春は毛利元秋、天野隆重に加賀要害とともに真山城の普請について、毛利輝元以下吉田と相談するとしている。すでに先行研究によって指摘されるように、「城督」「検使」は本国・安芸から派遣されるもので、史料3が示すように、富田城にいた毛利元秋が検使であった井上源右衛門尉に対して自身のところへ挨拶のために立ち寄らず、安芸へ帰るように伝えているこ

とからもうかがえる。

史料8は年未詳だが、『松江市史史料編4』では天正9年頃と推定している史料である。真山城にあった多賀元忠が居住していた曲輪を、元忠が帰陣するまでそのままとすることを、吉川元春が多賀元忠に約束したものである。つまり割り当てられた曲輪・住居は、約束を取り付けないと取り払われる可能性を含む不安定なものであると同時に、真山城の曲輪に居住していた様子がうかがえる。

史料9は天正11年(1583)と年代がやや下り、史料10は年未詳史料で、佐陀成相寺(松江市荘成町)に関する史料である。史料9によると真山城の番衆に加わるよう依頼され、成相寺が応じたようである。その際、史料10にあるように「丸一ツ」預けられたようである。天正11年は毛利領が中国国分によって高梁川(岡山県)から東、伯耆は八橋を境に東が割譲された時期にあたる。この時期に至っても真山城が維持されていたと考えられる。

以上のことから、尼子勝久らが去った後、真山城には毛利元康が入ったことがうかがえる。城の普請には井上らが普請奉行として携わるが、後に「城督」が置かれ、井上自身も城番に加わっている。他に多賀氏、成相寺が番衆の名に見え、彼らは曲輪ごとに番を割り当てられたようである。そこには「御住宅之丸」と呼ばれるように、多賀氏が居住する機能があったようすが看守できる。また「大事之御山」であるので「城督」を置いているように、後の松江城となる末次城(土居)ともに、宍道湖から中海をつなぐ重要ルートとして後年になっても押さえておく必要性があったことがうかがえる。

### 3 縄張りと文献との対比

文献史料からは、尼子勝久退去後に毛利氏によって普請が継続して行われているようすが伺え、「城督」の他、「番衆」が複数入れ置かれていた。「城督」は寄親的存在で、それがために毛利元康も番衆の曲輪を勝手に手出しするわけにはいかなかった。つまり真山城へ入った城督や5・6人必要と言われた番衆たちは強固な上下関係にあるわけではなく、いわば並列的な立場にあった。このことを踏まえると、真山城は比較的標高差がなく、同じようなレベルに曲輪が連なる構造のため、多くの番衆を必要としたと考えられる。また彼らの立場が並列的で、縄張り構造もどこが主郭か断じがたい姿をしており、文献史料から伺える並列的な姿と一致する。天正年間中頃まで使用が確実であるにもかかわらず、縄張り自体は単純であることから、末次の後背地を守る役割を担った城であったと評価できる。また、「御住宅之丸」や「一丸」という表現が登場するように、曲輪を「丸」と呼んでいることや、曲輪単位で人物を入れ置くことなど、真山城に関する史料は今後の城郭研究の上でも、さまざまな示唆を与えてくれる。

今後、その他の地域で番衆が複数入れ置かれた城との比較も必要であるが後考を期したい。

(史料1) 吉川元春・口羽通良・志道元保連署書状案 (多賀文書・早稲田大学)

(端裏切封ウハ書)

「 連署

元康 御宿所 元春」

猶々多賀方所望之儀、代所申調遣置候者、彼領地御所勘之様ニ可被裁判候、不可有疎意候、御方在宅之儀新山ニ被相還ニ付而、多賀方之儀、為一所、被仰談度之通蒙仰候、無御余儀存候、吉田・隆景へ申理、可調遣之候、其段聊不可有相違候、為其二、以一通申入候、猶此衆中可申候、恐々謹言

(元龜二年)

八月廿九日

元春

通良

元保

(史料2) 毛利輝元書状 (井上文書 『大日本史料』 十一六)

就新山城誘之儀、為普請奉行井上源右衛門尉、野村信濃入道、新藤木工助申付候、從其許茂一兩人被相副、急度普請堅固可被仰事、肝要存候、猶此者可申候、恐々謹言

(元龜二年)

十月十三日

輝元 (花押)

元春御宿所

(史料3) 毛利元秋書状 (井上文書 『大日本史料』 十一六)

御折紙披見候、誠新山之儀御普請相調、一入珍重此事候、是ハ旁々被精入候故与存計候、弥当国之堅目与申、可然御事候、次御方之儀、從其元直ニ御帰之由候、爰元御寄立茂候へかしと存候へ共、自其許路次ちかき由申候之条、月迫与申、早々御帰可然候、何も明日以使者重疊可申入候、恐々謹言

(元龜二年)

十二月八日

元秋 (花押)

井上源右衛門尉殿御返報

(史料4) 毛利輝元書状 (多賀文書・早稲田大学)

一筆令申候、誠雖無尽期御辛勞候、新山番之儀御出候而、預御馳走之由、可為祝着候、就夫、以此者申入候、御分別肝要候、猶自兩人所可申候間、不能詳候、恐々謹言

(元龜三年)

二月六日

輝元 (花押)

多賀左京亮殿

御宿所

(史料5) 毛利輝元書状写 (萩藩閥閥録遺漏 1—1 多賀兵右衛門 1 6)

一筆申候、仍先度茂如申入候、新山之儀取誘候、雖御辛勞之儀候、有在城何篇御馳走候者可為祝着候、猶委細此者可申候条閣筆候、恐々謹言

(元龜三年)

卯月二日 輝元 御判

多賀左京亮殿 御宿所

(史料6) 天野隆重書状写 (萩藩閥閥録 3 8 井上彦左衛門 3 5)

一筆申候、井上源右衛門尉被申候、子二候源三ニ御給地を者遣候之而、源右衛門尉事相拘り候程被成御扶助候者新山被致御番之由、吾等迄内儀被申候、御兩所御内談候而一丸御預ケ候者可然儀候、大事之御山ニ候間、城督被仰付候共、加様之衆五人六人程者被置せ度御事候、可預御披露候、恐々謹言

(元龜三年) 天 紀

卯月六日 隆重 判

貞俊

通良 参 御宿所

(史料7) 吉川元春書状 (萩藩閥閥録 1 1 5 湯原文左衛門 1 1 7)

態御状之通令承知候、此比彼是為相談、今日吉田罷出候間委細可申聞候、加賀要害普請、諸事趣之儀委細得其心候、是又可申候、新山城誘之事於吉田令内談、從是可申入候、委可令申候へ共、迺重疊態可令啓候条不能多筆候、恐々謹言

(元龜三年)

五月十二日 元春 御判

「 元秋 駿河守

隆重 御返報 元春 」

(史料8) 吉川元春書状写 (萩藩閥閥録遺漏 1—1 先大津多賀兵衛門 6 0)

「 駿河守

元忠参 人々申給へ 元春 」

元康新山入城之儀付而、当時御住宅之丸、御帰陣迄者無異儀様にと蒙仰候、尤存候、於元康茂其段分別候而御同意ニ被申越候、弥以其趣可申遣候、縦又以入城之上菟角被申候共、元忠御打帰迄之儀者不可有御承引候、重疊自我等茂可申候、猶伊但可申候、恐々謹言

九月廿八日 元春 御判

(史料9) 毛利元康書状 (成相寺文書・『松江市史』史料編IV)

新山御在番之儀申入候之處、則御馳走祝着候、然者、相加成相寺・常楽寺新五料会田進

之置候、如前々御裁判專一候、恐々謹言

天正拾一

七月八日

元康（花押）

（史料10）毛利元康書状（成相寺文書・『松江市史』史料編Ⅳ）

佐陀成相寺之事、御理付而、如前々無相違進之置候、於当城丸一ツ預ケ可申候之間、堅固可有御抱事肝要候、御登城之刻似相心を付可申候、於様躰者、態内蔵・白肥可申候、恐々謹言

正月十六日

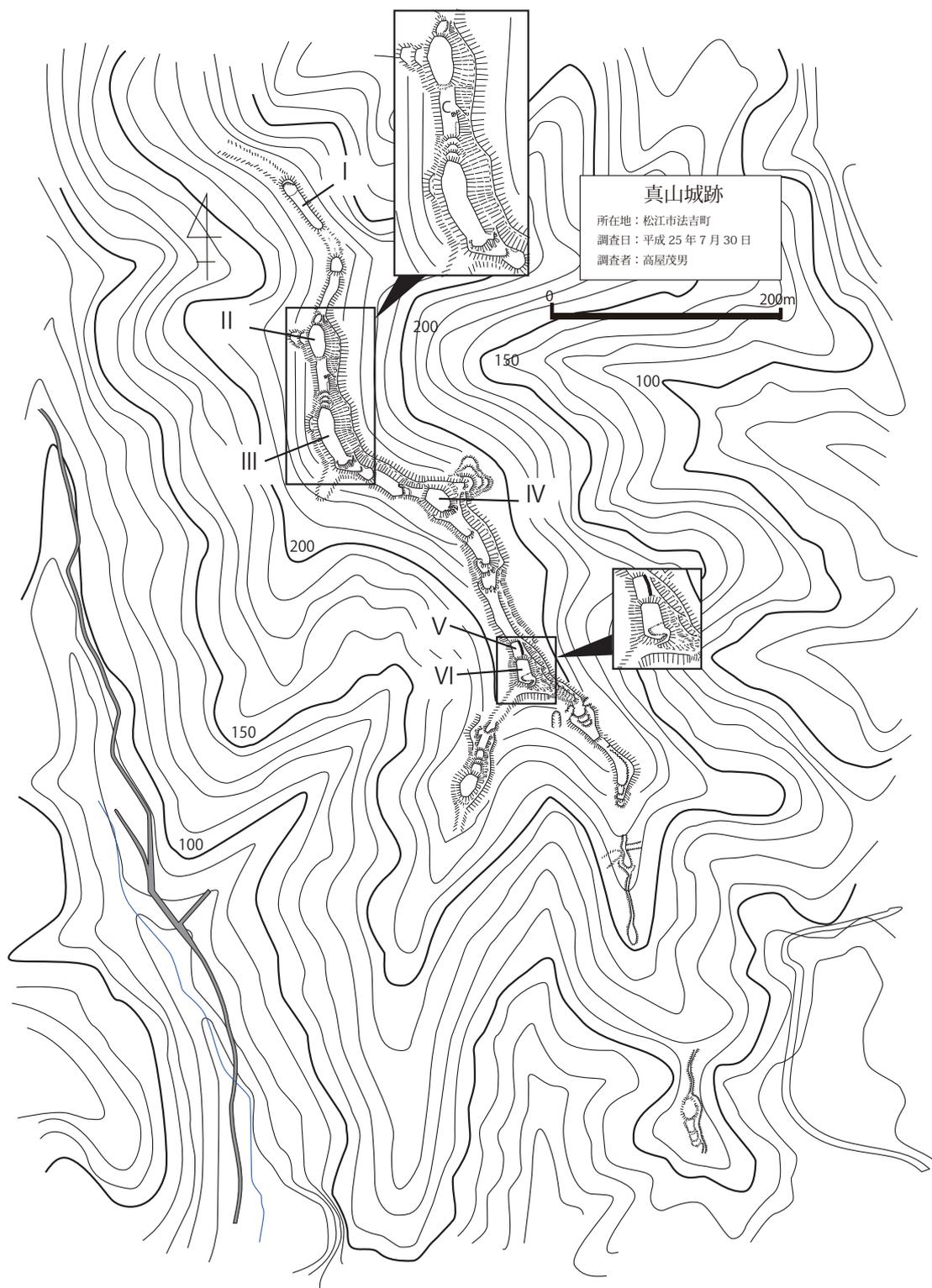
元康（花押）



第9図 真山城と白鹿城・末次城位置図



第10図 真山城と白鹿城位置図



第 1 1 図 真山城と白鹿城位置図

### 第3節 伯耆亀井山城の構造と意味

#### はじめに

亀井山城跡は鳥取県日野郡日南町生山に位置する（第12・13図）。そのため別名生山城とも呼ばれる<sup>32</sup>。標高470m、麓からの比高は180mの山に存在し、眼下には日野川とその支流の石見川が合流している。日野郡は伯耆富士とも称される大山の南西に位置し、江美、根雨、黒坂、生山と日野川沿いに宿場が残り、米子から岡山県高梁、倉敷、岡山方面や、岡山県津山方面へ抜ける街道として重要視された。亀井山城の麓には2000年（平成12年）の鳥取県西部地震によりその後移転した日南町役場が存在した。

亀井山城跡は石垣が導入された城郭で、伯耆国には他に米子城跡（米子市）、江美城跡（江府町）、黒坂城跡（日野町）、八橋城跡（東伯郡琴浦町）、打吹城跡（倉吉市）、羽衣石城跡（東伯郡湯梨浜町）がある（第2図）<sup>33</sup>。他にも2・3段の石を積んだもので裏込石を伴わない戦国期の石垣が存在するが、ここでは天正から慶長期の石垣を対象に検討する。

石垣を持つ城郭は、概ね天正後半期～文禄・慶長期の吉川期、関ヶ原以後に入部した中村期の頃に築かれた可能性があるが、その後1610年（慶長10）の中村氏改易後、米子には加藤貞泰、黒坂には関一政、八橋には市橋長勝が入っているため、このあたりの時期に築かれた可能性もある。しかしながらこれらの石垣が具体的にいつの時期に構築されたものか十分に検討は行われていない。亀井山城跡以外の諸城のうち、米子城跡は平成18年に国史跡に指定され、近年発掘調査が一部行われるなど研究の進展がみられる<sup>35</sup>。江美城跡では銀杏段で発掘調査が行われ金箔瓦が出土しているが、その位置づけについては諸説ある<sup>36</sup>。その他、西伯耆における織豊系城郭についての検討が行われているが、亀井山城跡については大規模に石垣を導入した城郭であるにもかかわらず、他の諸城のように登城路などが整備されておらず、研究史上でも触れられることもなく、ほぼ等閑視されてきたとあってよい。縄張り研究による成果もあるが石垣についての検討が全く行われておらず、石垣を持つ城郭ではその積み方や構築形態についての議論無くして語ることはできない<sup>38</sup>。

そこで本論では亀井山城跡の縄張り調査及び石垣の検討を行うことで、伯耆国における織豊城郭の検討の試論とし、出雲国における織豊城郭との対比が行える下地を整えるとともに、毛利及び吉川氏、中村氏における城郭政策についても触れたい。

#### 1 亀井山城の歴史

この城の築城時期の詳細は不明であるが、『伯耆志』<sup>39</sup>には里人の伝承として、天正年中（1573～92）に吉川広家が在城し、その後山名和泉守景清が入ったと記す。しかし『日本歴史地名大系第32巻 鳥取県の地名』では、『伯耆民談記』に山名和泉守景清を久志路大和守景清としていることをあげ、吉川氏のときには久志路氏に亀井山城を守らせた<sup>38</sup>と考証している。それは天正年間から慶長5年までとし、その後中村氏の時には断絶し、

慶長 15 年に関氏が当城へ入ったのち、黒坂城へ移ったという。しかしながら 1 次史料では亀井山城の歴史について明らかにしえない。ただ、永禄 11 年 5 月 4 日付「杉原景盛書状」(関関録)によると、柏村就清が「生山表」において、「宗徒之敵」を鉄砲で撃退している記録が見える。また永禄 5 年 6 月 18 日付「毛利元就・隆元連署書状」(『萩藩関関録』未確認)によると、「伯州之儀日野本城之事、山名摂津守殿久代出候而仕取候、雲州番衆中井平三兵衛尉・米原平内罷退候<sup>40</sup>」とあり、「日野本城」が登場する。永禄 6 年尼子氏が河岡・尾高両城へ攻撃した際に、毛利氏は山名藤幸に両城近辺への出陣を要請し、手薄となる日野郡へは上原豊将を派遣するよう命じている。永禄 7 年 8 月に江尾城の蜂塚氏が毛利氏の杉原盛重によって滅ぼされるが、その際、山名藤幸は毛利に背いた日野衆の一員として蜂塚氏を助勢している。これらの史料からは、直接亀井山城の記載はうかがえないが、吉川期の伯耆国内における城館関連史料に、「伯耆手間・保昌寺・日野・黒坂・小田加、是等之吉川留守居<sup>42</sup>」とあり、「日野」と「日野本城」と亀井山城との関係が注目される。後に詳しく触れるが、文禄四年四月三日付「豊臣秀吉朱印状<sup>43</sup>」によると、「西伯耆国之内日野山ニ銀子出来」と見え、西伯耆において銀山の存在が確認できる。これは現在の鳥取県日南町大倉山麓に存在した日野銀山と推定され、亀井山城と至近の距離であることから、「日野」「日野本城」は亀井山城である可能性が高い。

文政年間に記された『因伯古城跡図志』(鳥取県立博物館蔵)には、「生山村亀井山古城跡関長門守居城其後黒坂へ引由竹木草有巖石ニテ險峻也高七十一間位麓ヨリ上り百四十間計山形余程大也山下ニ大川有西北間下石見村谷ヨリ出ル川有同村へ通山道有古城山下ハ谷幅狭」とあるが、関氏入城以前の具体的様相については不明といわざるを得ない。

## 2 亀井山城の構造

亀井山城の現地調査を踏まえた縄張り図が第 15 図である。亀井山城の構造は最高所の主郭 A を中心に東西南北に遺構が広がる。特に A～F は法面に石垣が構築されている。それ以外、石垣は見られないが、岩が露出するなど山全体が岩がちであることがうかがえる。主郭周辺に築かれている石垣は、周辺で産出する石を用いたと考えられる。

主郭 A の西北側は方形に成形された区画 a がある。a の南東側には L 字に構築された石垣が残る。A の東側はやや高まった区画も見られる。A の北側法面には高さ 2 m ほどの石垣が築かれている。A の北側には方形に成形された b、c が存在する。隅角部の確認できるところが 2 か所あり、算木積の志向性もうかがえる。また階段と考えられる石列もあり、c から b が主郭 A に入る虎口と判断される。またこの周辺にはこの城に用いられている石垣の石材と比較して、かなり大型の石が数多く存在していることも特筆される。b の北側法面には北側部分は崩落により不明確だが、3 段に石垣が構築された形跡が確認できる。A の東から南、西にかけても 2 段の石垣が構築されている痕跡が残る。西側法面では石垣を継ぎ足したように縦に目地が通る部分がある。しかしこの左右の石垣の積み方には差

はなく時期差は見出しがたい。そのため継ぎ足しではなく、石垣構築の際の工区である可能性も残す。向かって右側は石材の左右の振り分けも見られ、算木積を志向している。Aの南側は隅角部がシノギ積みになっており、この周辺は地形に合わせて構築しているようで、一部に小尾根が張り出す部分は石垣が見られない。つまり主郭Aの北側法面と東・南・西法面の石垣には明らかに異なる積み方をしている。

Bはこの城でもっとも大きな曲輪である。北側法面には石垣が残る。この石垣がAのb・c北側法面の石垣と続くかどうかは現地では確認できなかった。

Cには虎口と考えられる部分があり、両側に石垣が構築されている。ここから北側の谷へ降りる道があり、小曲輪がある。おそらく谷を登ってくる登城路があると考えられる。他にD、Eにも石垣が一部に残るがEの石垣はかなり崩落した石材がある。B・C・Dの西側には石垣の痕跡を見出せなかった。またFにはこの城でもっとも高い石垣が残り3m程度確認できる。

このようにA～Fは2～3段に構築された痕跡がうかがえ、現状からうかがえる石垣をもとに推定復元した亀井山城中心部の様子が第16図である。

全体として谷部分では現存3m程度の高石垣とし、そのほかは2～3段に段築している。主郭A・Bの北側石垣の隅角部では算木積を志向し、角石が築石より特化している傾向があるが、南や西側のものはあまり差がなく、シノギ積の部分がある。

A～Fがこの城の最終段階において、石垣化された中心部分である。この他Eの先は大きな岩盤が露出しG・Hが存在する。Gは比較的曲輪面積が大きい。Qも石垣は存在せず、その先には小曲輪がつく。Fから北側は急傾斜となり、堅堀を越えてRがある。この周辺は細い尾根で小さい曲輪が点在し、側面に越曲輪を回しているところもある。さらに北へ自然地形の細い尾根を降りていくとSを中心とした曲輪群がある。Sの南側には一文字の土塁がある。ここから山頂へ向けて尾根沿いに点在する小曲輪の側面に道が続くが、谷へ降りてCの虎口へ続く道がある可能性がある。Sの北側は急傾斜となるが、北東側の小尾根には2本の堀切が確認できる。堀切は主郭Aの南東側へ延びる尾根においても2本確認できる。

つまり石垣化される以前の城は、各所に岩盤が露出し、断崖絶壁となる天然の要害であった地形に、いくつかの曲輪群に分かれ、一部に堀切が導入された中世的な城であったと考えられる。その後、A～Fを石垣化した城と考えられる。

またSは山麓に近く、比較的広い面積を保有し、虎口に付随すると見られる一文字状の土塁があり、館として利用された可能性がある。

### 3 亀井山城の石垣

(構造)

亀井山城のある山塊は花崗岩で、周辺には奇岩、怪石で知られる石霞溪がある。亀井山城の石垣はこの山でとれる石材で構築されており、扁平に割れる石材を用いている。

亀井山城の石垣には大きく2種の積み方で構築されている。ひとつは算木積を志向し、角石が築石よりも、大きい（長い）石材が用いられている（新相）。もうひとつはシノギ積みで角石と築石がほぼ同等の石材で構築されている部分である（古相）。また高石垣となっているのは谷部分のAとFの北側法面だけで、後は2～3段に構築されている。ただ試みに新相、古相を時期差としたが、構築主体が変わるほどの時期差とはしがたい。

新相としているのは、主郭Aと、b、cの北側法面石垣で一部に隅角部が確認できるところと、主郭A西側の法面の2段構築の下段における、石垣に縦の目地が看守できる部分である。古相としているのは主郭A南側の部分に代表される。つまり同じ主郭でも様相の異なる積み方がされているのである。

注目されるのはa、bの主郭Aへの虎口と考えられる部分である。この周辺には亀井山城の石垣石材のなかでも、格別大きな石が点在している点である。また主郭Aの周囲では2～3段にセットバックする形で石垣が構築されている点も注目される。

（構築時期）

それでは亀井山城の石垣化を行った構築主体や時期について検討する。

一般に石垣の年代観は、積み方や石材の加工度によって判断するが、地域によってもその表れ方には多様性がある。主に織豊政権支配下では算木積が明確で石材も大形化していくが、毛利領国下では全般的に織豊系の石垣構築は低調であることが指摘されている。<sup>44</sup> 中国地方の石垣の検討については乗岡実の成果によるところが多いが、吉川元春館での事例のように、天正年中には高さ3mほどの石垣を築いており、地域に根差した石垣構築技術が醸成されていた。また吉川氏の居城である日野山城でも石垣が構築されている。亀井山城の歴史を踏まえると、石垣構築の可能性のあるのは、吉川広家期（慶長5年・1600年まで）か、慶長5年（1600）の中村一忠伯耆一國拝領時、慶長15年（1610）の関一政の黒坂入部の段階が考えられる。そのため、改めて周辺での事例検討をもとに構築時期を検討する。

亀井山城では主郭を中心に2段ないし3段に構築された石垣が確認できる。米子城飯山（采女丸）では、3段に構築された石垣があり、<sup>45</sup> 月山富田城三ノ丸でも3段に構築されている。これらの石垣は吉川広家期のもものと判断されており、亀井山城での事例と共通性を見出せる。亀井山城の石垣は隅角部では算木積を志向するとはいえ、左右の振り分けは徹底していない。むしろ戦国期の石垣に近い要素を持つ。主郭A西から南・東側では、旧地形に合わせる形で石垣を構築しており、富田城などの事例と比較すると中村期や関期まで年代を下げるのは無理がある。しかしa、bという主郭Aへの虎口では枳形となり、大形の石を交えるなど見せる効果を考えている。そのためいわゆる戦国期的なものから、象徴としての虎口となっているのがうかがえる。

亀井山城では、これまで瓦は1点も採集されていない。周辺では江美城で発掘調査が行われ、金箔瓦や軒丸瓦、軒平瓦や陶磁器類が確認されている。これらの瓦はコビキAである。また亀尾山城では採集瓦のみ知られているが、<sup>46</sup> 部分的な石積みを確認されるの

みで、江美城や亀井山城のような石垣は見られない。瓦はコビキA丸瓦が含まれている。このように亀井山城を含め周辺に存在する石垣や瓦が出土する城館では、石垣はあるが瓦がない（亀井山城）、石垣はないが瓦がある（亀尾山城）、石垣、瓦ともに存在する（江美城）など多様な姿を見せる。

出雲国での堀尾氏の支城体制についての事例検討でも、堀尾氏は入部当初富田城へ入部し、後に松江城を築き移っているが、出雲国内に三刀屋城、瀬戸山城を支城としているが、瓦は三刀屋城、瀬戸山城ともに見られず、石垣は両者ともにあるが、三刀屋城は矢穴をとまなう石垣で堀尾氏入部段階の様相として妥当だが、瀬戸山城には矢穴は見られない<sup>47</sup>。このように領内の支城の在り方も多様であることがうかがえる。そのため年代特定には困難が伴うが、亀井山城の所在する位置は、いわゆる天正13年の中国国分後の東側防衛ラインに近接している。江府町江美、根雨から岡山県側の新見市や津山市へ抜ける重要な街道で、亀井山城のある生山は広島県庄原市へ抜ける街道であった。このような地理環境のため吉川期にはこの街道は大変重要視されたことは想像に難くない。この街道上にある江美城、亀井山城、亀尾山城に見られる石垣や瓦は、このような政治状況が背景にある可能性を考えたい。吉川期の伯耆国内における城館関連史料には、「伯州手間・保勝寺・日野・黒坂・小田加、是等之吉川留守居」（武田文書 天正20年（1592））というものがある。手間（手間要害・米子市）、保勝寺（法勝寺城・米子市）、日野（日野郡内の城館）、黒坂（黒坂城・日野町）、小田加（尾高城・米子市）と考えられるが、江美城、亀井山城（生山城）の名は見られない。日野については日野郡内であることは予測できるが、具体的にどの城のことを指しているかはこの史料からは不明である。しかし江美城については、尼子氏と毛利氏との戦いの中で、蜂塚氏が尼子方につき激しい戦いが行われており、その関連文書の中では「江美之城」「江尾要害」「蜂塚城」「蜂塚要害」という名称で登場しており、「日野」は別の場所である可能性がある。永禄5年6月と推定される毛利元就・隆元連署書状には「日野本城」という記載があり、境目であるため大事であるとしている。その後も永禄6年～7年にかけて日野には毛利家臣である上原右衛門太夫が入っていたと考えられる。そのため江美とは異なる地点で「日野」と呼称される城の存在が想定される。そのため「日野」は亀井山城である可能性が高い。

天正19年に吉川広家が出雲3郡、伯耆3郡、安芸1郡を与えられるため、これが大きな契機となっている。しかし月山富田城での石垣の検討から、算木積の志向性が登場するのは、吉川期でも後半と考えられる。亀井山城でも算木積の志向性、2～3段にセットバックする石垣という点で共通項があり、吉川後期に位置づけをしたい。

#### 4 亀井山城の石垣化の意味

亀井山城のある位置は、吉川広家領の国境に直接、接しているわけではない。また同じ日野郡内では江美城や黒坂城も存在する。それではなぜ亀井山城が石垣化されたのであろうか。その理由として考えたいのが、日野銀山との関係である。この日野銀山の眼

前には石見川が流れており、これを下流へ下ること5kmの位置に亀井山城がある。

文禄4年4月3日の亀井茲矩宛豊臣秀吉朱印状に、「西伯耆国之内日野山ニ銀子出来之儀見立段尤候 早々為掘之有様付記御公用令取沙汰可運上之也」とある。これは現在の日野郡日南町の大倉山の南西麓に存在した「日野銀山」と考えられている。この場所は吉川領であるにも関わらず隣国の亀井氏がなぜ開発できたのか不明な点は残るが、翌文禄5年と推定される3月13日付安国寺恵瓊自筆書状（吉川家文書）に、「伯州銀山」の経営権を認める朱印状を吉川広家に与えるよう働きかけており、その結果9月7日に広家に「日野之内銀山」の経営が吉川広家へ移されている。『伯耆志』によると、慶長年中に亀井氏による銀山開発によって是次村から分村し銀山村があったと記す。慶長18年には関主馬正が下石見村の大蔵大明神宮山の銀山用木を含む竹木伐採を禁じている。

### 小結

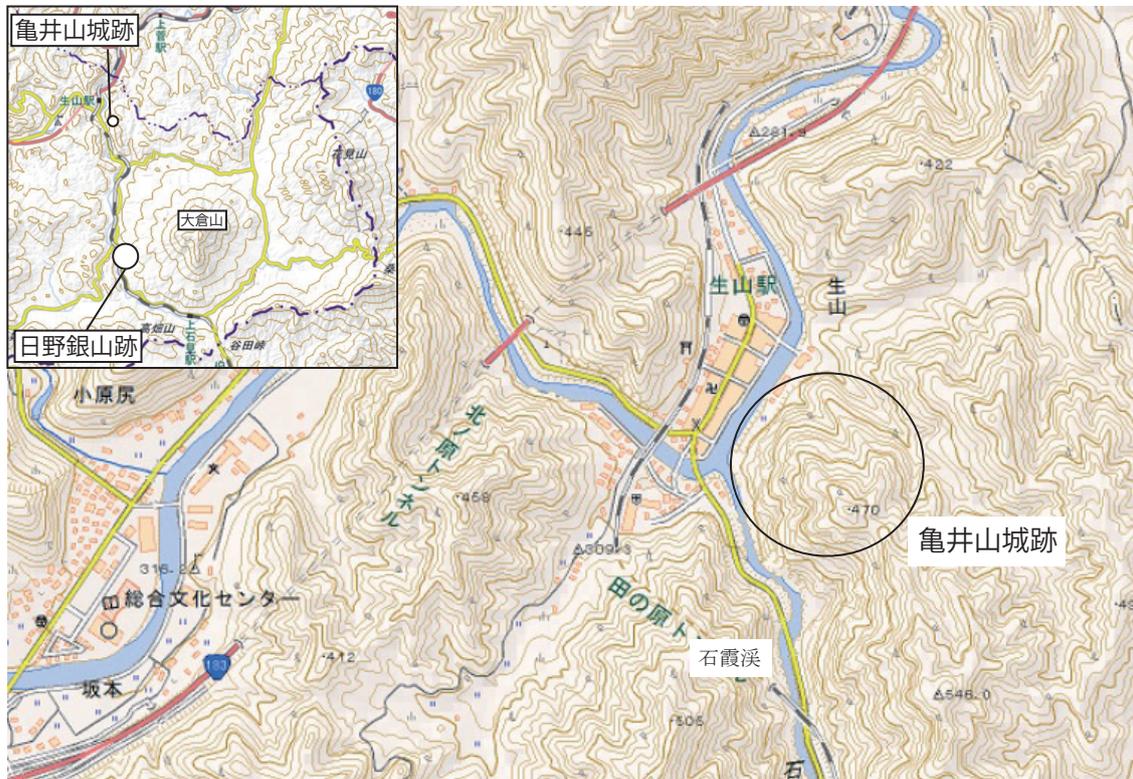
亀井山城はこれまで縄張りについての調査は行われているが、石垣が存在するにもかかわらず十分な調査が行われてこなかった。本論では不十分ながらも、3段にセットバックして築かれた石垣や、虎口周辺での大形の石材が用いられていること、算木積の志向性などを指摘した。これらは米子城や月山富田城での石垣の在り方などと比較して共通点も多く、吉川期と判断した。その構築の意味として文禄期に開発された日野銀山との関連の可能性を想定した。

### おわりに

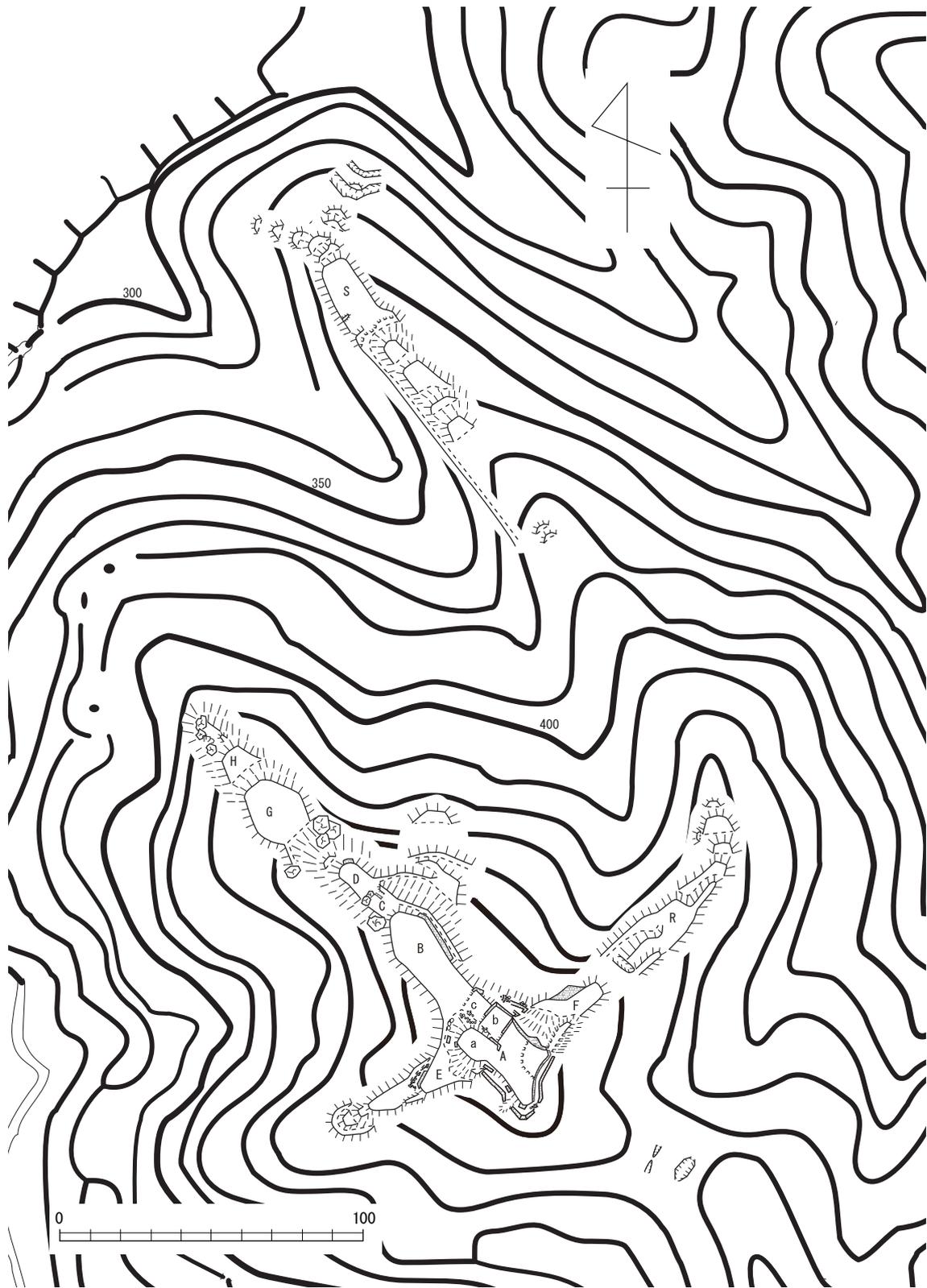
山陰の城館研究は、亀井山城に関する研究のように石垣を持つ城館であるにもかかわらず、ほとんど学術研究が行われていないものも存在する。近年米子城について登り石垣や城域内での発掘調査が行われたが<sup>48</sup>、その他は打吹城での石垣、瓦に関する研究や<sup>49</sup>、江美城に関する研究など<sup>50</sup>に限られ、全国的にみると課題が多い。今回亀井山城についての検討を行ったが、今後、江美城や米子城との関連性などについても考察を進める必要がある。また毛利領国内では、今回扱った真山城以外にも、温湯城など数多くの城が少なくとも天正後半まで維持されている。それらについても考察を進める必要があろう。課題が多いが、今後二期したい。



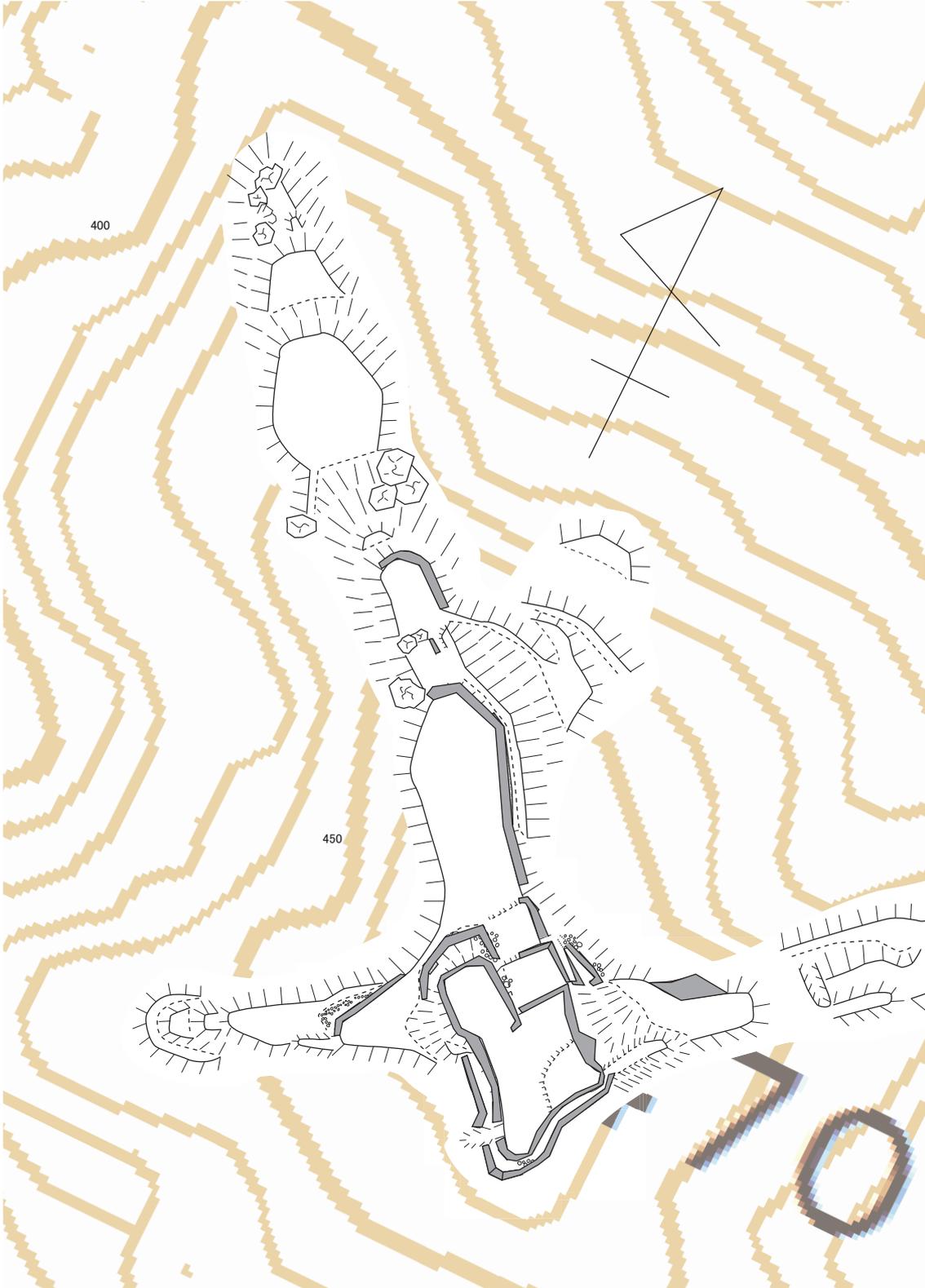
第12図 日野郡位置図



第13図 亀井山城跡・日野銀山位置図



第15図 亀井山城縄張り図（アミカケは石垣）



第16図 亀井山城中心部復元図（アミカケは石垣）



A 東側の高石垣



b 東側の段築された石垣（左奥に2段目の石垣が見える）



a 南東の石垣L字部分



A 東の高石垣(奥にbの張り出した石垣が見える)



A 南側のシノギ積石垣



b 西側の大型石材



c 東側の石垣隅部



A 西側の石垣縦目地の通る部分

- 1 鳥取市歴史博物館やまびこ館 2008、岡村吉彦 2007、岡村吉彦 2009
- 2 近年、米子城跡、富田城跡については継続的に発掘調査が行われ、次第に様相が明らかになりつつある。
- 3 島根県教育委員会 1997・1998、鳥取県教育委員会 2002・2004、寺井毅 2012 年、高屋茂男編 2013・2017 などで、縄張り図が掲載されている。
- 4 中森祥・西尾克己・守岡正司 2013、廣江耕史 2013、中森祥 2009、2012、2013、2014、古賀信幸 2013、村上勇 2013 など)
- 5 城郭談話会 2000、舟木 2013、小都 2013
- 6 黒田慶一 2000、山崎敏昭 2008
- 7 西尾孝昌 2013
- 8 黒坂城は山城部分と山麓に石垣を伴う遺構を有している。高田徹 2000 では、関氏が黒坂城へ入る前にいた伊勢の城郭との共通点から山城部分における関氏の改修を検討している。
- 9 伊藤創 2013
- 10 中井均 2012、2013
- 11 井上寛司 1997
- 12 広島県教育委員会 1994b、北垣聰一郎 1997
- 13 岩橋孝典 2014
- 14 木原光 2014
- 15 宮田健一 2012
- 16 中井均 2012、2013
- 17 加藤理文 2012
- 18 伊藤創 2009a
- 19 加藤 2012 では秀吉死去後に位置づけ、伊藤・西尾 2009 では吉川期と判断している。
- 20 高田 2000 では、関氏や一族の城である伊勢国鈴鹿郡新所城と鹿伏兎城が、連続する曲輪を土塁によって一体化する形態が、黒坂城山上部の遺構と共通する。
- 21 中井 2015 では、山麓部の石垣が完成された算木積で間詰石をほとんど用いないことから、慶長 14 年の関氏入部段階ではなく、さらに年代をさげ鳥取藩池田氏の家臣福田氏が入部した寛永 9 年に位置づけている。同じく矢穴が見られる石材がある八橋城の石垣も寛永 9 年の津田氏入部に位置づけている。
- 22 真山城は史料では「新山城」として登場することが多いが、現在現地案内版や『出雲の山城』（ハーベスト出版)でも「真山城」として紹介していることから、「真山城」と統一をする。ただし史料上の記載については「新山城」と表記する。
- 23 馬部隆弘 2002、高屋茂男編 2013、村田修三編 1987
- 24 村田修三編 1987
- 25 『雲陽誌』(『大日本地誌大系』第 27 巻 1930)
- 26 松陽新報社『雲陽軍実記』 192
- 27 吉川元春書状写 (『内海文化研究所紀要』 16 七三)
- 28 毛利元就書状写 (『閩閩録』 11 浦図書 15)
- 29 毛利輝元書状 (「野村家文書」・古代出雲歴史博物館蔵)
- 30 毛利輝元書状 (「野村家文書」・古代出雲歴史博物館蔵)、吉川元春・口羽通良・志道元保連署書状案 (「多賀家文書」早稲田大学蔵)
- 31 馬部隆弘氏は、「大事之御山～置せ度御事候」の部分に関しての解釈で、大事な山なので城督を置

いたのか、大事な山なので曲輪単位で在番する衆を五、六人置くということか、解釈が難しいが城督の事例の少なさから前者ととらえている。筆者もおおむね賛成で、大事な御山なので、城督を置くが、さらに番衆を五、六人置く解釈したい。馬部隆弘「城郭支配政策からみた戦国期毛利氏の権力構造」(『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社)

32 地元では狩野稔夫 1979 の研究がある。

33 米子城、八橋城、江美城、打吹城については、伊藤創 2009ab、伊藤創・西尾克己 2009、2013、木地谷了一 2011 などの研究がある。

34 高田 2000 年、伊藤・西尾 2009、伊藤・西尾 2012 によって、個別城郭の検討が行われている。また中井均 2015 では矢穴を伴う八橋城の石垣などは寛永期に位置づけられている。

35 米子市教育委員会「史跡米子城跡発掘調査現地説明会資料」(2017 年 4 月)、米子市教育委員会「史跡米子城跡発掘調査現地説明会資料」(2016 年 3 月)、濱野浩美 2017 などの発掘調査によって「登り石垣」や築城期と見られる石垣が確認されるなど、次第に米子城跡の様相が明らかになりつつある。また米子市教育委員会「山陰三城跡シンポジウム」(2017 年 11 月 11 日)、城下町科研・米子研究集会「中近世移行期の山陰東部における都市・地域・権力ー因幡・伯耆・出雲ー」(11 月 19 日)を通じて一般への普及啓発や研究者間の意見交換も活発になりつつある。

36 江美城は山陰で唯一金箔瓦が発見された城郭で、江府町教育委員会 1982、江府町教育委員会 1998 にその成果が報告されている。瓦は今のところコビキ A だけが確認されており、山陰地方ではコビキ A からコビキ B への転換は関ヶ原以降と考えられる(伊藤創 2013)ので、金箔瓦は吉川期と位置づけできるが、その背景については結論を見ない。乗岡実 2015c、花谷浩 2017、加藤理文 2012e、伊藤創・西尾克己 2009

37 伊藤創・西尾克己 2009、伊藤創 2009a

38 寺井毅 2005 では、石垣や天守台が確認できる城郭を全て中村期と短絡的に規定しており、後に寺井毅 2012 においても、石垣や出雲国内で類例の少ない縄張りを持つ城を堀尾期と位置付けている。戦国期には地形の制約を受けながら、さまざまな政治状況の中で築城が行われているので、縄張りの分類でイレギュラーなものは数多く存在するため、十把一絡げで堀尾氏の改修と位置付けることには問題がある。況や堀尾期、中村期の前段には吉川広家が支配した時期もあり、吉川期には富田城での事例のように檜台が築かれており、論証手法的にも問題があるのは明らかである。

39 景山肅雍卿『伯耆志 卷五』国立国会図書館デジタルコレクション

40 (永禄 5 年) 6 月 18 日付「毛利元就・同隆元連署安堵状写」『出雲尼子史料集』1154

41 (永禄 6 年) 7 月 23 日付「毛利元就書状写」『出雲尼子史料集』1236

42 天正 20 年正月 11 日付「毛利輝元条々写」武田金三氏所蔵文書『広島県史』古代中世資料編Ⅳ)

43 文禄 4 年 4 月 3 日付「豊臣秀吉朱印状」(「亀井家文書」『新鳥取県史 資料編古代中世 1 古文書編 下』

44 乗岡実 2016

45 伊藤創 2009b

46 伊藤創・西尾克己 2009 ほか、伊藤氏とともに日南町多里に所在する「ホームランド多里」にて展示中の丸瓦を実見した。

47 中井 2018b

48 米子市教育委員会 2017

49 木地谷了一 2011

50 伊藤創 2009a

## 第4章 出雲月山富田城の構造と位置付け

### はじめに

月山富田城跡は尼子氏の居城として知られ、尼子氏の毛利投降後は、毛利家臣の天野隆重、毛利元秋、末次元康、吉川広家などが続いて入り、関ヶ原の戦いの後、堀尾氏が入っている<sup>1</sup>。吉川氏、堀尾氏段階には石垣造りに大規模な改修が加えられている。

堀尾氏は当初、富田城へ入りその後松江城を築き移り、富田城、三刀屋城、瀬戸山城を支城として維持した<sup>2</sup>。その後富田城は廃城となったため、江戸初期の遺構が非常によく残されている。そのため中世から近世初頭にかけての城郭の変遷を把握する好例である。

石垣は廃城によって壊されている部分があるものの、全体として残りは良く、近年の発掘調査によって当時の石垣が明らかとなり重要な成果となっている<sup>3</sup>。それによって従来の遺構評価を改めねばならない点も出てきている。また近年『松江市史』の編纂に関連し『松江市史 別編1 松江城』が刊行され、様々な角度から検討が試みられているが、富田城についても詳細に検討されている<sup>4</sup>。富田城はこれまで山上の本丸、二ノ丸、三ノ丸の他、山中御殿、花の壇、千畳平などで発掘調査が行われてきたが、全体的な縄張り研究は地表面観察によってきた<sup>5</sup>。唯一考古学的観点から富田城の遺構全体を検討しているのが小都隆である<sup>6</sup>。小都は毛利氏の本拠である吉田郡山城の在り方との比較により、Ⅰ期からⅢ期に分類する。確かに毛利氏のように山稜の最も高いところではなく、麓に近い尾根先のピークに居城を構え、勢力拡大に応じてより高いところに中心を移し、山全体を城郭化する動きは、丹波波多野氏の八上城などにも同様に確認できるのである<sup>7</sup>が、富田城の所在する月山の山麓は比高の低いなだらかな丘陵となっており、他の戦国大名の居城が所在する山と同様ではない。改めて考古学成果、石垣調査、縄張り研究の成果を踏まえて検討の必要性がある。そこでこれら最新の研究成果に依拠しながらも、改めて広大な城域を持つ富田城の縄張りについて再検討し、その意義について考えたい。

### 第1節 遺構と形態

ここでは地区ごとに分けて概要を把握するが、通称名がある曲輪についてはそれに依拠し、無い地区については任意で記号をふって解説をする。また、この通称名はあくまで伝承であるが、実際に現地での案内でも用いられており、その対応性からもこの名称を用いるが、本来ならば「伝本丸跡」のように表記すべきだが、煩雑になるため「伝」「跡」は全て省いて表記する。また発掘調査成果については末尾にあげた成果が代表的なものである。

## 1 山頂部エリア

山頂部エリアは本丸、二ノ丸、三ノ丸、西袖ヶ平で構成され、通称「月山」と呼ばれる標高 183m を中心に展開する。

### 本丸

本丸はその中でも最も南側に位置し、勝日高守神社が存在する。現状で約 170 m の長さがあり、富田城内では山中御殿、千畳平について大きい曲輪である。中央部北側には曲輪の輪郭に沿って大きな土塁がある。現在山中鹿介幸盛の記念碑が建てられている。この部分の南側には枡形虎口と言われる大きな石が露出する方形の窪みがある。この土塁と方形の窪みある部分の東西で地形の高低が確認でき、曲輪が分かれる可能性がある。また勝日高守神社の部分も地形の高まりが認められる。本丸は全体的に石垣があまり見られないが、土塁の北側にある小曲輪、本丸の西端、神社の周辺に確認できる。神社の前面や本殿後方南側などは後世の石垣と考えられるが（写真 1）、その他の石垣は城郭に伴うものと考えられる。

本殿後方北側には大ぶりの石が用いられた石垣が見られ（写真 2）、同じく本殿後方の平坦地に、南西に向かって礎石のように直線的に石材が並んでいるところがあり、最も南には面をあらわにした石材がある（写真 3）。図 3 のように東側の石垣とつながり、コの字状の形態を有するものと判断される。さらに南東側の小曲輪の下方には 2 m を超える石垣がある。この石垣は裏込め石を伴う。この石垣は隅部が崩落しているが、平面がコの字状を形成していると考えられる。また本丸北側斜面の小曲輪でも石垣が確認されている。

本丸北西側斜面部分では発掘調査が行われ、トレンチ 1 では複数の加工段が構築されており、多数のピットが確認されている（図 5）。本丸へのルートはこの加工段によって屈曲すると推定されている。トレンチ 2 では 1 8 2 m ラインで裏込めのない石垣が確認されている。この石材の上ではコビキ B の瓦が確認された。

コビキとはコビキとは、瓦を製作する際に、粘土の塊から粘土板を切り出す際に、撚糸を使って切り離す技法をコビキ A、鉄線をつかって切り出す方法をコビキ B と呼ばれる。コビキ A は撚糸による切断面に斜めの痕跡がのこるが、コビキ B は水平に切断痕が残る。この技術革新は地域によって移り変わる年代に違いがあるが概ね 1 6 世紀後半である。山陰におけるコビキ B の瓦の年代観は 1600 年前後にコビキ A からの転換が行われると考えられているので、吉川期最末期から堀尾期のものと判断される。

現状ではこの二ノ丸に面した部分では石垣は確認されていないが、トレンチ 2 では裏込め石のない石垣が確認されていることから、本来は数段の低い石垣が積まれていた可能性もある。神社境内に使われている後世に積まれた石垣の石材は、大ぶりなものが用いられており、本丸内で使用されていた石材が運ばれたと推定される。

従来、二ノ丸や三ノ丸に対して、本丸では石垣が地表面上で確認されないことから、本丸は吉川段階にはあまり使用されなかったように推定する説もあったが、むしろ積極

的に利用されていると肯定してよいと考えられる。

## 二ノ丸

二ノ丸は本丸とは大きな堀切で分断されており石垣が築かれている（写真4）。二ノ丸は全体的に石垣が導入されているが、東側は一部しか認められない。恐らく三ノ丸から二ノ丸西側に通路があるためそれを意識したものであろう。西側に虎口が設けられており、枡形虎口を形成している。三ノ丸とは通路は確認されておらず、分断されていたとの見方もあるが、高低差はあまりない。発掘調査によって礎石建物跡と掘立柱建物跡が確認され、礎石建物跡と推定される位置から備前焼の埋め甕が2点確認されている<sup>10</sup>。

現状は発掘調査成果をもとに建物跡の表示が行われるとともに整備が行われ、東屋が設置されている。

## 三ノ丸・西袖ヶ平

三ノ丸は二ノ丸同様西側にのみ石垣を用いている。全長80m近くあり、本丸に次いで大きい。北東部に石垣を用いた虎口を設けており、北側の石垣は3段になっている（写真5、6）。発掘調査によって中央部分に堀切があったことが確認されている<sup>11</sup>（図6）。また帯曲輪では建物跡（SB01）も確認されている。石垣の外側には幅1.4mの通路状遺構が確認されている。

この帯曲輪の建物跡（SB01）が見つかった遺構面（第1遺構面・図7）では、瓦は出土せず鉄くぎが多数出土しており、糸切底の土師器皿が出土しているのに対して、さらに深い第2遺構面では京都系土師器のみが見られることが注目されるとともに、炭が一面に見られる（図8）。この炭の層は尼子氏が下城した頃と判断される。

西袖ヶ平は三ノ丸からさらに北に延びる尾根上にあり、北半分をコの字状に石垣を施している（写真7、8）。西袖ヶ平は三ノ丸の東側までつながっており、ここに山中御殿へ降り口がある。その脇には石垣が確認できる。

## 2 山中御殿、花ノ壇

富田城で最も大きな面積を有する曲輪である。大きくS-1、S-2の二つの曲輪に分かれ、S-1は北側から中央部分まで大きくえぐれている。南側には山上部へ通じる通路がある。北側の石垣には虎口と考えられる場所が石垣によって埋め込まれている（写真9）。S-1の西側には塩谷口虎口があり、発掘調査によって姿を現した（図9）。外から入ると左右に階段がある構造である。S-2は石垣が石塁状になっており南側に菅谷口虎口と山上へ上る通路がある。つまり菅谷口虎口を入れて、S-1へ入らずにそのまま山上へ行くことができる構造となっており、両者は一体の曲輪ではあるものの、主従でいえば、S-1が主、S-2従の関係となる。S-1は上御殿屋敷、S-2は下御殿屋敷に該当する。S-1から北西側に尾根は伸びるが、石垣によって区画している。その西側に花ノ壇側に行く虎口がある。

花ノ壇とは堀切によって分断され、発掘調査によって堀切の西側に通路が確認されている。山中御殿北面石垣の中には矢穴の痕跡のある石材があり（写真10）、この部分は堀尾期に改修されたことが判断される。菅谷口虎口及び周辺の石垣は石畳状になり、打込接で築かれ富田城内で最も新しい要素を持ち、その上には建築物が建っていたと推測される（図10・11・12）。

花ノ壇は山中御殿S-2の北側虎口から尾根の西側を通過して至る。山中御殿と花ノ壇の間には堀切に挟まれた曲輪も存在し、現在ここには便益施設としてトイレが設置されている。西面に石垣が確認され（図14）、西端に出入り口が確認されている。花ノ壇の西側虎口付近には石垣が確認できるが、全体として石垣の普請は限定的である。花ノ壇東側へ延びる尾根にも小曲輪があるが、近世的な普請は見られない。発掘調査では堀切北側で建物跡が確認され（図13）、西法面では屈曲した通路に石垣が構築されている（写真11、図15）。なお花の壇は別名「宗松寺成」という。富田城と谷を隔てた北側山麓に宗松寺跡があり、毛利元秋墓所が存在する。富田城の曲輪名は伝承であって信憑性は低いが、毛利元秋在城時には、山中御殿はもっと小規模であったと考えられるので、花の壇の位置が毛利元秋の居所であったためかもしれない。

### 3 奥書院、太鼓壇、千畳平、馬乗馬場

これらの曲輪群は花の壇から北側に展開している。山中御殿側から順に、花ノ壇、奥書院と続き、奥書院から北へ延びる尾根（a）と太鼓壇、千畳平の尾根に分かれる、また太鼓壇から北には馬乗馬場がある。

奥書院は花ノ壇同様、基本的に石垣は見られない。東へ延びる尾根（a）も小曲輪が点在し、堅堀が2条、堀切が確認でき中世的な要素を残す。しかし北東側に延びる尾根（北東曲輪）は堀切で奥書院とは隔絶され2段の曲輪に分かれ、先端部分には屈曲をともなう石垣が構築されている。先端部分は城下町側から見える部分にあたる。

太鼓壇は現状で民家も建ち、山中鹿介の像なども建立されており、全体的に改変を受けている可能性がある（写真12）。

千畳平は近年まで近代の建物が残されていたが、撤去後、発掘調査が行われ大きな成果が出ている（図16～23）。これまで千畳平は北側を中心に石垣が確認されており、方形に仕上げられた区画が確認できていた。しかし発掘調査によって西側で2ヶ所、方形の区画が確認され、富田城の中でもかなり近世的な景観となっている（写真13、14、15）。この石垣は裏込め石が確認できる。また谷部分（石垣1-6）には13mにおよび石垣が構築されている。千畳平で確認された方形の区画は櫓台と考えられ、発掘調査によって瓦が出土している。

馬乗馬場は長さが約150mあるが、幅20mほどの細長い曲輪である。しかし東側には高さは2mにも満たないが、20mにわたり石垣が築かれている。西側部分には2か所の方形の区画が確認できる。ともに石垣で構築されている（写真16、17、18）。周辺は崩落して

いる部分も見られる。

#### 4 大東成、能楽成、巖倉寺

このエリアは民家や寺院、田畑などによって地形の改変を受けていると考えられる。山中御殿より (b)、(c) を経由して能楽成、巖倉寺にかけてが主たる尾根となり、能楽成より南西側に延びる尾根に大東成がある。(b) は通称「大土塁」と呼ばれる高さ 2m、長さ 35m ほどの高まりがある (図 24)。しかしこの東側は畑などで開墾されており、削られた結果土塁状になっている可能性もある。それはこの北側が能楽成へ通じる道として堀切状に削られている部分があり、その先の北東側にのびる小さい尾根 (d) と同様に曲輪状であった可能性もある。(d) との間は堀切で遮断されていた可能性があり、現状では道となっている。土塁か細い曲輪状であったかはともかく、その役割としては、塩谷口から入ると、左手に大東成が見え、その先で二股に谷が分かれるが、正面に大土塁が位置する。左の谷へ進むと袋小路となり、右へ進むと山中御殿の塩谷口虎口へ至る。そのため大土塁は塩谷口側のルートを制限する役割があり、この方面の防御の要であったことが伺える。

能楽成は比較的広い面積を有するが、現状では一切石垣が確認できない。土塁やその他の遺構もみられず平坦面のみである。

巖倉寺は月山富田城から西南に 6・7km の安来市広瀬町山佐にあったと伝わる。社伝によると文治 3 年 (1187 年) に現在地に移ったという。富田城築城期から存在すると考えられるが、今見える石垣などは後世のものである。また御子守神社の部分も城の遺構と見られる。巖倉寺の東側の谷は山中御殿まで続き、御子守口と呼ばれる。

能楽成から南に延びる尾根には大東成がある。ここは先端部分に石垣があり高いところで 3m 近くある (写真 19、20)。コの字状になり檜台と考えられる。この南側には塩谷口がありこの方面の視覚を意識したものと考えられる。この石垣の北側にも曲輪の塁線がややコの字状になっているところがあり、東側もやや地形がコの字状になっているところがあり、千畳平のような形態であった可能性も考えられる。今後発掘調査などにより明らかになることを期待したい。

#### 5 本丸北側地区

本丸の北側の急傾斜を降りると、東側に土塁のある曲輪 (K-1) に出る。ここは東側に傾斜のゆるい谷が入り込んでいるので、土塁を設けて遮断していると考えられる。この地区では K-2、K-6 あたりが中心的な存在と考えられる。K-2 からは北西側に K-9、K-10 などの比較的大きな曲輪のある尾根が伸びている。この尾根の先端は菅谷口へ向かい、山中御殿へ入る直前の位置にあたる。K-2 から南東側には K-3 ～ 5 への尾根が延びる。K-5 には石積みを確認できる。K-6 から東には K-7、K-8 があるが、これらは曲輪の削平状況はあまり良くない。K-6 から北、北西側に延びる尾根にも曲輪が続くが、これらは比

較的面積の小さいものである。本丸北側地区全体として、曲輪の普請状況は比較的良好、面積も大きい曲輪が存在する。また曲輪の墨線は直線的なものではなく、中世城郭的な色彩を色濃く残す。

菅谷口の入り口には「里御殿」と呼ばれる尼子氏の屋敷があったと伝わり、尼子期には大手であったと推察される。そのため菅谷口の最奥部に位置するK-10は重要な役割を担ったであろう。従来この地区を含む城安寺にかけての山塊に残る曲輪群は、毛利氏による包囲網の際に拡張されたエリアと考えられてきたが、本丸北側地区は尼子期には本丸から三ノ丸にかけての山城主要部に準じて、富田城の中心的役割を担った曲輪群と解せる。

## 6 城安寺裏地区

本丸北東地区K-6から北へ延びる尾根続きを進むと、城安寺裏地区へ入る。J-1、J-2が最も高所に位置する。これより南、西へと延びる尾根に曲輪が点在するがいずれも小規模なものである。J-2の北西にはJ-3、J-4があるが、ここも曲輪の削平は良くなく、自然地形の部分を多く残す。J-5も曲輪全体を削平せず、中央部分は自然地形のままとなっている。唯一J-6のみ削平が良好で、石積みが確認できる（写真21）。

城安寺裏地区全体として、曲輪の普請があまり行われず、自然地形のままであったり、小規模な曲輪が多く、本丸裏地区と対照的である。ただしJ-6のみ麓に近く石積みも一部に見られることから、馬乗馬場や奥書院北東曲輪のように、城下から見える部分については普請を行っている可能性がある。この地点は西ノ坊と呼ばれ、発掘調査によって、1間×5間の掘立柱建物跡が確認されている。柱穴には扁平な石を敷いているものや、柱の外側に詰められた石が確認されている。この建物との前後関係は不明であるが、重複して1間×3間の掘立柱建物跡も確認されている。土坑からは京都系土師器が出土しているが、周辺の塩谷B調査区の資料よりも器壁が厚く、肥前系唐津を伴うため17世紀前半に位置づけられる<sup>12</sup>。そのため堀尾期においても、何らかの使用があったと推定される。

## 縄張りの評価とまとめ

富田城は広大な城域を持つ城郭で、尼子期、吉川期、堀尾期の各時期の遺構が残されている。それぞれの時期の特徴をまとめるが、月山山上部から山麓部の遺構は、吉川期、堀尾期に大きく改変を受けており、尼子期の様相は断片的にしかわからない。

発掘調査成果からは、本丸では上部が欠失しているが、低い裏込めのない石垣が確認され、二ノ丸との間の堀切に面して複数の加工段が確認され、各加工段に低い石垣があった可能性も残る。また本丸南側ではコの字状に石垣が確認できるため本丸も三ノ丸のように石垣造りで吉川期最末期から堀尾期に利用されていた可能性が高い。本丸の北側エリア（KおよびJ）では石垣がほとんど確認されていないが、K地区（本丸北側地区）では、曲輪の面積が本丸や三ノ丸に匹敵する面積を持つものがあるが、J地区では自然地形の部

分や、曲輪の普請が十分でない曲輪が多い。このことから、K地区は山上部に従属する富田城の山城を中枢をなす曲輪群であると考えられ、J地区は急ごしらえで普請されたと判断される。またK地区の北側には菅谷があり、その入り口には尼子氏の館といわれる里御殿と伝わる場所が存在する。そのため尼子期にはこの菅谷及びK地区が重要視されたと考えられる。

三ノ丸では堀切の痕跡も確認され、尼子期には山上部の曲輪群は現状よりも曲輪の数が多かった可能性が高い。山中御殿では下御殿とされる菅谷口側の石垣は石畳状で多門櫓が建っていたといわれる。石垣も調査前の段階でもある程度残存しており、破城も部分的であったことがうかがえる。上御殿屋敷側の石垣には埋め込まれた虎口や、矢穴の確認できる石材がある。塩谷口の虎口は算木積を志向するものの、虎口に続く西側の石垣ではシノギ積になるなど、古相を呈する部分がある。そのため下御殿といわれる菅谷口を中心に堀尾氏によって改修されたと考えられる。千畳平では少なくとも3ヶ所の出隅が確認されている。山中御殿より北に存在する曲輪ではコビキAの瓦は見つからず、コビキBの瓦が多数確認されている。以下に各時期について概要をまとめる。

#### 尼子期

月山山上部を中心に山麓部にかけて展開したと考えられる。山上部は現状見る本丸、二ノ丸、三ノ丸、西袖ヶ平といった曲輪だけでなく、三ノ丸には堀切があり、さらに曲輪の数は多く、中世的な要素が多い。山麓部は後に大きく改変を受けており、尼子期の詳細は不明だが、花ノ壇周辺では堅堀なども依存している。本丸から城安寺にかけての山塊には数多くの曲輪が残されているが、その中でも本丸側の曲輪は比較的曲輪の削平状況もよく面積も大きいものが存在するが、城安寺側へ行くと頂部は未削平で残した曲輪や、自然地形に近いものも多く、急拵えで築かれた感が否めない。これについては従来から唱えられている尼子期最末期の、毛利氏による包囲網の際に拡大された城域と判断される。つまり尼子期の中心となる富田城は月山山頂部とK地区(本丸北側地区)と、山麓部に広がる巖倉寺を含む曲輪群と言えよう。

尼子期の城主の屋敷は菅谷口の里御殿であったという。昭和50年の発掘調査によって建物跡や石積などが確認されている。この位置から菅谷口へ入っていくと、K-10の直下へ入ってくる。このようなことから、尼子期の大手は菅谷口で本丸北側地区が重要な役割を果たしたことがわかる。

#### 吉川期

吉川期には山上部から山麓部にかけて石垣造りに改変された時期である。この時期には尼子期の富田城の中心の一角を占めたK地区(本丸北側地区)は放棄されている。現状では山上部の石垣は、二ノ丸・三ノ丸・西袖ヶ平に多くみられ、本丸の二ノ丸側には石垣が見られないことから、吉川期には本丸は放棄されたとの意見もあったが、本丸

の東側に勝日高守神社があるがその裏手にコの字状に石垣が残り、本丸の二ノ丸側での発掘調査で、部分的な石垣が確認されており、石垣構築時期に併行すると考えられるコビキBの軒丸瓦、丸瓦が確認されており、吉川期においても本丸は使用されていたと考えられる。また近年進められつつある瓦の研究では、出土した瓦の総数では堀尾期のものが圧倒的に多く、吉川期のものは限定的である結果が報告されており<sup>13</sup>、石垣が多数積み込まれているものの瓦葺き建物は限定的な仕様であったことがうかがえる。

#### 堀尾期

堀尾期には山中御殿の菅谷口側の石垣が整備され、改めて山中御殿が富田城の要として整備される。恐らくこの時期、城下町との関係で御子守口が重用され、もともとあった虎口が埋め込まれ、「伝大手門」とされる部分に象徴として的大门が整備されたのであろう。また千畳平や山中御殿などには瓦葺建物が立ち並び、城下町からの景観は山頂まで白壁や瓦葺建物が立ち並んでいる姿として見えたと考えられる。破城によって城下からよく見える千畳平や象徴として的大门を中心に石垣が破壊されたと考えられる。

## 第2節 石垣

石垣は織豊系城郭や近世城郭での編年案の提示が行われ、近年では戦国期の石垣についても研究が進みつつある。<sup>14</sup> これらの研究手法は、隅角部における算木積に代表される構築形態や稜線形態、石材の加工度、意匠石垣などの視点による検討が中心である。しかし石垣は縄張りの変更や修理によって積み替えられることも多く、年代評価には注意が必要だが、年代観の基準として、文禄から慶長年間に起こった文禄・慶長の役に関連して朝鮮半島に構築され、その後廃絶し使用されなかった「倭城」での事例や<sup>15</sup>、紀年銘瓦や石垣上の建築物に伴う棟札、石垣に記された年号などにより、絶対年代が明らかになるもので補完されている。

しかしこのような編年案は織豊勢力下での城郭が対象で、本論で扱う中国地方は毛利氏の勢力下では異なる動向を示していることが指摘されている。<sup>16</sup> つまり毛利配下の吉川氏関連の館や寺院において、大石を用いた石垣が見られ、戦国期以来の歩みが既にあった。そこに一時中国地方の大半を手中に収める勢力を誇った毛利氏や、在地性を保ちながら豊臣政権に従属した宇喜多氏領では、広島城や岡山城のように、天正年間後半以降に織豊系の城石垣の構築は始まった。<sup>17</sup>

山陰地域では天正19年に富田城が吉川広家の居城となり、千畳平や山中御殿で大石を用いて、織豊系の石垣構築が始まったと指摘され、月山山上の本丸以下の曲輪にセットバックして段築されている石垣はあるものの、単体では3mを超える高石垣は見られず、戦国期の要素を引き継ぐものと評価されている。<sup>18</sup>

富田城では山頂部分の本丸・二ノ丸、三ノ丸や、山中御殿や千畳平などの山麓部分な

どに広く石垣が分布しており、これらの石垣は場所によって様々な積み方が見られる。これは先行研究が指摘するように吉川期から堀尾期にかけて、何段階かに分けて整備されたものと考えられるが、各々の年代を細かく導き出すのは難しい。ここでは試みに石垣の様式を6つに分け解説し、時期区分を試みる。

#### 様式Ⅰ 馬乗馬場1・2、大東成1

- ・隅角石の稜線を通すものの不十分、築石が小さい

割石乱積による。馬乗馬場1・2では隅角石が築石よりやや大きい程度、隅部が鈍角になっている。稜線は通そうという意図が見えるものの不十分である。「コ」の字状の方形の出隅にならずいびつな形状の出隅となっている。築石はこぶりで間詰石を多用する。大東成1の隅角石も築石より大きいものを用いるが、築石もこぶりで馬乗馬場と共通する。また築石と間詰石の大きさの差が小さいく区別しがたいものを含む。

#### 様式Ⅱ 本丸1、本丸3、二ノ丸1、三ノ丸1、西袖ヶ平1、千畳平（尼子神社西側）

- ・隅角石には築石よりも大きいものを使い特化。稜線も通す意識がある
- ・築石も様式Ⅰより大きいものを使う
- ・間詰石を用いる
- ・裏込石が見られない

割石乱積による。この様式の石垣は使われている石材が地山石で城内から運び込まれたと考えられる。隅角部の角石の大きさが築石に対して多少大きいものを選択し方形に整え、面もそろえている。また隅部は算木積ではない。しかし三ノ丸、本丸勝日高守神社裏、西袖ヶ平のいずれの場所においても平面形が「コ」の字状の形態にしている。三ノ丸1では3段にセットバックしながら積んでおり、高石垣にはならない。

#### 様式Ⅲ 山中御殿1、2

- ・隅角石はシノギ積となり、築石と石材の大きさは大差ない
- ・築石は綺麗に面を揃える
- ・打込接となり間詰石は比較的少ない

割石乱積による。山中御殿塩谷口側にある1、2では、築石は面を綺麗にそろえている。角部は鈍角でシノギ積になっており、算木の意識は見られないが稜線は通そうという意識はある。ただ1では下から4石目までの隅角石は、加工度が低く稜線が甘い。それに対して5石目からは稜線が通り加工度も高くなるので、上段は補修かもしれない。しかし昭和9年の写真でもかなり残りが良く、天端石まで残っているところも多い。そのため上段の石垣は破城よりも前に構築されていた石垣といえる。

#### 様式Ⅳ 山中御殿3、旧大手門

- ・隅角部にはやや算木を意識した長方形の石材を交互に入れ、稜線が明確である
- ・築石と間詰石に歴然とした差がある
- ・打込接となり石材の加工度が高い

山中御殿3は発掘調査によって明らかになった虎口で、破城によって完全に埋められていた。外側から入ると左右両方に階段がつく形態で、埋門形式となっている。隅角部は稜線をしっかり通し、長方形の石材を左右に振っているところもみられ、算木積を志向していると考えられる。

#### 様式Ⅴ 千畳平1、2、3

- ・隅角石は算木積を志向する
- ・山上部などとは異なる布部石を用いる

千畳平の大半部分の石垣は複雑に「コ」の字状に石垣を構築している。それぞれ発掘調査によって瓦も出土している。このあたりの石垣は布部花崗岩の自然石あるいは粗割石が用いられている。また隅部は算木積を志向した形態となっている。角石と築石の大きさは大差ないが、築石と間詰石とは歴然とした差がある。松江城の石垣も完全に算木積になりきらず古相を呈する点では共通するが、様式Ⅴは2mを越えない高さであるため、松江城よりは古く位置づけされる。

#### 様式Ⅵ 山中御殿5

- ・打込接となり、間詰石が少ない
- ・石墨状となる
- ・築石も大きいものを使う

山中御殿5は通称菅谷口と呼ばれる虎口である。西側には通称「軍用道」と呼ばれる山上部へ通じる通路が存在する。かなり石材の加工度の進んだ打込接となり、最も新しい要素を持つ。

これらの様式の年代について検討する。

様式Ⅰは富田城の中で最も古相を呈するものである。

Ⅱ～Ⅲは隅部が鈍角になるものもあるが、角石は築石に対して多少大きいもので角が出るよう加工された石材を用いており、これらはほぼ年代としては同時期とみたい。また2・3段にセットバックする形態は、千畳平（尼子神社西側）や三ノ丸などの発掘調査成果に見られるが、同様の高石垣にならないセットバック石垣は亀井山城（鳥取県日南町）、米子城・飯山（鳥取県米子市）等にも見られ、関ヶ原以前に位置づけられそうである。

様式Ⅳ～Ⅵは算木積みを意識しており、富田城の中でも新しい要素である。特にⅥは石材の加工が進んだ打込接となり、最も新たらしい年代が与えられる。様式Ⅴの千畳平

西側出隅部での発掘調査では、松江城と同范の可能性のある軒平瓦や鯨瓦が、石垣前面の炭化物を多く含む粘土質の堆積から見つかり、最終段階にこの瓦が葺かれていた建物があったと判断されるため、様式Vの石垣は堀尾期まで使用されていたと推定される。

上記のような特徴から様式VIについては、関ヶ原以降の年代が想定されるため堀尾期と推定したい。様式I～Vはそれ以前の時期が想定されることから、天正19年（1591）慶長5年（1600）の吉川期と考えられる。その中でも、様式Vは算木積を志向するなどやや新しい要素も見られるが、石垣の高さが低く、堀尾期まで下げる要素は少ない。そのため吉川後期に構築され、堀尾期まで継続して使用されたと考える。様式II～IVも角部が鈍角になるなどの要素はあるものの、年代としては吉川期後期ととらえる。様式Iは最も古相を呈すため吉川前期ととらえたい。

### 第3節 山中御殿の評価

これまでの検討から、山中御殿は堀尾期に改修・拡張が行われたことが確実だが、現状では「伝大手門」と呼ばれる部分が大きくえぐれた状態となっており（写真）、その他虎口と考えられる「塩谷口」「菅谷口」に加え、発掘調査によって明らかになった虎口があり、これらが同時に存在したかも不明確な状態である。また山中御殿北面の石垣には埋め込まれた虎口が確認されている。

山中御殿は上御殿屋敷と下御殿屋敷に分かれ、ここを通らねば山上の曲輪へ至れぬ首にあたる部分である。そこで山中御殿の虎口について検討し、そこから山中御殿の評価について検討したい。

#### 山中御殿の虎口

##### ・菅谷口虎口

復元整備以前から地上に石垣が露出した状態が確認できた（写真38、39）。石垣上部の石材は失われている部分もあったが、比較的残りは良い。虎口幅は約3mとそれほど大きくはない。菅谷口の虎口周辺から北側にかけての石垣は、石墨状になっており、上には多門櫓が建っていたと考えられている。塩谷口側の石垣の造りとは大きく異なり、この部分の石垣は打込接となっており、城内で最も新しい様式である。

菅谷口虎口を出た先は、谷へ降り北に広がる菅谷を通った先には、「里御殿」と称される場所がある。ここでは昭和50年に道路建設によって発掘調査が行われており、建物跡や基壇や堀の一部が確認されている。そのため尼子段階において菅谷口は大きな役割を担ったと考えられる。

#### ・塩谷口虎口

昭和54年の発掘調査によって初めて明らかとなった虎口である。虎口幅は1.56mから1.85mで人ひとり通るのがやつの幅である。虎口内部は両側に階段が確認された。虎口の規模から大手になるような規模ではない。塩谷口虎口を出ると谷になり、大東成南側へでる。大東成では一部に隅部が見られる石垣が確認され、この虎口と対応したものであろう。この虎口は人為的に埋められており、その埋土からは唐津焼が出土している。塩谷口虎口は埋められていたが、周辺の石垣は整備前の段階でも天端石が確認でき（写真36、37）、残りが良い。

#### ・発掘虎口

菅谷口虎口から北側に延びる石垣は、山中御殿の北東部分の花の壇側へ延びる尾根は石墨によって遮断されている。この石墨の山中御殿側に斜めに入る階段が発掘調査によって確認された（写真）。間口は13～14mあり大きな虎口である。階段は4段あり最上段は削平されており、段の高さが低くなっている。最下段には排水の溝も設けられている。この虎口は報告によると人為的に埋めたものではなく、自然体積によって埋まったものとされている。そのため廃城段階まで使用され、その後自然に埋まったと判断されている。しかし石墨に対して斜めに入っており、この石墨が築かれた時期の虎口としては違和感がある。また上部が削平を受けていることから、石墨構築以前にあった虎口でその後、一時使用されないような時期を経て、石墨が構築された段階までに埋没したか可能性がある。

#### ・伝大手門跡

現状では大きくえぐられたような形状となっている部分である（写真40）。この北側の石垣には隅部のラインが見えるところがあり（写真30）、本来はここが開口していたと考えられ、後に石垣によって埋め込まれたものである。この隅部はやや算木積を志向しているような趣があり、様式的には様式Ⅳに相当する。全国的な破城手法から考察すると、<sup>19</sup>大手や城下から見える部分を重点的に破壊する傾向がうかがえ、富田城も千畳平の出隅や大手を中心に破壊したものと推察される。それに対して同じ山中御殿でも菅谷虎口は整備以前でも石垣が概ね残り、塩谷口も虎口以外の石垣は非常に良好に残存している。このことから、伝大手門跡といわれる部分は破城によって徹底的に破壊されたものとする蓋然性がある。

#### 評価

山中御殿は菅谷口側の石垣が打込接となり、北面の石垣には矢穴の残る石材がある。それに対して塩谷口側は算木積も不十分で菅谷口側より先行する要素がある。菅谷口側は下御殿屋敷、塩谷口側は上御殿屋敷があったと伝わる。山上の曲輪へは菅谷口から通

称「軍用道」と呼ばれる直線道路と、塩谷口側の山手に相階段があり、ここを登ると「軍用道」と合流する構造となっている。

石垣の特徴から下御殿屋敷がある菅谷口側が堀尾期の普請と判断されることから、堀尾期に山中御殿は菅谷口側の普請と大手門の位置の変更が行われたと推測される。それは新たな出雲の拠点城郭として、御子守口を改めて大手道として整備し、城下から直線的に侵入し、その突き当りに象徴的な大手口として改めて設定したものと考えられる。このことは過去の発掘調査において、山上部の本丸以下の曲輪での出土遺物の様相は、コビキ B の瓦に一定量のコビキ A が入っており、16 世紀末頃の肥前系陶器が最も新しく、17 世紀に入ってから遺物は見られない。コビキ B の瓦があることから 17 世紀入ってからも堀尾期に使用されていることがうかがえるものの、山上部において生活を伴う使用は行われていない。これに対して、山中御殿以下の山麓部の曲輪ではコビキ B の瓦のみでコビキ A は見られない。そのため堀尾期には、山上部の曲輪群と建物を吉川期から引き継ぎながらも、積極的な改変は行わず、山中御殿以下の山麓部を中心に改変を加えた姿が浮かび上がる。

恐らく吉川段階に山上部から山中御殿、千畳平、大東成、馬乗馬場などが石垣化され、山中御殿に御子守口、菅谷口、塩谷口のルートが集まる構造が造られ、それを基礎として堀尾期に改めて城下町の再整備が行われ、御子守口側が大手道として位置づけられ、「伝大手門」が象徴的に整備され、それ以外の谷は高石垣を構築し遮断線とし、侵入できるルートを限定したものと判断したい。

ただ、菅谷口側については、発掘で明らかになった虎口があり、吉川期の菅谷口虎口については検討の余地がある。

#### 第4節 城下からの視覚

富田城周辺には城下町遺構である富田川河床遺跡や、尼子氏の屋敷があったという里御殿、尼子氏の一族である新宮党の館という新宮党館跡、塩谷遺跡、などで発掘調査が行われている<sup>20</sup>。

富田川河床遺跡以外の地点では、尼子氏の滅亡の時期以降遺物が激減しており、河床遺跡では 17 世紀中頃まで遺物が確認できる<sup>21</sup>。富田城城下町は 1666 年に洪水により移転したとの伝承を保有しており、実際に発掘調査による成果でもこれ以前の紀年銘を持つ遺物が見つかるため、陶磁器の年代観からも矛盾がない。

近年の瓦の研究からは、吉川期に相当する年代のコビキ A は少なく、堀尾期に該当するコビキ B 瓦が圧倒的多数を占める。特に千畳平での発掘調査では、鬼瓦や鯰瓦が出土している。

石垣が見られるのは城下からの視点で見た場合、手前に見える千畳平や馬乗馬場の先端部分、巖倉寺、大東成、そして大手として整備された御子守口から見える花ノ壇西側面、大手門が置かれた山中御殿、そして山上部である（写真 41、42）。堀尾期の段階では、城

下から見た場合、山麓部から山頂部まで石垣と瓦葺建物で埋め尽くされたように見えたであろう。これらのことから当初堀尾氏は富田城にかなり手を加えていることになる<sup>22</sup>。にもかかわらず居城を松江城へ移しているため、比較的早い段階で松江城築城を考えたようである。

尼子期には山上部の遺構（本丸～三ノ丸及びK地区）と里御殿の位置関係系や地形より、菅谷口が重視されたと判断されるが、吉川期から堀尾期には山麓部の3つの尾根の集まる山中御殿が重視され、城下からみた視覚が大きく意識されるようになったのである。

## おわりに

富田城は広大な城域を持ち、尼子期から堀尾期まで中近世以降期の城館の移り変わりを考えるのに重要な素材である。今回縄張りを改めて調査し、従来山上部より北に延びる尾根に広がる石垣が築かれていない曲輪群は、毛利氏による包囲網に際して拡大された城域と考えられてきた。しかし今回K地区とした曲輪群は曲輪の面積が本丸などに比してそれほどない規模をもっており、削平も良好であることから本丸以下の山上部の曲輪群に続き、尼子期の富田城の中心をなす城域と判断した。これより北のJ地区については毛利氏包囲網に際して拡大された城域と考えてよいであろう。また菅谷には「里御殿」と呼ばれる尼子氏の屋敷があったと伝わるが、その最奥部にあたるのがK地区である。このこともK地区の重要性を物語っている。

吉川期には城下からの視覚を意識して、K地区は放棄され、山上部および、山中御殿や千畳平などの山麓部の曲輪群が石垣造りに改修されたが、瓦葺建物は限定的であった。堀尾期に至って山中御殿が大きく改修され、「上御殿屋敷」「下御殿屋敷」として整備され、大手門の位置が変更され、この時期の一国一城の大手としてふさわしい姿に改変されたと考えられる、また瓦葺建物も多く建てられ、城下から見た景観は一山全体が城塞化された姿と見えたであろう。

- 1 妹尾豊三郎 1978、1997、米原正義 1981、長谷川博史 2000 を始めとして富田城については多くの研究がある。その他毛利氏に関する研究でも多く触れられており、すべてに触れられないが、長谷川博史 2013、2015、山根正明 2009 などにおいて触れられている。
- 2 中井均は堀尾氏が松江城築城後、富田城、三刀屋城、瀬戸山城を支城として整備し、三沢城、亀嵩城も堀尾期に部分的な改修や山麓寺院建設による支城的な役割を担ったと分析する。中井均 2012、2013、2016
- 3 史跡整備に伴って千畳平を中心に発掘調査が行われ、出隅をとまなう石垣が確認されるとともに、城域全体の石垣調査がなされている。それによって富田城の石垣は様々な様式によって構成されていることが明らかにされつつある。安来市 2017、安来市 2017
- 4 特に乗岡実氏が石垣、花谷浩氏が瓦、中井均氏が堀尾期の領国内の城郭について検討が試みられており、大きく研究が進められた。またその過程でも『松江城研究』や『松江市歴史叢書』などを通じて、多くの論考が発表されている。岡崎雄二郎 2013、2018、佐々木倫朗 2008、中井均 2012、2013、2018a、2018b、乗岡実 2014b、2014b、2015c、2017、2018、花谷浩 2016、2017、2018、松江市史料編纂課 2018、山上雅弘 2018 のほか、石井悠 2012 による松江藩の総括的研究成果がある。
- 5 このような広域の城館の場合、地表面観察による遺構調査が特に有効な手段となる。島根県中近世城館研究会 1995 年や、八巻孝夫 1987、寺井毅 2013 によって城域全体の踏査が行われており、概ねこれら先行研究により富田城の全体像は把握されたといつてよい。筆者も 2014 年から 18 年にかけて現地調査を行い縄張り図の作成を行った（高屋茂男 2018）。しかし石垣が多用された城郭の場合、その検討抜きにしては語るができない。石垣は斜面部分に埋もれており、近年の安来市や筆者による調査によって明らかになったものも多く、改めて石垣を含めた検討が必要といえよう。
- 6 小都隆 2013
- 7 八上城研究会 2000、篠山市教育委員会 2003、八上城東中腹の奥谷城が初期の波多野氏の城と考えられている。
- 8 伊藤創 2009b、2013
- 9 寺井毅「富田城」（高屋茂男 2013）
- 10 広瀬町教委 2003
- 11 広瀬町教委 2003
- 12 廣江耕史 2013
- 13 乗岡実 2017
- 14 北垣聡一郎 1987 では石垣全般について検討が行われ、北垣聡一郎 1980 で富田城についての検討が行われている。その他堀口健次 2002、2017 では石垣分類試案が示されている。乗岡実 2014、2018 では富田城と松江城の石垣と瓦について検討が行われている。
- 15 城郭談話会 1997～2010、太田秀春 2017 など
- 16 乗岡実 2017
- 17 吉川氏関連の城館については、小都隆 2008 が詳しい。また乗岡実 2015a をはじめとして、乗岡氏による精力的な研究成果がある。
- 18 乗岡実 2017、2018
- 19 岩国城跡では虎口などを中心に破壊されている。
- 20 広瀬町教育委員会 1977、1981a、1982、1983、1988、西尾克己・舟木聡・守岡正司 2012
- 21 西尾克己 2003、西尾克己・守岡正司 2013
- 22 中井均 2018 では、里御殿での発掘調査成果（報告書未刊）で、屋敷を区画する溝に石積が見られ、整然とそろう天端石から、堀尾氏によるものと判断している。そしてこの場所を、堀尾吉晴の隠居所と

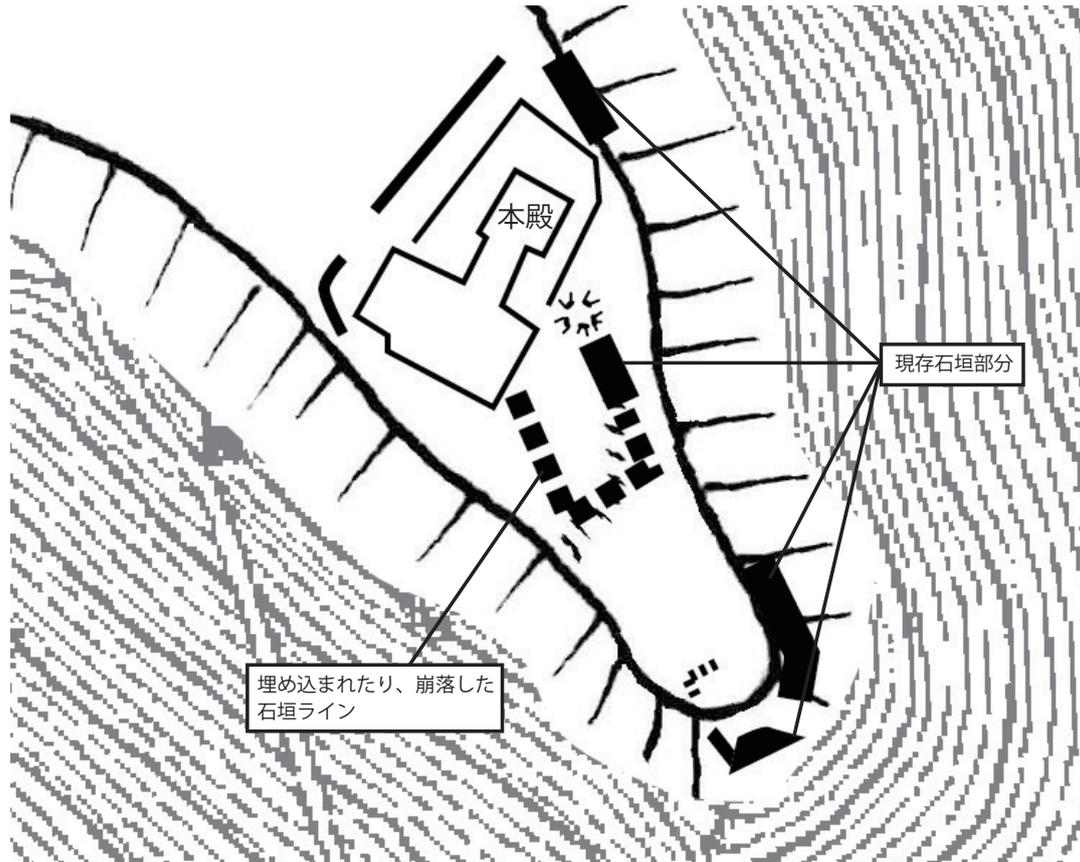




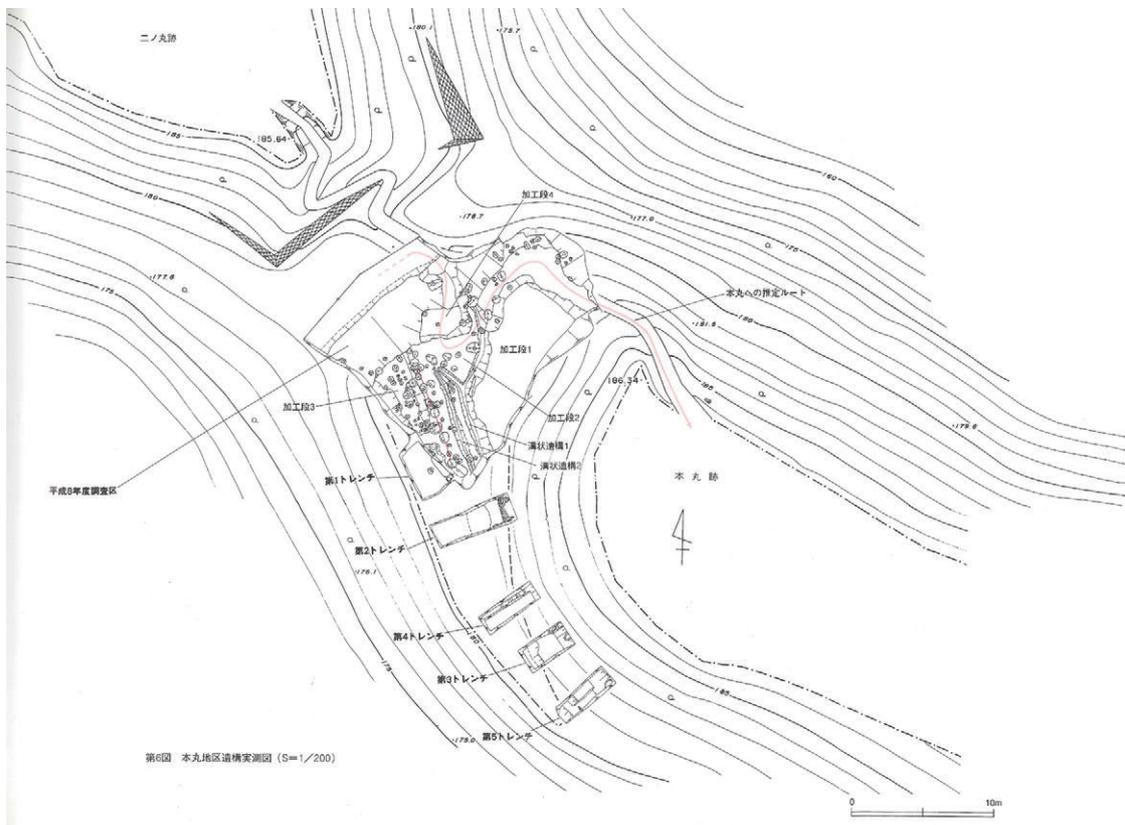
第2図 月山富田城縄張り図拡大図（北側）



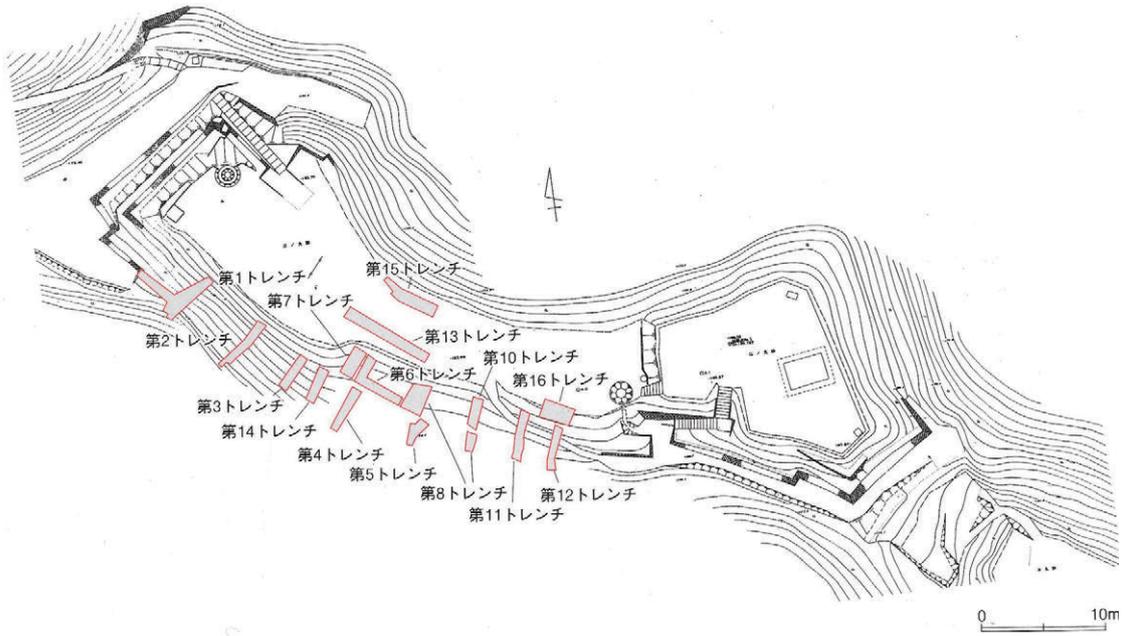
第3図 月山富田城縄張り図拡大図（南側）



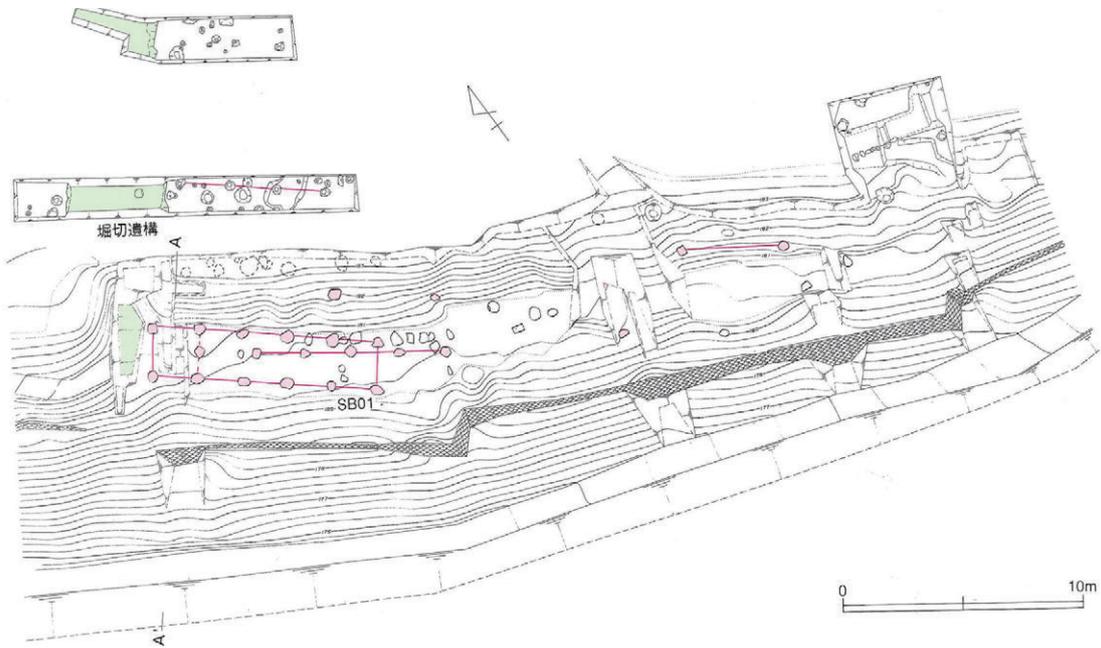
第4図 本丸南端・勝日高守神社周辺石垣位置図



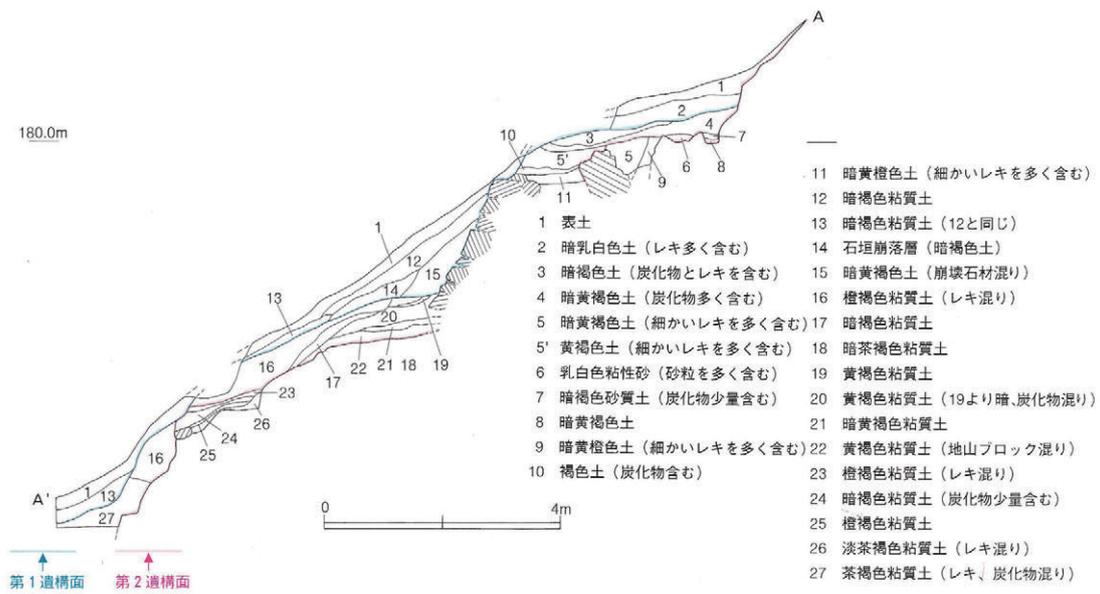
第5図 本丸地区北西部遺構図



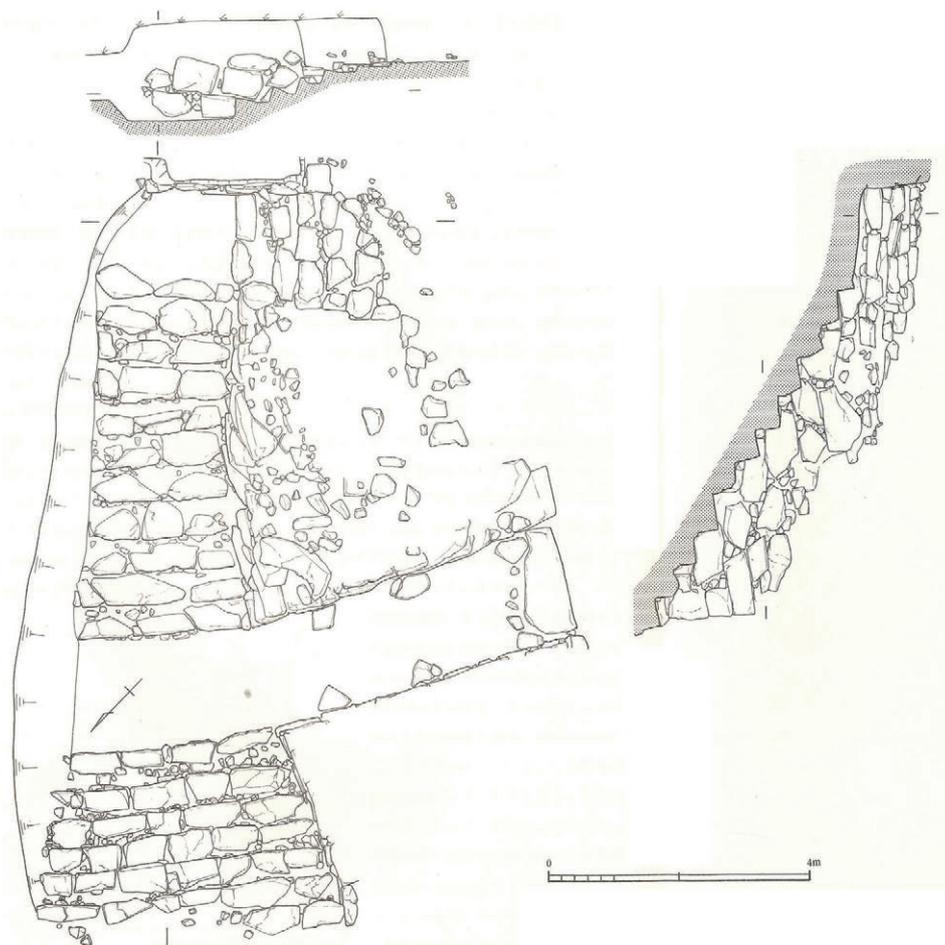
第6図 三ノ丸地区トレンチ位置図



第7図 三ノ丸地区帯曲輪遺構実測図



第8図 三ノ丸地区帯曲輪断面図



第9図 山中御殿塩谷口虎口遺構実測図

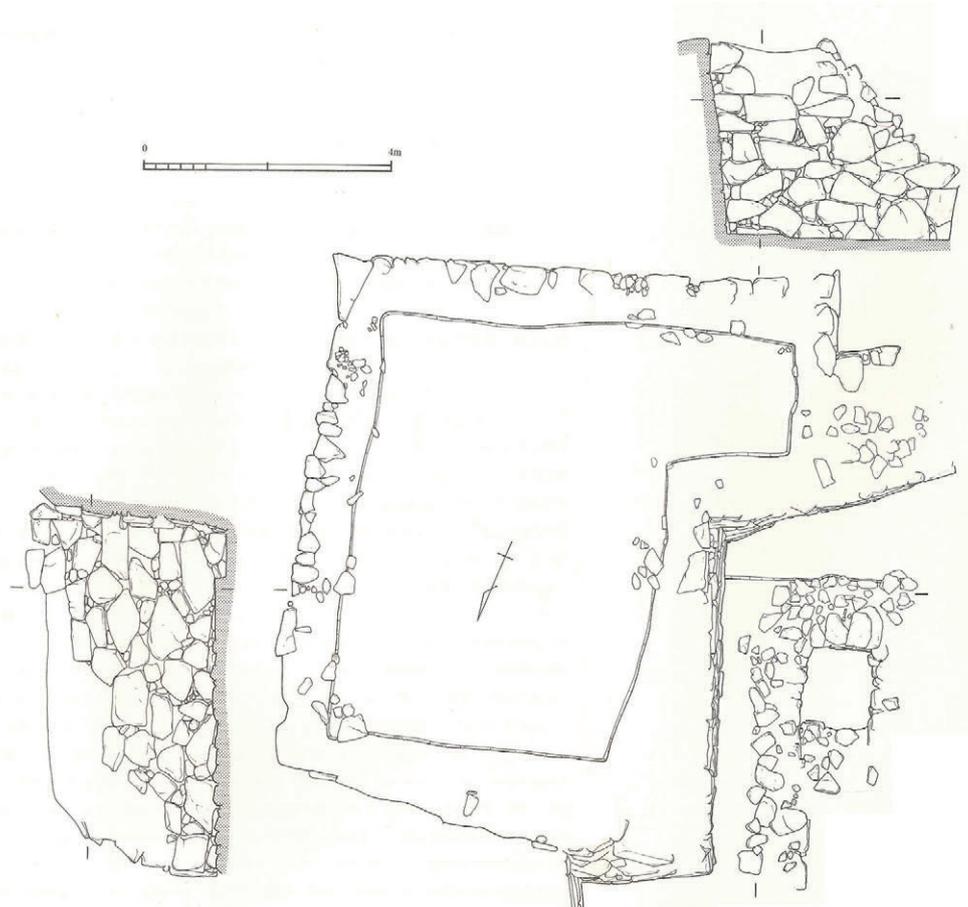
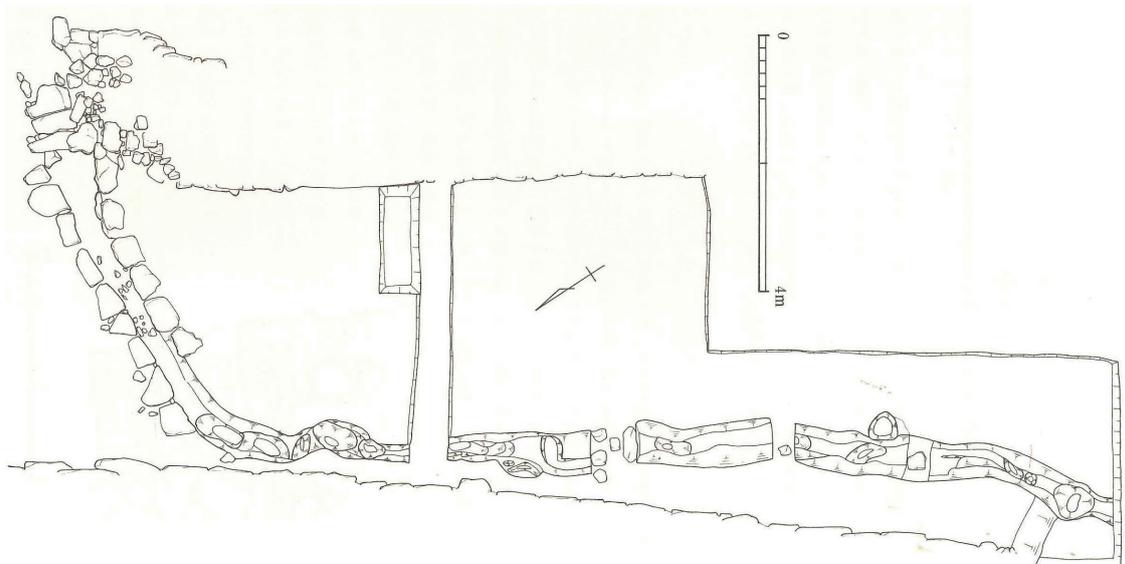
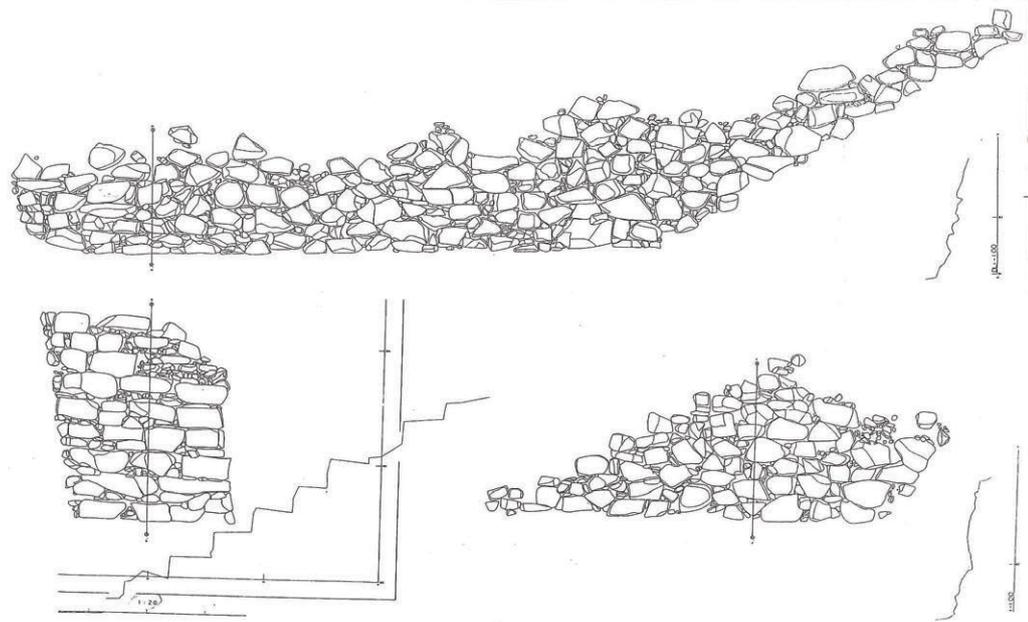


Fig10 菅谷口第1調査区 櫓跡付近実測図

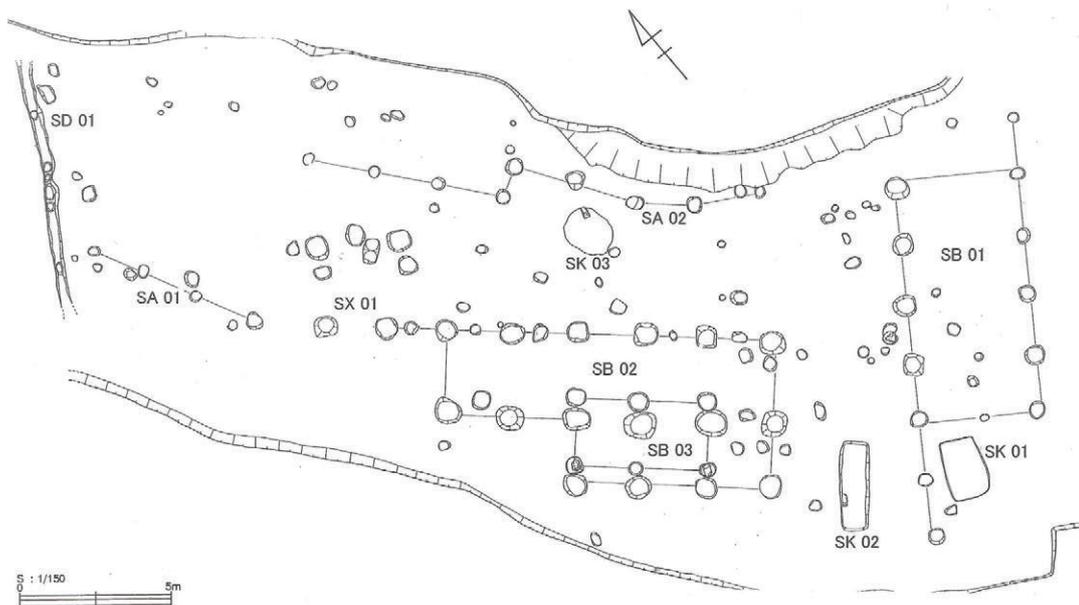
第 10 図 山中御殿菅谷口櫓台実測図



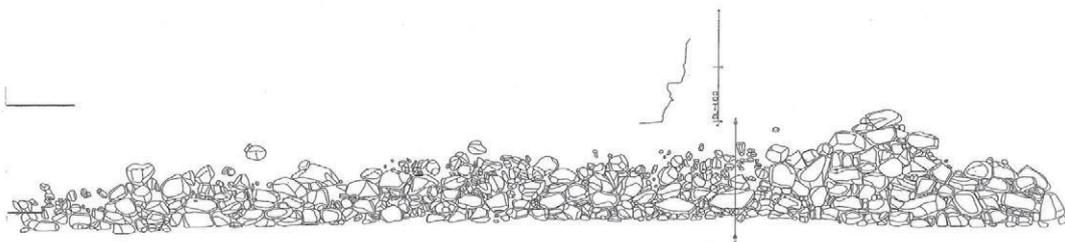
第 11 図 山中御殿菅谷口溝跡実測図



第12図 山中御殿相坂部石垣実測図

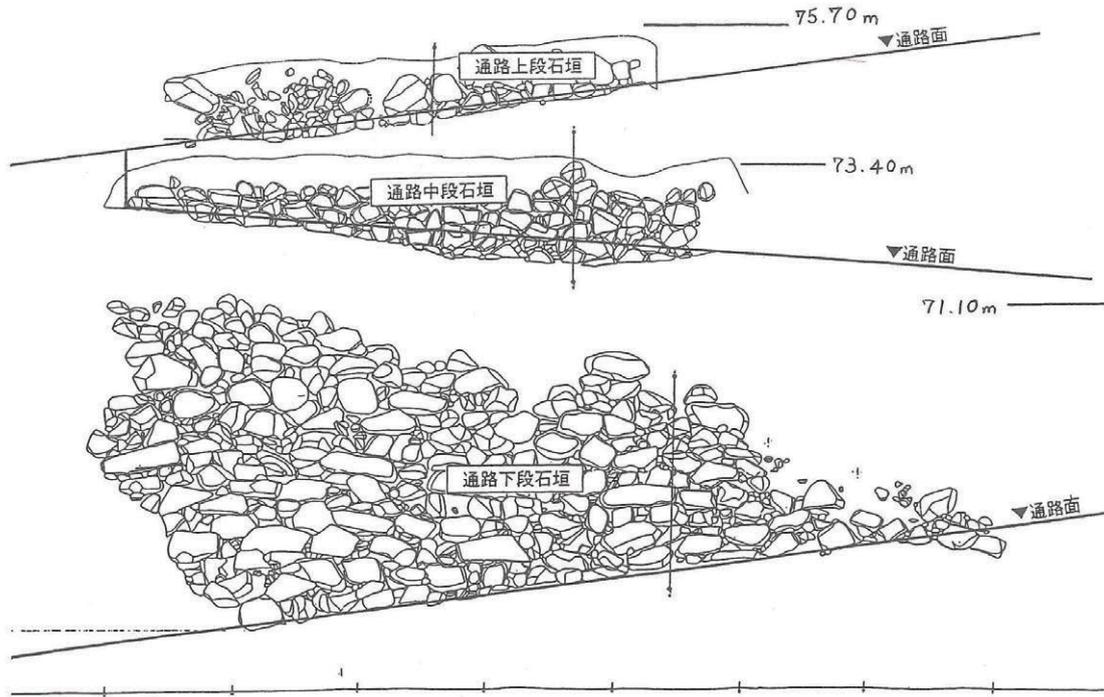


第13図 花の壇 建物遺構図

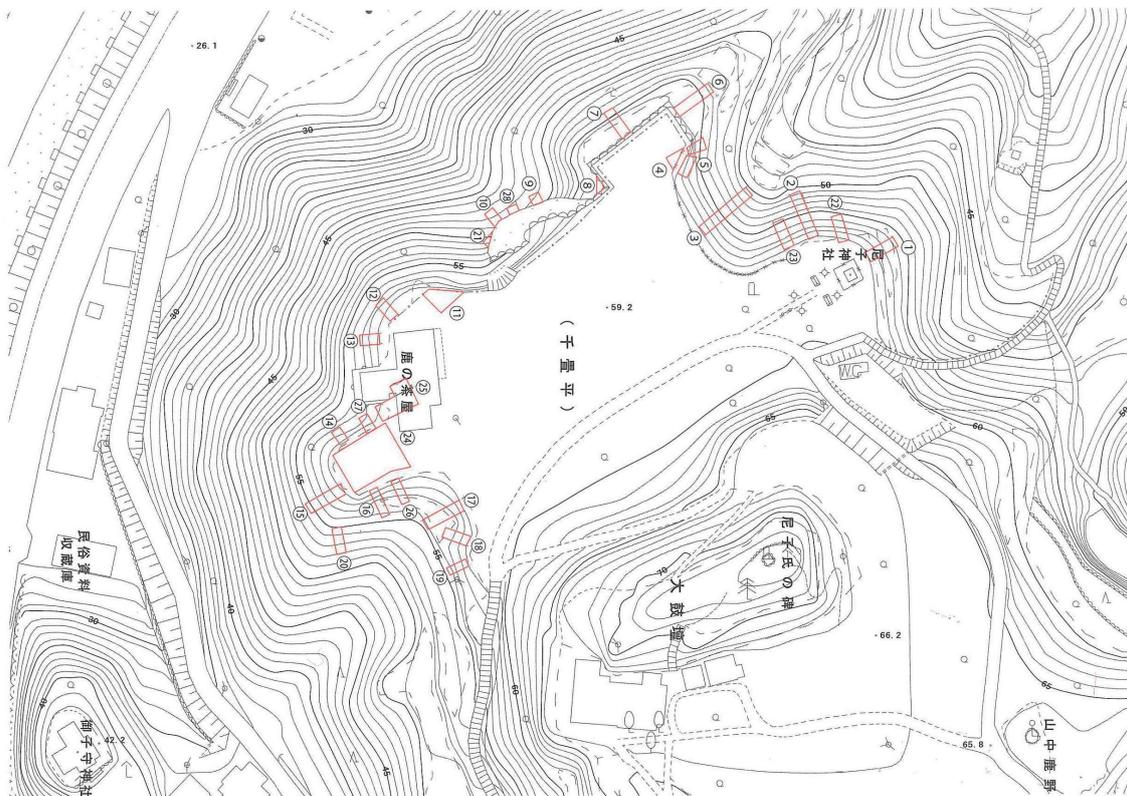


第14図 花の壇 第V調査区石垣実測図

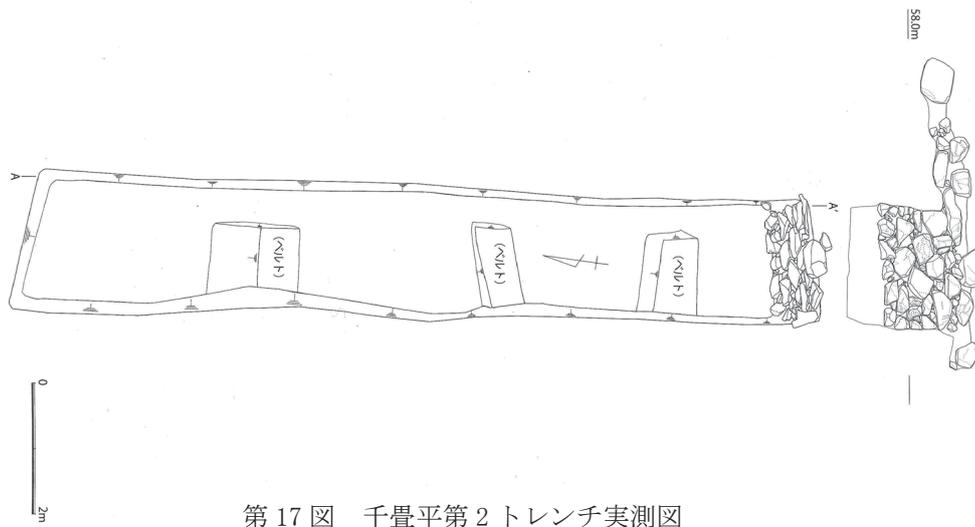
■第Ⅳ調査区遺構実測図



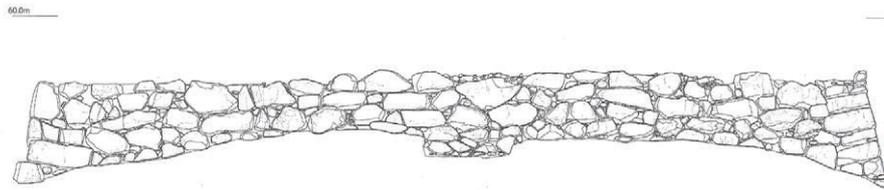
第15図 花の壇 西面石垣実測図



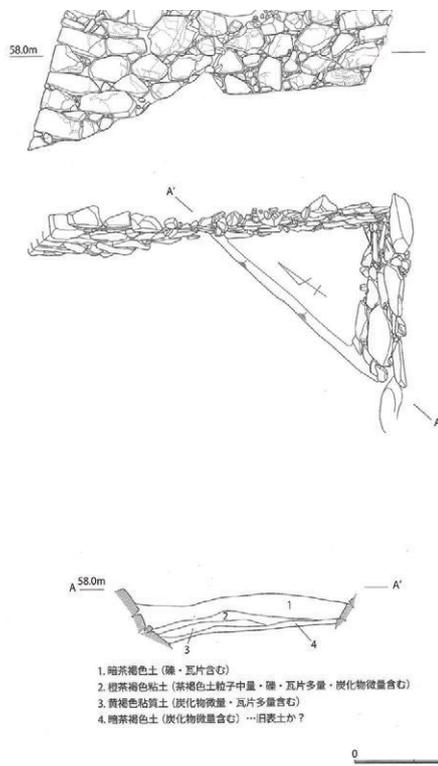
第16図 千畳平トレンチ配置図



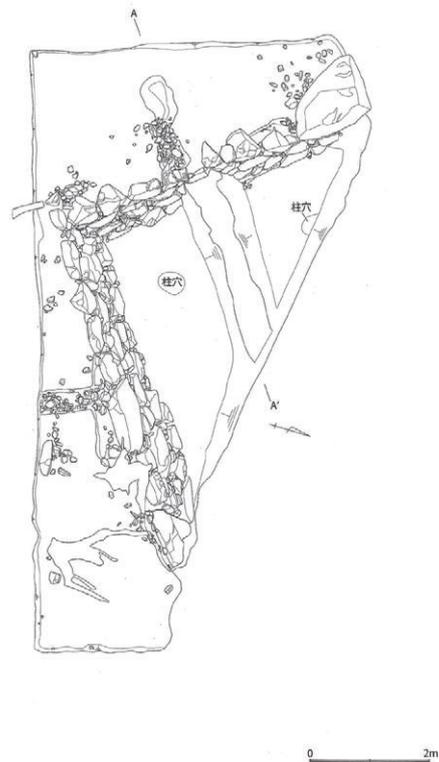
第17図 千疊平第2トレンチ実測図



第18図 千疊平第7トレンチ実測図



第19図 千疊平第8トレンチ実測図

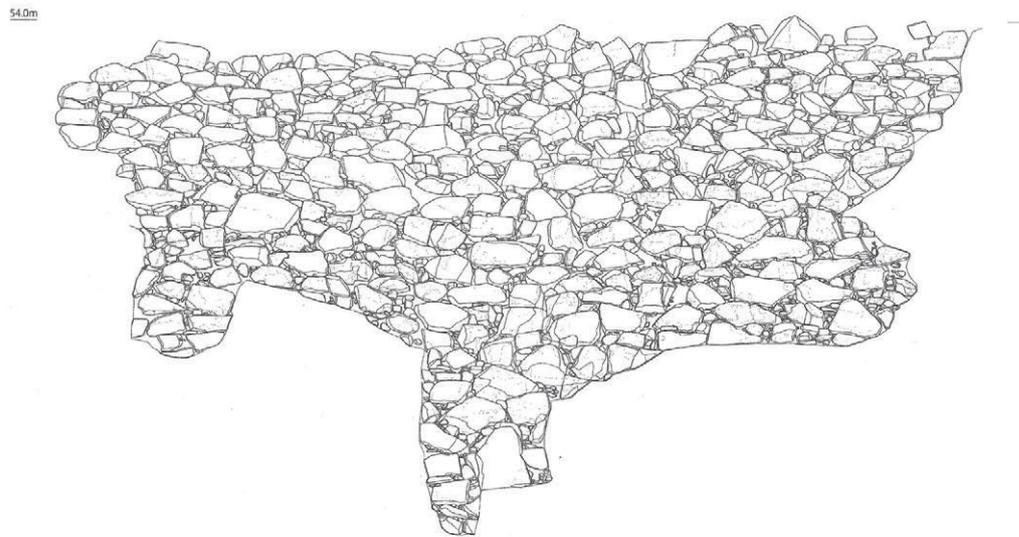


第20図 千疊平第11トレンチ実測図



第 21 図 千畳平第 22 トレンチ実測図

第 22 図 千畳平第 25 トレンチ実測図



第 23 図 千畳平北西大石垣実測図



第 24 図 大土塁周辺図



写真1 勝日高守神社前面石垣



写真2 勝日高守神社後方北側石垣



写真3 本丸南端石垣



写真4 二ノ丸堀切石垣



写真5 三ノ丸石垣



写真6 三ノ丸虎口と門礎石



写真7 西袖ヶ平石垣（隅部が崩落している）



写真8 西袖ヶ平石垣（後方は三ノ丸）



写真9 山中御殿・埋め込まれた虎口



写真 10 矢穴のある石材



写真 11 花ノ壇通路石垣



写真 12 太鼓の壇、山中鹿介像



写真 13 千畳平石垣・出隅部



写真 15 千畳平石垣・栗石



写真 14 千畳平石垣・出隅部



写真 16 馬乗馬場遠景（中央と奥に出隅が見える）



写真 17 奥の石垣隅部



写真 18 奥の石垣築石部



写真 19 大東成石垣隅部



写真 20 大東成石垣築石部



写真 21 城安寺裏側地区石垣

## 石垣分類 様式Ⅰ



写真 22 馬乗馬場 1



写真 22 馬乗馬場 2  
(下方は崩れている)



写真 23 大東成

## 様式Ⅱ



写真 25 千畳平・尼子神社裏



写真 26 三ノ丸

## 様式Ⅲ



写真 27 山中御殿 1



写真 28 山中御殿 2

## 様式IV



写真 29 山中御殿塩谷口虎口



写真 30 山中御殿 旧虎口

## 様式V



写真 31 千畳平 1



写真 32 千畳平 2



写真 33 千畳平 3

## 様式VI



写真 34 山中御殿 菅谷口側 石塁



写真 35 山中御殿 菅谷口側 虎口付近

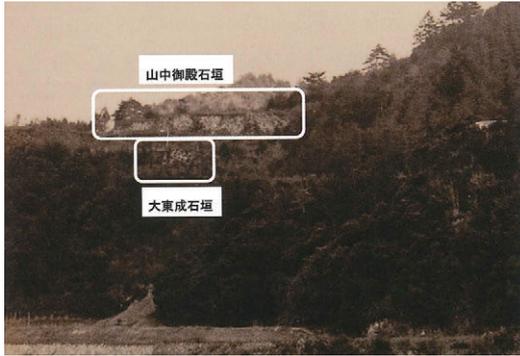


写真 36 昭和 9 年 山中御殿（奥）と大東成（手前）の石垣

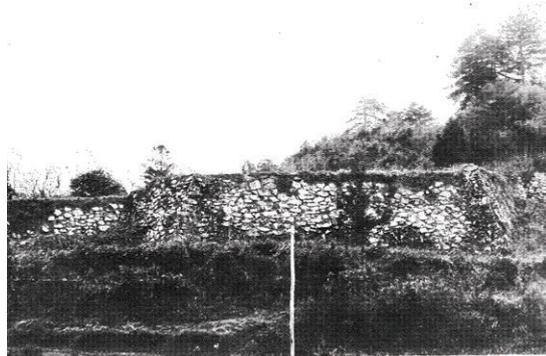


写真 37 昭和 9 年 山中御殿塩谷口側の石垣



写真 38 昭和 9 年 山中御殿菅谷口側の石垣



写真 39 昭和 9 年 山中御殿菅谷口虎口の石垣



写真 40 伝大手門現状



写真 41 富田城全景（島根県立八雲立つ風土記の丘提供）

右側に飯梨川（旧城下町）、中央あたりから左へ入る谷が塩谷口。城下町は飯梨川の地点になるため、その眼前に千畳平が見えることになる。



写真 42 富田城遠景

## 終章

## 終章

第1部では戦国期城館の特色として「畝状空堀群」を取り上げ検討し、第2部では中近世移行期における地域における城館変遷の具体例の検討を通して考察を進めてきた。本章では各章で検討した概要を整理しておきたい。

第1部第1章では研究史を取り上げた。1980年代に全国的に注目されるようになった畝状空堀群だが、それ以前に新潟県における田中寅吉氏と伊藤正一氏、東海での根津袈津之氏らの研究があった。彼らの研究や第3回全国城郭研究者セミナーを通して、全国的な分布が明らかとなった。これにより各地域において、盛行する時期の違いや、横堀との組み合わせによる新旧の判断などを行う手法も、1980年代に進められた。

1990年代から2000年代になると都道府県における城館分布調査も進展が見られ、分布状況も明らかになりはじめた。特に2010年代には、京都府や福岡県でも悉皆調査が行われた。それにより、従来知られていたより多くの畝状空堀群が存在することが明らかとなった。その成果をもとに各地域における分布の検討、遺構分類などが試みられた。

分類については、伊藤正一氏がA急斜面型、B緩斜面型、C平坦面型、D堅堀連接型に分類し、空堀群の立地する傾斜角度に着目している。千田嘉博氏は横堀との組み合わせに着目し、I類、II類に分類し、織豊政権との関係性を説いている。千田氏の研究は後の研究に大きな影響を与えた。

地表面観察による城の縄張りの検討は有効な手段ではあるが、畝状空堀群は斜面に存在することが多いため、上部の横堀は埋没している可能性が高い。傾斜角度は城館が機能していた当時と変わらないと考えられ、傾斜角度から検討することは重要である。村田修三氏は島根県鳶巣城（周布城）の事例を取り上げ、尾根の背が広がったなだらかなところに築かれたAと、谷地形のBに分類している。つまりAタイプは傾斜の緩い空間を潰すことが目的で、谷部分は堀切などからの回り込みを防ぐ目的で築かれている。つまり畝状空堀群は地形を克服する有効な手段として導入されたのである。

第1部第2章では、主に西日本で発掘調査事例を扱った。しかし畝状空堀群からの遺物の出土は少なく、構築時期を特定することは難しく、直上の曲輪での遺物年代を参考とした。当然、曲輪面の年代と畝状空堀群の年代が合致するとは言えないので、取り扱いには注意が必要である。しかしながら、概ね第1段階として、畝状空堀群は14世紀頃から堀切や堅堀から初源的なものが見られ、第2段階には15世紀に堅堀の本数が増え、第3段階では16世紀に入ると、畝状空堀群としてまとまりを見せ始める。そして第4段階の16世紀後半には、平山城館跡（綾部市）に見られるように堀の形状や間隔なども企画的となる傾向を指摘した。

分布と地域性では各地で畝状空堀群の存在は知られているが、全国的な見地で見ると、山形県、秋田県、新潟県、福井県や京都府北部（丹波北部、丹後）、兵庫県北部（但

馬)、南部(播磨)、高知県、島根県、広島県、福岡県を含む九州北部などで、密な分布が報告されているが、概ね16世紀半ばから後半にかけて盛行するとみられる。畝状空堀群は城館の防御施設の中でも、堀切、堅堀から発展した施設であるので、本来ポピュラーな技術であり、どの勢力でも導入することが可能であった。その中で、極度の軍事的緊張の高まりの中で、境目と称される領域抗争圏に多く生み出される施設であるといえる。その他、毛利氏や長曾我部氏などの戦国大名が用いたとする見方もあるが、それは軍事境界線における城郭において用いられ、横堀や折れを伴って導入されることもある<sup>1</sup>。勝山城(島根県安来市)は、第1部第3章で扱ったように毛利元就の本陣が置かれたと伝わる城館であるが、畝状空堀群の上部の曲輪に「折れ」が見られる。これは千田嘉博氏や村田修三氏が指摘している。その他、毛利氏が播磨上月城を攻めた際の、毛利方の仁位山城にも畝状空堀群が見られ、毛利氏が畝状空堀群を使用したこと自体は間違いない。ただそれは毛利氏独自の技術ではなく、軍事的緊張環境で、在地勢力の中から導入のし易さにより発展したものである。そのような技術であるため、戦国大名も軍事境界線における陣城に使用したと推察されるのである。

第1部第3章では、具体的な事例検討して、第1節では丹波・丹後を、第2節では出雲・石見を取り上げた。地表面観察による縄張り図は非常に有効な研修手法であるが、別々の研究者が描いた縄張り図をもとに、畝状空堀群の形態という細かい部分の検討を行うに当たっては、標準化を行うことは、微妙な描き方の違いなどで難しい点がある。そこで標準化を行う手法として、大規模敷設が行われているかどうかを見極める事を行った<sup>2</sup>。大きく敷設本数によってABCに分類を行った。その結果、局所的な分布を見せることが分かった。その理由として、畝状空堀群は一時的な軍事的緊張下では、陣城などで限定的な仕様がなされ、ある一定の期間、軍事的緊張が続き、なおかつ中小規模の国人が並列的な勢力を維持している地域で導入が目立つ傾向があることを指摘した<sup>3</sup>。

第2部第1章では、丹波国何鹿郡上林谷を取り上げて検討を行った。この地域は丹波から若狭へ抜ける重要ルートで、谷の両側に多くの城館が築かれている。城館の規模かや普請状況から、丁寧に普請を行い連郭的に曲輪を配した城館は、概ね規模も当地の中では大きいことを明らかにし、それらは上林氏と渡邊氏というこの地域を代表する一族お城であることを明らかにした。悉皆調査によって城館の分布が明らかとなり、今後、「光明寺再建奉加帳」に見える有力者との関係性などを今後検討をお行うにあたって有効な成果となる。

上林谷地域では日置谷城と上林城が重要である。里村紹巴の天橋立紀行に「上林雲州館」「嫡孫城」が見え、これらは日置谷城と上林城の可能性を指摘した<sup>4</sup>。「嫡孫城」では連歌が催されており、この時期会所に類する施設が上林谷に城に存在したことがうかがえる。

上林城では4次にわたって発掘調査が行われている。特に本丸、西曲輪で大きな成果が上がった。本丸では建物の建て替えの痕跡や、石垣が確認された。西曲輪では畝状空堀群が存在したが、後に埋められていることが明らかになった。建物跡には堅穴建物が

あり、それが16世紀第2四半期までに廃絶し、その後堅穴の大半を埋めて新たな建物が建てられている<sup>5</sup>。日置谷城や上林城には役割分担があると考えられる。

第2部第2章では、船井郡園部を事例として検討した。園部には元和5年(1619)に小出吉親が入部し、当初舟井荘内の宍人の小島氏を頼って仮館を構えた。その過程については福島克彦氏らの検討があるが、その前提として、戦国期には荒木山城守の城が園部にあったという説がある。本章ではそれを否定し、全く城館のなかった菌部村(中世では菌部の文字を使用)に小出氏が陣屋を構築したことを明らかにした。また宍人には山城と山麓に2ヶ所の城館遺構があることはすでに先行研究で明らかにされているが、そのうち城館遺構A群のうちⅡ・Ⅲについては、小出氏家臣の居住地との見方を示した。そして園部陣屋が構築場所として選定される前提として、周辺の町場、門前町などの検討を行い、生身天満宮の所蔵の禁制や普濟寺鰐口銘に見られるように、天満宮の門前町の優位性を明らかにし、園部陣屋・陣屋町構築の過程を明らかにした。

そして陣屋町は寺社の創建年代や位置から、3段階に発展過程をとらえ、概ね小出吉親存命時代に町場の拡大が見られ、初期の段階で新町が成立していることを明らかにした。

第2部第3章では山陰における織豊期城館の展開を検討した。第1節では因幡、伯耆、出雲、石見の領主変遷について検討し、第2節では出雲・真山城を取り上げ、尼子段階から毛利、吉川期における城館の改修・維持について検討した。それにより毛利氏は尼子方の城を奪った後、戦線は因幡方面まで進んでいるにもかかわらず、出雲において拠点城郭である富田城以外にも山城をどのように維持管理しているかを明らかにした。第3節では従来研究史上では等閑視されてきた伯耆・亀井山城について検討した。伯耆における石垣を持つ城館としては米子城があり、これについては研究が進みつつあるが、亀井山城については縄張り研究での先行研究はあるが、石垣について詳細に検討したものは皆無であった。改めて縄張り調査を行い石垣については復元案を作成した。それにより2段ないし3段にセットバックしながら構築されている様子を明らかにした。このような構築方法は、米子城の吉川段階と言われる石垣や、富田城山上部などでも確認できるため、吉川期に亀井山城付近で発見された日野银山との関りで構築されたものと推定した。

第2部第4章では、出雲の拠点城郭である富田城について検討した。広域な城域を持つ富田城全体を改めて現地調査し、縄張り図を作成した。それとともに城域に小範囲に構築されている石垣についても分類を行い、大半が吉川期に構築されたものと推定した。そして堀尾期には山麓の山中御殿の大規模な増改築を明らかにし、山上部、山中御殿、千畳平などで瓦葺きの建物が多く建てられたことを明らかにした。それにより、城下からの視覚的景観を明らかにした。

これら第1部・第2部の検討を通して、全体として、戦国期から近世初頭における地域の城館構成、維持改修、町場との関係性などを明らかにした。検討範囲が近畿北部

から山陰地方と幅広くなり、やや散漫な形となったが、第1部での畝状空堀群の検討は今後全国的な集成を行うとともに、各地域の中での盛行時期や、構築主体についても幅広い視野で検討していかねばならず、検討課題も多い。第2部では上林谷と園部という小規模な単位での検討を通じて、中近世移行期における城館の構造変化や、新領主入部に際してどのような過程で陣屋構築場所が選択されるかなどを検討した。

全体を通して、解決すべき課題は多いが数多くの問題提起ができたと考える。

- 1 勝山城（島根県安来市）は、第1部第3章で扱ったように毛利元就の本陣が置かれたと伝わる城館であるが、畝状空堀群の上部の曲輪に「折れ」が見られる。これは千田嘉博氏や村田修三氏が指摘している。その他、毛利氏が播磨上月城を攻めた際の、毛利方の仁位山城にも畝状空堀群が見られ（中井均1987）、毛利氏が畝状空堀群を使用したこと自体は間違いない。
- 2 高屋茂男 2017などで出雲、石見については検討した。
- 3 筆者は近畿から中国地方で畝状空堀群が多く分布する美作、安芸などでの調査が十分行えておらず、今後の課題である。
- 4 『天橋立紀行』には諸本あり、誤記が見られることはすでに指摘されているが、それらを踏まえた検討も必要である。
- 5 西日本では城館での竪穴建物の検出例は東国に比べて少なく、今後の調査例の増加に期待されるが、2018年に島根県・普源田砦で検出されている。島根県埋蔵文化財調査センター 2018

# 引用・参考文献一覧

## 論文・書籍

- 秋本哲治 2017「安芸毛利氏本拠地周辺における連続空堀の分布」『中世城郭研究』第31号
- 秋山伸隆 1998『戦国大名毛利氏の研究』吉川弘文館
- 芦田確次ほか 1973『丹波戦国史』
- 綾部史談会 1986『丹波志何鹿郡之部』
- 石井悠 2012年『松江藩（シリーズ藩物語）』
- 石田明夫 2017「南東北南部を中心とする連続空堀群の城」『中世城郭研究』第31号
- 石田雅彦 2005「戦国期茶の湯成立の背景」『嘉悦大学研究論集 86号』
- 一倉喜好 1959「丹波桐野河内における室町幕府の権力失墜」『日本歴史』第132号
- 伊藤創 2009a「西伯耆における織豊城郭の成立～米子城と江美城を例として～」『伯耆文化研究』第11号
- 伊藤創 2009b「米子城のはじまりについて～飯山の石垣と採集瓦から～」『島根考古学会誌』第26集
- 伊藤創 2013「伯耆におけるコビキ技法の転換期」（山陰中世石器検討会『山陰中世石器研究Ⅰ－西尾克己さん選暦紀年論集Ⅰ』）
- 伊藤創・西尾克己 2009「伯耆江美城とその城下町」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅰ』
- 伊藤創・西尾克己 2012「伯耆八橋城とその城下町」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅱ』
- 伊藤正一 1977「戦国期山城跡の畝形施設について」『かみくひむし』第27号
- 伊藤正一 1984「第1回全国城郭研究者セミナー資料」
- 犬持雅哉 2004「生身天満宮所蔵「園部村大村山領定状」について」（園部文化博物館『園部文化博物館報 第5号』）
- 井上寛司 1997「石見小笠原氏と三原丸山城」『丸山城跡』川本町教育委員会
- 岩崎健 2003「城郭が語る吉川氏の西見攻略」『郷土石見』62号
- 岩崎健 2004「津和野城の安芸式城郭への改築と籠城戦への影響」『郷土石見』67号
- 岩崎健 2005「毛利氏の侵攻に備える益田氏の築城」『郷土石見』71号
- 岩橋孝典 2014「本経寺墓地の発掘調査」『石見銀山－大谷地区 本経寺墓地発掘調査報告書【山吹城南西麓の郭遺構の調査－】』
- 内野和彦 2017「奈良県下での畝状空堀群を有する城郭について」『中世城郭研究』第31号
- 大久保健司 2010「四万十川下流域の中世城郭」『中世土佐一条氏の世界と一条氏』高志書院
- 太田秀春 2017「織豊系城郭研究と倭城」『織豊系城郭とは何か－その成果と課題』
- 大場修 1990「園部旧城下町における町家遺構の発展過程と地方的特質」『日本建築学会計画系論文集 第412号』
- 岡崎雄二郎 2018年「第1章松江城の築城と整備 第3節堀尾氏の城郭普請 第2項松江城周辺の山城跡」『松江市史 別編1 松江城』
- 岡寺良 2006「戦国期秋月氏の城館構成－福岡県朝倉市杷木地域を事例に－」『城館史科学』第4号
- 岡寺良 2012「戦国期城郭としての筑前益富城」『九州歴史資料館研究論集』第37号
- 岡寺良 2017「九州北部における畝状空堀群の様相」『中世城郭研究』第31号
- 岡村吉彦 2007『織田 vs 毛利－鳥取をめぐる攻防－』
- 岡村吉彦 2009『尼子氏と戦国時代の鳥取』
- 奥田勲 1970「『紹巴天橋立紀行』について」『国文学攷（通号53）』
- 小都隆 2006『中世城館跡の考古学的研究』漢水社
- 小都隆 2012「石見丸山城跡の再検討」『西国城館論集Ⅱ』小野正敏 2008「第二十三回古代文化講座 中世富田城と戦国時代城下町研究」（島根県小都隆 2013「遺構から見た富田城の変遷」（島根県古代文化センター『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』）
- 古代文化センター『しまねの古代文化 古代文化記録集（15）』
- 貝原益軒 1713「西北紀行」『諸州巡覧記』（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 数野雅彦 1999「武田系城郭と白山城」『白山城の総合研究』白山城跡学術調査研究会
- 加藤理文 2012a『織豊権力と城郭一瓦と石垣の考古学』
- 加藤理文 2012b『豊臣政権の城郭統制』『織豊権力と城郭』
- 加藤理文 2012c『豊臣政権下の城郭瓦』『織豊権力と城郭』
- 加藤理文 2012d「石垣の普及と展開」『織豊権力と城郭』
- 加藤理文 2012e「中国地方における瓦の導入」（『織豊権力と城郭一瓦と石垣の考古学』）
- 亀岡市文化資料館 1987『大堰川の歴史－母なる川のうつつかわりー』
- 狩野稔夫 1979「亀井山城 ふるさと探訪17」『町報にちなん 419号』
- 川端二三三郎 1980「綾部の山城」『綾部市文化財調査報告書 第7集』
- 川辺小学校百周年記念誌編集委員会編集 1986『ふるさと史大堰の流れ：川辺小学校百年記念誌』
- 木谷谷一 2011「瓦・石垣から見た打吹城－その構築時期について－」島根考古学会『島根考古学会誌 第28集』
- 北垣聡一郎 1980「月山富田城の立地とその遺構」（広瀬町教育委員会『史跡富田城跡 山中御殿平（昭和50年～54年度環境整備報告）』）
- 北垣聡一郎 1988「中世城郭における「畝状タテ堀」遺構成立の一考察」『網干善教先生華甲記念考古学論集』網干善教先生華甲記念会
- 北垣聡一郎 1992「北播磨における中世城館の構造変遷」『播磨・水尾城跡の調査と研究』西脇市教育委員会
- 北垣聡一郎 1997「石見丸山城とその石積み遺構について」（川本町教育委員会『丸山城跡』）
- 木原光 2014「益田七尾城の構造」『中世都市研究会益田大会資料』
- 黒田慶一 2000「若桜鬼ヶ城跡出土の軒瓦について」『因幡若桜鬼ヶ城』城郭談話会
- 小出吉親公憲章会 1987『園部探訪』
- 古賀信幸 2013「西国の城館遺跡から出土する京都系土師器について」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター
- 佐々木倫朗 2008『堀尾吉晴と忠氏－松江開府を成しとげた武将たち－（松江市ふるさと文庫4）』
- 篠山市教育委員会 2003『八上城・法光寺城跡調査報告書』
- 篠山毎日新聞社 1931『初井家日記』
- 島根県中近世城館研究会 1995『出雲国 富田城踏査報告』
- 城郭談話会 2004『図説近畿中世城郭事典』
- 城郭談話会 1997～2010『倭城の研究』創刊号～第6号
- 城郭談話会（著）中井均（監修）2014『【図解】近畿の城郭Ⅰ』
- 城郭談話会（著）中井均（監修）2015『【図解】近畿の城郭Ⅱ』
- 城郭談話会（著）中井均（監修）2016『【図解】近畿の城郭Ⅲ』
- 城郭談話会（著）中井均（監修）2017『【図解】近畿の城郭Ⅳ』
- 城郭談話会（著）中井均（監修）2018『【図解】近畿の城郭Ⅴ』
- 城郭談話会 2000『因幡若桜鬼ヶ城』
- 新人物往来社 1979～1981『日本城郭大系』
- 新人物往来社 1987～1991『図説中世城郭事典』
- 妹尾豊三郎 1978『出雲富田城史』（山中鹿介幸盛公顕彰会）
- 妹尾豊三郎編 1997『尼子とその城下町（復刻版発行）』広瀬町役場
- 千田嘉博 1990「戦国期城郭・城下町の構造と地域性」『ヒストリア』第129号
- 千田嘉博 2000「長野城の構造」『長野城－長野城の分布・確認調査－』北九州市教育委員会
- 千田嘉博ほか 1993『城館調査ハンドブック』新人物往来社
- 園部町教育委員会 1975『園部町史』史料編第4巻
- 園部町教育委員会 1981『園部町史』史料編第2巻
- 園部町教育委員会 1991『園部の歴史 郷土史の資料』
- 園部町教育委員会 2005『図説 園部の歴史』

- 園部文化博物館 2001a 『小出吉親』  
 園部文化博物館 2001b 『発掘された埋蔵銭』  
 園部文化博物館 2002 『生身天満宮宝物展』  
 園部文化博物館 2003 『園部の仏教文化』  
 高田徹 2000 「伯耆鏡山城の縄張り－関氏の城郭考－」『愛城研』第5号  
 高田徹 2016 「近畿地方の畝状空堀群・畝状堅堀・連続堅堀」『全国城郭研究者セミナーレジュメ』  
 高田徹 2017a 「畝状空堀群の諸問題－その現状と課題」『中世城郭研究』第31号  
 高田徹 2017b 「近畿地方の畝状空堀群・畝状堅堀・連続堅堀（群）－その現在・過去・未来」『中世城郭研究』第31号  
 高田紅濤 1980 『丹波戦史 波多野盛衰記』  
 高橋成計 1988 「丹波八上城包圍の付城について」『丹波史』15  
 高橋成計 2014 「備前宇喜多氏の陣城縄張りの考察－陣城縄張りの変遷－」『中世城郭研究』第28号  
 高橋哲郎 2001 「肥前名護屋城 天下人秀吉の夢の跡」『城破りの考古学』  
 高屋茂男 1998a 「綾部市上林地域の中世城館について（1）」『太邇波考古』第10号  
 高屋茂男 1998b 「綾部市上林地域の中世城館について（2）－沼ヶ谷城跡・赤道城跡－」『太邇波考古』第10号  
 高屋茂男 1998c 「中世園部城と荒木山城守の居城について」『京都府埋蔵文化財情報』第68号  
 高屋茂男 2000a 「綾部市梨子ヶ岡城－畝状空堀群を持つ小規模城館－」『太邇波考古』第15号  
 高屋茂男 2000b 「丹波位田城について（愛知中世城郭研究会『愛城研』5号）」  
 高屋茂男 2001 「中世城館の悉皆調査について－綾部市上林地域を事例－」『北近畿の考古学』  
 高屋茂男 2002a 「戦国期城館における斜面防御の一形態－畝状空堀群と横矢の関連性から－」『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社  
 高屋茂男 2002b 「細川晴国の動向に関する基礎的考察」『丹波 創刊号』  
 高屋茂男 2004a 「丹波地方の畝状空堀群について～城館の斜面防御施設～」『京都の城・溝・館』京都府埋蔵文化財研究会  
 高屋茂男 2004b 「生身天満宮所蔵「小山村山領渡状」について（園部文化博物館『園部文化博物館報』第5号）」  
 高屋茂男 2005a 「一 丹波での争乱（園部町・園部町教育委員会『図説 園部の歴史』）」  
 高屋茂男 2005b 「三 貨幣経済の浸透（園部町・園部町教育委員会『図説 園部の歴史』）」  
 高屋茂男 2005c 「二 蛭川氏と蟠根寺（園部町・園部町教育委員会『図説 園部の歴史』）」  
 高屋茂男 2005d 「六 野々口五兵衛尉と松下之綱（園部町・園部町教育委員会『図説 園部の歴史』）」  
 高屋茂男 2008 「園部陣屋町の成立と周辺の市・町」『太邇波考古』第25・26号合併号  
 高屋茂男 2012 「島根の畝状空堀群～松江市宍道町山城跡の再検討～ 中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅱ』」  
 高屋茂男 2014a 「畝状空堀群」『中世城館の考古学』  
 高屋茂男 2014b 「日置谷城」『近畿の城郭Ⅰ』  
 高屋茂男 2015a 「梨子ヶ岡城」『近畿の城郭Ⅱ』  
 高屋茂男 2015b 「蟠根寺山城」『近畿の城郭Ⅱ』  
 高屋茂男 2015c 「畝状空堀群からみた戦国期城館構成～島根県の事例をもとに～ 中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅲ』」  
 高屋茂男 2017a 「畝状空堀群の山城」『石見の山城』  
 高屋茂男 2017b 「発掘された城の遺構」『石見の山城』  
 高屋茂男編 2013 『出雲の山城』  
 高屋茂男 2016 「丹波穴人城の評価と小出氏の入部」『丹波』18号  
 高屋茂男編 2017 『石見の山城』  
 高柳光寿 1958 『明智光秀』  
 多紀史蹟研究会 発刊年不詳 『高城軍記』  
 竹内秀雄 1968 『天満宮』  
 竹岡林 1980 「園部城」『日本城郭大系』  
 竹岡林 1976 『丹波路』  
 多田暢久 2009 「縄張り研究に於ける戦国前期一分布モデルからの析出の可能性－」『城館史科学』第7号  
 田中寅吉 1959 「越後地方に多い城郭の特異施設に就いて」『越佐研究』第15号 新潟県人文研究会  
 丹波史談会 1975 『丹波水上郡志 上・下巻』  
 中国・四国地区城館調査検討会 2017 『伊予松山城から見た近世城郭の論点』（第22回中国・四国地区城館調査検討会（愛媛大会）資料集）  
 中世城郭研究会 1986 『全国城郭研究者セミナー資料』  
 寺井毅 1991 「石見福屋氏の桜尾城・松山城・波佐一本松城の畝状堅堀群についての考察」『島根考古学会誌』第8号  
 寺井毅 2005 「伯耆国主中村氏の城郭について－伯耆国内乱としての米子城騒動－」『戦乱の空間』第4号  
 寺井毅 2012 「出雲入国時における堀尾氏の支城について」『戦乱の空間』第6号  
 鳥取市歴史博物館やまびこ館 2008 『天正九年鳥取城をめぐる戦い－毛利・織田戦争と戦国武将・吉川経家－』  
 富永公文 1984 『遠州松下加兵衛之綱とその一族』  
 富永公文 2002 『松下加兵衛と豊臣秀吉』  
 中井均 1987 「仁位山城」『図説中世城郭事典』第3巻 新人物往来社  
 中井均 1994 「『民衆』と『城館』研究試論－特に考古学的資料を中心に－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第5集』  
 中井均 2009 「検出遺構よりみた城館構造の年代観」『戦国時代の城 遺跡の年代を考える』高志書院  
 中井均 2012 「堀尾氏の出雲支配における支城について（1）－三刀屋尾崎城－」『松江城研究』第1号  
 中井均 2013 「堀尾氏の出雲支配における支城について（2）－赤名瀬戸山城－」『松江城研究』第2号  
 中井均 2015 「鳥取藩自分手政治の陣屋～その位置と構造を中心に～ 中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅲ』」  
 中井均 2016 「堀尾氏の出雲支配における支城について（3）－亀岡城と三沢城－」『松江市歴史叢書』9（松江市史研究7号）  
 中井均 2018a 「第1章松江城の築城と整備 第1節堀尾氏の入国と富田城の改修」『松江市史 別編1 松江城』  
 中井均 2018b 「第1章松江城の築城と整備 第2節領内諸城の改修と破城」『松江市史 別編1 松江城』  
 永惠裕和 2016 「畝状堅堀群からみた但馬国の城館」（城郭談話会『但馬竹田城 雲海に浮かぶ天空の山城』）  
 永惠裕和 2012 「畝状堅堀群からみた丹後国の城館」『第29回全国城郭研究者セミナー資料』第29回全国城郭研究者セミナー実行委員会・中世城郭研究会  
 永戸貞著・古川茂正 1794 『丹波志』（1974年に名著出版より復刻）  
 中西裕樹 2015 『大阪府中世城館事典』  
 中西裕樹 2001a 「園部陣屋から園部城へ－明治維新の築城とその平面構造－」『城館研究論集』  
 中西裕樹 2001b 「戦国期・延徳年間における小島氏の動向（『丹波』3号）」  
 中西義昌 2001 「北部九州の戦国期城郭」『歴史史料としての戦国期城郭－北部九州における城郭遺構と地域権力－』服部英雄研究室  
 中村修身 2000 「北部九州の畝状空堀群」『長野城－長野城の分布・確認調査－』北九州市教育委員会  
 中村孝行 1984 「上林城跡出土遺物の再検討」『綾部史談』第116号  
 中森祥 2009 「鳥取県における中世城館の様相－鳥取中世城館分布調査の成果から－」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅰ』  
 中森祥 2012 「鹿野城跡出土瓦の検討」『西国城館論集Ⅱ』  
 中森祥 2014 「伯耆・因幡の城館」『中世城館の考古学』高志書院  
 中森祥、西尾克己、守岡正司 2013 「出雲と西伯耆における城館出土陶磁器の様相」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター  
 中森祥 2013 「山名氏関連遺跡出土の京都系土師器Ⅲ」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター  
 南丹市立文化博物館 2014 『園部藩関係史料寺社類集 図版編 翻刻編』  
 南丹市立文化博物館 2008 『園部藩のあゆみ』  
 仁木宏・福島克彦編 2015a 『近畿の名城を歩く 大阪・兵庫・和歌山編』  
 仁木宏・福島克彦編 2015b 『近畿の名城を歩く 滋賀・京都・奈良編』  
 西尾克己 2003 「出雲・富田城とその城下町」（高志書院『戦国時代の考古学』）  
 西尾克己・舟木聡・守岡正司 2012 「安来市新宮堂館跡出土の陶磁器」『古代文化研究』20  
 西尾克己・守岡正司 2013 「富田川河床遺跡における戦国期の遺構と出土陶磁」（島根県古代文化センター『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』）

- 西尾孝昌 2001 「畝状空堀群」『城郭研究の軌跡と展望』 城郭談話会
- 西尾孝昌 2013 「鳥取市域の城郭―陣城・景石城・鹿野城など―」『鳥取城調査研究年報』第6号
- 西股総生・松岡 進・田嶋貴久美 2015 『図説 日本の城郭シリーズ① 神奈川中世城郭図鑑』
- 西股総生 2002 「背後の堀切」『中世城郭研究』第16号
- 乗岡実 2009 「岡山県下のコピキBの瓦を伴う城郭群」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅰ』
- 乗岡実 2012 「石垣（特集 織豊系城郭の成立と展開：織豊系城郭の成立）」『季刊考古学』(120)
- 乗岡実 2014a 「石積み・石垣」『中世城館の考古学』
- 乗岡実 2014b 「松江城の石垣の構造と年代」『松江歴史叢書』7（松江市史研究5号）
- 乗岡実 2015a 「秀吉政権下の宇喜多氏と毛利氏の城郭群」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅲ』
- 乗岡実 2015b 「兵庫・中国地方の城郭石垣」（織豊期城郭研究会『構築技術からみた織豊系城郭の石垣の成立』）
- 乗岡実 2015c 「松江城の屋根瓦―山陰で活躍した瓦工と城郭整備―」『松江歴史叢書』8（松江市史研究6号）
- 乗岡実 2016 「兵庫・中国地方における織豊系の城石垣の成立」『織豊城郭』第16号
- 乗岡実 2017 『石垣と瓦から読み解く松江城（松江市ふるさと文庫19）』
- 乗岡実 2018 「第2章松江城の石垣 第2節石垣の構造と改修」『松江市史 別編1 松江城』
- 橋本勝行 2004 「丹後国の城・館・寺～『丹後国御植家帳』を中心として～」『京都の城・溝・館』京都府埋蔵文化財研究会
- 長谷川博史 2000 『戦国大名尼子氏の研究』
- 長谷川博史 2013 「中世水運と松江―城下町形成の前史を探る―（松江市ふるさと文庫15）』
- 長谷川博史 2015 「毛利氏の出雲国支配と富田城主」『論集戦国大名と国衆 17』（初出は2003『戦国期大名毛利氏の地域支配に関する研究』）
- 花岡興史 2005 「近世城郭の築城と破却―熊本県芦北町佐敷城を中心として―」『史学論叢』35
- 花谷浩 2016 「島根の中近世瓦と松江城」『松江城調査研究集録』3
- 花谷浩 2017 「出雲における中近世の瓦と松江城築城時の瓦」（松江市史研究第8号）
- 花谷浩 2018 「第10章石材・石垣・瓦調査資料 第5節松江城の瓦」『松江市史 別編1 松江城』
- 花本哲志 1997 「広島県の中世山城跡から検出された遺構について（2）」『研究輯録』第7号 広島県埋蔵文化財調査センター
- 馬部隆弘 2002 「城郭製作から見た戦国期毛利氏の権力構造」『新視点中世城郭論集』
- 馬部隆弘 2013 「細川晴国陣営の再編と崩壊：発給文書の年次比定を踏まえて」『古文書研究』76
- 濱野浩美 2017 「米子城跡における登り石垣」織豊期城郭研究会『織豊城郭』第17号
- 林野孝孝・大場修 1988 「園部旧城下町の町家に関する調査研究」（京都府立大学・京都府立大学女子短期大学部『桂川流域学術調査報告書』）
- 林屋辰三郎 1975 『中世文化の基調』
- 日吉町郷土資料館 2000 『大堰川に筏が流れた頃』
- 廣江耕史 2013 「出雲地域東部の京都系土師器皿の様相について」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1998 『越前朝倉氏一乗谷 眠りからさめた戦国の城下町』
- 福島克彦 1990 「織豊系城郭の地域的展開」（村田修三編『中世城郭研究論集』）
- 福島克彦 1993 「丹波日置谷城について」『綾部史談』第132号 綾部史談会
- 福島克彦 1994 「織豊期における城郭・城下町の地域的展開―丹波国を中心に―」『ヒストリア』142号
- 福島克彦 2000 「園部城下町の成立と国人―小島氏の役割を中心に―」（園部文化博物館『園部文化博物館』）
- 福島克彦 2002 「中世城郭の分布と形態」『宮津市史上巻』
- 福島克彦 2005 「中近世移行期城館論―丹波園部陣屋の成立を中心に」『歴史評論』
- 福島克彦 2009 『近畿・近国の戦国合戦』
- 館報 第2号』
- 藤井善布 1984 「丹波地方の中世城郭について」『京都府埋蔵文化財調査報告書 第3集』
- 藤田叔民 1973 『近世木村流通史の研究―丹波材流通史の研究―丹波材流通の発展過程―』
- 舟木聡 2009 「土居成遺跡出土の陶磁器について」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅰ』
- 舟木聡 2013 「富田城本丸跡・二ノ丸跡の遺構と遺物」（島根県古代文化センター『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』）
- 舟木聡・伊藤創 2002 「富田城跡・米子城跡出土瓦について」『第7回中国・四国地区城館調査検討会』
- 舟木聡 2013 「富田城本丸跡・二ノ丸跡の遺構と遺物」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター
- 保角里志 2001 「山形県における畝状空堀をもつ城跡について」『さあべい』第18号
- 堀口健武 2002 「城郭石垣の様式と編年」『新視点中世城郭研究論集』
- 堀口健武 2005a 「畝状空堀群を持つ倭城について」『愛城研報告』第9号
- 堀口健武 2005b 「城郭石垣の様式と編年―近畿地方の寛永期までの事例を中心に―」『新視点中世城郭論集』2002年
- 前島己基 1973 「あらわれたまぼろしの城下町」『季刊文化財第22号』
- 松江市史料編纂課 2018 「第1章松江城の築城と整備 第3節堀尾氏の城郭普請 第1項松江城築城物語」『松江市史 別編1 松江城』
- 松江市史編集委員会 2018 『松江市史 別編1 松江城』
- 松尾慶三 1982 「尼子氏以前の富田庄 城下町成立の歴史的前提」『季刊文化財第45号』
- 松岡進 2000 「千田嘉博著『織豊系城郭の形成』」『中世城郭研究』第14号
- 松岡進 2002 『戦国期城館群の景観』
- 松岡進 2004 「書評『新視点 中世城郭研究論集』」『城館史料学』第2号
- 松岡秀夫 1985 「中世山城の畝形阻害：西播磨を中心に」『兵庫史の研究 松岡秀夫傘寿記念論文集』神戸新聞出版センター
- 松田直則 2012 「土佐一条氏家臣団の城郭構築技術再検討」『西国城館論集』第2号 中国・四国地区城館調査検討会
- 三島正之 2017 「東国における多重防衛遺構の展開」『中世城郭研究』第31号
- 水澤幸一 2017 「信越の連続堅堀群―越後とその周辺」『中世城郭研究』第31号
- 水本邦彦 2001 「丹波・丹後の城下町」（園部文化博物館『園部文化博物館報』第2号）
- 水本邦彦編 2002 『街道の日本史 32 京都と京街道 京都・丹波・丹後』
- 南洋一郎 2016 「一乗谷城と畝状連続堅堀の研究」『一乗谷城の基礎的研究―中世山城の構造と変遷―』
- 美作国の山城 2011 『美作国の山城』
- 宮田健一 2012 「津和野城跡外縁部の遺物をめぐり―考察」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅱ』
- 村上勇 2013 「出土陶磁から見た尼子氏時代の諸様相」『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター
- 村田修三 1980 「城跡調査と戦国史研究」『日本史研究』211
- 村田修三編 1987 『図説中世城郭事典』新人物往来社
- 村田修三 1987a 「湯田川館群」『図説中世城郭事典』新人物往来社
- 村田修三 1987b 「城の分布」（『図説中世城郭事典』3、新人物往来社）
- 村田修三 1998 「波佐一本松城の評価をめぐって」（波佐文化協会『金城の風土記』）
- 目次謙一 2012 「戦国期石見銀山をめぐる軍事情勢の一端」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅱ』
- 守岡正司 2009 「島根県下における山城跡出土の陶磁器」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅰ』
- 森岡弘典 2009 「二ツ山城と本城の周辺あれこれ」『西国城館論集』第1号 中国・四国地区城館調査検討会
- 森島康雄 2001 「シミズ谷城跡下層の堅穴状遺構について」『京都府埋蔵文化財論集』第4集
- 八上城研究会 2000 『戦国・織豊期城郭論 丹波国八上城遺跡群に関する総合研究』
- 山上雅弘 2018 「第1章松江城の築城と整備 第3節堀尾氏の城郭普請 第3項城地選定と築城経過」『松江市史 別編1 松江城』
- 八巻孝夫 1987 「富田城」『図説 中世城郭事典』第3巻』
- 山崎敏昭 2008年 「城館出土瓦からみた近世初頭の小大名―摂津三田城跡及び因幡若桜鬼ヶ城跡出土瓦の検討から―」『城館史料学』第5号
- 山根正明 2009 『堀尾吉晴―松江城への道―浜松、富田、松江、城普請の軌跡―（松江市ふるさと文庫6）』
- 山根正明 1987 「出雲における毛利氏の山城について」（山陰歴史研究会『山陰史談』22号）
- 山根正明 1991 「宍道地域の城館と道・村」（宍道町『宍道町史通史編上巻』）
- 山本浩樹 2000 「戦国大名毛利氏とその戦争」『織豊期研究』第2号
- 山本浩樹 2007 『西国の戦国合戦』吉川弘文館
- 吉川弘文館 2001 『城破りの考古学』
- 吉田清 1979 「荒木氏系図」『広報そのべ』No. 244

- 吉田清 1999 「幕末の城地普請成功」『丹波 創刊号』
- 吉田ちづゑ 2015 「山陰道園部藩鳥羽宿の明治維新一園部藩御米藏買受と「河港道路修築規則」一」『京都歴史災害研究』第16号
- 吉成承三 2017 「畝状堅堀群からみた四国の城館 — 土佐国の事例を中心に」『中世城郭研究』第31号
- 吉野健志 2004 「中世城郭編年のための一作業」『河瀬正利先生退官記念論文集』河瀬正利先生退官記念事業会
- 米原正義 1981 『出雲尼子一族』新人物往来社
- 若江茂 1999 『口丹波城郭総覧 城山—園部町内編—』
- 若江茂 2004 「丹東城塁記の中世城郭の調査」(丹波史談会『丹波』第6号)

## 発掘調査報告書

- 綾部市教育委員会 1980『上林城跡（綾部市文化財調査報告書第7集）』  
綾部市教育委員会 1979『生貫山城跡発掘調査概報（綾部市文化財調査報告第6集）』  
綾部市教育委員会 1981『上林城跡第3次発掘調査概報（綾部市文化財調査報告第8集）』  
綾部市教育委員会 1982『綾部市文化財調査報告第9集』  
N T T ドコモ中国受診施設建設埋蔵文化財調査委員会 2007『篠向城跡 N T T ドコモ中国受診施設建設事業に伴う発掘調査報告』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 2002『中城跡・底なし田2遺跡・元城跡』  
春日町歴史民俗資料館 1994『史跡黒井城跡保存管理計画策定報告書』  
香春町教育委員会 1992『香春岳 埋蔵文化財調査報告と自然 歴史と文学 香春岳の総合調査』  
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1999『園田浦城跡（北九州市埋蔵文化財調査報告書 第232集）』  
北九州市教育委員会 2000『長野城 長野城の分布・確認調査（北九州市文化財調査報告書 第89集）』  
岐阜県文化財保護センター 1993『鶴尾山城跡・深戸遺跡 東海北陸自動車道建設に伴う緊急発掘調査報告書（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第6集）』  
京都府教育委員会 2012『京都府中世城館跡調査報告書 第1冊（丹後編）』  
京都府教育委員会 2013『京都府中世城館跡調査報告書 第2冊（丹波編）』  
京都府教育委員会 2014『京都府中世城館跡調査報告書 第3冊（山城編1）』  
京都府教育委員会 2015a『京都府中世城館跡調査報告書 第4冊（山城編2）』  
京都府教育委員会 2015b『京都府中世城館跡調査報告書別冊（分布図・索引）』  
京都府教育委員会 1983『京都の文化財』第1集  
京都府教育委員会 1998『京都の文化財』第15集  
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996『京都府遺跡調査概報 第70冊』  
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990『京都府遺跡調査報告書 第14冊』  
（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2012『京都府遺跡調査概報152 三ノ宮東城跡』  
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997『京都府遺跡調査概報 75冊』  
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2006『京都府遺跡調査概報 第119冊』  
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988『京都府遺跡調査概報 第28冊（谷内遺跡第4次・栗ヶ丘横穴群・園部城跡第2次・平安京右京一条三坊九町（第7次）・八後遺跡・恭仁京跡（作り道）・京奈バイパス関係遺跡（南福八妻城跡）・シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群・泉源寺遺跡・八ヶ坪遺跡第3次）』  
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997『京都府遺跡調査概報 79冊』  
（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2012『京都府遺跡調査報告集 152冊』  
玖珠町教育委員会 1984『伐株山城』  
玄海町教育委員会 2003『高江城跡調査概報（玄海町文化財調査報告書 第10集）』  
（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2008『西山城跡（（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書 第106集）』  
（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1999『西本城跡』  
江府町教育委員会 1982『江美城址調査概報』  
江府町教育委員会 1998『江美城跡 現説資料』  
静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『庵原城跡』（静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第225集）  
島根県教育委員会・日本道路公団中国支社 2000『野津原II（西区）遺跡・女夫岩西遺跡・城山遺跡』  
島根県教育委員会『石見の城館跡 島根県中近世城館跡分布調査報告書 第1集』1997年  
島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡 島根県中近世城館跡分布調査報告書 第2集』1998年  
島根県埋蔵文化財調査センター 2018『菅原田岩跡現地説明会資料』  
園部町教育委員会 1975『園部町史 史料編 第4巻』  
園部町教育委員会 1981『園部町史 史料編 第2巻』  
鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布調査報告書 第1集』2002年  
鳥取県教育委員会『鳥取県中世城館分布調査報告書 第2集』2004年  
鳥取県立公文書館史編さん室『新鳥取県史 資料編考古3』2018年  
鳥取県立公文書館史編さん室『新鳥取県史 資料編近世4』2018年  
南丹市教育委員会 2010『摩気神社蔵小島文書調査報告書』  
西股総生・松岡進・田嶋貴久美 2015『図説 日本の城郭シリーズ① 神奈川中世城郭図鑑』  
白山城跡学術調査研究会『白山城の総合研究』1999  
広島県教育事業団埋蔵文化財調査室 2005『牛の皮城跡・曾川2号遺跡（財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第12集）』  
広島県教育委員会 1993『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第1集』  
広島県教育委員会 1994『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第2集』  
広島県教育委員会 1995『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第3集』  
広島県教育委員会 1996『広島県中世城館遺跡総合調査報告書 第4集』  
広島県教育委員会 1977『高陽新受託市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』  
広島市教育委員会 1989『伴東城跡発掘調査報告（広島市の文化財第45集）』  
広島市教育委員会 1987『三ツ城跡発掘調査報告（広島市の文化財第37集）』  
広島市教育委員会 1982『国重城跡発掘調査報告』  
広島市歴史科学教育事業団 1993『有井城跡発掘調査報告（（財）広島市歴史科学教育事業団調査報告第8集）』  
広瀬町教育委員会 1977『史跡富田城跡環境整備に伴う発掘調査概報一塩谷口付近門跡一』  
広瀬町教育委員会 1981a『塩谷遺跡発掘調査報告書』  
広瀬町教育委員会 1981b『史跡富田井城関連遺跡群発掘調査報告書』  
広瀬町教育委員会 1982『新宮谷遺跡発掘調査報告』  
広瀬町教育委員会 1983『新宮谷遺跡発掘調査報告 第2次発掘調査概要』  
広瀬町教育委員会 1988『富田川河床遺跡発掘調査概報：飯梨川中小河川改修事業に伴う』  
広瀬町教育委員会 1997『史跡富田城跡環境整備事業報告書』  
広瀬町教育委員会 2002『史跡富田城跡発掘調査報告書（山中御殿平・花ノ壇地区）史跡富田城跡環境整備事業に伴う』  
広瀬町教育委員会 2003『史跡富田城跡環境整備事業報告書 2』  
広瀬町教育委員会 2004『史跡富田城跡発掘調査報告書（千畳平地区）附日向丸城跡群発掘調査報告』  
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005『石山城跡（福井県埋蔵文化財調査報告 第83集）』  
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006『浅見金道口遺跡・三重山城跡・浅見東山遺跡（福井県埋蔵文化財調査報告 第89集）』  
福岡県の城郭刊行会 2009『福岡県の城郭—戦国城郭へ行く』  
福岡市教育委員会 2000『香椎B遺跡 本文編（福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第621集）』  
安来市教育委員会 2015『史跡富田城跡石垣調査報告書』  
安来市教育委員会 2015『史跡富田城跡保存管理計画』  
安来市教育委員会 2017『史跡富田城跡発掘調査報告書 千畳平地区 2』  
米子市教育委員会 2017『史跡米子城跡発掘調査現地説明会資料』  
若桜町教育委員会『鬼ヶ城遺跡 若桜鬼ヶ城基礎資料整備事業総合調査報告書』1991

# 初出一覧

## 序章 新稿

### 第1部 城館遺構の分析と大名勢力 第1章 畝状空堀群の研究史と視点 第2章 畝状空堀群の分類と構造

「戦国期城館における斜面防御の一形態—畝状空堀群と横矢の関連性から—」『新視点中世城郭研究論集』2002、「島根の畝状空堀群～松江市宍道町城山城跡の再検討～」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅱ』2012、「畝状空堀群」『中世城館の考古学』2014 などをもとにし、改稿した。

### 第3章 畝状空堀群の地域的特質に関する検討

「丹波地方の畝状空堀群について～城館の斜面防御施設～」『京都の城・溝・館』京都府埋蔵文化財研究会2004、「畝状空堀群からみた戦国期城館構成～島根県の事例をもとに～」中国・四国地区城館調査検討会『西国城館論集Ⅲ』2015、「畝状空堀群の山城」『石見の山城』2017 などをもとにし、改稿した。

## 第2部 中近世移行期における城館構成の変容と地域社会

### 第1章 丹波国何鹿郡上林谷における事例検討

#### 第1節 上林地域の城館分布

「綾部市上林地域の中世城館について（1）」『太邇波考古 第10号』1998、「綾部市上林地域の中世城館について（2）—沼ヶ谷城跡・赤道城跡—」『太邇波考古 第10号』1998、「綾部市梨子ヶ岡城—畝状空堀群を持つ小規模城館—」『太邇波考古 第15号』2000、「中世城館の悉皆調査について—綾部市上林地域を事例—」『北近畿の考古学』2001 などをもとにし、改稿した。

#### 第2節 日置谷城の構造と築城主体

「日置谷城」『近畿の城郭Ⅰ』2014 をもとにし、改稿した。

#### 第3節 発掘調査成果からみた上林城の構造

新稿

## 第2章 丹波国船井郡園部における事例検討

### 第1節 園部陣屋成立前史～中世園部城の検討を通して～

「中世園部城と荒木山城守の居城について」『京都府埋蔵文化財情報 第68号』1998（一部改変）

### 第2節 丹波穴人城と小出氏の園部入部

「丹波穴人城の評価と小出氏の入部」『丹波 18号』2016（一部改変）

### 第3節 中世における園部周辺諸村

「園部陣屋町の成立と周辺の市・町」『太邇波考古 第25・26号合併号』2008（一部改変）

### 第4節 園部陣屋・町の成立

新稿

## 第3章 山陰における織豊期城館の展開

### 第1節 山陰における織豊期城館と研究史

「山陰」『第19回中国四国城館調査検討会岡山大会 中国四国における織豊系城郭の成立と展開』2014 をもとに改稿

### 第2節 城郭の改修と維持～出雲真山城を事例に～

「真山城跡にみる中世城館の改修と維持主体の関係性」『山根正明先生古希記念誌刊行会 地域に学び、地域とともに』2017

### 第4節 伯耆亀井山城の構造と意味

新稿

## 第4章 出雲月山富田城の構造と位置付け

「出雲月山富田城の構造と位置付け」『山陰名城叢書 月山富田城』2019 刊行予定

## 終章

新稿